

# 京都府遺跡調査概報

## 第 85 冊

1. 浦入遺跡群
2. 椋ノ木遺跡
3. 木津地区所在遺跡
  - (1) 木津城山遺跡
  - (2) 天神山古墳群
  - (3) 片山1号墳
4. 長岡京跡右京第585次・第589次  
下植野南遺跡

1 9 9 8

巻頭図版 椋ノ木遺跡



(1)調査地全景（南から）



(2)7トレンチST185副葬品出土状況

# 序

財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センターでは、京都府内の公共事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査を行ってまいりました。この間、当センターの業務の遂行にあたりましては、皆様方のご協力を賜り、厚く御礼申し上げます。

さて、発掘調査については、その内容を出来るだけ早く公表する必要があり、それに対応するために三種の刊行物を出しております。すなわち、発掘調査の速報と職員の論考等を『京都府埋蔵文化財情報』によって、発掘調査成果の概要報告を『京都府遺跡調査概報』によって公表しております。そして、特に著しい成果のあったものについては、『京都府遺跡調査報告書』を刊行しております。

本書は、『京都府遺跡調査概報』として、平成9年度に実施した発掘調査のうち、舞鶴市教育委員会、京都府土木建築部、住宅・都市整備公団関西支社関西文化学術研究都市整備局・日本道路公団大阪建設局の依頼を受けて行った浦入遺跡群・棕ノ木遺跡・木津地区所在遺跡(木津城山遺跡・天神山古墳群・片山1号墳)・長岡京跡右京第585次・第589次・下植野南遺跡に関する発掘調査概要を収めたものであります。本書が学術研究の資料として、また、地域の埋蔵文化財への関心と理解を深める上で、何がしかのお役にたてば幸いです。

おわりに、発掘調査を依頼された各機関をはじめ、舞鶴市教育委員会・精華町教育委員会・木津町教育委員会・大山崎町教育委員会などの各関係諸機関、ならびに調査に参加、協力いただきました多くの方々に厚く御礼申し上げます。

平成10年11月

財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター

理 事 長 樋 口 隆 康

# 凡 例

1. 本書に収めた概要は、下記のとおりである。
  1. 浦入遺跡群                      2. 椋ノ木遺跡
  3. 木津地区所在遺跡(木津城山遺跡・天神山古墳群・片山1号墳)
  4. 長岡京跡右京第585次・第589次・下植野南遺跡
2. 遺跡の所在地、調査期間、経費負担者及び概要の執筆者は下表のとおりである。
3. 本書で使用している座標は、国土座標第6座標系による。

遺跡名	所在地	調査期間	経費負担者	執筆者
1. 浦入遺跡群	舞鶴市字千歳小字池カナル・花ヶ口	平9.4.14～3.18	舞鶴市教育委員会	石井 清司 田代 弘 筒井 崇史
2. 椋ノ木遺跡	相楽郡精華町大字下狛小字椋ノ木ほか	平9.5.6～11.7	京都府土木建築部	森島 康雄
3. 木津地区所在遺跡 (1)木津城山遺跡 (2)天神山古墳群 (3)片山1号墳	相楽郡木津町木津片山	平9.6.17～10.15 平9.10.6～平10.1.28 平9.8.7～10.16	住宅・都市整備公団	伊賀 高弘
4. 長岡京跡右京第585次・第589次・下植野南遺跡	乙訓郡大山崎町下植野小字五条本・門田	平10.1.19～2.13	日本道路公団大阪建設局	戸原 和人 岩松 保

4. 本書の編集は、調査第1課資料係が当たった。

# 本文目次

1. 浦入遺跡群平成9年度発掘調査概要-----	1
2. 棕ノ木遺跡平成9年度発掘調査概要-----	17
3. 木津地区所在遺跡平成9年度発掘調査概要-----	67
(1) 木津城山遺跡-----	69
(2) 天神山古墳群-----	89
(3) 片山1号墳-----	93
4. 長岡京跡右京第585次・第589次・下植野南遺跡発掘調査概要-----	95

# 挿図目次

## 1. 浦入遺跡群

第1図 調査地位置図-----	1
第2図 浦入遺跡群調査地点配置図-----	2
第3図 A地点遺構配置図-----	4
第4図 竪穴式住居跡SH01実測図-----	5
第5図 掘立柱建物跡SB01実測図-----	5
第6図 A地点出土遺物実測図-----	7
第7図 O地点遺構配置図-----	9
第8図 R地点遺構配置図-----	11
第9図 R地点土層図-----	12
第10図 丸木舟実測図-----	13
第11図 浦入遺跡R地点出土縄文土器実測図-----	15

## 2. 棕ノ木遺跡

第12図 調査地位置図(周辺遺跡分布図)-----	18
第13図 トレンチ配置図-----	19
第14図 3トレンチ遺構平面図-----	20
第15図 3トレンチ基本土層図-----	21
第16図 3トレンチSK600・92・592・514平面図・断面図-----	22
第17図 3トレンチSK671・530・531平面図・断面図-----	23

第18図	3 トレンチ S K 173 北部石敷き平面図・断面図	24
第19図	3 トレンチ S X ・ S D 535 東端部平面図・立面図	25
第20図	3 トレンチ S X 512 ・ S D 512 ・ 532 平面図・断面図	25
第21図	3 トレンチ S D 512 遺物出土状況図	26
第22図	3 トレンチ S D 513 遺物出土状況図	26
第23図	3 トレンチ S B 1 平面図・断面図	27
第24図	3 トレンチ S B 2 ・ 3 ・ 4 平面図・断面図	28
第25図	3 トレンチ S B 5 平面図・断面図	29
第26図	3 トレンチ S T 382 平面図・断面図	30
第27図	4 - 1 トレンチ 拡張区平面図・断面図	31
第28図	4 - 5 トレンチ 拡張区平面図	32
第29図	4 - 5 トレンチ S D 01 断面図	33
第30図	6 トレンチ 北壁断面図	33
第31図	6 トレンチ 平面図	34
第32図	7 トレンチ 遺構平面図	35
第33図	7 トレンチ S K 49 ・ 54 ・ 04 遺物出土状況図	36
第34図	7 トレンチ S K 48 ・ 285 平面図・断面図	37
第35図	7 トレンチ S K 186 平面図・断面図	37
第36図	7 トレンチ S D 1 付近 トレンチ 東壁断面図	37
第37図	7 トレンチ S D 5 遺物出土状況図	38
第38図	7 トレンチ S A 1、S B 2 ・ 3 ・ 4 平面図・断面図	39
第39図	7 トレンチ S T 185 平面図・断面図・立面図	40
第40図	3 トレンチ 出土遺物実測図(1)	42
第41図	3 トレンチ 出土遺物実測図(2)	43
第42図	3 トレンチ 出土遺物実測図(3)	44
第43図	3 トレンチ 出土遺物実測図(4)	45
第44図	3 トレンチ 出土遺物実測図(5)	48
第45図	3 トレンチ 出土遺物実測図(6)	49
第46図	3 トレンチ 出土遺物実測図(7)	50
第47図	3 トレンチ 出土遺物実測図(8)	51
第48図	3 トレンチ 出土遺物実測図(9)	53
第49図	3 トレンチ 出土遺物実測図(10)	54
第50図	3 トレンチ 出土遺物実測図(11)	55
第51図	3 トレンチ 出土遺物実測図(12)	56
第52図	3 トレンチ 出土遺物実測図(13)	57

第53図	3トレンチ出土遺物実測図(14)-----	59
第54図	3トレンチ出土遺物実測図(15)-----	59
第55図	4-5トレンチ出土遺物実測図-----	60
第56図	7トレンチ出土遺物実測図(1)-----	61
第57図	7トレンチ出土遺物実測図(2)-----	62
第58図	7トレンチ出土遺物実測図(3)-----	62
第59図	7トレンチ出土遺物実測図(4)-----	63
第60図	遺構に伴わない遺物実測図-----	63
第61図	1～3・5・7トレンチ平面略図-----	64

### 3. 木津地区所在遺跡

#### (1) 木津城山遺跡

第62図	調査地位置図-----	68
第63図	木津城山遺跡トレンチ配置図-----	70
第64図	木津城山遺跡 本調査地区遺構平面図・断面図-----	72
第65図	木津城山遺跡 S B 32～35・S D 15実測図-----	73
第66図	木津城山遺跡 S B 09実測図-----	75
第67図	木津城山遺跡 S B 23・片山3号墳実測図-----	76
第68図	木津城山遺跡 S X 16下層遺構(S B 39・40・53・56)実測図-----	77
第69図	木津城山遺跡 S X 49実測図-----	77
第70図	木津城山遺跡 S X 16(片山3号墳内部主体)実測図-----	78
第71図	S X 19(片山4号墳)・S B 51実測図-----	79
第72図	木津城山遺跡 II・IIIトレンチ配置図・主要遺構平面図-----	80
第73図	木津城山遺跡 IIトレンチ平面図-----	81
第74図	木津城山遺跡 銅鏡実測図-----	83
第75図	木津城山遺跡 鐸形土製品実測図-----	83
第76図	木津城山遺跡 出土遺物実測図(1)-----	84
第77図	木津城山遺跡 出土遺物実測図(2)-----	86
第78図	木津城山遺跡 出土遺物実測図(3)-----	87

#### (2) 天神山古墳群

第79図	天神山古墳群 トレンチ配置図-----	90
第80図	天神山古墳群 S X 07実測図-----	91
第81図	天神山古墳群 出土遺物実測図-----	92

#### (3) 片山1号墳

第82図	片山1号墳トレンチ 遺構平面図-----	94
------	----------------------	----

### 4. 長岡京跡右京第585次・第589次・下植野南遺跡

第83図	調査地位置図-----	95
第84図	R 585次調査区南壁土層図-----	96
第85図	R 589地点周辺遺構配置図-----	97
第86図	下植野南遺跡出土土器実測図(1)-----	98
第87図	下植野南遺跡出土土器実測図(2)-----	99

## 図 版 目 次

### 1. 浦入遺跡群

図版第 1	(1) 浦入遺跡群全景(南から)	(2) 浦入遺跡群全景(西から)
図版第 2	(1) A 地点全景(東から)	(2) A 地点全景(真上から、上が北西)
図版第 3	(1) A-1 地点全景(真上から、上が北西)	(2) A-1 地点全景(東から)
図版第 4	(1) A-1 地点重機掘削作業風景(南から)	(2) A-1 地点柱穴群(上が北西)
	(3) A-1 地点竪穴式住居跡 S H04・05(南から)	
図版第 5	(1) A-1 地点竪穴式住居跡 S H01全景(真上から、上が北西)	
	(2) A-1 地点竪穴式住居跡 S H01作業風景(北から)	
	(3) A-1 地点竪穴式住居跡 S H01竈全景(西から)	
図版第 6	(1) A-2 地点全景(南東から)	
	(2) A-3 地点全景(東から)	
	(3) A 地点現地説明会風景	
図版第 7	A 地点出土遺物(1)	
図版第 8	A 地点出土遺物(2)	
図版第 9	(1) O-1 地点全景(東から)	
	(2) O-2 地点全景(東から)	
図版第10	(1) O-2 地点石敷炉(南東から)	(2) O-2 地点 S K02全景(南東から)
図版第11	(1) R 地点全景(北東から)	(2) R 地点全景(真上から、上が南)
図版第12	(1) R 地点丸木舟出土状況(東から)	(2) R 地点丸木舟近景(南東から)

### 2. 棕ノ木遺跡

図版第13	3 トレンチ全景(上が北)	
図版第14	(1) 調査地全景(南から)	
	(2) 3 トレンチ北部全景(上が北)	
図版第15	(1) 3 トレンチ中央部全景(上が北)	(2) 3 トレンチ南部全景(上が北)
図版第16	(1) 3 トレンチ S K92全景(南から)	



- (2) 3 トレンチ S K592 遺物出土状況(東から) (3) 3 トレンチ S K514 全景(北から)
- 図版第17 (1) 3 トレンチ S K671 遺物出土状況(東から) (2) 3 トレンチ S K530 全景(南から)  
(3) 3 トレンチ S K531 全景(南から)
- 図版第18 (1) 3 トレンチ S K531 小石敷検出状況(南から)  
(2) 3 トレンチ S K173 北部小石敷検出状況(南から)  
(3) 3 トレンチ S X535 石組検出状況(南から)
- 図版第19 (1) 3 トレンチ S X512 礫群検出状況(南から)  
(2) 3 トレンチ S D512 遺物出土状況(南から)  
(3) 3 トレンチ S D513 遺物出土状況(北から)
- 図版第20 (1) 3 トレンチ S B 1 ピット(S P 665) 根石・柱根検出状況(南から)  
(2) 3 トレンチ S B 1 ピット(S P 635) 遺物出土状況(西から)  
(3) 3 トレンチ S B 2 ピット(S P 855) 断面(南から)
- 図版第21 (1) 3 トレンチ S T 382 副葬品検出状況(南から)  
(2) 3 トレンチ S T 382 底板出土状況(南から)  
(3) 3 トレンチ S T 382 底部栈木痕跡検出状況(東から)
- 図版第22 (1) 4-1 トレンチ 拡張区 全景(東から) (2) 4-1 トレンチ 拡張区 南壁(北から)  
(3) 4-5 トレンチ 拡張区 全景(南から)
- 図版第23 (1) 4-5 トレンチ 拡張区 S D01 遺物出土状況(東から)  
(2) 6 トレンチ 全景(西から) (3) 6 トレンチ 西部第1 遺構面 全景(南東から)
- 図版第24 (1) 7 トレンチ 全景(東から) (2) 7 トレンチ 全景(西から)  
(3) 7 トレンチ S K54 全景(東から)
- 図版第25 (1) 7 トレンチ S K 4 全景(南から) (2) 7 トレンチ S K168 全景(南から)  
(3) 7 トレンチ S D 5 遺物出土状況(北東から)
- 図版第26 (1) 7 トレンチ S B 3 全景(北東から) (2) 7 トレンチ S B 4 全景(西から)  
(3) 7 トレンチ S T 185 全景(南から)
- 図版第27 (1) 7 トレンチ S T 185 副葬品出土状況 1 (上が南)  
(2) 7 トレンチ S T 185 副葬品出土状況 2 (上が南)  
(3) 7 トレンチ S T 185 副葬品出土状況 3 (上が南)
- 図版第28 出土遺物 1
- 図版第29 出土遺物 2
- 図版第30 出土遺物 3
- 図版第31 (1) 3 トレンチ S K92・94・95・335 出土遺物  
(2) 3 トレンチ S K668・514 出土遺物
- 図版第32 (1) 3 トレンチ S K514・671 出土遺物 (2) 3 トレンチ S K671・530 出土遺物
- 図版第33 (1) 3 トレンチ S K531・177・173 出土遺物 (2) 3 トレンチ S X512 出土遺物

- 図版第34 (1) 3 トレンチ S X512出土遺物 (2) 3 トレンチ S X512出土遺物
- 図版第35 (1) 3 トレンチ S X512出土遺物 (2) 3 トレンチ S X512出土遺物  
(3) 3 トレンチ S X535、S D46出土遺物
- 図版第36 (1) 3 トレンチ S D512出土遺物 (2) 3 トレンチ S D512出土遺物
- 図版第37 (1) 3 トレンチ S D513出土遺物 (2) 3 トレンチ S D513出土遺物
- 図版第38 (1) 3 トレンチ S D521・522・532・534出土遺物  
(2) 3 トレンチ S D535・711・742出土遺物
- 図版第39 (1) 3 トレンチ S B 1・2・3・5、S A 1出土遺物  
(2) 3 トレンチ S T382出土遺物
- 図版第40 (1) 4-5 トレンチ S D 1 出土遺物  
(2) 7 トレンチ S K49・285・54・4 出土遺物
- 図版第41 (1) 7 トレンチ S K 4・48・168出土遺物  
(2) 7 トレンチ S D37・5・1、S B 2・3・4、遺構に伴わない出土遺物
- 図版第42 (1) 7 トレンチ S T185出土遺物  
(2) 7 トレンチ S T185出土遺物

### 3. 木津地区所在遺跡・木津城山遺跡

- 図版第43 (1) 調査地遠景 1 (西から) (2) 調査地遠景 2 (北西から)  
(3) 調査地遠景 3 (南から) (4) 調査地遠景 4 (南東から)
- 図版第44 (1) 木津城山遺跡 I トレンチ全景(西南西から)  
(2) 木津城山遺跡 I トレンチ S D01検出状況(東南東から)  
(3) 木津城山遺跡 S D01・S X53検出状況(南から)  
(4) 木津城山遺跡 S D01横断面(B-B'断面、東から)
- 図版第45 (1) 木津城山遺跡 本調査地区南半部全景(南西から)  
(2) 木津城山遺跡 S B32~35検出状況(北から)  
(3) 木津城山遺跡 S B32・33検出状況(素文鏡出土地点を指示、北から)  
(4) 木津城山遺跡 S B32素文鏡出土状況(上が北)
- 図版第46 (1) 木津城山遺跡 S D15全景(遺物出土状況、西から)  
(2) 木津城山遺跡 S D15全景(完掘段階、東から)  
(3) 木津城山遺跡 S B09全景(東から)  
(4) 木津城山遺跡 S B09内の立石検出状況(南から)
- 図版第47 (1) 木津城山遺跡 片山3号墳全景(主体部完掘前、北西から)  
(2) 木津城山遺跡 片山3号墳の櫛室内に堆積した炭層(北西から)  
(3) 木津城山遺跡 片山3号墳全景(櫛室内完掘状況、南東から)  
(4) 木津城山遺跡 片山3号墳下層遺構検出状況(南東から)
- 図版第48 (1) 木津城山遺跡 片山4号墳全景(東南東から)

- (2) 木津城山遺跡 S B 23・S X 53 検出状況(南東から)
- (3) 木津城山遺跡 S X 49 検出状況(北から)
- (4) 木津城山遺跡 S X 20 検出状況(東南東から)
- 図版第49 (1) 木津城山遺跡 II トレンチ遠景(北西から)
- (2) 木津城山遺跡 II トレンチ全景(南東から)
- (3) 木津城山遺跡 II トレンチ S D 03 周辺遺構検出状況(南東から)
- (4) 木津城山遺跡 II トレンチ方形台状墓 1 区画溝(S D 01) 検出状況(北西から)
- 図版第50 (1) 木津城山遺跡 II トレンチ砲台陣地(S X 02) 検出状況(南東から)
- (2) 木津城山遺跡 II トレンチ砲台陣地(S X 06) 検出状況(南東から)
- (3) 木津城山遺跡 III トレンチ検出状況(南から)
- (4) 木津城山遺跡 IV トレンチ検出状況(南西から)
- 図版第51 出土遺物(1)(木津城山遺跡)
- 図版第52 出土遺物(2)(木津城山遺跡)
- 図版第53 出土遺物(3)(木津城山遺跡)
- 図版第54 出土遺物(4)(木津城山遺跡・天神山古墳群)

#### 4. 長岡京右京第585次・第589次・下植野南遺跡

- 図版第55 (1) 長岡京跡右京第585次調査地点全景(東から)
- (2) 長岡京跡右京第585次調査地点遺物出土状況(北から)
- (3) 長岡京跡右京第585次調査地点遺物出土状況(西から)
- 図版第56 長岡京跡右京第585次調査地点出土遺物



## 1. 浦入遺跡群平成9年度発掘調査概要

### 1. はじめに

浦入遺跡群は、京都府舞鶴市千歳池カナル・花ヶ口ほかに所在する(第1図)。舞鶴市東部には福井県に境を接して大浦半島がある。大浦半島は、若狭湾の西端を占める宮津湾の東岸に位置する半島で、舞鶴湾の湾口をなす。大浦半島は山地性の地形に富んでおり、海岸線は、宮津湾に面する外海はリアス式の急崖が発達する。

大浦半島の西縁、舞鶴湾口付近に浦入湾がある。浦入湾は通称松ヶ崎と呼ばれる砂嘴が海側に発達しており、ラグーン状をなす。浦入湾岸には、縄文時代早期から鎌倉時代にかけての人々の生活の跡が遺跡として各所に残っている。これらの遺跡を総称して浦入遺跡群と呼んでいる。

浦入遺跡群の立地上の特徴は、臨海性であり、周辺集落との交通手段としてもっぱら舟などによる海上交通に頼らざるを得ない点にある。浦入湾のある場所は舞鶴湾の入り口にあたり、海上交通によれば由良川河口地域、宮津湾岸地域と至近距離にある。

さて、この地に関西電力株式会社による火力発電所が建設されることになった。建設工事で遺跡群が消滅するため、工事に先立って記録保存を目的とした発掘調査を実施することになった。舞鶴市教育委員会は、平成4年度から浦入湾岸における遺跡の分布状況、密度などを把握するために分布調査・試掘調査等の予備作業を実施し、平成7年度から、試掘成果に基づいて発掘調査に着手した。当調査研究センターは舞鶴市教育委員会の依頼を受けて、平成7年度から舞鶴市とともに調査に着手した。本年度までの3年間、舞鶴市教育委員会と協議した調査計画案に沿って発掘調査を継続してきた。当調査研究センターでは、平成7年度はM地点(嶋遺跡)、平成8年度はB・D・F・N地点を調査対象とした。

これまでの主な調査成果について舞鶴市教育委員会の調査成果とあわせてみると、以下の通りである。縄文時代早期から後期の文化層を確認した(N・P地点)。縄文時代から弥生時代にかけての海岸線を確認した(M地点)。弥生時代後期の流路跡とともに良好な土器資料を検出した(N地点)。6世紀中頃の横穴式石室を内部主体とする円墳を調査した(F地点=浦入西2号墳)。飛鳥時代から平安時代の製塩作業に関すると思われるテラス状遺構を多数検出した(N地点)。奈良時代から平安時代の大規模な製塩遺構群を確認した(Q地点)。



第1図 調査地位置図

本年度は、A・O・R地点を調査対象とし、当調査研究センター調査第2課調査第2係長辻本和美、同主任調査員石井清司、同調査員田代 弘・筒井崇史が担当した。調査面積は、A地点(約7,200m<sup>2</sup>)・O地点(約8,000m<sup>2</sup>)・R地点(約650m<sup>2</sup>)である。各地点の調査は、A地点は筒井崇史、O地点は田代 弘、R地点は石井清司が主に担当したが、状況に応じてそれぞれの現場をお互いに補佐した。本概要報告の執筆は、各地点の調査担当者がそれぞれ分担した。また、R地点の出土遺物については、舞鶴市教育委員会和泉大樹が執筆した。なお、本概要報告の写真は、遺構を各担当者が、遺物を調査第1課主任調査員田中 彰が撮影した。

調査期間中、猛暑、極寒の中、地元有志の方々、学生諸氏など多くの方々には、作業員・調査補助員・整理員として作業に従事していただいた。また、調査に当たっては、舞鶴市教育委員会・<sup>(注1)</sup>関西電力株式会社・西大浦産業株式会社・株式会社関西総合環境センターをはじめとする関係各機関の御協力を得て、現地でも多くの方々に御協力と御指導を賜わった。なお、発掘に係る

経費は、全額、舞鶴市教育委員会が負担した。



## 2. 調査の経過

調査の大まかな日程は以下の通りである。A地点は平成9年4月14日に着手し、11月20日に終了した。O地点は、O-1地点をA地点に並行して着手し、O-2地点はA地点の調査終了後に本格稼働し、翌年3月18日に終了した。R地点は11月26日に着手し、翌年2月末日に終了した。

それぞれの調査地点において、面的に遺構を検出する作業に着手する前に、バックホーを投入して表土面の除去を行った。表土除去作業は、丘陵斜面のA地点から着手し、次いで海岸部のO地点、R地点の順に行った。排土は、不整地運搬車やダンプカーを稼働し、全て調査地外へ搬出し

た。O地点においては、掘削面積が広く、埋め立てによる土壌の堆積が厚かったので大量の排土が生じ、除去に手間取った。大型重機による表土除去作業後、人力で清掃作業をし、遺構の精査に当たった。精査中、トレンチ設定や排水溝の整備等、適宜、小型重機を活用した。

精査の結果、本年度の調査で各地点において重要な遺構・遺物を多数検出することができた。丘陵部に位置するA地点では奈良時代の住居跡群、O地点では奈良時代から平安時代にかけての製塩関連・鍛冶関連遺構、R地点では縄文時代前期の丸木舟と海岸跡などである。

以下、これらの成果についての要点を報告する。 (田代 弘)

## (1) A地点の調査

### 1. 調査概要

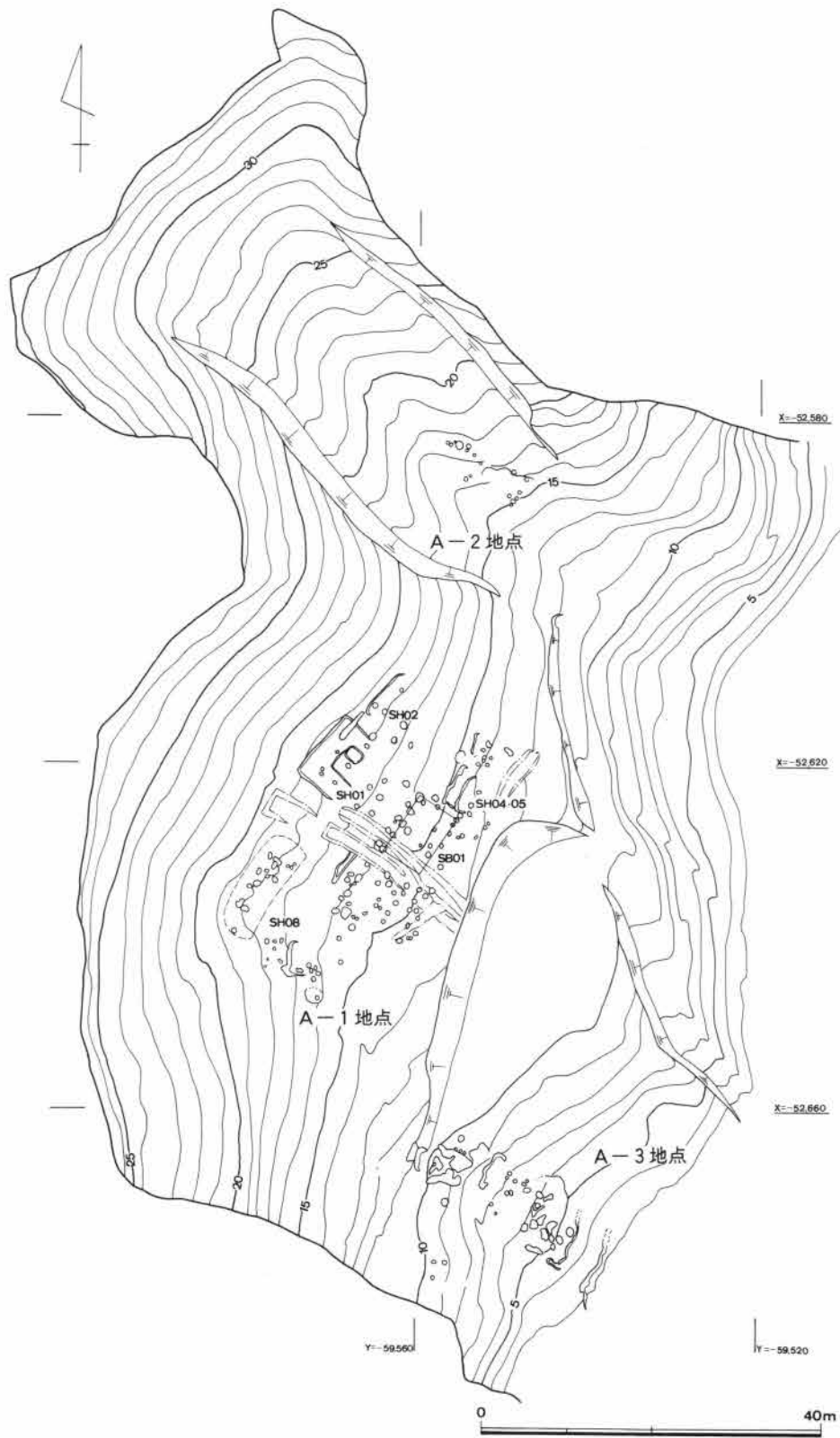
浦入遺跡群A地点は、浦入湾の西側、標高4～35mの丘陵斜面に位置する。当初、舞鶴市教育委員会の試掘調査の成果をふまえて約3,000m<sup>2</sup>を対象として調査を開始した。その後、A地点の北側に隣接する谷部でも遺物包含層が確認されたため、前者をA-1地点、後者をA-2地点として調査を行った。さらに、O地点の調査にあわせて両者の間にある斜面部の重機掘削を行った結果、新たに遺構が検出されたため、A-3地点として調査を行った(第2図)。A-1・A-2地点の重機掘削は平成8年度中に実施したが、本格的な調査は平成9年4月14日から実施した。この間、平成9年11月7日に現地説明会を実施し、同11月20日にすべての作業を終了した。

調査の結果、A-1地点では、丘陵斜面を深く掘り込んだ竪穴式住居跡1基や、同様に丘陵斜面を掘り込んで平坦面を造成したテラス状遺構6基、掘立柱建物跡1棟、柵または掘立柱建物跡を構成すると思われる柱穴200基余り、土坑1基などを検出した。一方、A-2・3地点では、柱穴や土坑、焼土などを検出したが、建物跡として復原できるものや竪穴式住居跡などは確認できなかった。調査以前に、畑地または果樹園として利用されたため、遺構の多くが削平されたようである。

ここでは、A-1地点の遺構・遺物を中心に概要を述べる。

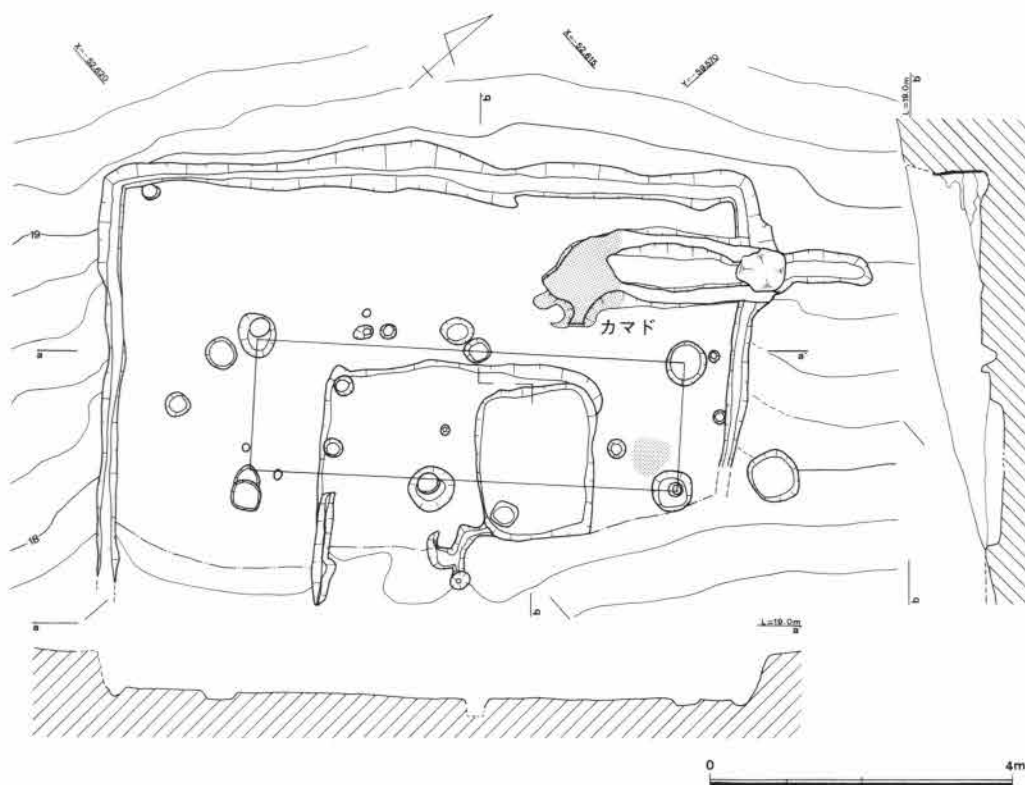
### 2. 検出遺構

竪穴式住居跡SH01(第4図) 調査地内では、もっとも高い位置に造られている。竪穴式住居跡は、長辺8.7m・短辺5.3mを測り、床面上で柱穴や土坑、周壁溝などを確認した。住居跡内部に残した土層観察用のセクションを観察すると、丘陵上位側の周壁に沿って黒い腐植土がまっすぐ立ち上がっているのを確認した。竪穴式住居跡の周壁がほぼ垂直であることと合わせて、住居跡の内側に板などを当てて壁としていたものと思われる。住居跡の北隅には、住居跡内部に煙道を有するカマドが造り付けられていた。このような構造を有するカマドについては、平成8年度に調査を実施した浦入遺跡群N地点の竪穴式住居跡SH01にも見られた<sup>(注2)</sup>。今回、検出されたカマドは、これまでの検出例よりも規模が大きく、時期も新しく位置づけられる。なお、この住居跡

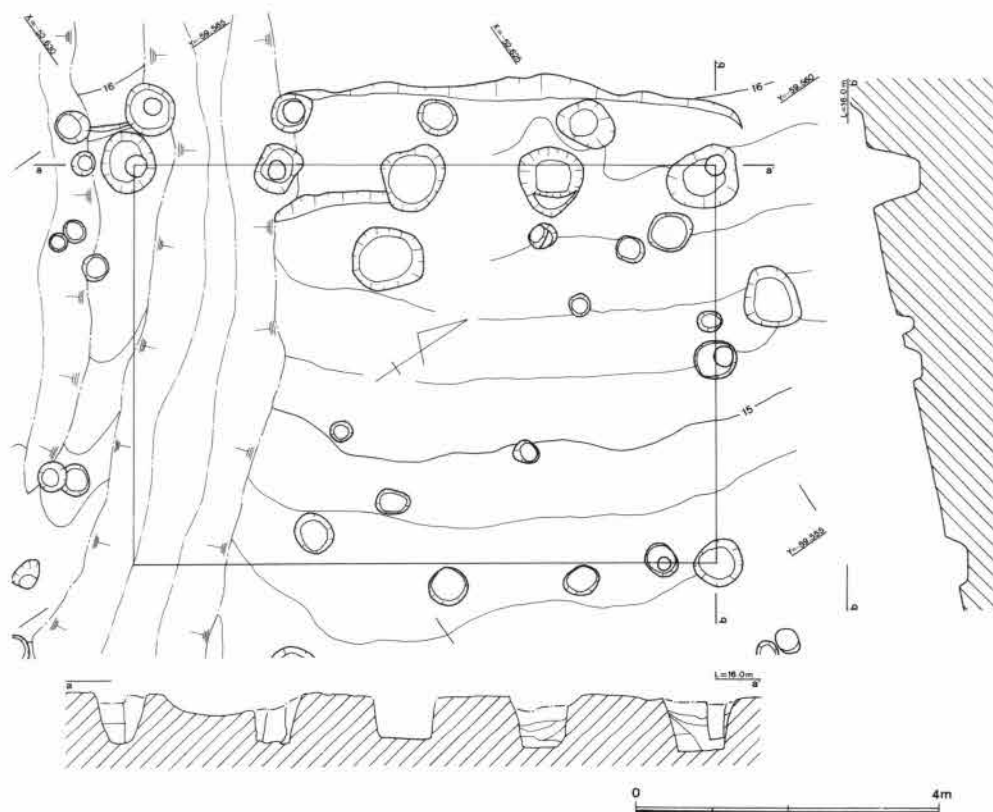


第3図 A地点遺構配置図





第4図 竪穴式住居跡 S H01実測図



第5図 掘立柱建物跡 S B01実測図

からは須恵器・土師器・製塩土器支脚などが出土した。遺物の大半は埋土からの出土で、床面上や柱穴からの出土はごくわずかである。

**テラス状遺構 S H04・05** 2基のテラス状遺構が重複していると考えられる。S H04は長辺5.2m・短辺1.8mを測る。またS H05は長辺4.4m・短辺1.6mを測り、床面で複数の柱穴を検出したが、建物跡としてはまとまらない。S H04・05からは須恵器・土師器・製塩土器などが出土した。また、S H04では、埋土から細片化した製塩土器がまとまって出土した。これらはS H04が埋没していく過程で、一括投棄されたものと考えられる。

**テラス状遺構 S H08** 竪穴式住居跡の南西側に造られた、大型のテラス状遺構である。遺構の一部は、すでに舞鶴市教育委員会の試掘調査で確認されていた。土石流によって遺構が破壊されているため、正確な規模は不明であるが、少なくとも長さ12m以上・幅4.0m以上を測るテラス状遺構と思われる。床面上で、複数の柱穴あるいは土坑ほか、焼土を検出した。S H08では埋土や土坑から鉄滓やフイゴの羽口などが出土していることから、これらの焼土は鍛冶炉であった可能性が考えられる。焼土は、試掘調査分と合わせて3基確認した。S H08からは須恵器・土師器・フイゴ・鉄滓などが出土した。

**掘立柱建物跡 S B01(第5図)** 竪穴式住居跡の南東側に位置し、N-55°-Wに主軸をとる4間(7.8m)×2間(5.3m)の掘立柱建物跡である。北西辺の柱穴は、一辺が55~95cmを測る方形または長方形を呈し、深さは70cm前後を測る。確認できた柱痕跡は直径20cmないし30cmを測る。梁間の柱穴は、北東側で2個確認できた。なお、掘立柱建物跡で確認できた柱穴は、以上の7個だけであるが、これは遺構が斜面地に立地するため、ほかの柱穴はすでに流失あるいは削平されたものと考えられる。

**土坑1** 遺構が集中する平坦地の南端で検出した土坑である。長軸長4.2m・短軸長2.0mを測り、ややいびつな形状である。土坑内からは須恵器杯・土師器がまとまって出土した。

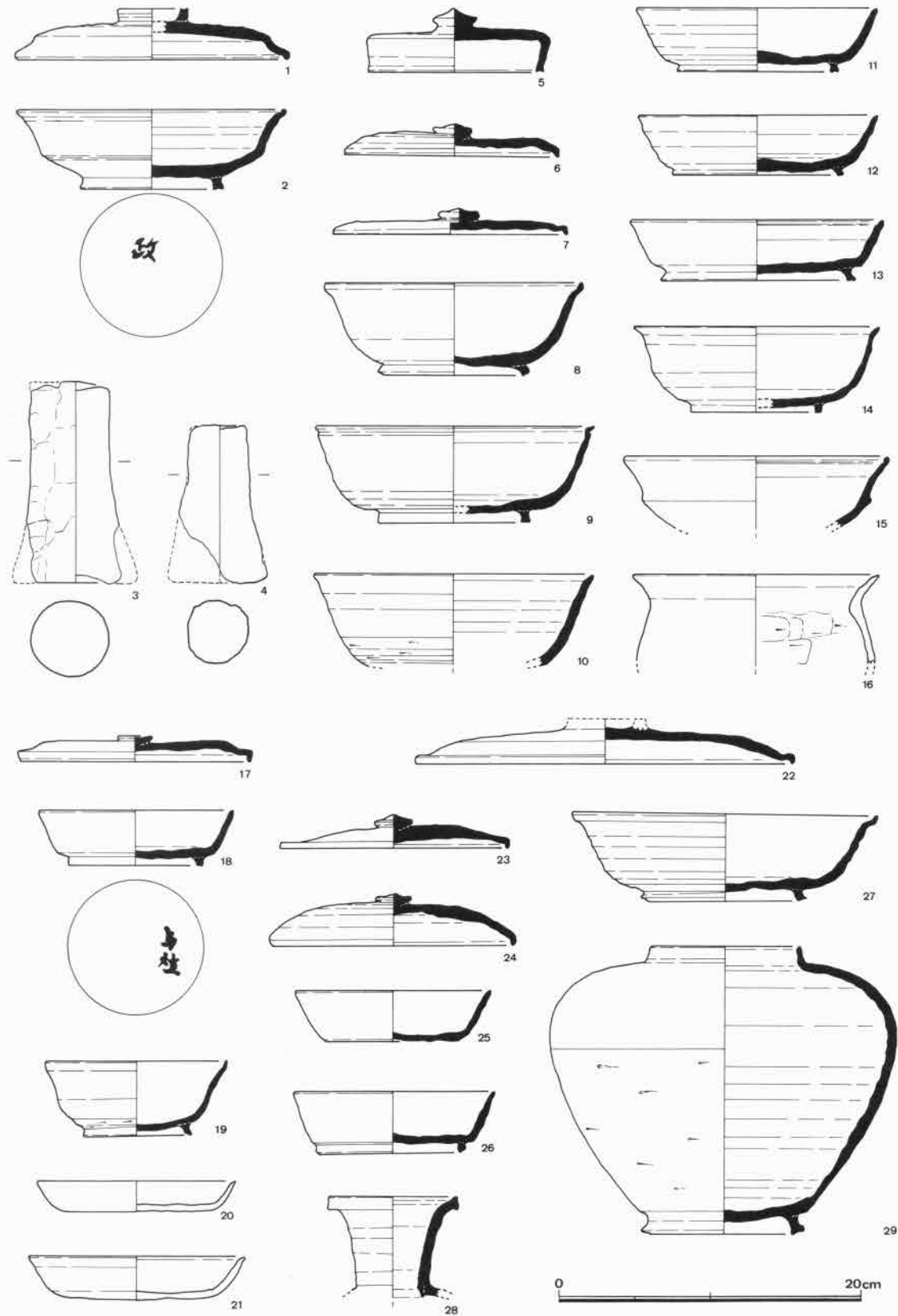
A-1地点で検出された主要遺構は上述の通りであるが、このほかにも多数の柱穴が確認されており、掘立柱建物跡S B01以外にも複数の掘立柱建物・柵列が復原できると思われる。

また、A-3地点において検出された遺構の多くは、掘形が極めていびつで、遺構がつぶれたような様相を示していた。重機による断ち割り、下方に位置するO-2地点における調査成果から、A-3地点の遺構ベース(黄褐色土)が地滑り的な現象を起こしたことが直接的な原因と考えられる。この地滑りが発生した時期は、O-2地点出土遺物から、平安時代後半と思われるが、その要因については、今後の検討課題である。

### 3. 出土遺物(第6図)

今回は、A-1地点の遺構から出土した遺物を中心に図示した。これらの遺物は、概ね奈良時代前半~中頃のものと考えられる。

1~16は、竪穴式住居跡S H01出土の遺物である。図示した遺物は、いずれも遺構埋土中からの出土である。須恵器は、奈良時代に通有な、高台付きの杯身(11~13)とその蓋(6・7)のほか、各種の椀が多く出土した(2・8~10・14・15)。13は、高台付きの杯身で、口縁部内面に沈線が



第6図 A地点出土遺物実測図

1～16；竪穴式住居跡S H01

17～20；テラス状遺構S H04

21～27；土坑1 27・28；包含層

1条巡る。2・15は、いわゆる稜椀と呼ばれるもので、浦入遺跡A・N地点のテラス状遺構や遺物包含層などから比較的多数の出土例がある。2は底部に「政」と墨書されている。椀は、いずれも体部下半にケズリ調整、あるいはケズリ調整ののちナデ調整を行うものが大半を占める。杯・椀以外では、稜椀の蓋(1)、葉壺の蓋(5)などがある。

土師器は、甕(16)のみを図示したが、土師器の出土量は須恵器に比べて少ない。

製塩土器支脚は大きさの異なる2点を図示した(3・4)。このうち4は、浦入遺跡N地点で出土した製塩土器支脚とほぼ同形同大である。細片化した製塩土器も、少量ではあるが出土した。

17～20は、テラス状遺構SH04出土の遺物である。須恵器は高台付きの杯身(18・19)とその蓋(17)、土師器は杯(20)がある。18は、底部に「与□」と墨書されている。19は、体部が緩やかな「S」字状を呈する。図示していないが、内面にかえりを有する杯B蓋の破片なども出土している。また埋土からは細片化した製塩土器の破片が多数出土した。

21～27は、土坑1出土の遺物である。須恵器は杯蓋(23・24)、大型の蓋(22)、無高台の杯身(25)、高台付き杯身(26)、椀(27)がある。土師器は杯(21)がある。

28・29は、A-1地点遺物包含層出土の遺物である。28は体部以下を欠損する壺、29は須恵器短頸壺である。

(筒井崇史)

## (2) O地点の調査

### 1. 調査概要

O地点は、工房群と推定されるテラス状遺構が多数検出されたA・N地点の東に接する臨海部の調査地点である。この地点は、南北に長く、2地点に分けて調査した。北半をO-1地点、南半をO-2地点と名づけた。O地点は、旧日本軍関連施設建設や耕作地造成に伴い、汀線まで全て埋め立てられていた。このため、表層では遺物や遺構は全く検出されず、遺構の遺存状況を把握することは困難であった。調査に先立って、まず、重機を用いて試掘調査を行い、遺構や遺物の包含状況を確認した。その結果、対象地すべてに製塩遺跡にかかわる遺構の存在が推定され、全面について調査を実施することとなった。

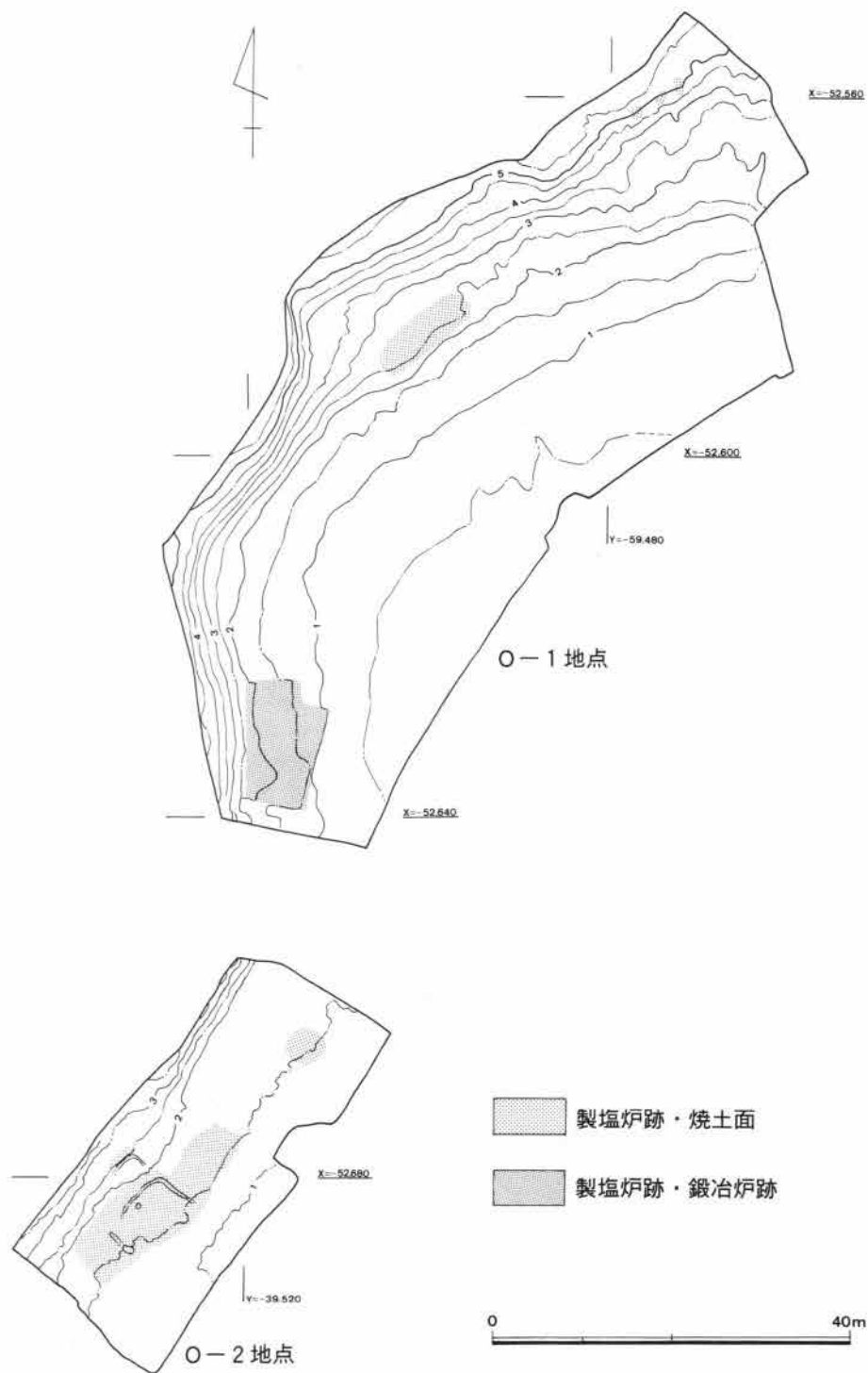
調査にあたっては、バックホーを用いて表土を掘削し、あわせて不整地運搬車を用いて排土をすべて場外へ搬出した。表土除去後、人力によって精査を行い遺構の検出に努めた。その結果、以下に記すような成果を得た。

### 2. 検出遺構

**O-1地点の成果** O-1地点では、広範囲にわたって奈良時代から平安時代末期にかけての浜辺を検出した。この浜は浦入湾ではみられない緩やかな浜で、多くの生活遺物も検出された。製塩土器片も数多く認められた。浜の背後には小段丘があり、小規模な石敷製塩炉跡や、製塩炉とみられる規模の大きな地床炉等が認められた。製塩炉は奈良時代のものと平安時代のものがあ

る。製塩土器は平安時代に属すると思われる薄手小形のものが主体であるが、厚手大形のものも若干認められた。

また、調査地点南端で製塩炉とともに20基をこえる鍛冶炉跡を検出した。覆屋などを示す遺構は検出できなかったが、炉跡が狭小な地点に集積した状況で検出されており、工房跡である可能性が高い。鍛冶炉は伴出したわずかな遺物から10世紀代のものと推定している。遺存状態の良好



第7図 O地点遺構配置図

な炉跡には鍛冶滓とみられる椀形滓が認められた。また、各炉内からサンプリングした土壌を洗浄した結果、鍛冶に伴うと見られる鍛造剥片・粒状滓を多数検出している。

**〇ー2 地点の成果** 〇ー2 地点は、汀に接する丘陵斜面に位置し、丘陵がそのまま海へ至る。平安時代後期の地滑りを挟む上下の面で、遺構を多数検出した。地滑り面上では、平安時代末期の製塩炉を検出した。この製塩炉には製塩土器・製塩土器支脚が一括投棄されており、共伴した土器から12世紀中頃のもの<sup>(注3)</sup>と推定された。若狭湾岸における土器製塩の終末時期を示唆する資料として重要なものである。

地滑り面下では、奈良時代前半のもの<sup>(注3)</sup>とみられる大規模な造成面を検出した。造成面には広い範囲で被熱して赤褐色化しており、地床炉と考えている。酸化面と還元面がブロック状に集積している様子が観察されることから、いくつかの作業単位で焼成作業を繰り返した結果、造成面前面が被熱したものと考えている。製塩土器を伴うことから、製塩に関する施設と推定される。舞鶴市教育委員会による調査地点でも、同様の遺構が多数検出されており、製塩の主要施設と推定される。

なお、丘陵斜面には小規模な配石があった。石が被熱して製塩土器を伴っていることから製塩炉と考えられる。斜面の遺構は、地滑りによってほぼ崩壊しており、全体の様子をつかむことができないが、地床炉と同時期のもの<sup>(注3)</sup>と考えると、製塩作業における分業の痕跡として注目される。

(田代 弘)

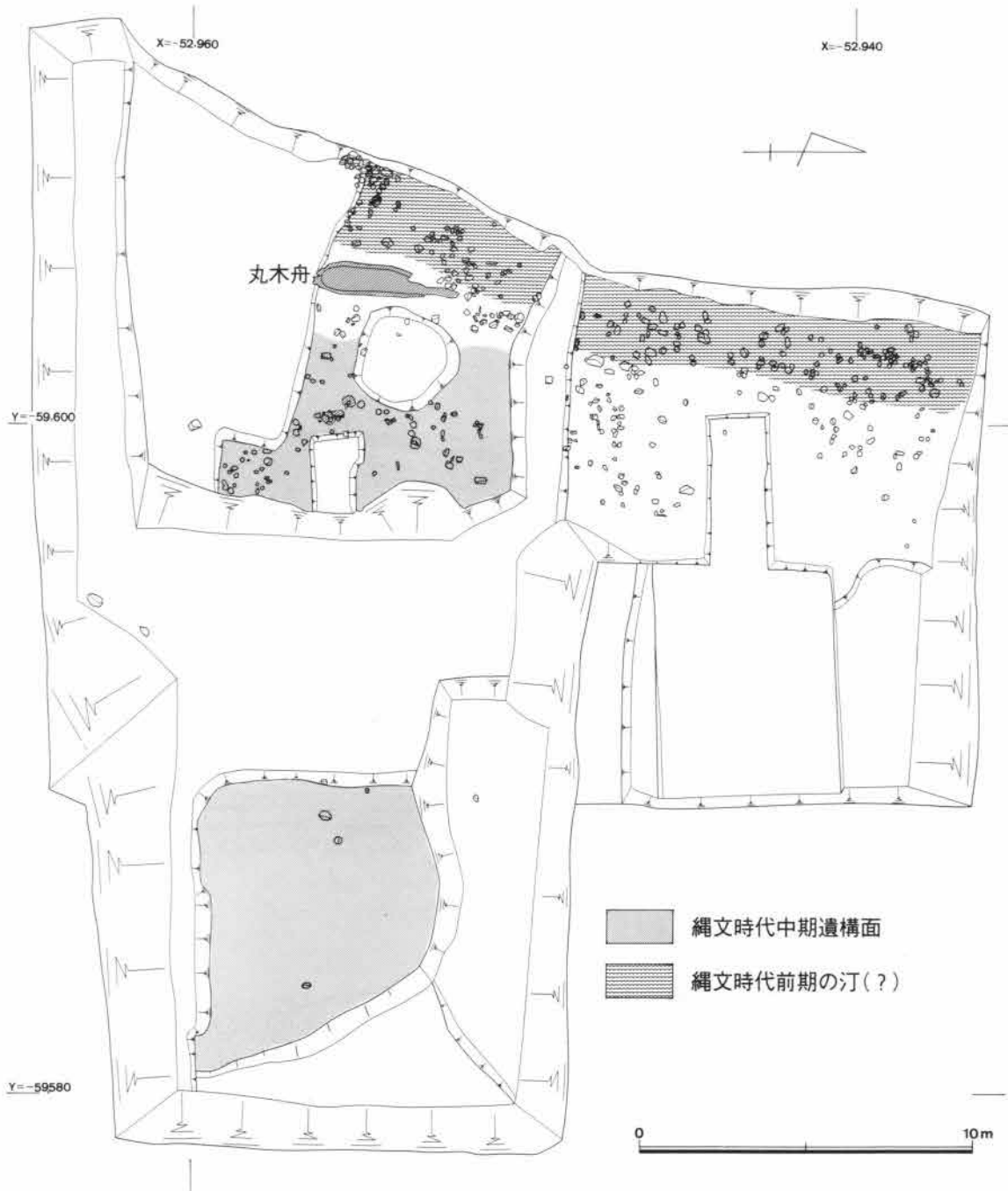
### ( 3 ) R 地点 の 調 査

#### 1. 調査経過

R 地点は浦入遺跡のなかでも南西端に当たり、地元では「松ヶ崎」と呼ばれる砂嘴の付け根部分に位置する。この海にのびる砂嘴の部分は、平成7年度に発掘調査を実施した嶋遺跡(M地点)と隣接した位置にあり、嶋遺跡が立地する砂嘴の形成を考える上で重要な地点である。R 地点の調査では、平安時代の製塩遺跡や弥生・縄文時代の遺構・遺物の検出を想定して、舞鶴市教育委員会が平成9年度に試掘調査を実施した。試掘調査では、製塩遺構あるいは弥生時代の遺構は検出できず、表土下約20cmで縄文時代の包含層を検出し、この地点が縄文時代の遺物が密集する地点であることが明らかとなった。

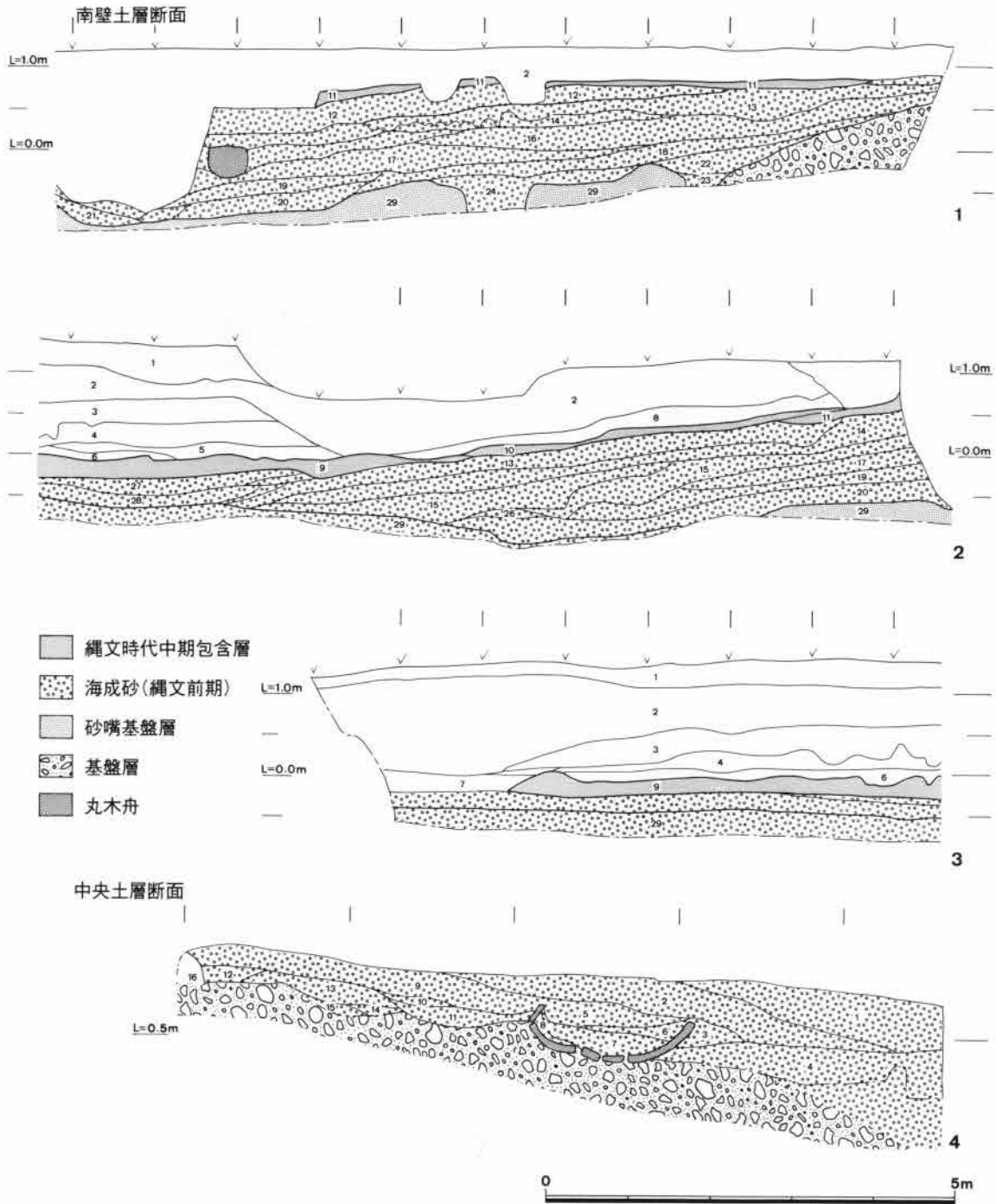
このため舞鶴市教育委員会では、平成9年度事業として、新たに当調査研究センターにR 地点の発掘調査の依頼があり、舞鶴市教育委員会が試掘を行った地点を含めて、約650㎡の発掘調査を当調査研究センターが実施した。

発掘調査では、試掘調査の結果を踏まえて、縄文時代の包含層の広がり<sup>(注3)</sup>と縄文時代の遺構の検出に努めるとともに、砂嘴の形成を明らかにするため、一部縄文包含層の下層まで掘削して調査



第8図 R地点遺構配置図

を行った。試掘調査で検出した縄文時代の包含層の広がり、後述するように、調査地西端から東へ10mの範囲までである。その東側については内海の堆積層があり、その北側では明治時代の発電所の基礎部分によって削平を受けたために、包含層が検出できず、包含層の範囲については明らかにできなかった。調査は縄文包含層の検出の後、一部その下層の海成砂層を掘り下げたところ、それに埋没するような状況で丸木舟を検出した。この砂層は厚さ約1.5mにわたって堆積している。この中には、後述するように縄文時代前期後半の土器を少量含んでいることも明らかとなった。また海成砂層の下部では、砂嘴を形成する基盤層を一部検出した。そのため、当初の調査期間を一部変更し、平成9年11月26日～平成10年2月末日までの3か月を要した。



第9図 R地点土層図

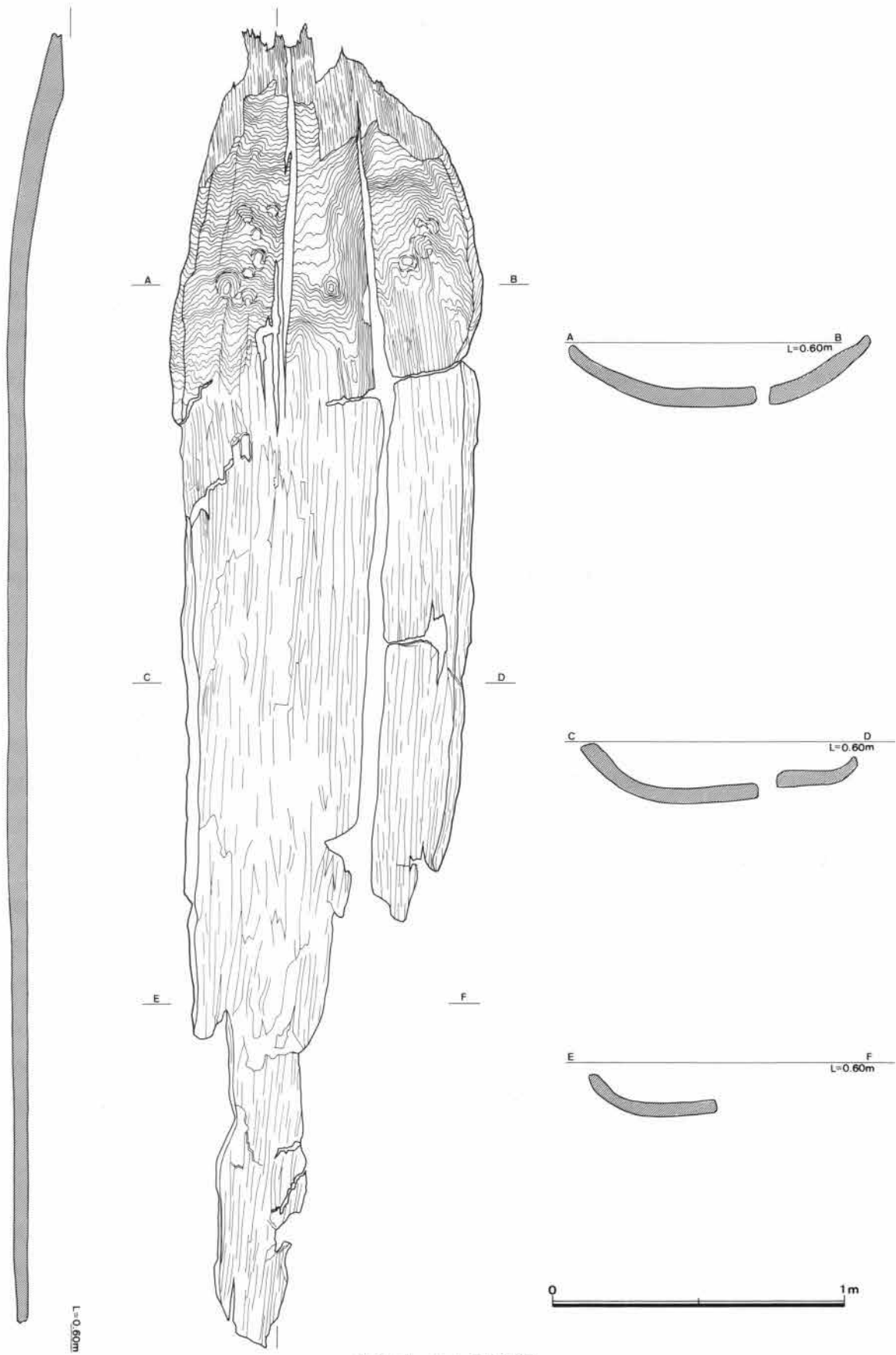
R地点調査トレンチ南壁土層断面図(1~3)

1. 耕作土 2. 茶褐色粘質土 3. 暗茶褐色細砂 4. 褐色細砂 5. 暗褐色砂礫 6. 明褐色砂礫 7. 黒灰色泥炭  
 8. 明黄灰色砂 9. 黒灰色砂土 10. 暗茶褐色砂(縄文中期遺物包含層) 11. 暗茶褐色粘砂質土(縄文中期包含層)  
 12. 暗黄褐色砂 13. 暗茶褐色砂土 14. 暗黄灰色砂 15. 暗灰色砂土 16. 黄灰色砂土 17. 灰色砂土  
 18. 灰色砂土 19. 暗灰色砂土 20. 黄灰色砂礫土 21. 黄灰色土 22. 黄灰色砂土 23. 暗黄褐色砂土  
 24. 灰色砂礫土 25. 濁暗灰色砂土 26. 暗灰色砂土 27. 褐色砂礫土 28. 暗青灰色粗砂 29. 黒灰色砂土

R地点丸木舟埋没状況土層断面図(4)

1. 青灰色砂土 2. 灰色砂土 3. 灰色砂土 4. 橙灰色砂土 5. 黄灰色砂土 6. 灰白色砂土 7. 淡灰色砂土  
 8. 青灰色砂土 9. 橙灰色砂土 10. 橙灰色砂土 11. 灰色砂土 12. 橙灰色土 13. 橙色砂土 14. 褐色砂土  
 15. 橙色混礫砂土 16. 褐色粘質土 17. 橙灰色砂土





第10図 丸木舟実測図

## 2. 土層の堆積状況

調査地は海浜部に隣接しており、トレンチ上面の標高は1.3mを測り、最終の重機掘削では標高-4mまで掘削して基盤層を追いかけた。その結果、トレンチ西端から13mまで検出したものの、それよりも東側では重機掘削でも危険なため、未検出である。試掘調査で検出した縄文時代の包含層は、発掘調査の結果、縄文時代中期の土器を主体とするもの(暗茶褐色粘質土)であり、標高0.0~0.8mにかけて厚さ10~30cmで堆積しており、トレンチ西半分では陸化した土壌であるが、トレンチ東半分では波打ち際の湿地化した状況を表している。包含層の下層は、基本的には波打ち際あるいは海面下を表す海成砂が1m以上堆積しており、一部ラミネート化した砂層や生息した貝が吹き出した柱跡もある。この海成砂の中には少量であるが縄文時代前期の土器が含まれている。なお、後述する丸木舟は、標高0.5m付近で、海成砂である黄灰色砂に埋没した状況で検出された。丸木舟が埋没した時期に、標高何mまでが海面であったかは不明である。29層の黒灰色砂土はその上面の海成砂とは異なって外海から徐々に堆積したものであり、嶋遺跡の立地する砂嘴の基盤層と思われる。このように、R地点の断面土層の観察によると、29層の堆積した時期には標高-0.5m以下まで陸地化していたが、縄文時代前期後半には海面が標高0.5m以上まで上昇し、さらに縄文時代中期には標高0.0m付近が海面であったことがうかがえる。縄文時代の海進・海退の状況をそのまま示すことが明らかとなった。

## 3. 検出遺構

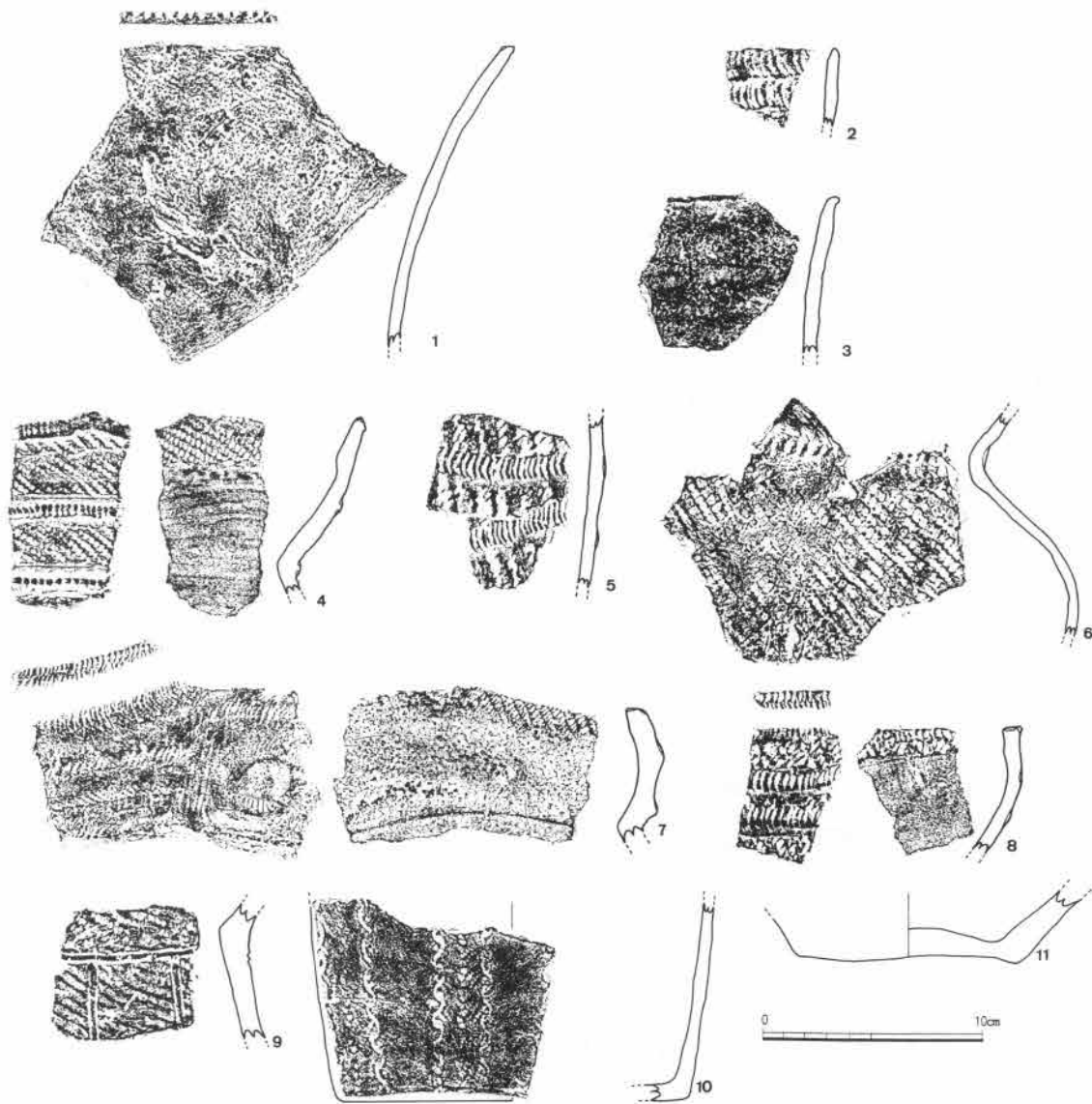
R地点の調査では、竪穴式住居跡や墓を思わせるような明確な遺構は検出できなかった。

当初の舞鶴市教育委員会の試掘調査で検出した、縄文時代包含層(縄文時代中期)の直下(標高0.5m付近)で磨石・石皿・碇石や杭を検出したが、明確な遺構は検出できなかった。縄文包含層下の海成砂の中からは、先述したように、縄文時代前期の遺物を少量出土するとともに海に埋没したかのような状況で触先を南(外海)にむけて丸木舟を検出した。

丸木舟は、一部破損したり、腐っている部分もあるが残りは良く、全長約5.0m・幅1.1mを測り、これまでにみつまっている丸木舟の中でも大型のもので、浦入遺跡が立地している位置を考え併せると、外洋へこぎだした舟の可能性が高いと考えられる。丸木舟の材質はスギ材で、C<sup>14</sup>年代はB. P. 5270±90という結果がでている。なお、現在丸木舟は保存処理中であり、前述の丸木舟の計測値も現地調査時の数値であり、保存処理後の復元作業の結果で、幅・深み・厚みについては前後するものと思われる。(石井清司)

## 4. 出土遺物

1は、外反する口縁部形態を呈し、口縁端部内側を刻む。外面は、磨減及び鉄分の付着が著しいが、縄文が施文されているのが確認できる。北白川下層Ⅱ a式に相当する。2は、口縁端部を丸く成形し、外面には、上下にほぼ均等な深さのC字形爪形文を施文する。爪形文の形状より北白川下層Ⅱ b式に相当する。3は、無文土器の口縁部片で、やや外反する口縁部形態を呈する。内外面はナデ調整されている。4は、口縁端部内外面に粘土紐を貼り付け、外側に刻みを、内側にLR縄文を施文する。口縁内側の縄文帯は、段を成す。外面は、RL縄文地にΣ状工具による



第11図 浦入遺跡R地点出土縄文土器実測図

刻みを施した突帯を持つ。前期末の大歳山式に相当する。5は、外面に節の中にシワの見られない特殊な縄文を施し、極めて低い突帯上にC字形爪形文を施文する。鷹島式に相当する。6は、胴上部が張り、一旦くびれて口縁部へと続く器形を呈する。くびれ部には極めて低い突帯を貼り付け、その上部に1cm前後のC字形爪形文を施文する。7は、上部が破損しているが、波頂部になると推定できる部分に円孔が穿たれる。その円孔下に円形を呈する隆帯を持つ。また、1.8cm前後のC字形爪形文が施されている。内面には、RL縄文を施文する縄文帯を持つ。8は、RL縄文地に極めて低い突帯を貼り付け、突帯上に1cm前後のC字形爪形文を施文する。内面にRL縄文帯を確認できるが、4のように段は成していない。9・10は、胎土や雰囲気がやや異質な土器である。9は、中部・関東地方の前期末の土器群に類似する。10は、円筒形を呈する胴部へと続く平底の底部で、内外面及び底面は丁寧にナデられている。外面には、結節縄文でS字状の連続文が施文される。石川県真脇遺跡出土の第7群ないし8群土器に類似するものがある。前期末

～中期初頭に位置づけられる。11は器厚が厚く、底径約9cmを測る。やや凹み底形を呈する。中期の船元式の底部と考えられる。(和泉大樹)

### 3. おわりに

平成9年度浦入遺跡群では、A・O・R地点を対象として調査を実施し、上述したような重要な成果を得ることができた。以下、今回の調査成果の要点を列挙しまとめたい。

A地点では、テラス状遺構・掘立柱建物跡などの遺構と須恵器・土師器などの遺物を多数検出した。テラス状遺構には製塩土器やフイゴ羽口を含むものがあり、これらは製塩や鍛冶の工房跡と推定される。すでに記したように、隣接するN地点においても工房群とみられる同様の遺構群が検出されていることから、両地点は一連のものである可能性が高まった。

O地点は臨海部に位置し、地点の立地する丘陵の裾部にあたる。この地点は便宜上、北半をO-1地点、南半をO-2地点と呼称して調査にあたった。O-1地点は奈良時代から平安時代の海岸線と製塩炉跡、鍛冶炉跡を検出した。海岸部は広く緩やかな浜が形成されていたことがわかった。炉跡は海岸を望む段丘上に作られていた。O-2地点では丘陵斜面を削るなど大規模な造成作業を施して造られた、平坦な遺構面を確認した。この面には焼土・炭灰・製塩土器が厚く堆積しており、主に、製塩作業を目的とした造成面であることがわかった。製塩土器は独立支脚を有する時期のもので、若狭地域で言う傾式・吉見浜式・塩浜式にあたる。地床炉とみられる焼土のまわりに石敷炉が配置されるという構造を有しており、製塩作業工程を反映する遺構として注目される。遺構面の造成は奈良時代前半に始まり、整地を繰り返しながら平安時代後期にかけて製塩作業場として断続的に利用された。製塩は浦入湾岸全体に及ぶ大規模なものとなった。多数の鍛冶炉跡も残されており、製塩作業の休止期に鍛冶を行っていたことも明らかとなった。

R地点は、縄文土器や縄文時代の泥炭層を確認したM地点の位置する砂嘴(松ヶ崎)の基部にあたる。試掘で縄文土器片や炭が出土したことから、縄文時代の生活痕跡の有無を確認するために発掘調査した。調査の結果、縄文時代前期に堆積した砂層から縄文時代前期後半～末にかけての土器片とともに、丸木舟が出土した。丸木舟は海岸に打ち上げられたような状態であり、付近から杭や礎石などもみつかったことから、船着き場の跡と考えている。浦入遺跡群の調査は本年度で終了した。今後、一定の整理期間の後、報告書刊行の予定である。舞鶴市教育委員会の調査成果と合わせ、遺跡群の評価を行っていききたい。(田代 弘)

注1 (敬称略、順不同)和泉大樹・伊藤栄二・大洞真白・岡田憲一・加納幸正・谷後恒美・植本順子・萩谷良太・福田和浩・水野聡哉・谷口成美・中村ひろみ・真下春美

注2 筒井崇史・植本順子「竪穴式住居内に煙道を有するカマドについて—浦入遺跡における調査事例から—」(『京都府埋蔵文化財情報』第65号 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1997

注3 田代 弘「12世紀の土器製塩炉跡」(『京都府埋蔵文化財情報』第69号 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1998

## 2. 棕ノ木遺跡平成9年度発掘調査概要

### 1. はじめに

この調査は、木津川上流浄化センターの建設にともない、京都府土木建築部の依頼を受けて実施した。浄化センターの敷地は約10万 $\text{m}^2$ におよび、遺跡の大半が含まれる。調査は、工事計画にしたがって各施設の建設予定地点に、平成7年度から順次トレンチを設定して行った(第13図)。

平成7・8年度の調査では、平安時代後期から南北朝時代にかけての集落関連の遺構が多数検出された。この成果については、平成9年度に報告を行った<sup>(註1)</sup>。

平成9年度は、平成8年度までの調査成果や工事計画等を考慮した協議の結果、平成8年度に試掘調査を行った水処理施設建設予定地内の4-1トレンチと4-5トレンチの一部を拡張する調査、平成8年度に試掘調査を行った電気棟および管廊建設予定地内の新たな試掘調査(3-2トレンチ)、第2ポンプ棟建設予定地の試掘調査(6トレンチ)、および、汚泥濃縮棟建設予定地内の試掘調査(7トレンチ)を行った。

このうち、4-1トレンチ拡張区は、旧浜道に想定されている相楽郡条里の里の境界線と坪の境界線との交点付近をねらって設定し、4-5トレンチ拡張区は、平成8年度の調査で検出された溝状遺構の南肩に対応する北側の肩を検出することを想定して設定したものである。また、3-2トレンチは、平成8年度に試掘調査を行った電気棟建設予定地の東側および北側に、管廊などの構造物が建設されることが判明したために、これら構造物の建設予定地の北辺に沿って新たに設定したものである。

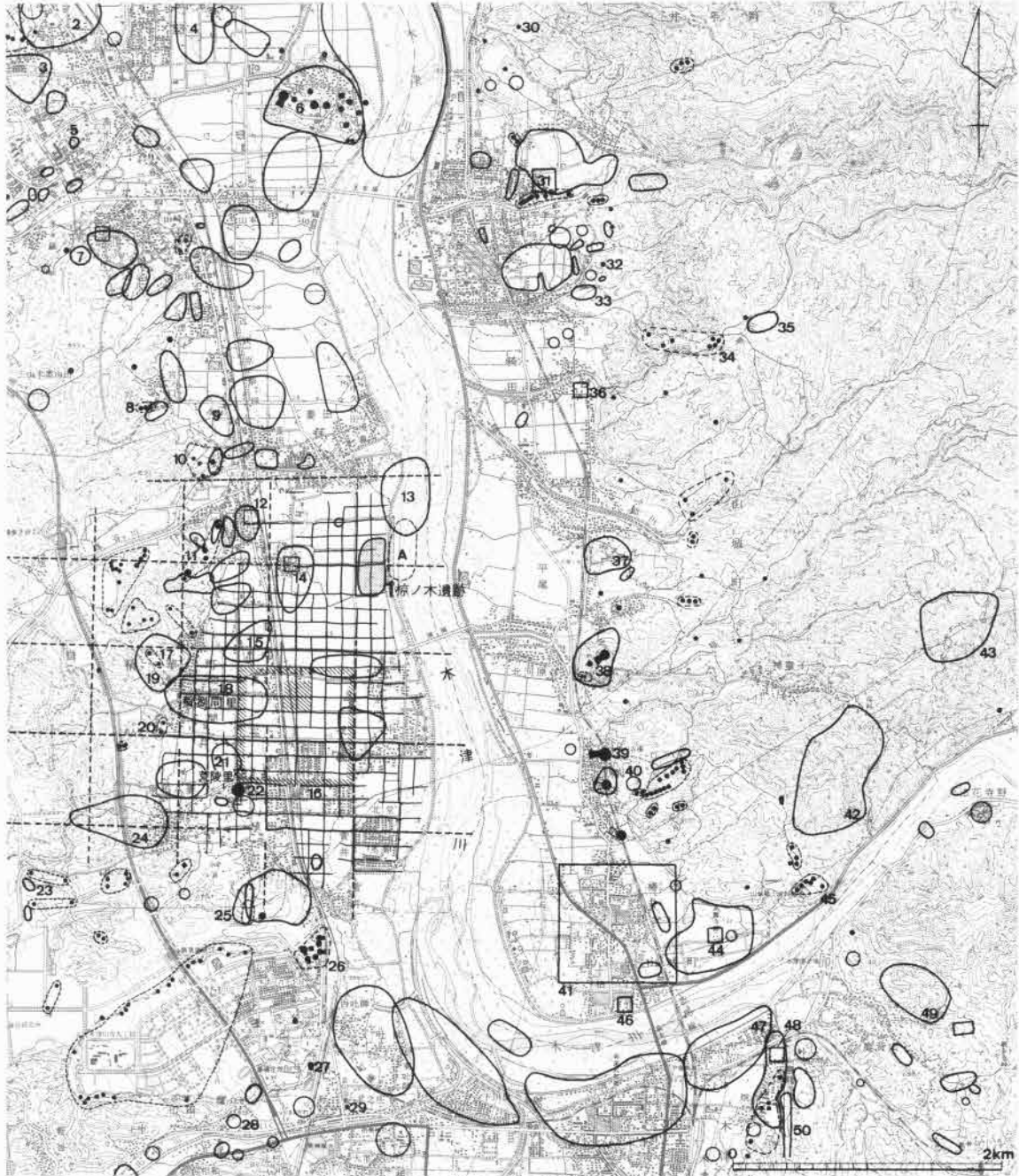
試掘調査の結果、6トレンチでは地境を示す畦や溝と耕作溝が検出され、周辺が耕作地であることが判明し、3-2トレンチと7トレンチでは顕著な遺構が多数検出された。協議の結果、3トレンチと7トレンチについては調査区を拡張して調査を行うことになった。

現地調査は平成9年度で終了し、平成10年度に、平成9年度調査分の整理報告を行うことになった。調査および整理報告に要した経費は、京都府が負担した。

調査期間は平成9年5月6日から平成9年11月7日までで、調査面積は約2,850 $\text{m}^2$ である。

### 2. 位置と環境

棕ノ木遺跡は木津川左岸の堤防に隣接する微高地上に立地する(第12図)。調査地は、調査着手直前は雑草の生い茂る荒れ地となっていた。しかし、浄化センター建設のための用地買収が行われるまでは、西半部は水田、東半部は畑であった。精華町域は東端を北に流れる木津川左岸の沖積平野が低く、西の丘陵に向かって高くなる地勢を示すが、調査地は自然堤防上に立地しているため、木津川左岸堤防を除けば、調査地東半部の畑が調査地付近で最も標高が高く、調査地西半

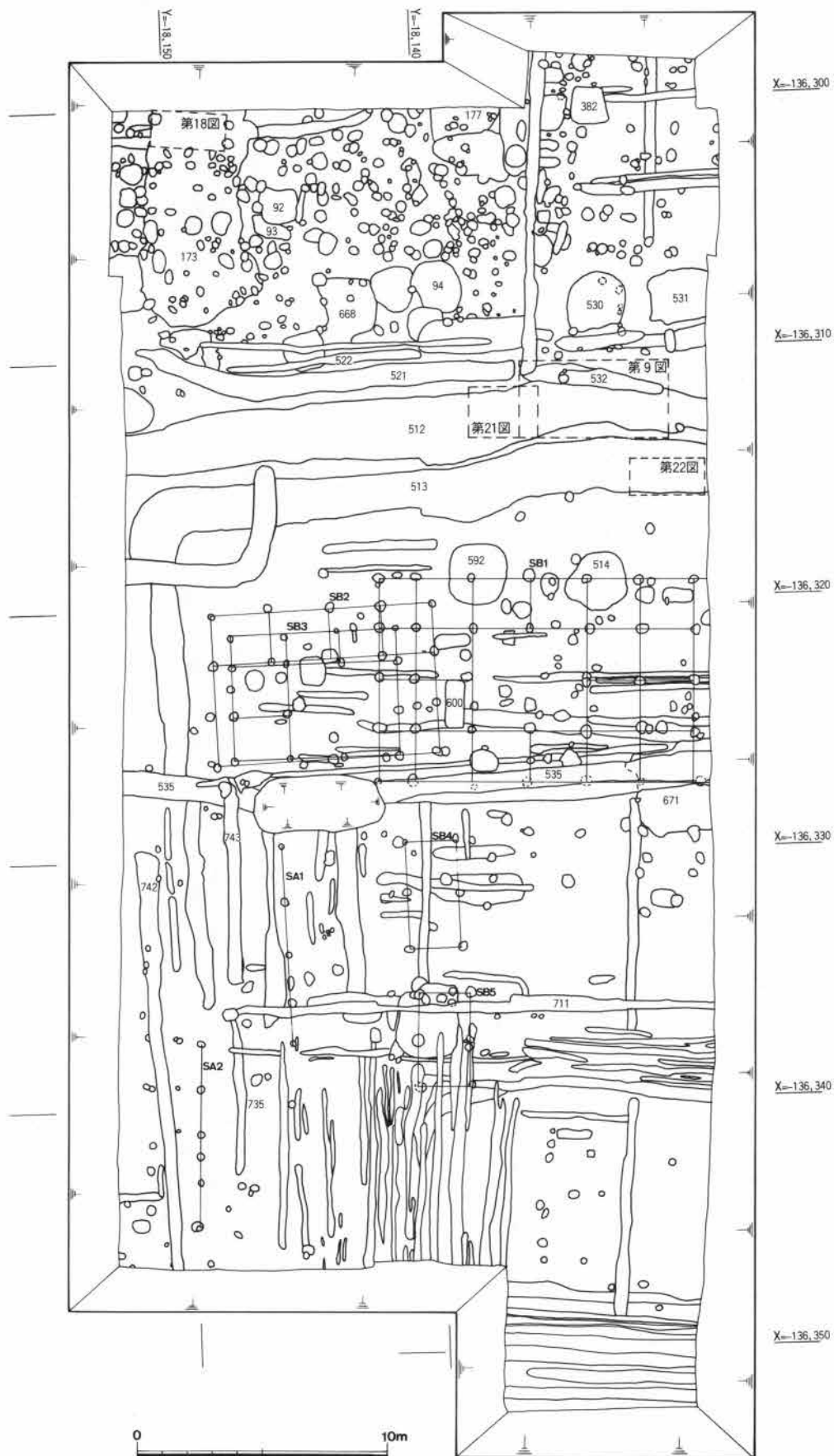


第12図 調査地位置図(周辺遺跡分布図) (1/50,000)

- |                   |               |                 |                    |
|-------------------|---------------|-----------------|--------------------|
| 1. 棕ノ木遺跡          | 2. 興戸遺跡(興戸廃寺) | 3. 興戸宮の前遺跡      | 4. 草路城跡            |
| 5. 天神山遺跡          | 6. 飯岡遺跡・飯岡古墳群 | 7. 口駒ヶ谷遺跡       | 8. 宮ノ口古墳群          |
| 9. 宮ノ口遺跡          | 10. 平谷古墳群     | 11. 鞍岡山古墳群      | 12. 下狛廃寺           |
| 13. 百久保地先遺跡       | 14. 里廃寺       | 15. 柿添遺跡        | 16. 山城国府推定地(奥田裕之案) |
| 17. 城山古墳群         | 18. 北稲遺跡      | 19. 城山遺跡(北大城遺跡) | 20. 国名平古墳群         |
| 21. 北尻遺跡          | 22. 丸山古墳      | 23. 煤谷川遺跡       | 24. 稻八妻城跡          |
| 25. 畑ノ前遺跡(畑ノ前古墳群) | 26. 吐師七ツ塚古墳   | 27. 白山古墳        | 28. 樋ノ口遺跡          |
| 29. 藤原百川墓伝承地      | 30. 平山古墳      | 31. 井出寺跡        | 32. 南大塚古墳          |
| 33. 鳥休遺跡          | 34. 車谷古墳群     | 35. 光明山寺跡       | 36. 蟹満寺            |
| 37. 湧出宮遺跡         | 38. 平尾城山古墳    | 39. 椿井大塚山古墳     | 40. 松尾神社(松尾廃寺)     |
| 41. 山城国府推定地(木下良案) | 42. 高之林城跡     | 43. 鷺城跡         | 44. 高麗寺跡           |
| 45. 千両岩古墳群        | 46. 泉橋寺       | 47. 上津遺跡        | 48. 燈籠寺廃寺          |
| 49. 鹿背山城跡         | 50. 鎌ヶ谷遺跡     |                 |                    |



第13図 トレンチ配置図(1/2,500)

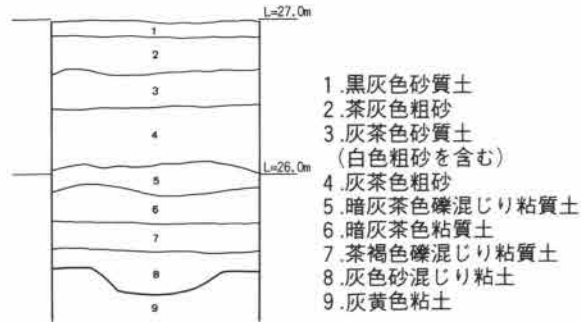


第14図 3トレンチ遺構平面図(1/250)



部の水田も、調査地西側の氾濫平野に展開する水田に比べれば標高が高い。

遺跡の周辺には1辺約109mの方格地割りが認められ、相楽郡条里の残存遺構と考えられている。遺跡は、相楽郡条里の北東端付近に位置し、遺跡の中央部を東西に横切る通称浜道を境に里が異なる。



第15図 3トレンチ基本土層図(1/50)

### 3. 検出遺構

#### (1) 3トレンチ(第14図)

**層序(第15図)** 3トレンチの基本的な層序は昨年度までに調査した調査区と同様である。耕作土である黒灰色砂質土の下には茶灰色粗砂、灰茶色砂質土、灰茶色粗砂と砂質の土層が続く。灰茶色砂質土には多くの白色の粗砂ないし小礫を含み、洪水によってもたらされたものと考えられる。以下は粘質の土層に変わり、暗灰茶色礫混じり粘質土、暗灰茶色粘質土、茶褐色礫混じり粘質土が堆積している。この下に、遺物を多く含む灰色粘土層があるが、この層は場所によってはみられない。遺構は灰黄色粘土の上面で検出される。

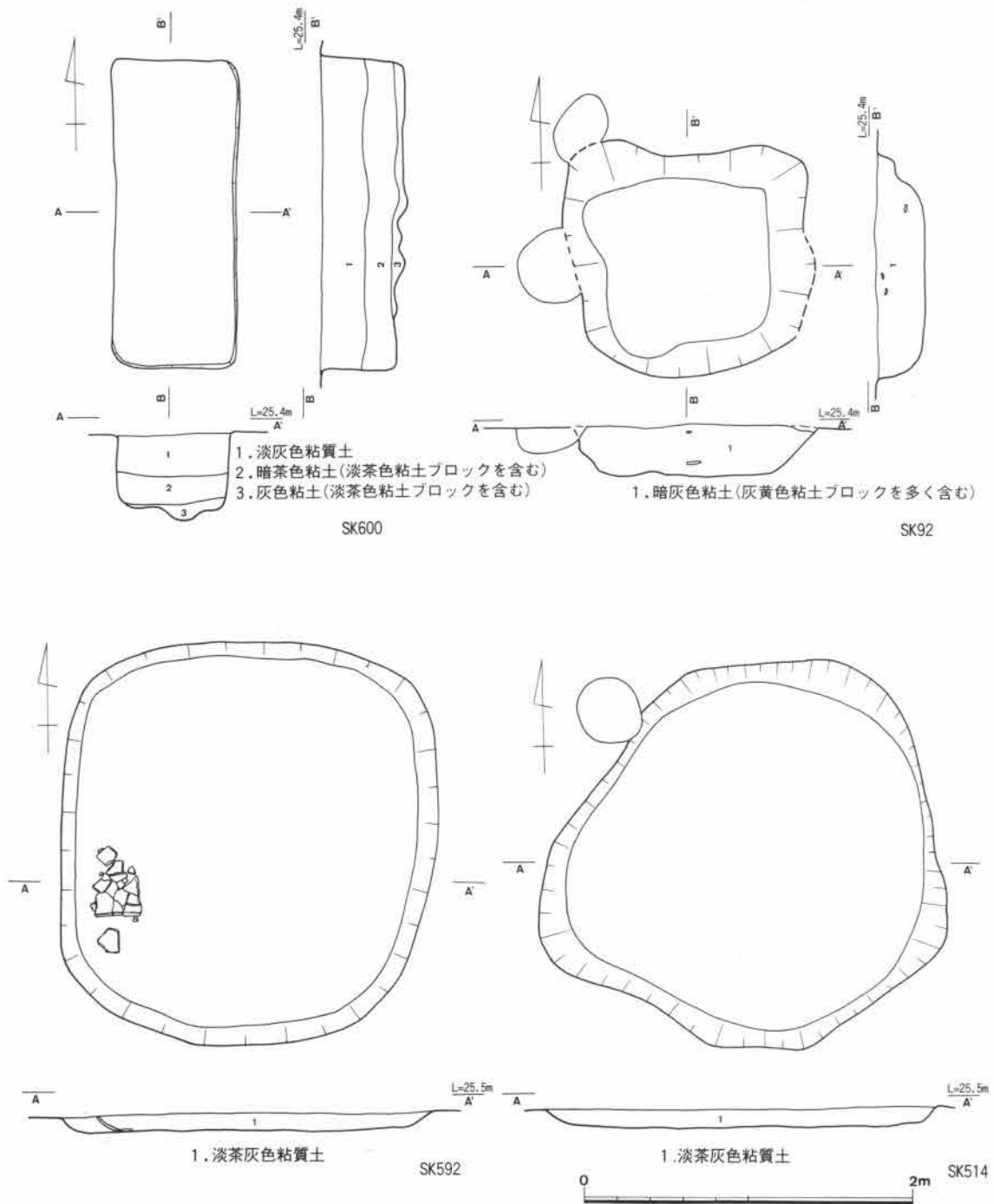
**S K 600(第16図)** 調査区のほぼ中央部で検出した長方形の土坑である。規模は、南北約1.9m・東西約0.7m・深さ約0.4mを測る。土坑の壁はほぼ垂直に掘り下げられており、底部は、やや凸凹が著しい。いったん掘り下げた後、淡茶色粘土をブロック状に含む灰色粘土を底部に貼り付けて底面を整形したのと考えられる。埋土は、人為的に一時に埋められたと考えられる暗茶色粘土と、その後の堆積土と考えられる淡灰色粘質土に分かれる。出土遺物はほとんど無く、時期を決定するのは困難であるが、建物1を構成するピットを切っていることから、13世紀前半頃が上限となる。

**S K 92(第16図)** 調査区北西部で検出した方形の土坑である。南北約1.3m・東西約1.4m・深さ約0.3mを測る。埋土は、灰黄色粘土をブロック状に多く含む暗灰色粘土の単一層である。出土遺物は多いが、破片が多く、12世紀初頭頃から12世紀後半のものまでが混じっている状況から、埋土中に混入したのと考えられる。

同様の遺構には、S K 93・94・95・688などがある。

**S K 592(第16図)** 調査区北東部で検出した、南北約2.5m・東西約2.3mの隅丸方形の土坑である。深さは約0.1mと浅く、底は平坦である。土坑の西辺付近で、約1/2大の土師器羽釜が出土した。埋土は淡茶灰色粘質土の単一層である。建物1を構成するピットに切られており、建物1以前の遺構と考えられる。S K 514との位置関係や形状の類似などからみて、S K 514と同時期の遺構である可能性が高い。

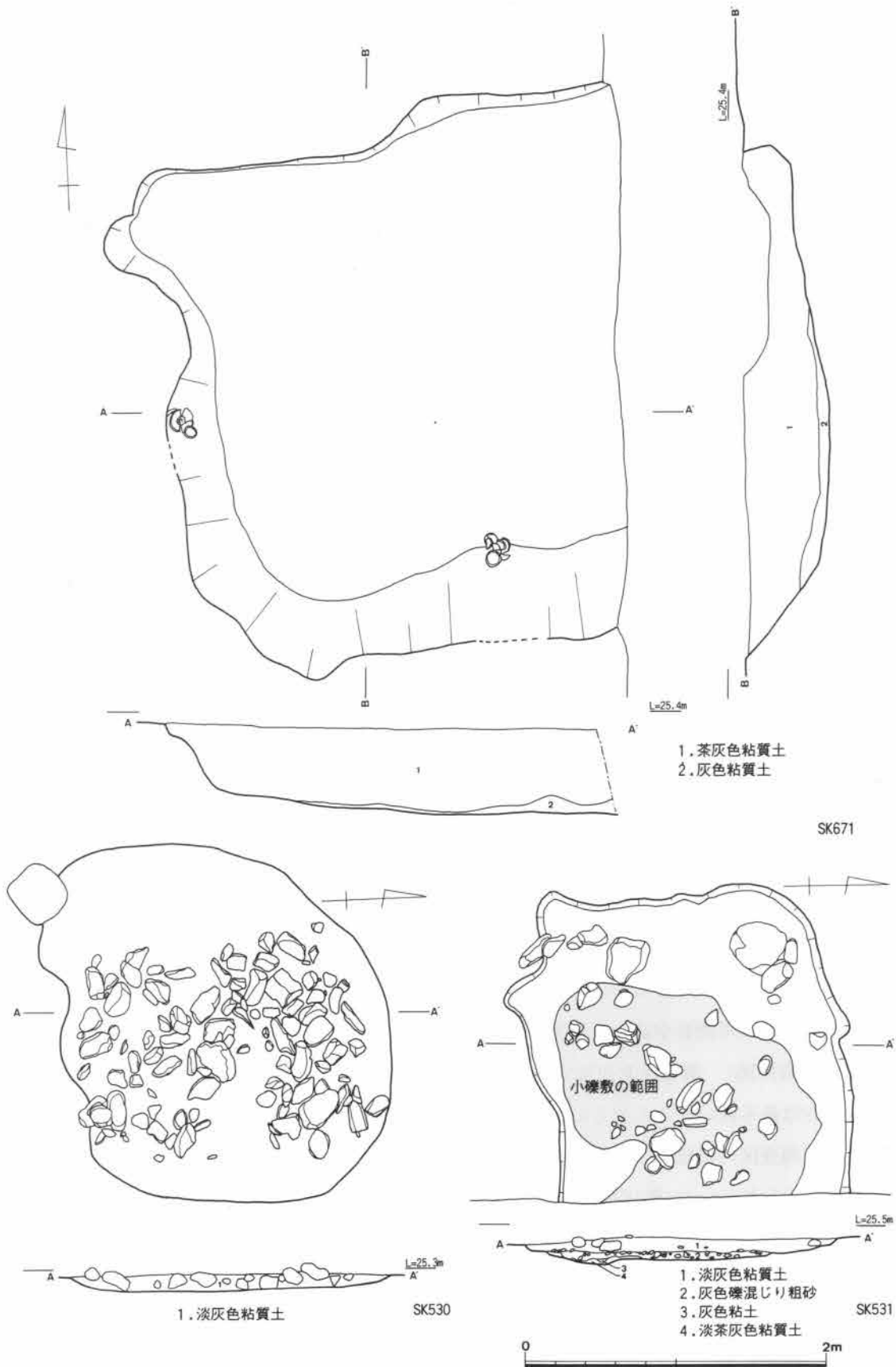
**S K 514(第16図)** S K 592の東約2.5mで検出した。やや不整な形をしているが、遺構の深さ埋土などもS K 592と同一である。土坑は、土器類で埋まっているといっても良いほどの状態で、



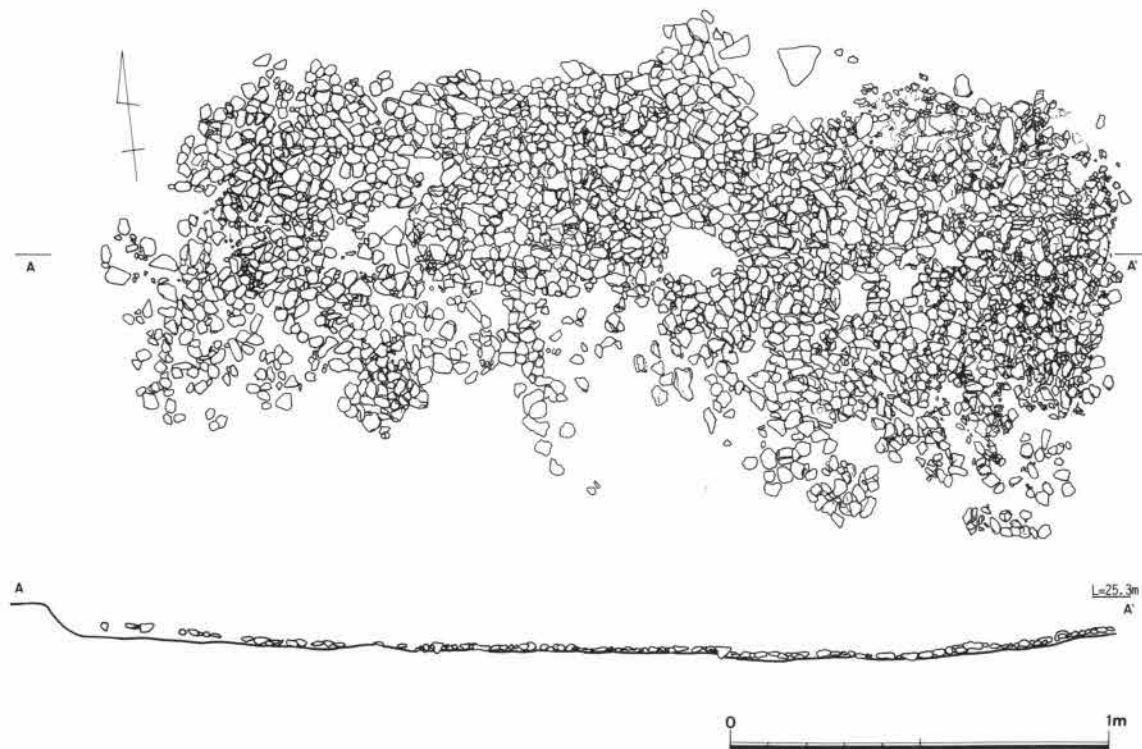
第16図 3トレンチSK600・92・592・514平面図・断面図(1/40)

完形品を多数含む土器類が出土した。特に瓦器皿が目立つ。SK592同様に、建物跡SB1を構成するピットに切られている。12世紀中葉の遺構と考えられる。

SK671(第17図) 調査区東辺中央部で検出した土坑である。東側は調査区外に続くため、全体の形状や規模は不明であるが、南北約3.6m・東西3m以上のやや不整な隅丸方形を呈する。深さは約0.6mを測る。南辺はゆるやかな傾斜で掘り込まれているが、西辺に回るにつれて掘方の傾斜が急になり、北辺ではほぼ垂直になっている。南辺と西辺の検出面に近いレベルで遺物がまとまって出土した。12世紀中葉の遺構と考えられる。



第17図 3 トレンチ S K671・530・531 平面図・断面図(1/40)



第18図 3 トレンチ S K 173 北部石敷き平面図・断面図(1/20)

S K 530(第17図) 調査区北東部で検出した。長径約2.8m・短径約2.0mを測る不整な楕円形の土坑である。深さは約0.1mと浅い。南北約1.9m・東西約1.5mの範囲に、30cm程度以下の礫を多数検出した。礫には敷き並べた様子は見られない。礫に混じって多数の遺物が出土した。14世紀中葉の遺構と考えられる。

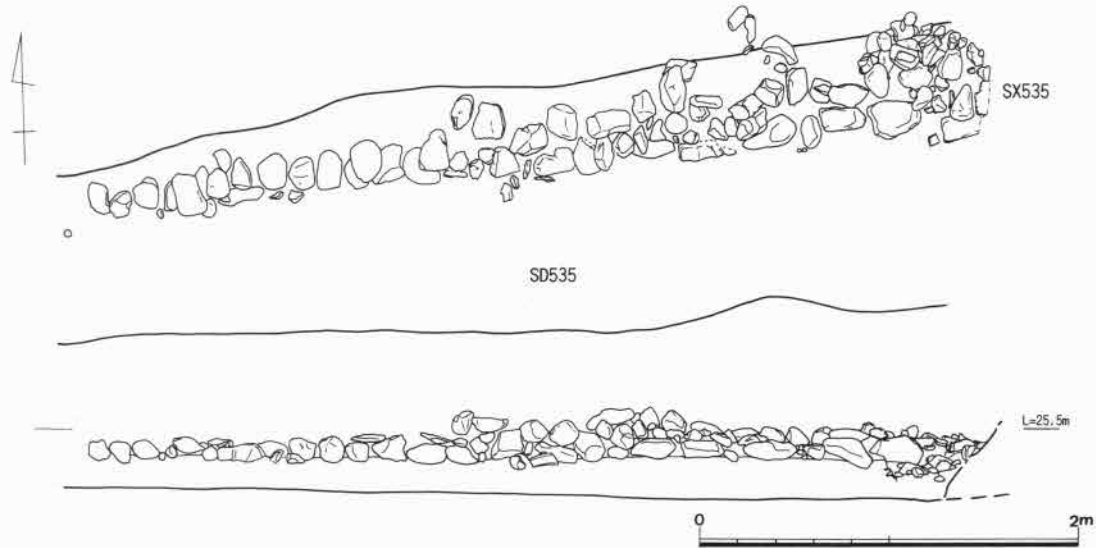
同様の遺構には、調査区北辺中央部で検出した S K 177がある。

S K 531(第17図) S K 530の東側に並んで検出した。東辺を検出していないが、S K 530とほぼ同じ規模と推定される。S K 530よりは数が少ないが、やはり礫を多数検出した。礫を取り除くと底面の中央部には小礫が敷き詰められていた。出土遺物が示す時期は S K 530よりもやや古いが、遺物量そのものが少ないため、上限を示すものと考え、遺構の形状などから S K 530とほぼ同時期の遺構の可能性が高いと考えている。

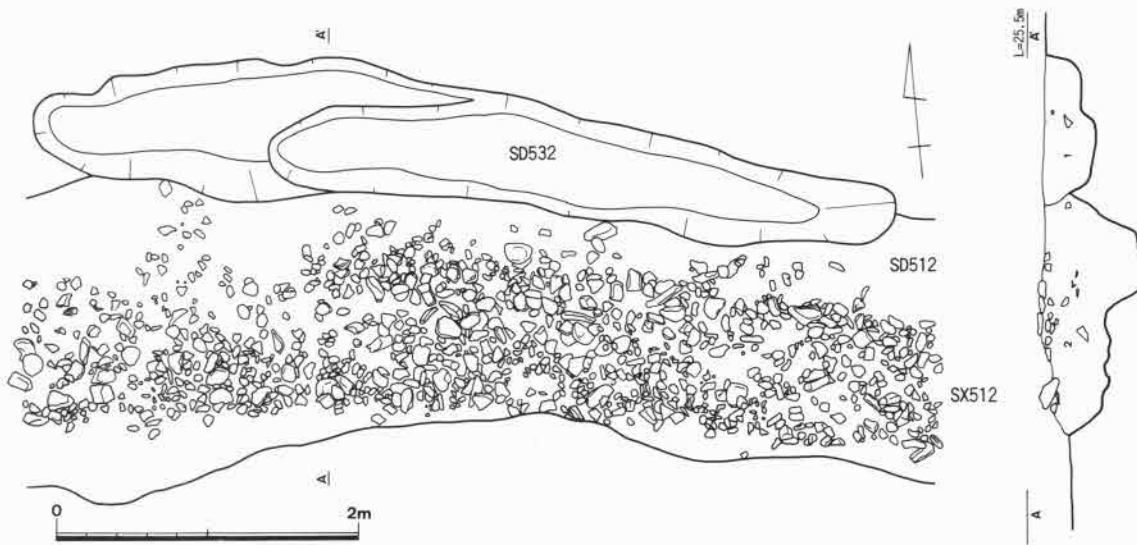
S K 173(第18図) 調査区北西部で検出した。東西4m前後を測る南北に細長い溝状の土坑である。深さは最も深いところでも0.2m程度で、浅い船底状を呈する。南北長約8.5mを検出したが、北側は調査区外に続く。北端部の南北約1.2m・東西2.5mの範囲の土坑底に直径5cm程度の礫が敷き詰められていた(第18図)。13世紀末から14世紀初頭頃の遺構と考えられる。

S X 535(第19図) 調査区中央部を東西に貫くように検出した石列である。S D 535の北肩に沿うように石を並べている。石は長軸を南北方向に揃えて並べられている部分が多い。遺存状態の良い東端部分では、石の南側の面をそろえた1段目の石の上に数段の石が積み上げられていることが分かる。石の間から出土した遺物から14世紀中葉頃の遺構と推定される。

S X 512(第20図) 調査区北部を東西に貫くように検出した礫群である。1.0~2.0m程度の幅



第19図 3トレンチSX・SD535東端部平面図・立面図



第20図 3トレンチSX512・SD512・532平面図・断面図

1.青灰色シルト：SD532 2.暗灰色シルト(淡茶灰色粘土ブロックを含む)：SD512

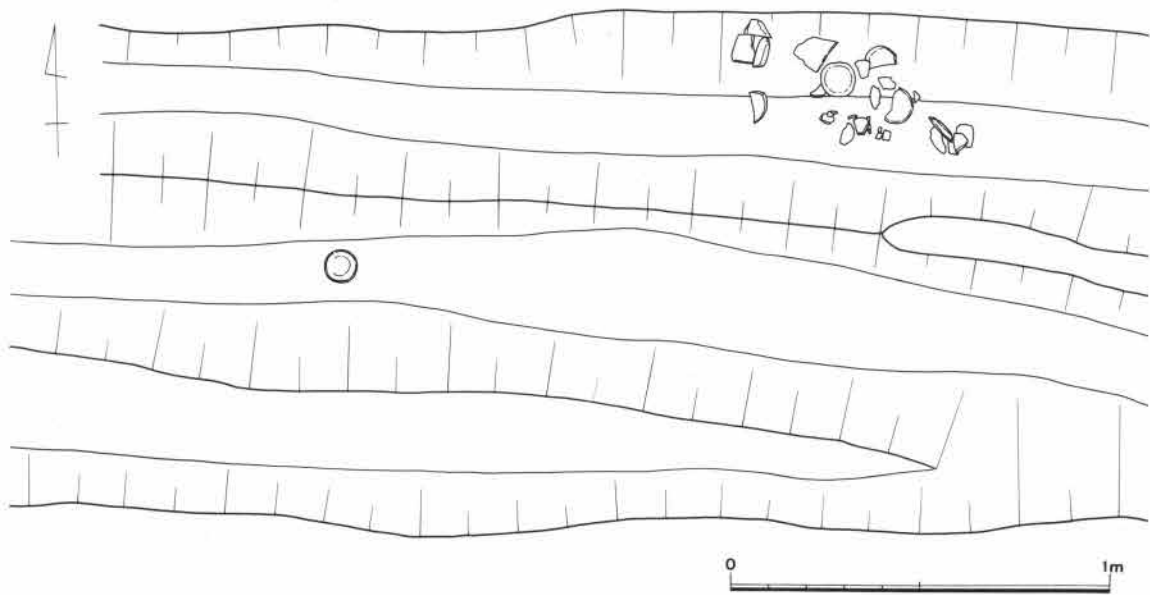
で礫が敷かれている。SX535のように、石を並べた様子はみられない。下層にはSD512があり、この部分の地面が軟弱であったために、石を敷いたものと考えられる。石に混じって瓦や土器などが多量に出土した。14世紀中葉頃の遺構と考えられる。

SD512(第20図) SX512の下層で検出した調査区を東西に貫く溝である。溝は北側が深く、深さ0.6~0.7mを測る。溝底のレベルは東端が西端よりも約0.1m低く、木津川のある東に向かって低くなっている。埋土は暗灰色シルトで、淡茶灰色粘土の小さなブロックを含んでいる。遺物が多量に出土したが、特に、北側の深い部分では集中して出土する地点があった(第21図)。屋敷地を区画する溝と考えられる。12世紀後半の遺構と考えられる。

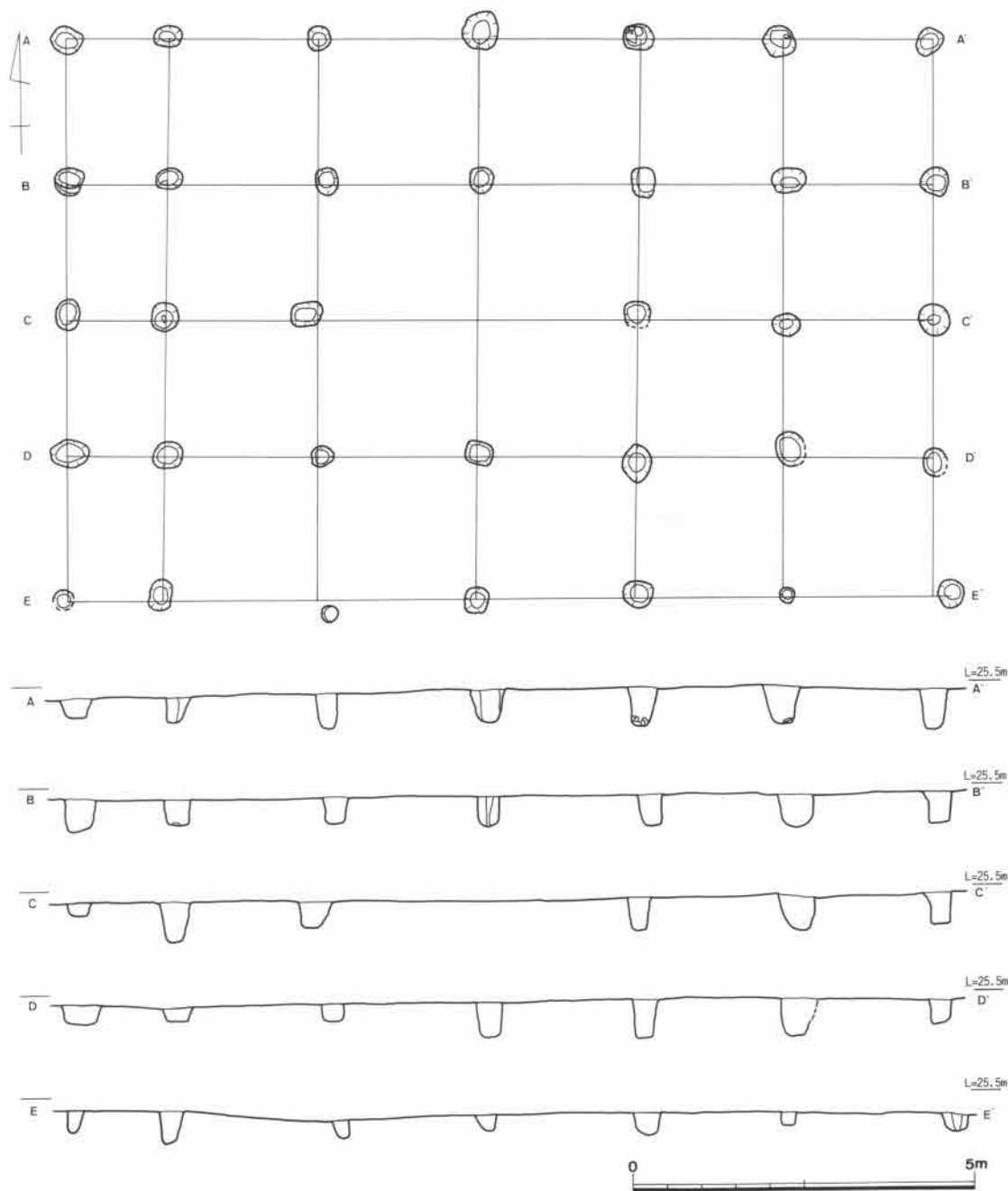
SD513 SD512の南側に平行して検出した溝であるが調査区西端付近で南に曲がり、幅も狭くなって調査区西辺中央部のSD535付近で終わる。溝底のレベルが最も低いのは北西の屈曲部



第21図 3 トレンチ S D512遺物出土状況図(1/20)



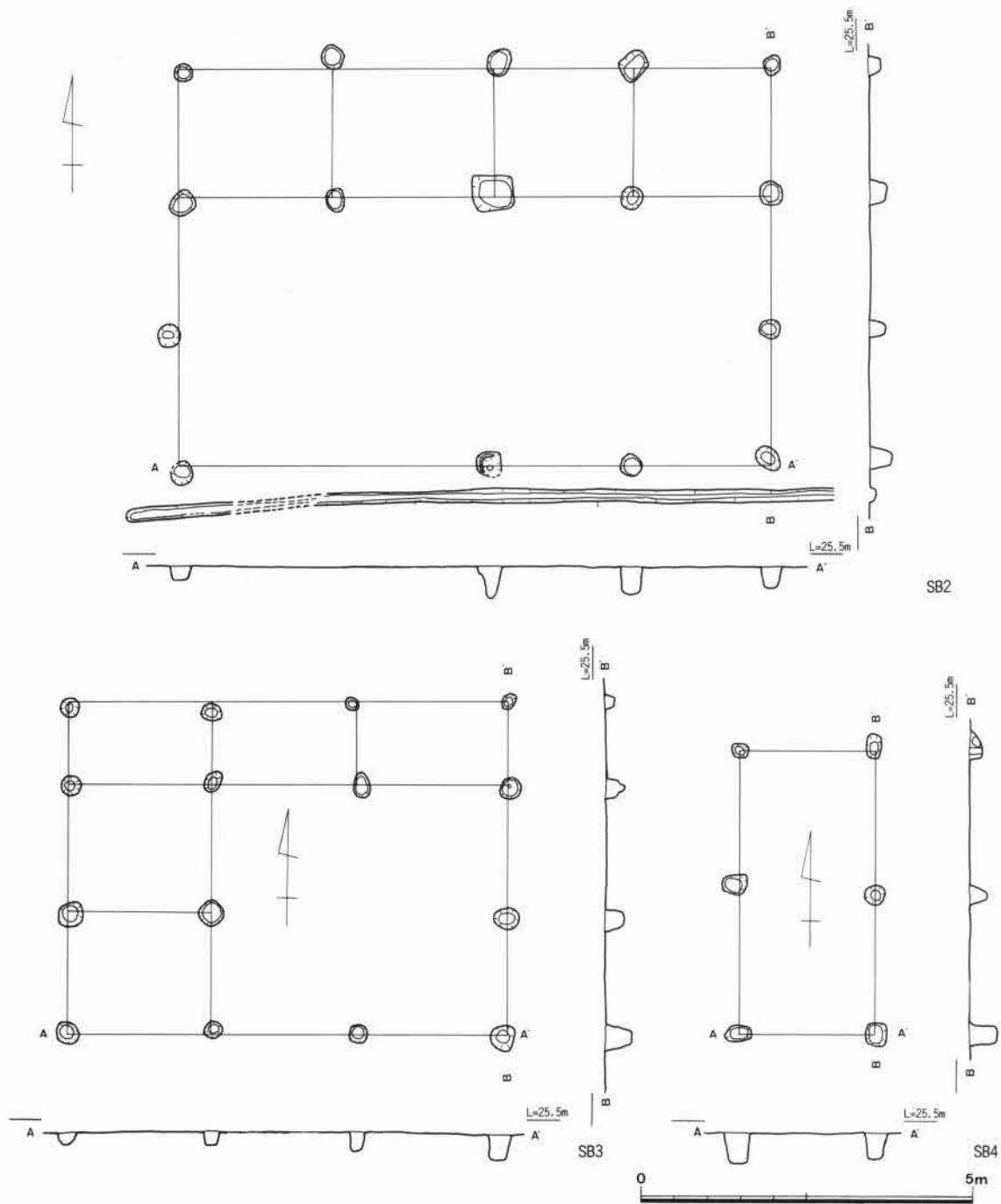
第22図 3 トレンチ S D513遺物出土状況図(1/20)



第23図 3トレンチSB1平面図・断面図(1/100)

分付近くで、深さ0.4m余りを測る。溝の深さは、東端で約0.3m、南端で約0.2mであるので、降水があれば、屈曲部付近に滞水が生じる。溝の東端付近では遺物がまとまって出土した(第22図)。時期はSD512よりもやや新しく、13世紀前葉の遺構と考えられる。

SB1(第23図) 調査区中央部東寄りで検出した大型の掘立柱建物跡である。身舎は南北4間、東西5間以上で、西側に庇が付く。建物の大きさは南北8.2m・東西12.7m以上を測る。柱間寸法は南北が2.1m前後、東西が2.2m前後のほぼ等間で、東西がやや大きい。庇の出は約1.4mである。建物の主軸方向は座標北から東に約2°振っている。総柱の建物であるが、身舎の西から3列目の柱列は北から3番目に当たる位置の柱穴が認められない。



第24図 3トレンチSB2・3・4平面図・断面図(1/100)

柱穴の底には石や瓦を据えたものがみられる。また、庇の北端の柱穴の底には、割れた瓦器碗が重ねて据えられていた。出土遺物から13世紀前葉の建物と考えられる。

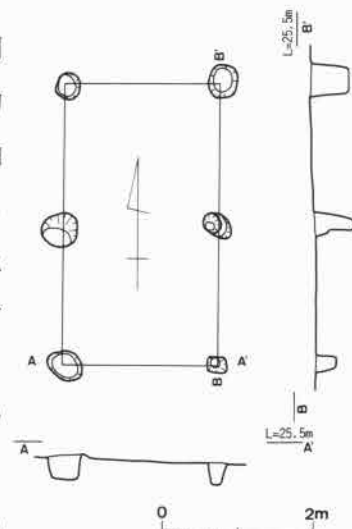
SB2(第24図) SB1の西側で、一部SB1に重なって検出した掘立柱建物跡である。南北3間、東西4間の建物である。北側の1間は庇であるかもしれない。柱間寸法は東西が、西側2間は約2.4m、東側2間は約2.1mで、南北は約2.0m等間である。建物の主軸方向は座標北から西に約2°振っている。建物の南側に沿って雨落ち溝と思われる小溝がある。柱の抜き取り穴に焼けた壁土が詰まった柱穴が認められ、この建物が焼失した可能性も考えられる。SB1よりや



や下がる13世紀前半の建物と考えられる。

**S B 3** (第24図) S B 2と重なって検出した南北2間、東西3間の身舎の北側に庇が付く掘立柱建物跡である。柱間寸法は東西が約2.2m、南北が1.9m前後で、庇の出は約1.3mである。建物の主軸方向は座標北から西に約1°振っている。出土遺物から推定される時期はS B 2よりもやや古いが、数多くの柱の掘形から焼壁が出土しており、S B 2が焼失したとすれば、その後に建て替えた建物である可能性が高い。

**S B 4** (第24図) S B 1の南側で検出した南北2間、東西1間の掘立柱建物跡である。建物の主軸方向は座標北から西に約1°振っている。出土遺物は小破片ばかりで、時期の上限が13世紀後葉であることが分かるのみであるが、S A 1と平行することから、14世紀中葉頃の遺構と推定される。



第25図 3トレンチS B 5  
平面図・断面図

**S B 5** (第25図) S B 4の南側で検出した南北2間、東西1間の掘立柱建物跡である。建物の主軸方向は座標北から東に約2°振っている。出土遺物には実測図(第53図415)を掲げたものよりも新しい瓦器碗があり、建物の時期が14世紀前半以降であることは確実である。

**S A 1** S B 4の西側に約4.9m隔てて平行する南北4間の柵である。主軸方向は座標北から西に約1°振っている。14世紀中葉頃の遺構と考えられる。

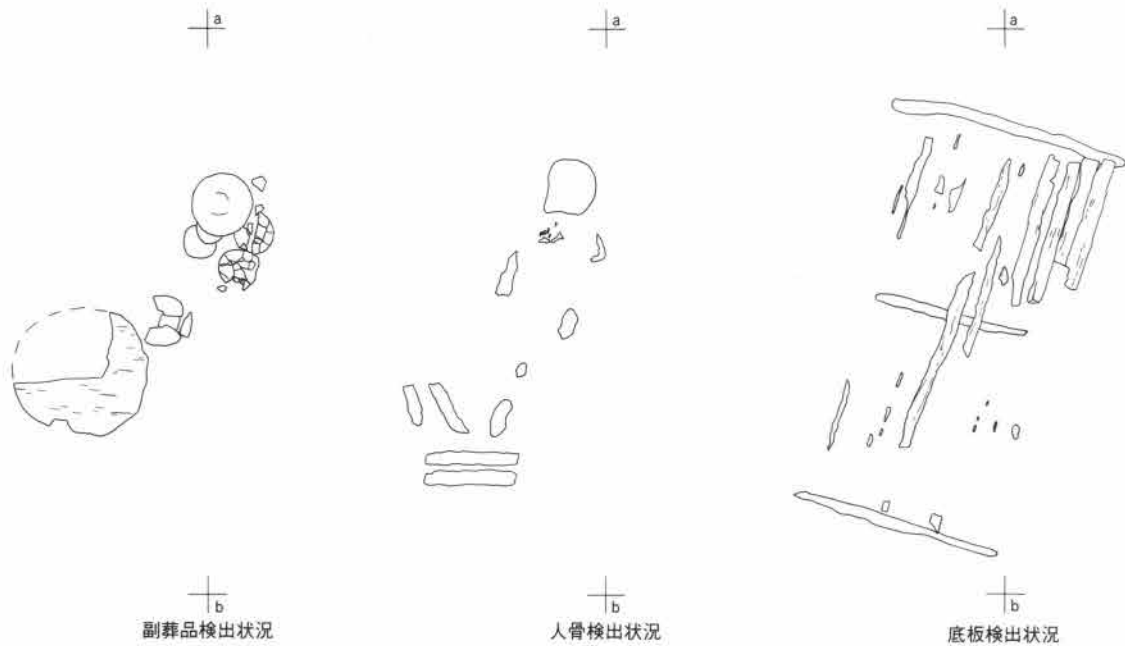
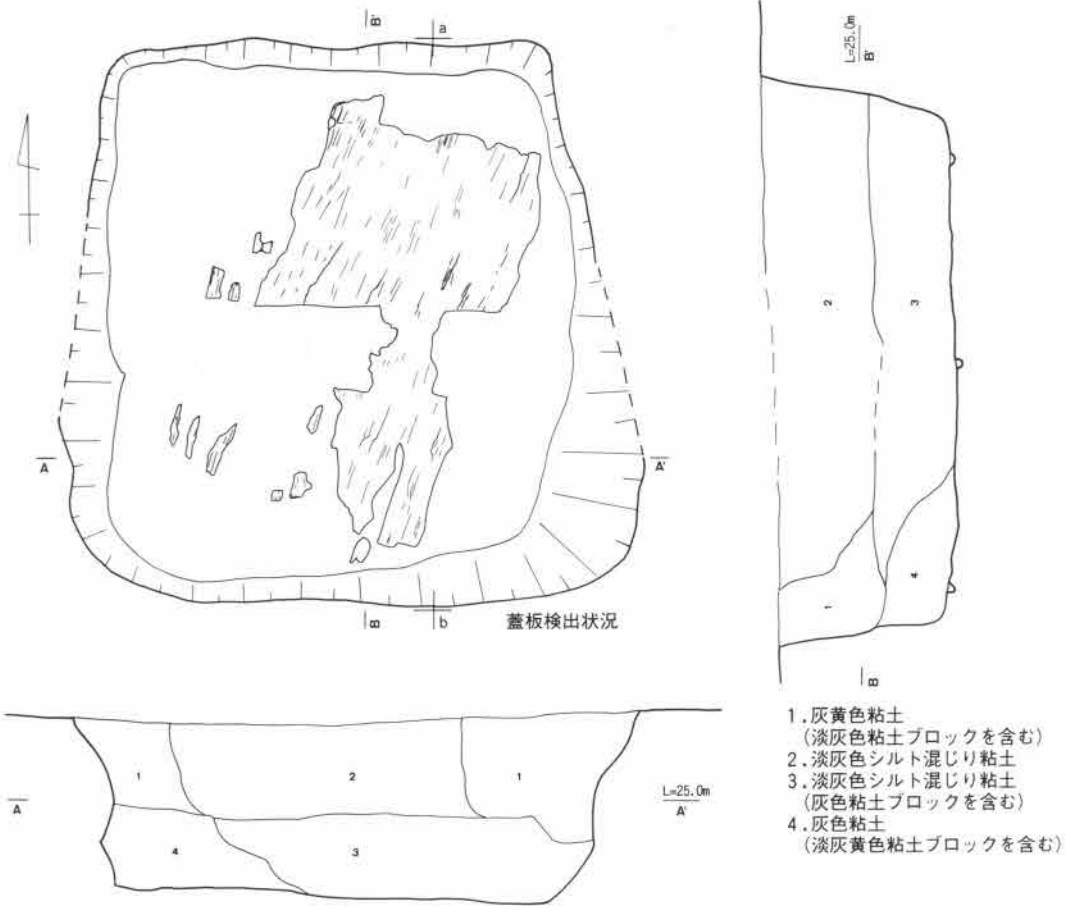
**S A 2** S B 5の西側に約8.7m隔てて平行する南北4間の柵である。主軸方向は座標北から東に約2°振っている。出土遺物が少なく、時期は14世紀以降と限定できるのみである。

**S T 382** (第26図) 調査区北東部で検出した墓である。墓壇の中央部が試掘調査時の側溝で断ち割られている。掘形は1辺約1.5mの方形で、深さは約0.5mを測る。掘削途中に板材が見えてきたために、当初は木棺墓と考えていたが、側板にあたる材が存在せず、通常の木棺墓とは埋葬方法が異なることが判明した。蓋板の下には白磁碗1点、土師器大皿1点、土師器小皿7点と円形と推定される板1点が副葬されていた。白磁碗の横には頭蓋骨や下顎骨と歯が認められ、被葬者は北頭位で、顔を西に向けて埋葬されたことが分かる。また、足は膝を西側に向けて曲げられていた。底板に当たるものは、1枚の板材ではなく、細長い板材を並べたものであった。この板材を除去すると、板材の南北両端と中央に当たる位置の墓壇底に、板材と直交する方向の粘土の詰まった幅3cm程の小溝が検出された。底板に当たる細長い板材の下に栈木状に置かれた棒状の材が墓壇底に食い込んで腐食したものと推定される。

以上から、①直径3cm程度の棒状の材を3本平行して栈木状に置く。②栈木の上に幅4～5cm程度の板材を13枚程度並べて底板に当たるものを作る。③遺骸を安置し、副葬品を供える。④薄い板材を蓋板として被せる。という埋葬手順が復元できる。時期は13世紀初頭頃と考えられる。

## (2) 4-1 トレンチ拡張区(第27図)

4-1 トレンチ拡張区は、調査地周辺に残存する相楽郡条里の里境線と坪境線の交点付近にあ



第26図 3トレンチS T382平面図・断面図(1/20)

たる。平成8年度までの調査で、相楽郡条里とされる現行地割りが12世紀後半まで溯るものであることが判明したために設定した。しかしながら、調査着手前に地盤改良工事が施工されていたために、現地表面までの土層の堆積状況を確認することはできなかった。また、鋼矢板打設のための先行ボーリングなどが行われていて、トレンチの東側1/3では攪乱が著しかった。

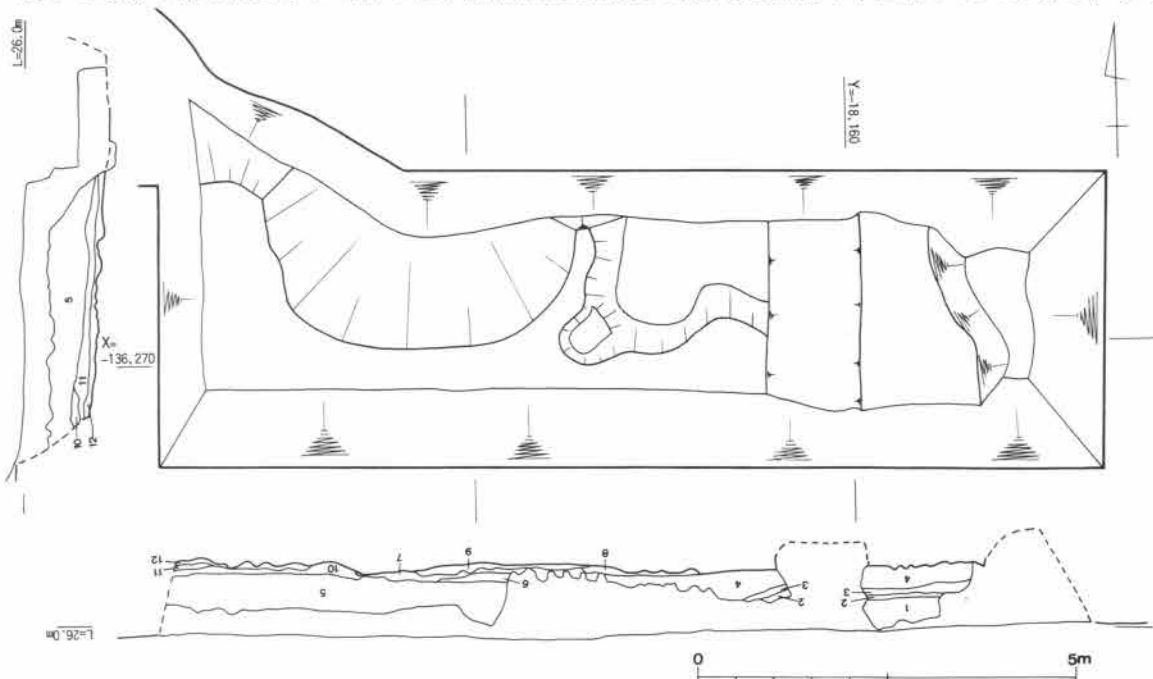
このような悪条件のもとであったが、トレンチ南壁の断面を観察すると、中央部から東側では淡茶灰色微砂、淡灰青色微砂、淡緑灰色微砂、青灰色微砂などの微細な砂のよく締まった堆積が見られるのに対して、西側では淡灰色微砂が厚く堆積しており、堆積状況に明瞭な違いが確認される。また、東側の第2層と第3層は、ボーリングによる攪乱の西側では西に向かって高くなって行く様子が認められ、この付近に坪境の高まりがあったことが推定される。東壁においても、第10～12層が南に向かって高くなって行く様子が認められ、トレンチの南側に、里境の高まりがあったのではないかと推定される。

遺構面では4-1トレンチで検出していた粘土採掘土坑SK01の南半分が検出されたが、ほかには遺構は見られなかった。

(3) 4-5トレンチ拡張区(第28・29図)

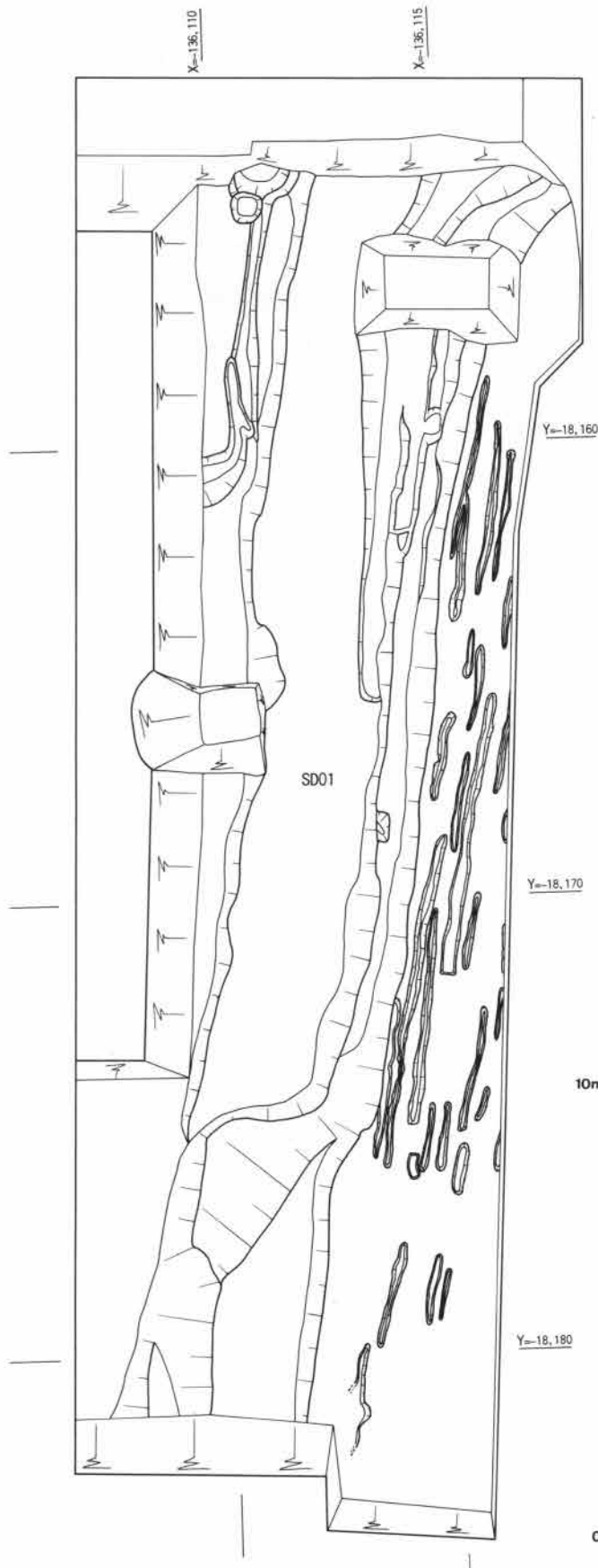
平成8年度の調査でSD01とした溝の性格を明らかにするために設定したトレンチである。旧4-5トレンチの東半部分を北側に工事用鋼矢板まで拡張した。

SD01は北に下がる傾斜面を検出していたものであるが、調査の結果、拡張区の範囲内では対応する北側の肩は検出されなかった。標高24.0m付近で幅2.5m前後の平坦なテラスをもち、さら



第27図 4-1トレンチ拡張区平面図・断面図(1/100)

- |           |                 |           |          |          |
|-----------|-----------------|-----------|----------|----------|
| 1. 淡茶灰色微砂 | 2. 淡灰青色微砂       | 3. 淡緑灰色微砂 | 4. 青灰色微砂 | 5. 淡灰色微砂 |
| 6. 灰色粗砂   | 7. 淡茶灰色砂礫混じり粘土  | 8. 青灰色シルト | 9. 青灰色粘土 |          |
| 10. 灰色粗砂  | 11. 淡青灰色砂礫混じり粘土 | 12. 茶灰色粘土 |          |          |



第28図 4-5 トレンチ拡張区平面図(1/150)

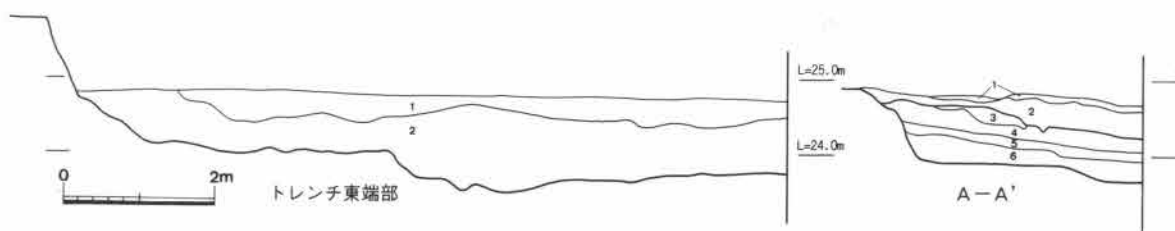
に北側に0.2m前後低い底面が続く。土器類や獣骨などの遺物の大半は、この2段目の斜面及び底面付近から出土した。底面の標高は約23.8mである。

SD01の堆積土はシルト質の上層と粘土の下層の2層に大別される。出土遺物には15世紀の遺物に混じって埴輪などの古墳時代の遺物が目立つ。埴輪は小破片ながら、ハケメなどの調整をしっかりと残すものが多く、西側の丘陵などから流されてきたものとは思われないので、付近の平地に古墳が存在した可能性も考えなければならない。

後述する6トレンチでは、SD01の検出面(標高24.9m前後)よりも高いレベルで遺構面が検出されていることから、SD01の北側の地形が全体に低くなっている可能性は少なく、また、これより北側に集落遺構が続く可能性も少ない。したがって、この遺構は、集落域の北を限る大溝、もしくは谷状地形と考えることができる。

(4) 6 トレンチ(第30・31図)

「T」字形にトレンチを設定し、標高25.4m前後の暗青灰色粘質土の上面で遺構検出を試みた。トレンチ西部では幅0.3m前後の南北方向の溝8条と、東西方向の溝1条を検出した。トレンチ東部は西部に比べて約0.1m低くなっており、畦状の高まりを検出した。南に延ばしたトレンチでは遺構は検出されなかった。トレンチ西部では標高25.2m前後の青灰色シルト上面で下層遺構の検出を試み、2条の浅い溝と畦



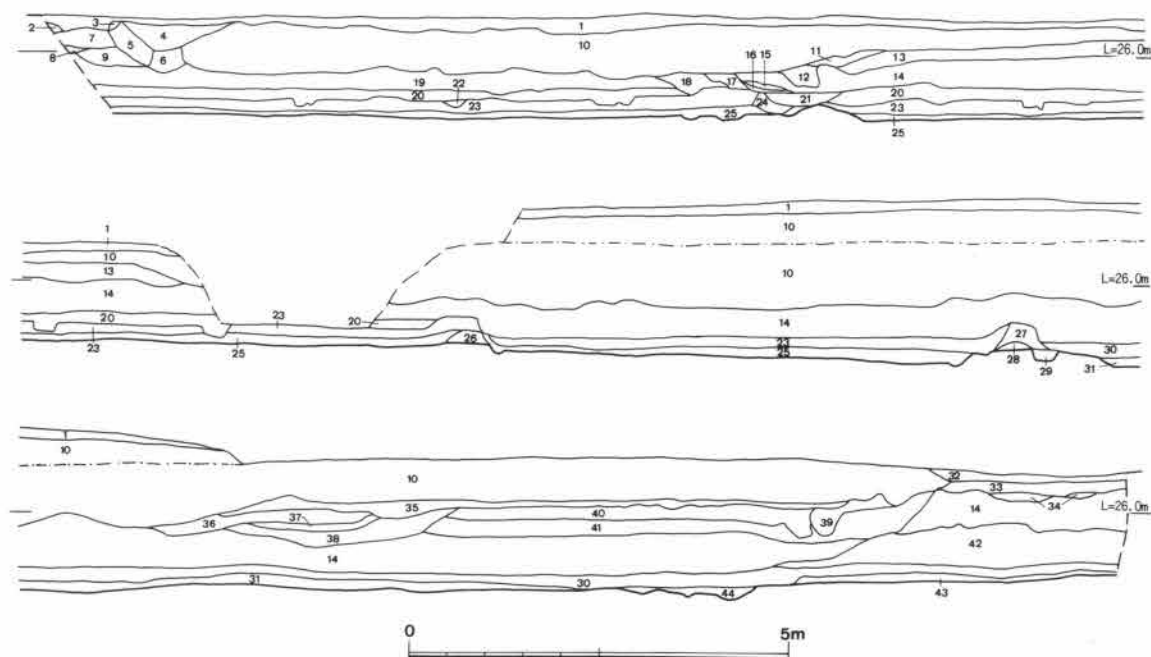
第29図 4-5 トレンチ S D01断面図(1/100)

トレンチ東端部(左)

- 1. 青灰色シルト
- 2. 黒灰色粘土

A-A' 断面図(右)

- 1. 青灰色微砂
- 2. 青灰色シルト
- 3. 黒灰色粘土(青灰色シルトを含む)
- 4. 黒灰色粘土
- 5. 黒灰色微砂
- 6. 黒灰色粘土

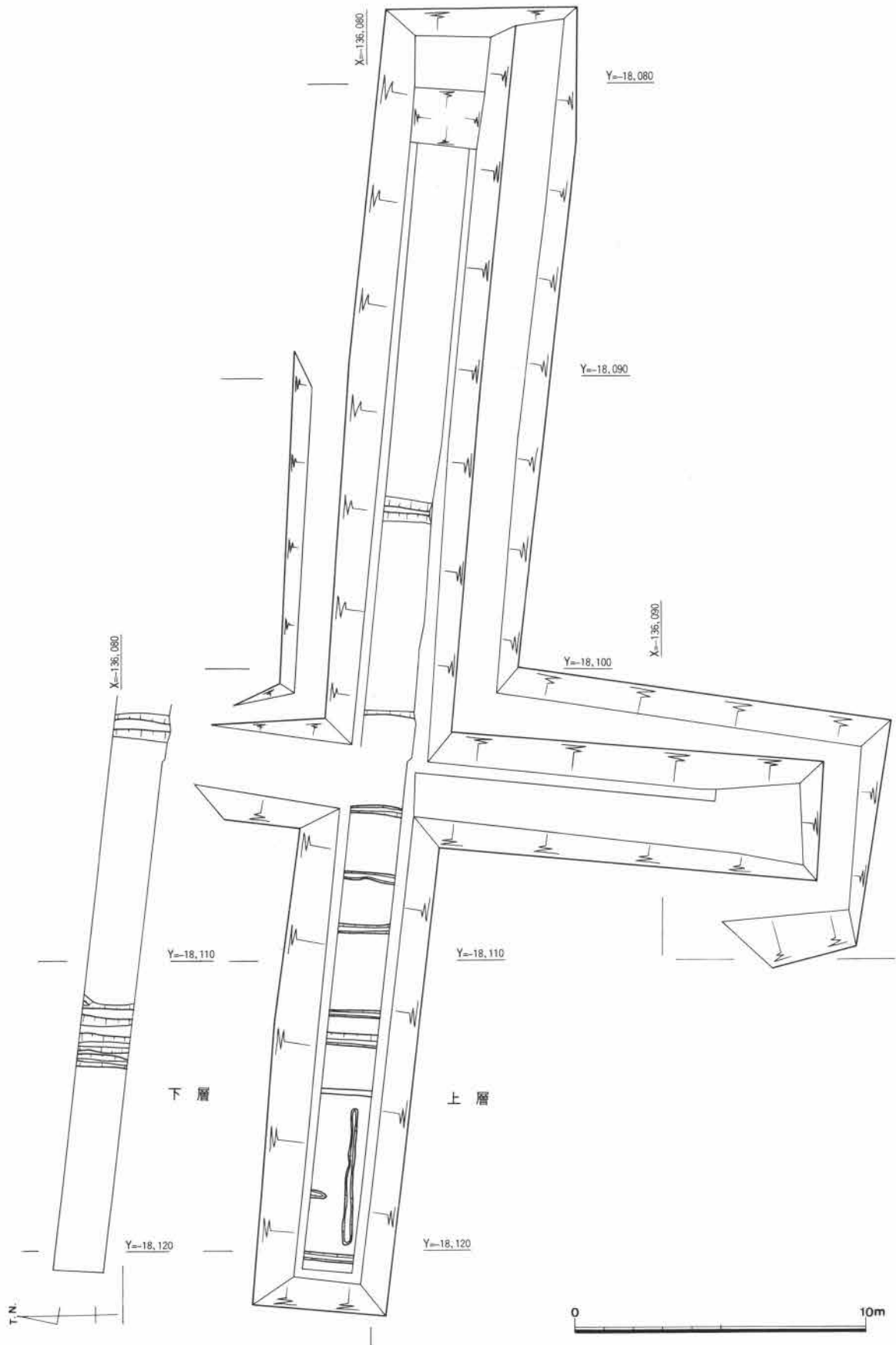


第30図 6 トレンチ北壁断面図(1/100)

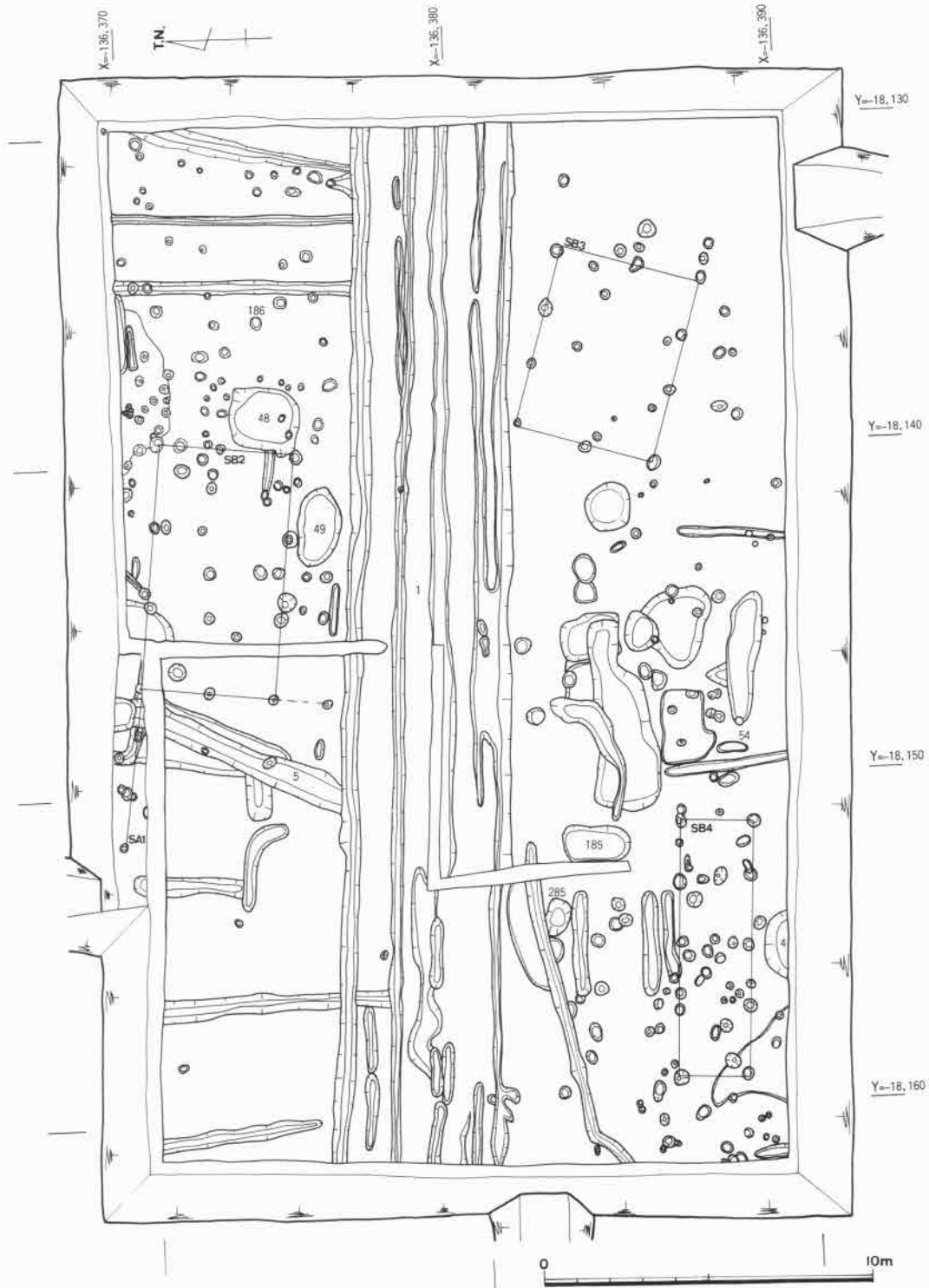
- 1. 黒灰色細砂質土(耕作土)
- 2. 暗灰色砂質土
- 3. 灰色粗砂
- 4. 灰黄褐色微砂
- 5. 褐色微砂
- 6. 灰色粘質土
- 7. 暗灰色細砂質土
- 8. 暗灰色砂質土
- 9. 灰黄色粘質土
- 10. 褐色微砂
- 11. 暗褐色微砂
- 12. 灰黄色粗砂
- 13. 灰褐色微砂
- 14. 灰色微砂
- 15. 黄灰色微砂
- 16. 暗灰色粘質土
- 17. 灰褐色粘質土
- 18. 黄褐色微砂
- 19. 灰黄色微砂
- 20. 黄灰色微砂
- 21. 灰色粘質土
- 22. 黄灰色微砂
- 23. 暗青灰色粘質土
- 24. 暗灰色粘質土
- 25. 暗青灰色シルト混じり微砂
- 26. 暗灰色粘質土
- 27. 灰黄色粘土
- 28. 暗青灰色粘質土
- 29. 暗青灰色砂質土
- 30. 灰青色粗砂混じり粘質土
- 31. 暗青灰色シルト
- 32. 黒灰色細砂質土(耕作土)
- 33. 暗灰色粘質土
- 34. 灰色粗砂
- 35. 灰褐色粗砂
- 36. 褐色微砂
- 37. 褐色粗砂
- 38. 明黄褐色粗砂
- 39. 黄灰色粗砂
- 40. 褐色粗砂
- 41. 褐色灰色粗砂
- 42. 明黄灰色粗砂
- 43. 灰色粘質土
- 44. 灰褐色粘土

状の高まりを検出した。

トレンチ内ではピットなどの集落関連の遺構は検出されず、この付近は耕作域であったものと思われる。土層断面の観察によると、遺構面の標高は東に向かって畦状の高まりを越えるごとに低くなっており、木津川に向かってだんだん低くなる棚田状の景観が想像できる。



第31図 6 トレンチ平面図(1/200)

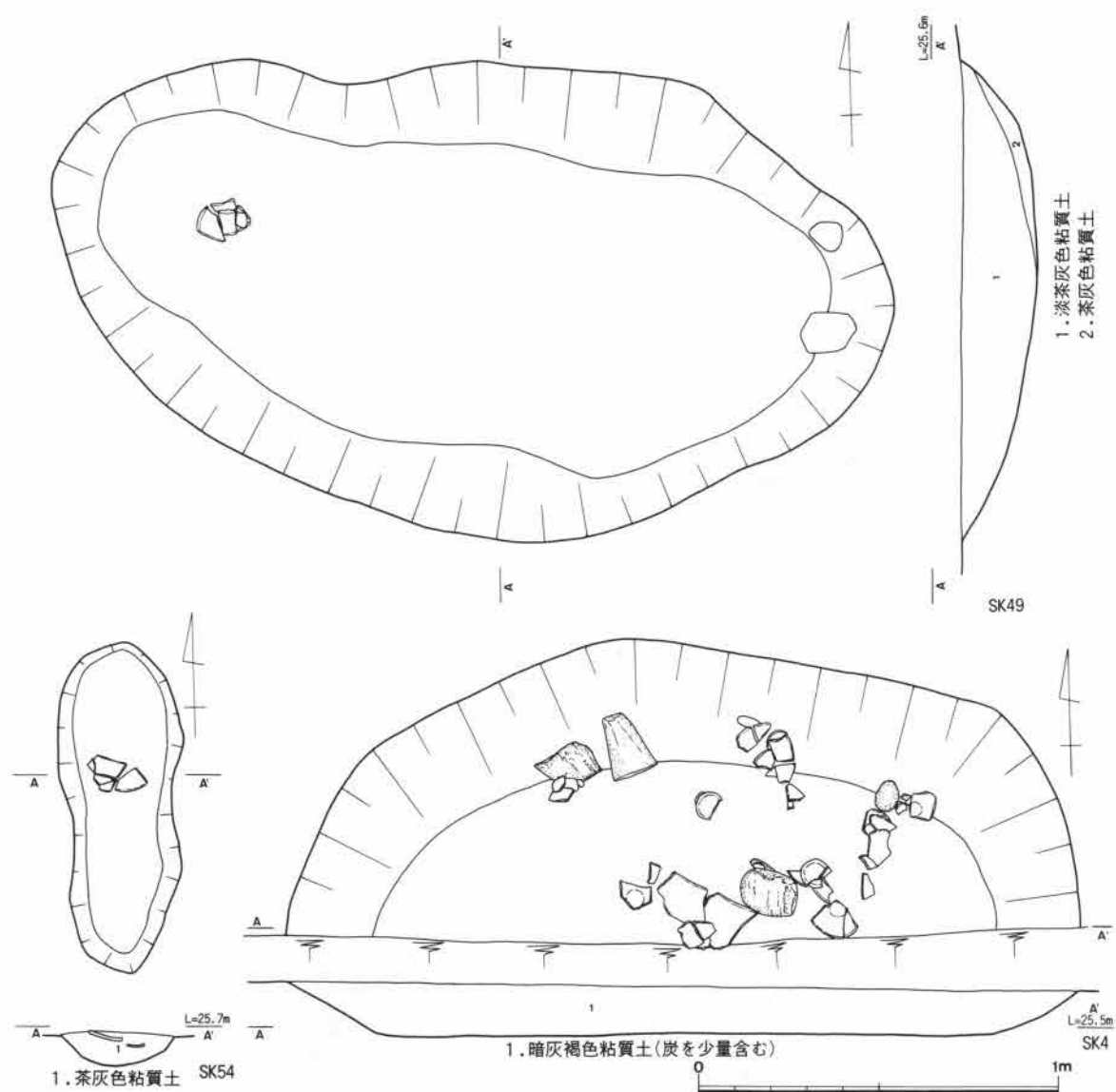


第32図 7トレンチ遺構平面図(1/200)

(5) 7トレンチ(第32図)

SK 49(第33図) 調査区北東部で検出した長径2.4m・短径1.5mを測る楕円形の土坑である。深さは約0.2mを測り、断面形は浅いU字形を呈する。西部から11世紀後半の瓦器椀が出土した。

SK 54(第33図) 調査区南西部で検出した長径0.9m・短径0.3~0.4mを測る長楕円形の土坑である。中央部の検出面に近いレベルで約1/2大の白磁椀Ⅱ類が出土した。埋土は茶灰色粘質土



第33図 7トレンチ S K 49・54・04遺物出土状況図(1/20)

の単一層である。

S K 04(第33図) 調査区南西部で検出した土坑である。南側は調査区外に続くため全体の形状は不明であるが、検出部分は東西2.2m・南北0.9mを測る。深さは最も深いところでも0.2m足らずで、底部は平坦である。石や土器片が多数出土しており、埋土には炭などが含まれている。13世紀中葉の廃棄土坑と考えられる。

S K 48(第34図) 南北約2.2m・東西約1.8mを測る不整な長方形の土坑である。深さは約0.3m足らずで、底部はほぼ平坦である。埋土は淡茶灰色砂混じり粘質土で、石や土器片が多数出土した。S K 04と同様に廃棄土坑かと思われる。時期は13世紀後半である。

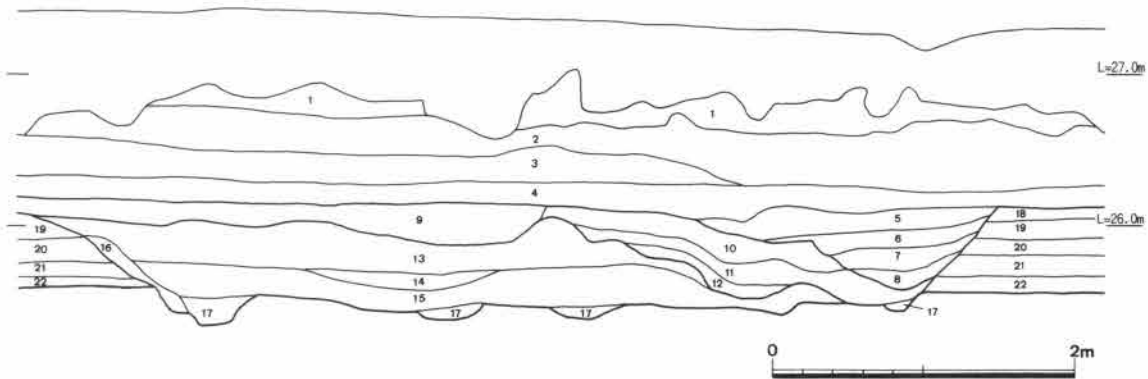
S K 285(第34図) 調査区南西部で検出した長径1.2m・短径0.7mの土坑である。深さは約1.2mを測る。埋土は淡緑灰色粘土である。埋土から13世紀中葉までの遺物が出土した。天水を溜める井戸であろうか。





第34図 7トレンチ S K48・285平面図・断面図(1/40)

第35図 7トレンチ S K186平面図・断面図(1/10)

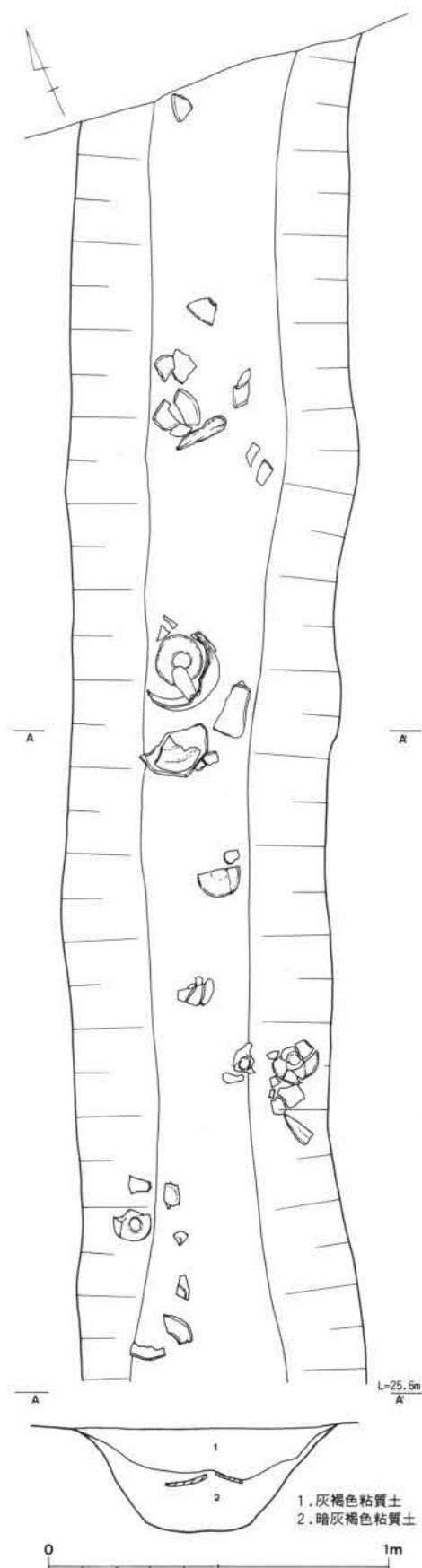


第36図 7トレンチ S D1 付近トレンチ東壁断面図(1/50)

1. 灰黄色粗砂 2. 灰褐色微砂 3. 灰褐色粗砂 4. 灰褐色粗砂混じり粘質土  
 5. 灰褐色粗砂混じり砂質土 6. 灰褐色砂質土 7. 灰褐色粗砂混じり粘質土 8. 灰褐色粘質土  
 9. 淡褐灰色粗砂混じり砂質土 10. 淡灰褐色粗砂混じり砂質土 11. 灰色粘土 12. 灰色砂礫  
 13. 灰色粗砂混じり粘質土 14. 灰色粘土 15. 青灰色粗砂混じり粘質土 16. 灰黄色粘質土  
 17. 青灰色粘質土 18. 淡褐灰色粗砂混じり砂質土 19. 褐灰色砂質土 20. 褐灰色粗砂混じり粘質土  
 21. 褐灰色粘質土 22. 暗褐色粘質土

S K186(第35図) 調査区北東部で検出した円形の土坑である。土坑内から、土師器羽釜の胴部以下が出土した。ほぼ、羽釜1個体が入る大きさの土坑であることから、土坑内に土師器羽釜を正置した状態で埋納していたと考えられるが、上部が削平されているために、鐙部以上は残っていなかった。また、羽釜の底部は埋納時から、欠損していたものと考えられる。断面の観察から、一度深く土坑を掘った後に、褐灰色粘質土を入れて、羽釜を据えたことが分かる。

S D1(第36図) 調査区中央部を東西に貫く溝である。遺構面では5条の小溝が平行しているように見えるが、断面観察によれば、この溝の掘り込み面は、遺構検出面よりも約0.7m上の面である。断面から、この溝は当初は幅6m以上の大きなものであったが、生活面が上昇するごとに3m、2mと幅を減じたことが分かる。幅が狭くなっても、南側の肩の位置はほぼ変わらず、



第37図 7トレンチSD5 遺物出土状況図 (1/20)

北の方が南に近づくことによって幅が狭くなっている。調査前にはこのトレンチの場所に方格地割りは認められないが、調査地周辺に見られる方格地割りの延長線は、SD1の南肩の3m程度南にあたり、SD1は、方格地割りの境界の溝にあたるものと考えられる。

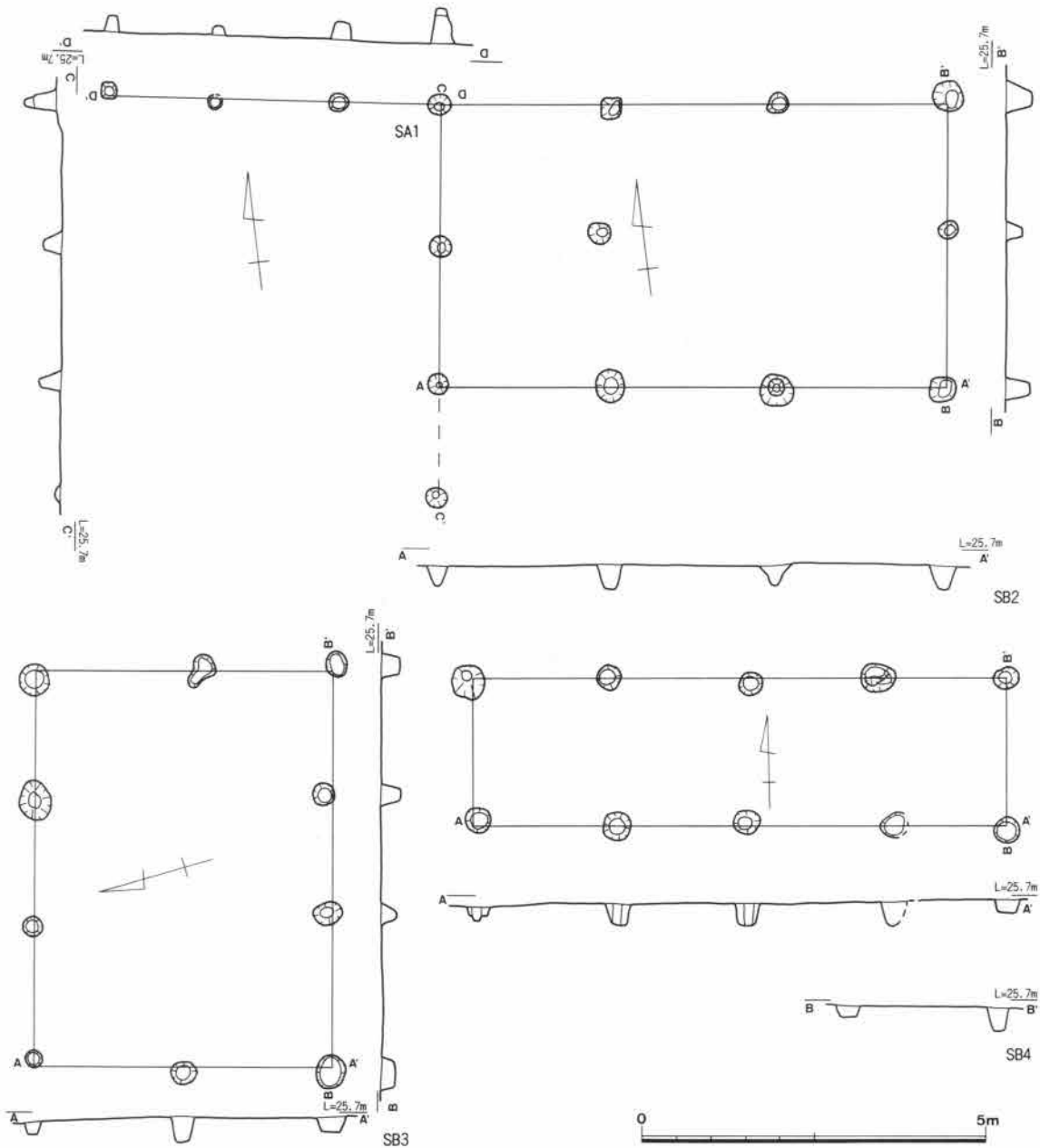
SD5(第37図) 調査区北西部で検出した幅0.8m前後を測る溝である。北部は調査区外に続き、南部はSD1で切られているが、調査区南半部には続かない。深さは0.3m余りを測り、断面形はU字形を呈する。13世紀中葉の遺物が多数出土した。

SB2(第38図) 調査区北部中央で検出した東西3間、南北2間の掘立柱建物跡である。現地説明会資料や略報では、2間×2間の掘立柱建物跡とL字形の柵(SA1)として復元したが、柵の南北部分の南端にあたるピットが極めて浅く、柱間寸法も短いこと、東西部分の東端の柱間寸法が短いことなどから、SA1のピットの一部を取り込んで、SB2を西に1間分大きくして復元した。柱間寸法は、東西が約2.5m等間、南北は西端の柱列のみが約2.1mの等間で、他は南が約2.3m、北が約1.9mを測る。建物の主軸方向は座標北から東に約7°振っている。出土遺物から、12世紀初頭頃の建物と考えられる。

SB3(第38図) 調査区南東部で検出した3間×2間の掘立柱建物跡である。この遺跡で検出した他のすべての建物がほぼ正方位に近い方向を向いているのに対して、この建物の主軸方向は座標北から東に約16°振っている。13世紀中葉頃の建物と考えられる。

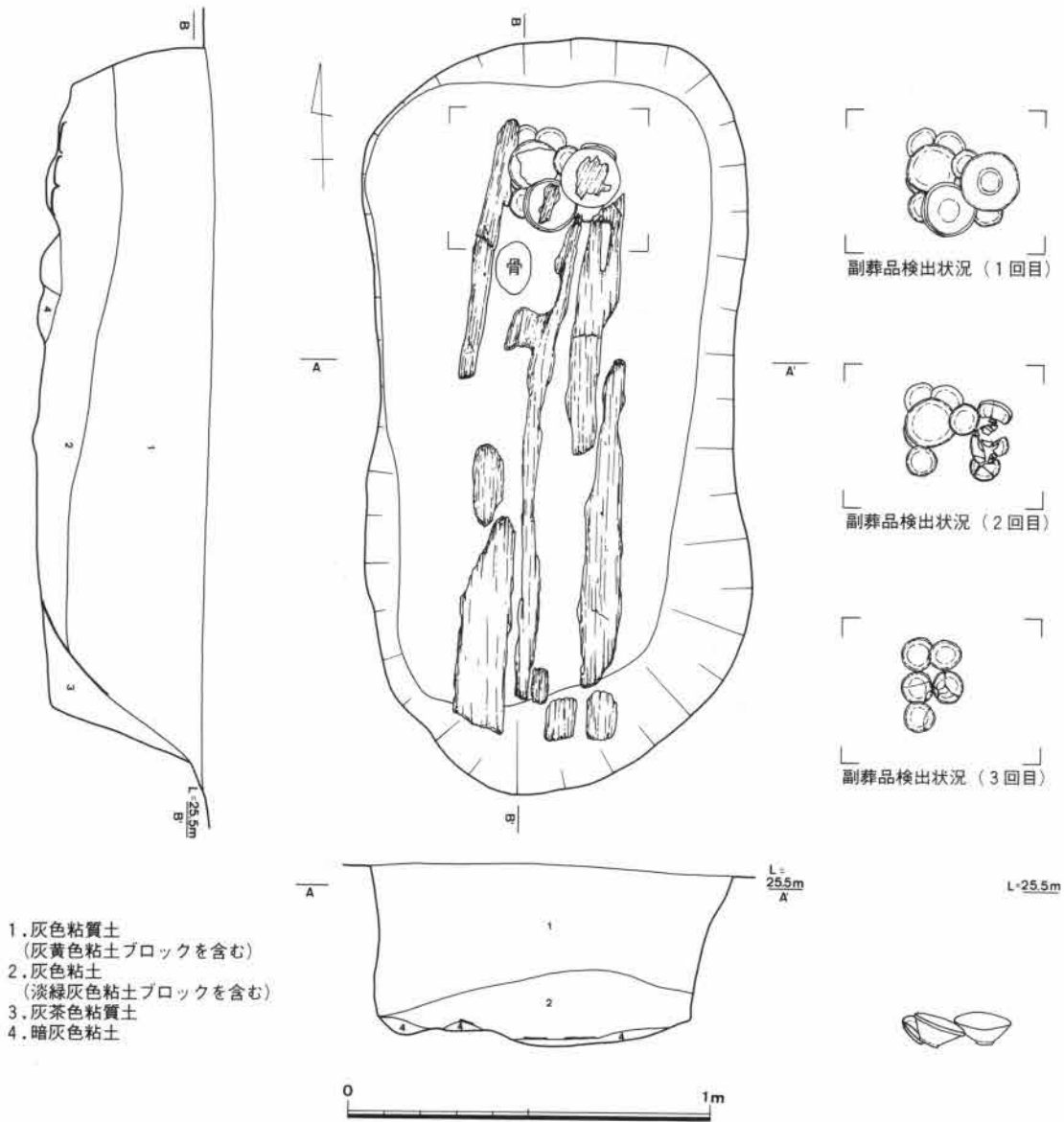
SB4(第38図) 調査区南西部で検出した東西4間の掘立柱建物跡である。南側は調査区外に伸びるため、全容は不明である。建物の主軸方向は、座標北から東に約2°振っている。出土遺物から、13世紀前葉頃の建物と考えられる。

ST185(第39図) SB4の北側で検出した墓である。掘形の平面形は南北2.1m・東西1.0~1.1mを測る隅丸長方形を呈する。蓋板は検出されたが、側板・底板は検



第38図 7トレンチSA1、SB2・3・4平面図・断面図(1/100)

出されず、遺骸の上に蓋板を被せるだけの埋葬方法がとられたものと考えられる。墓壙北寄りから頭蓋骨と思われるものが検出され、北頭位で埋葬されたことが分かる。頭蓋骨は、墓壙底に食い込むように検出された。この北側には副葬品が並べられていた。副葬品は、白磁碗2点、土師器大皿1点、土師器小皿9点が出土した。副葬品の埋納状況は、まず土師器小皿8点を、南北に3点、2点、3点と3列に並べているが、ぴったりと接して置かれた西側の2列5点からは、やや離れて東側の1列が並べられている。その上には、西に土師器大皿、東に土師器小皿が1点ずつ、わずかに重なり合うように置かれ、最後に白磁碗2点が置かれていた。時期は12世紀中葉頃と考えられる。



第39図 7トレンチ S T 185平面図・断面図・立面図(1/20)

#### 4. 出土遺物

##### (1) 3トレンチ(第40図～第54図)

S K 92(第40図 1～11) 1～6は土師器皿である。大皿(1)は2段のヨコナデ調整が施される。小皿には「て」字状口縁のもの(2)、口縁部外面に面取りを施すもの(3)、1段のヨコナデ調整で端部を尖り気味に丸く納めるもの(4～6)がある。7・8は瓦器皿である。7は口縁部内面にも圈線状のヘラミガキが施される。9は瓦器椀である。大和型第Ⅱ段階B型式(注3)に相当するものとみられる。10は白磁椀(注4)類である。釉葉が厚く、内面に釉垂れがみられる。11は土師器羽釜である。口縁部は短く、尖り気味に納めている。胴部外面はナデ調整、内面は板状工具によるナデ調整が施される。

S K 94(第40図12～15) 12は土師器大皿である。おそらく、高い高台が付くものと思われる。外面下半部は指押さえによる凹凸が著しい。13は土師器小皿である。厚手の作りで口縁部は短く1段の

ヨコナデが施される。14は瓦器碗である。大和型第Ⅲ段階A型式の範疇に納まるものと思われる。15は白磁碗Ⅳ類の底部である。高台の削り込みは鈍い。

S K 95(第40図16~18) 16は土師器小皿である。口縁部に施された面取りが、一部崩れている。17は瓦器碗である。大和型第Ⅲ段階A型式新相に相当する。18は土師器羽釜である。口縁と鐙の端部には面をもつ。胴部外面は、ナデ調整が施されるが、指押さえの痕跡も観察できる。内面は板状工具によるナデ調整が施される。

S K 335(第40図19・20) 19は土師器大皿である。口縁部が大きく立ち上がる深い器形である。口縁部は強いヨコナデ調整によって平滑に仕上げられているが、体部から底部にかけては指押さえの凹凸が著しい。20は白磁碗Ⅳ類の底部である。

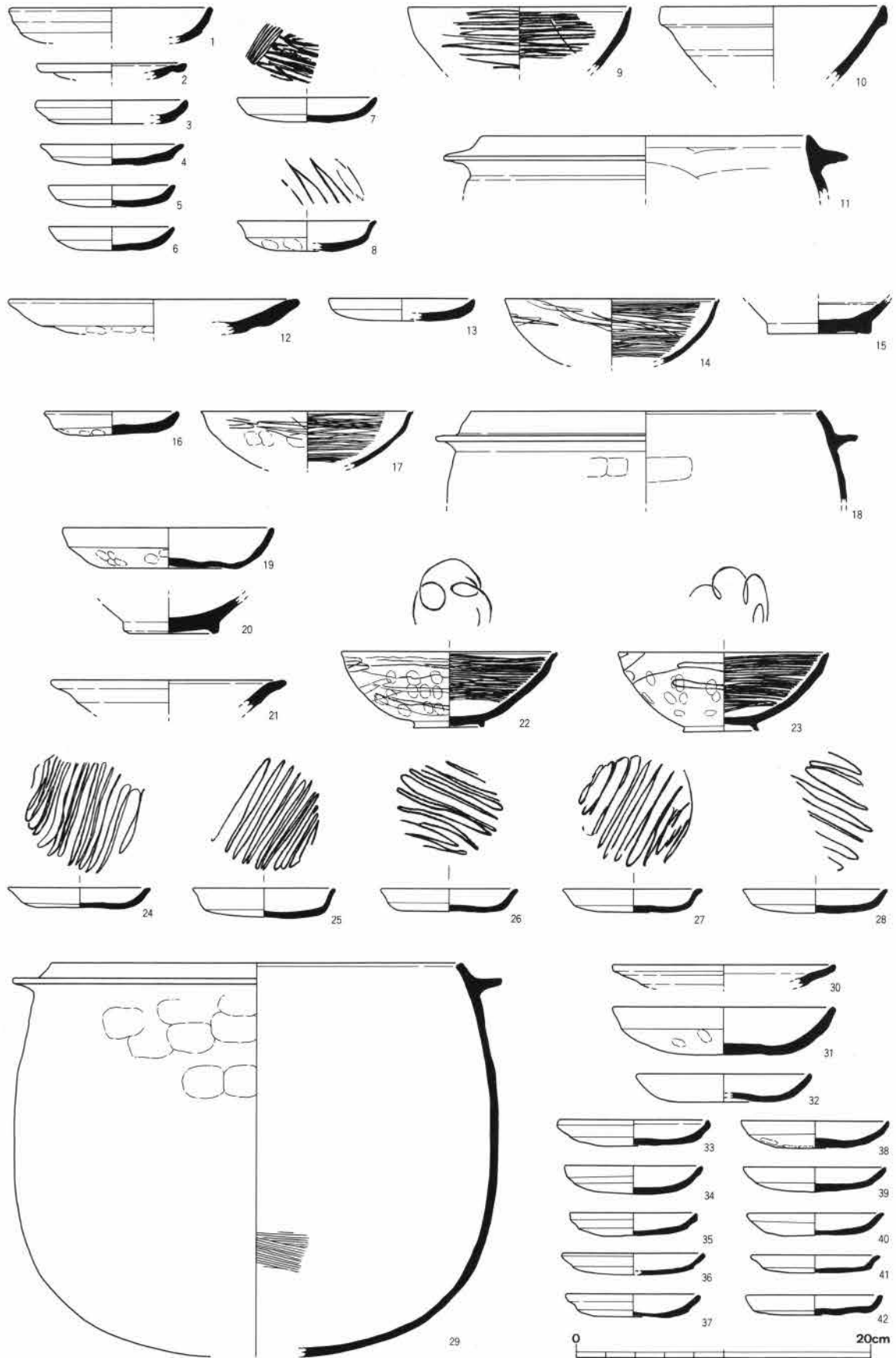
S K 668(第40図21~28) 21は土師器大皿である。12と同様に、高い高台が付くものと思われる。口縁端部は強く外反している。22・23は瓦器碗である。大和型第Ⅱ段階B型式に相当する。24~28は瓦器皿である。内底面に10数往復のジグザグ状の暗文が施される。

S K 592(第40図29) 土師器羽釜である。胴部外面は、ナデ調整が施されるが、指押さえの痕跡が目立つ。内面は板状工具によるナデ調整が施され、下部には横方向のハケ調整がみられる。

S K 514(第40図30~42・第41図43~69) 30~42は土師器皿である。大皿には「て」字状口縁の崩れたもの(30)、厚手で橙色を呈し、深いもの(31)などがある。小皿には口縁部外面に面取りを施すもの(33~37)と1段のナデ調整を施すのみのもの(38~42)がある。33の色調・胎土は31と同じである。43~49は瓦器碗である。43は大和型第Ⅱ段階A型式に相当し、他は、外面のヘラミガキの分割性が崩れているものもみられるが、おおむね大和型第Ⅱ段階B型式に相当する。50~66は瓦器皿である。内底面のジグザグ状の暗文はほぼ全面を覆う密なものも見られるが、10往復前後のものが多い。口縁部はいずれも1段のヨコナデ調整で、端部は外反する。67・68は東播系須恵器鉢である。67の口縁端部はほとんど肥厚せず、丸く終わるが、68はやや外側に肥厚している。69は丸瓦である。外面は縄叩きの一部が円周方向のナデ調整によって消されており、内面には糸切り痕跡と布目が観察できる。

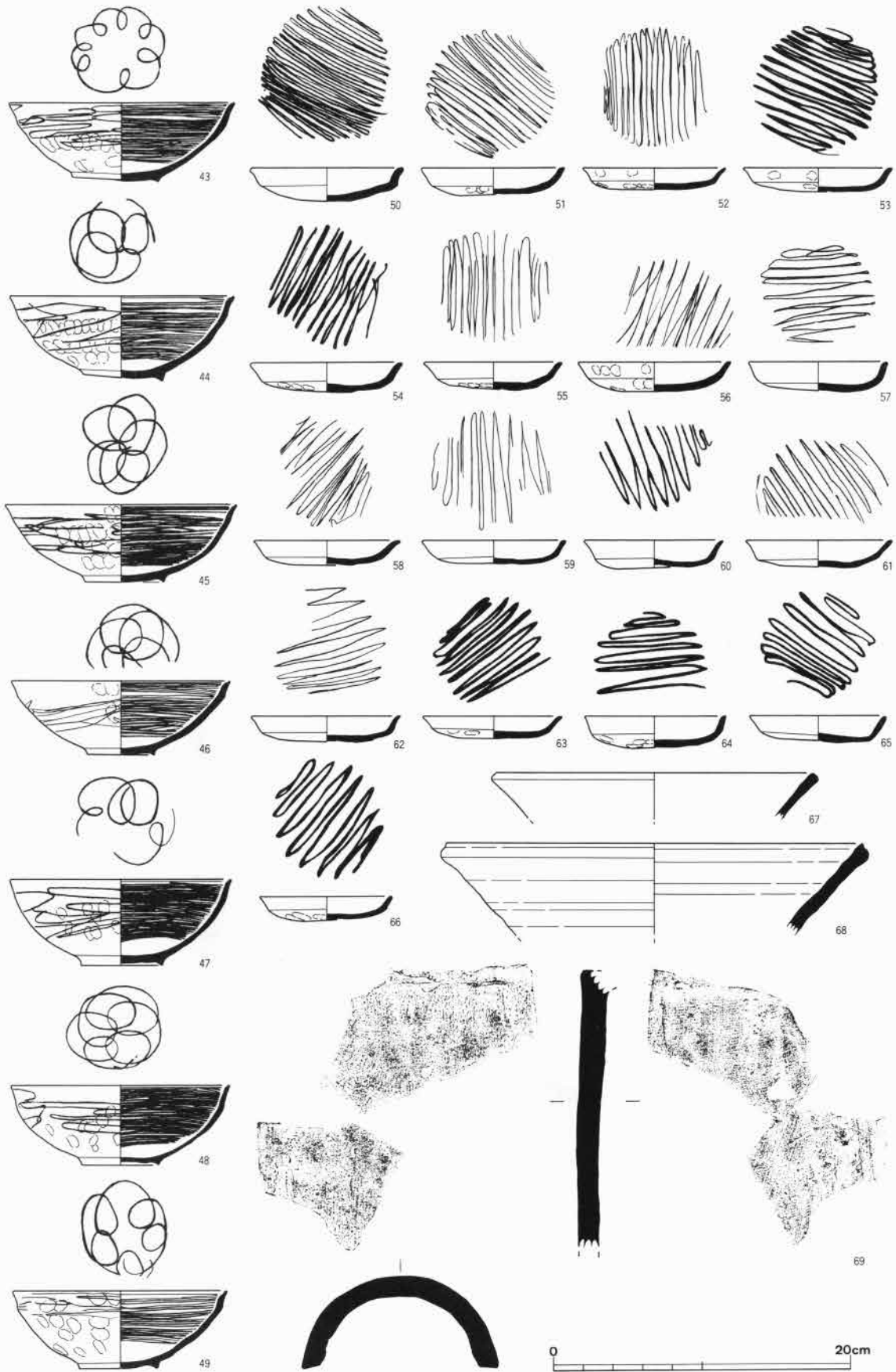
S K 671(第42図70~87) 70~80は土師器皿である。口縁端部はいずれも面取りが施されているが、76~80の面取りはやや崩れている。81は瓦器碗である。外面には明瞭な分割性のあるヘラミガキが施されている。大和型第Ⅱ段階B型式に相当する。82は瓦器皿である。内底面には17往復程度のジグザグ状の暗文が施される。83は土師器羽釜である。口縁部上半は、内側にわずかに屈曲する。口縁と鐙の端部には面をもつ。84は白磁碗、85は白磁皿である。いずれも見込みの釉が輪状に搔きとられている。86は須恵器壺である。9世紀の遺物が混入したものと考えられる。87は須恵器甕の底部である。外面は最下部のみナデ調整が施され、他はヘラケズリが施される。内面はほとんど調整が施されず、粘度紐の継ぎ目が明瞭に観察できる。産地は不明である。

S K 530(第42図88~118) 88~95は土師器大皿である。やや古い時期の混入と考えられる88を除いて口縁部の立ち上がり部が強い指押さえによって屈曲する。口縁端部は尖り気味に丸く納める。口縁部外面の下半には指押さえによる凹凸が目立つ。96~102は土師器小皿である。96・97

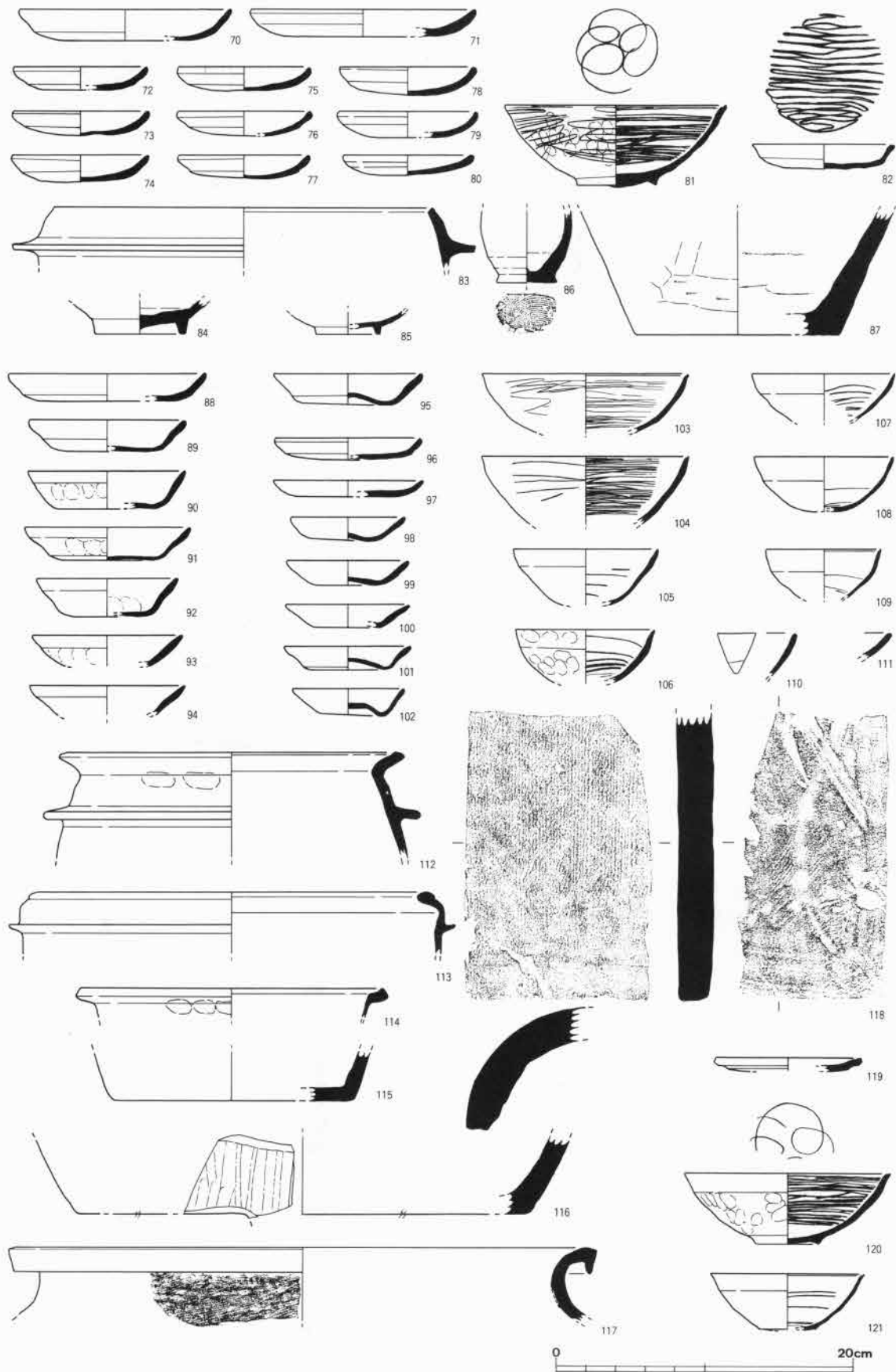


第40図 3 トレンチ出土遺物実測図(1) 1/4

1~11. S K92 12~15. S K94 16~18. S K95 19・20. S K335 21~28. S K668 29. S K592 30~42. S K514

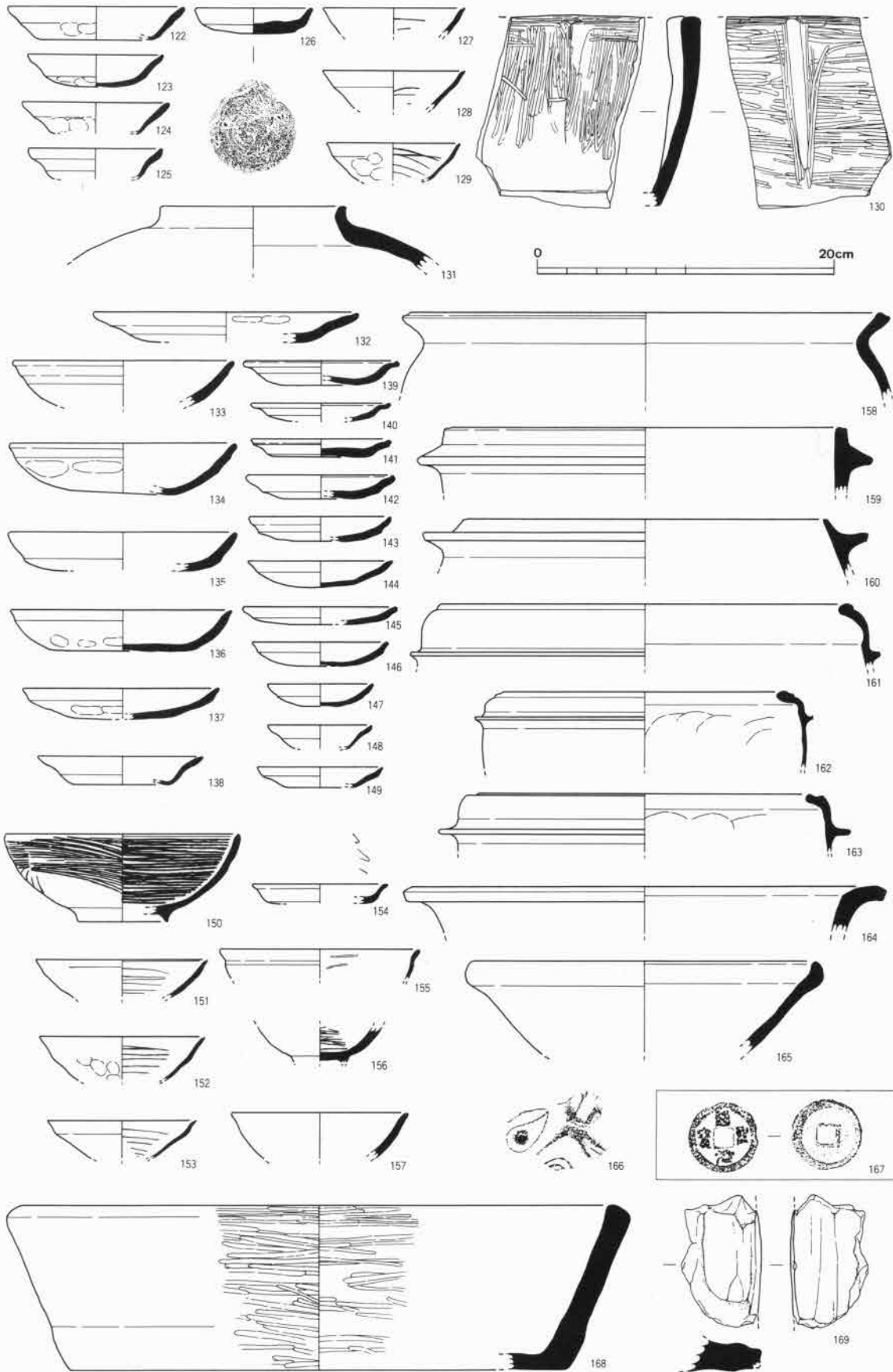


第41図 3トレンチ出土遺物実測図(2) 1/4 43~69. S K514



第42図 3 トレンチ出土遺物実測図(3) 1/4  
70~87. S K671 88~118. S K530 119~121. S K531





第43図 3トレンチ出土遺物実測図(4) 1/4(167は1/2)  
122~131. S K177 132~169. S K173

は88同様の混入と考えられる。98～102は大皿と同様の調整である。103～110は瓦器碗である。103・104はやはり混入と考えられる。105～110は半球形に近い形態の瓦器碗で、高台をもつものはみられない。口縁端部の沈線は痕跡的にわずかに施されるものと、施されないものがある。大和型第Ⅳ段階B型式に相当する。111は白磁皿である。112・113は土師器羽釜である。112は外反する口縁部の端部を内側にわずかに折り返すもので、混入品である。113は内湾する口縁部の端部を外側に折り返して丸く納める。114は瓦質土器鍋である。口縁部は短く退化している。焼成は土師質に近い。外面にはススが付着している。115・116は瓦質土器火鉢である。115は外面に縦方向のヘラミガキが施され、116は外面に縦方向、内面に横方向のヘラミガキが施される。116には脚が付く。117は東播系須恵器甕である。口縁端部は下方に肥厚し、外側に面をもつ。外面は頸部まで細かいタタキによって成形する。118は丸瓦である。内面は糸切り痕跡と布目が見られる。外面には縄タタキが施されるが、端部付近は円周方向のナデ調整によって消されている。

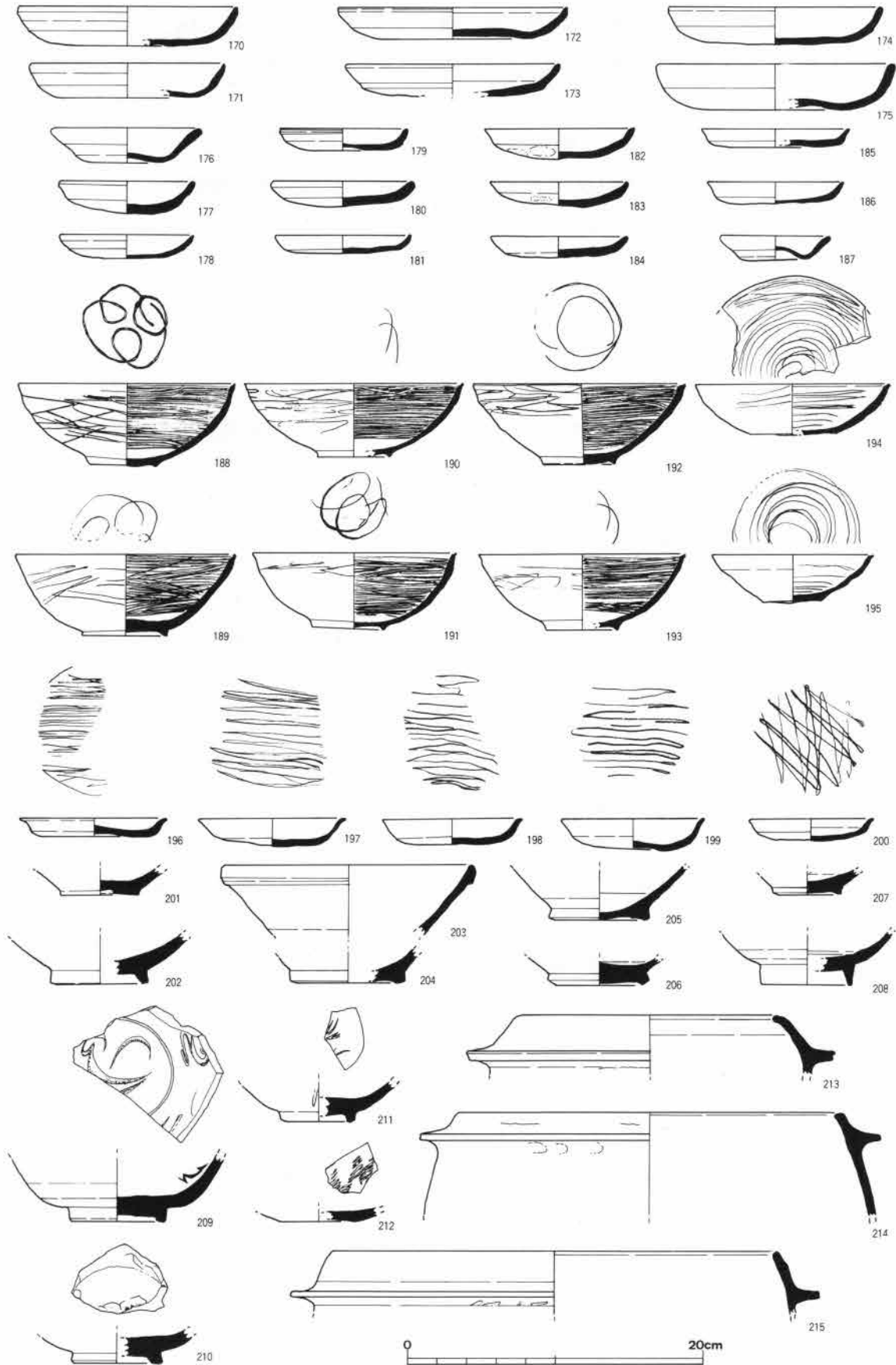
**S K 531**(第42図119～121) 119は「て」字状口縁の土師器小皿である。120・121は瓦器碗である。120は大和型第Ⅱ段階B型式に相当するものと思われるが、外面のヘラミガキはみられない。121は内面に粗い圏線ミガキが施されるのみである。大和型第Ⅲ段階E型式に相当する。

**S K 177**(第43図122～131) 122～126は土師器皿である。122～125は口縁部の立ち上がり部が強い指押さえによって屈曲し、口縁端部は尖り気味に丸く納める。口縁部外面の下半には指押さえによる凹凸が目立つ。123は口縁部外面のヨコナデの幅が広い。126は底部を回転ヘラ切りによって切り離している。127～129は瓦器碗である。大和型第Ⅳ段階B型式に相当するものと思われる。130は花形の瓦質土器火鉢である。内外面ともに密なヘラミガキが施される。ヘラミガキの方向は、外面は横方向で輪花部分のみ縦方向に施され、内面は縦方向で上端部付近のみ横方向に施される。131は常滑焼短頸壺である。

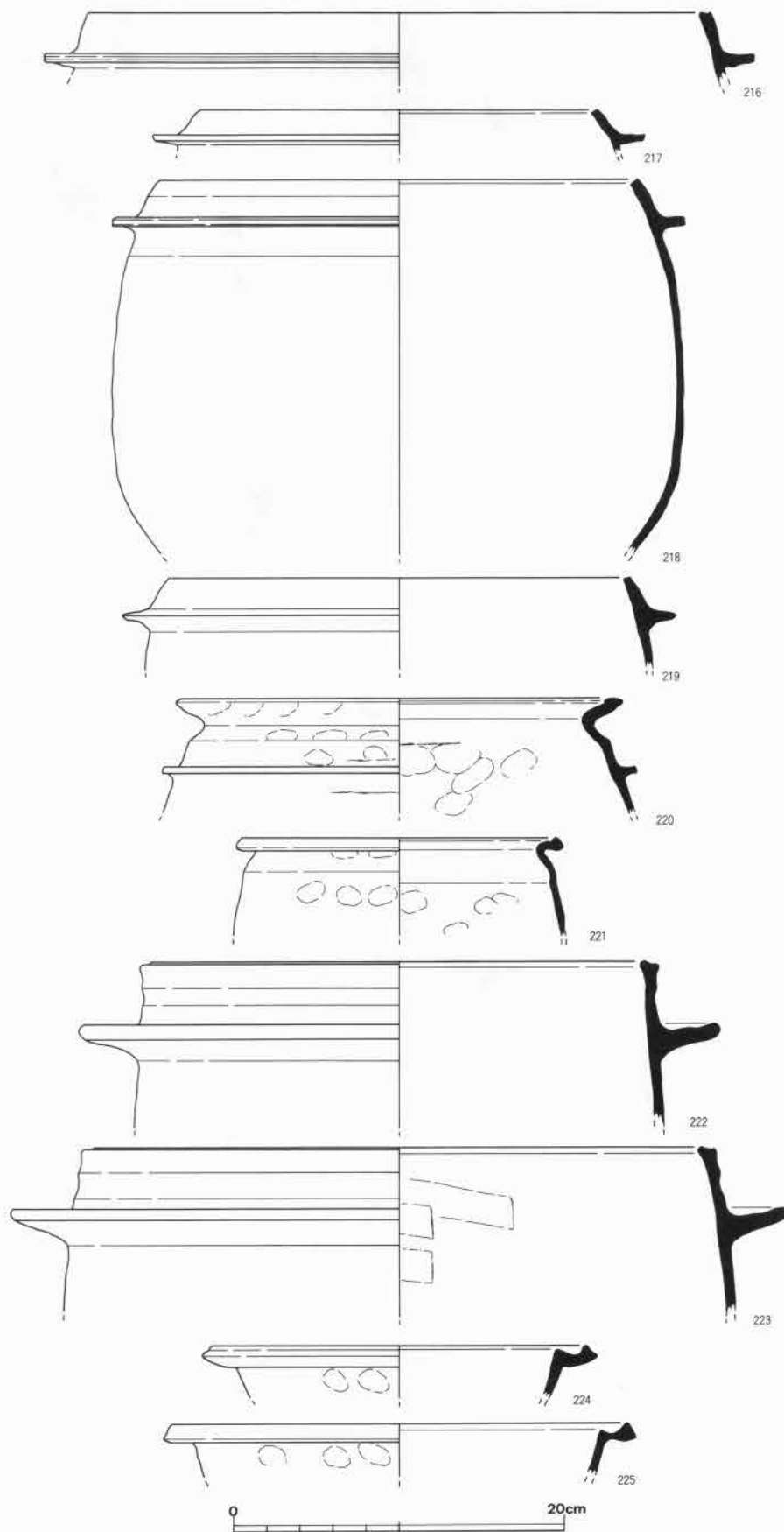
**S K 173**(第43図132～169) 132～138は土師器大皿である。132は「て」字状口縁のもの、133は口縁部に2段のヨコナデを施すもの、134～137は口縁部に1段のヨコナデを施すもの、138は口縁部の立ち上がり部が強く屈曲するものである。139～149は土師器小皿である。大皿と同様に、「て」字状口縁のもの(139～142)、口縁部に2段のヨコナデを施すもの(143)、口縁部に1段のヨコナデを施すもの(144～147)、口縁部の立ち上がり部が強く屈曲するもの(148・149)がある。150～153は瓦器碗である。150は内外面ともに密なヘラミガキが施されたもので、大和型第Ⅰ段階C型式に相当するものと思われる。151～153は内面に粗い圏線ミガキが施されるもので、151にのみ、外面のヘラミガキが認められる。大和型第Ⅲ段階D型式およびE型式に相当する。154は瓦器皿である。155・156は土師器碗である。155は口縁部がヨコナデによって外側にわずかに屈曲し、端部は丸く納めている。内面には粗いヘラミガキが認められる。156は回転台成形で貼り付け高台をもつ。内面にはヘラミガキが施される。157は山茶碗である。灰色の粗い胎土をもつ南部系の山茶碗である。158～163は土師器羽釜である。158は外反する口縁部の端面が工具によるナデ調整によって凹線状にくぼんでいる。159は直立する短い口縁部に断面三角形の太い鏝の付くもので、胴部内面はナデ調整が施される。160は内傾する短い口縁部をもつものである。

161・162は内湾する口縁部の端部を外側に折り返して丸く納めるもので、162では、胴部内面に当て具の痕跡が認められる。胴部外面はナデ調整である。163は口縁部が内側に屈曲して端部は折り返さずに丸く終わるもので、胴部の調整は162と同様である。164は須恵器甕である。岡山県亀山窯の製品と考えられる。165は東播系須恵器鉢である。口縁端部は外側に肥厚している。166は鬼瓦である。表面のみが剥離したもので、裏面は残っていない。奈良時代のものか。176は紹聖元寶である。168は瓦質土器火鉢である。内外面ともに横方向のヘラミガキが施される。胎土はやや粗い。169は土師器竈形土器である。焚き口下端部の破片と考えられる。

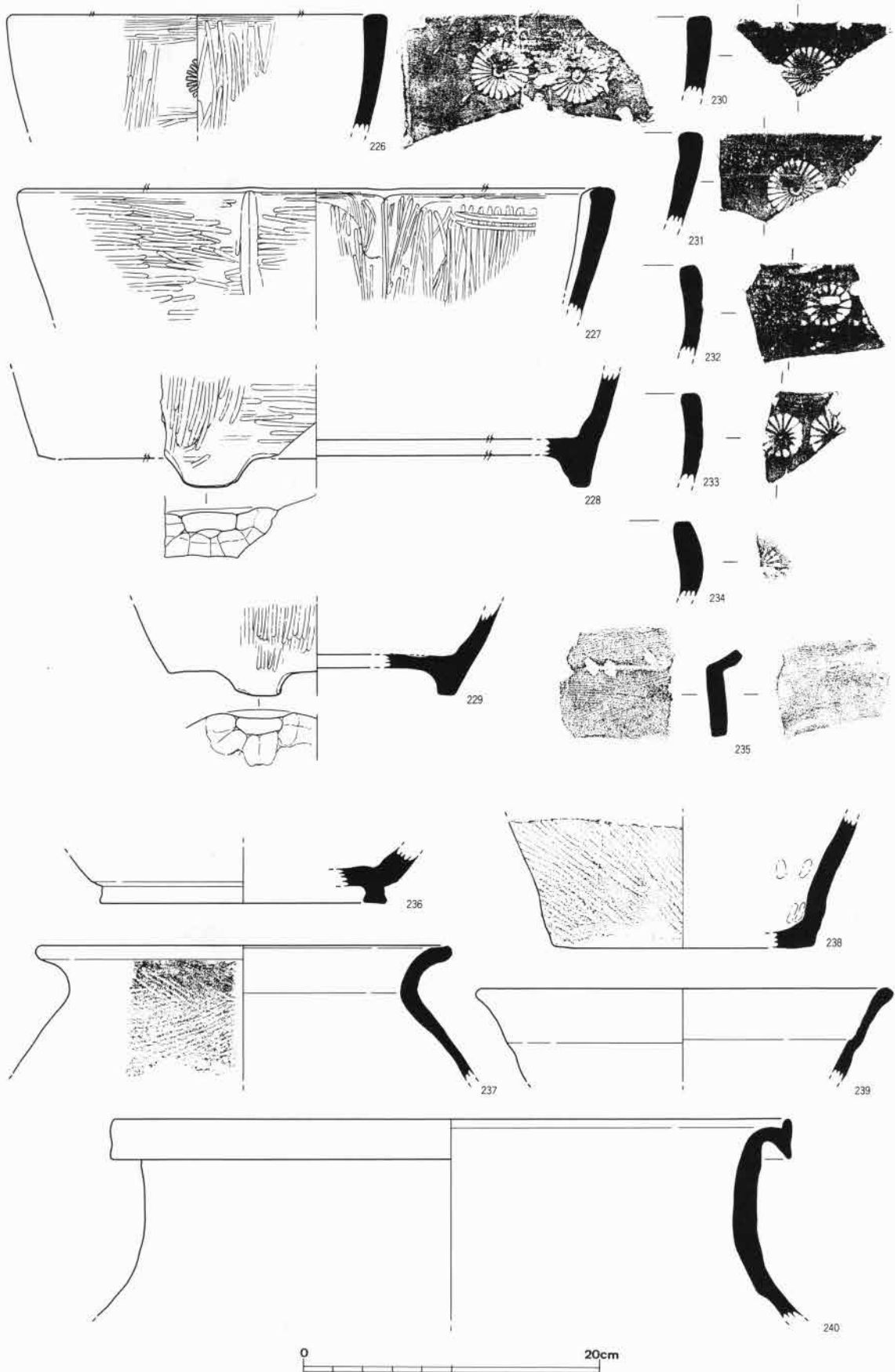
S X 512(第44図170～215・第45図216～225・第46図226～240・第47図241～251) 170～176は土師器大皿である。170・171は口縁部に2段のヨコナデを施し、端部を上方につまみ上げている。172は口縁部に1段のヨコナデを施し、端部を上方につまみ上げている。173は口縁端部に面取りを施し、174・175は口縁部に1段のヨコナデを施している。176は口縁部が強く屈曲して立ち上がるものである。177～187は土師器小皿である。口縁端部に面取りを施すもの(177～181)、口縁部に1段のヨコナデを施すもの(182～186)、口縁部が強く屈曲して立ち上がるもの(187)がある。188～195は瓦器碗である。188～190は外面のヘラミガキに分割性がみられ、見込みに連結輪状暗文が施される大和型第Ⅱ段階B型式に、191～193は外面のヘラミガキの分割性が崩れ、上半部のみヘラミガキが施される大和型第Ⅲ段階A型式古相に、194は内面の圏線ミガキが粗くなった大和型第Ⅲ段階B型式に、195は見込み部まで一連の渦巻き状のヘラミガキが施される大和型第Ⅲ段階D型式に相当する。196～200は瓦器皿である。内底面にはジグザグ状のヘラミガキが施されるが、200には2方向のジグザグ状のヘラミガキが施される。201は越州窯系青磁碗である。胎土は精良で発色もよい。高台は蛇の目で見込みには目痕がみられる。I-1類に相当する。202～208は白磁碗である。202はⅡ類、203～207はⅣ類である。209～211は青磁碗である。209は龍泉窯系I-2類、210は見込みに印花文をもつもの、211は見込みに陰刻文をもつものである。212は同安窯系青磁皿である。213～221は土師器羽釜である。213～219の口縁部はいずれも内湾する。220・221は外反する口縁部の端部を内側に折り返すものである。221は鏝が退化してなくなったものであるかも知れない。222・223は瓦質土器羽釜である。直立する口縁部の外面には3条の凹線がみられる。口縁端部は内側につまみ出されている。胴部外面はナデ調整、内面は板状工具によるナデ調整が施される。224・225は瓦質土器鍋である。口縁端部は断面三角形状を呈する。外面には指押さえの痕跡が目立つ。226～234は瓦質土器火鉢である。226～228は花形、229は円形の火鉢であることが分かるが、他は、破片が小さく不明である。内外面に幅の太いヘラミガキが施される。235は土師器竈形土器である。焚き口上部から釜口までの破片で、釜口を外側に折り曲げて庇としている。236は須恵器である。奈良時代頃の大形の壺などの底部か。237・238は須恵器甕である。237は東播系須恵器である。口縁部内面の端部付近はわずかに凹線状にくぼんでいる。外面は頸部までタタキによって成形している。内面は摩滅が著しい。この個体は、S D 513から出土した破片と接合した。238は香川県十瓶山窯産と思われる。この個体はS D 512・S D 533から出土した破片と接合した。239は陶器鉢である。器面は回転ナデによって平滑



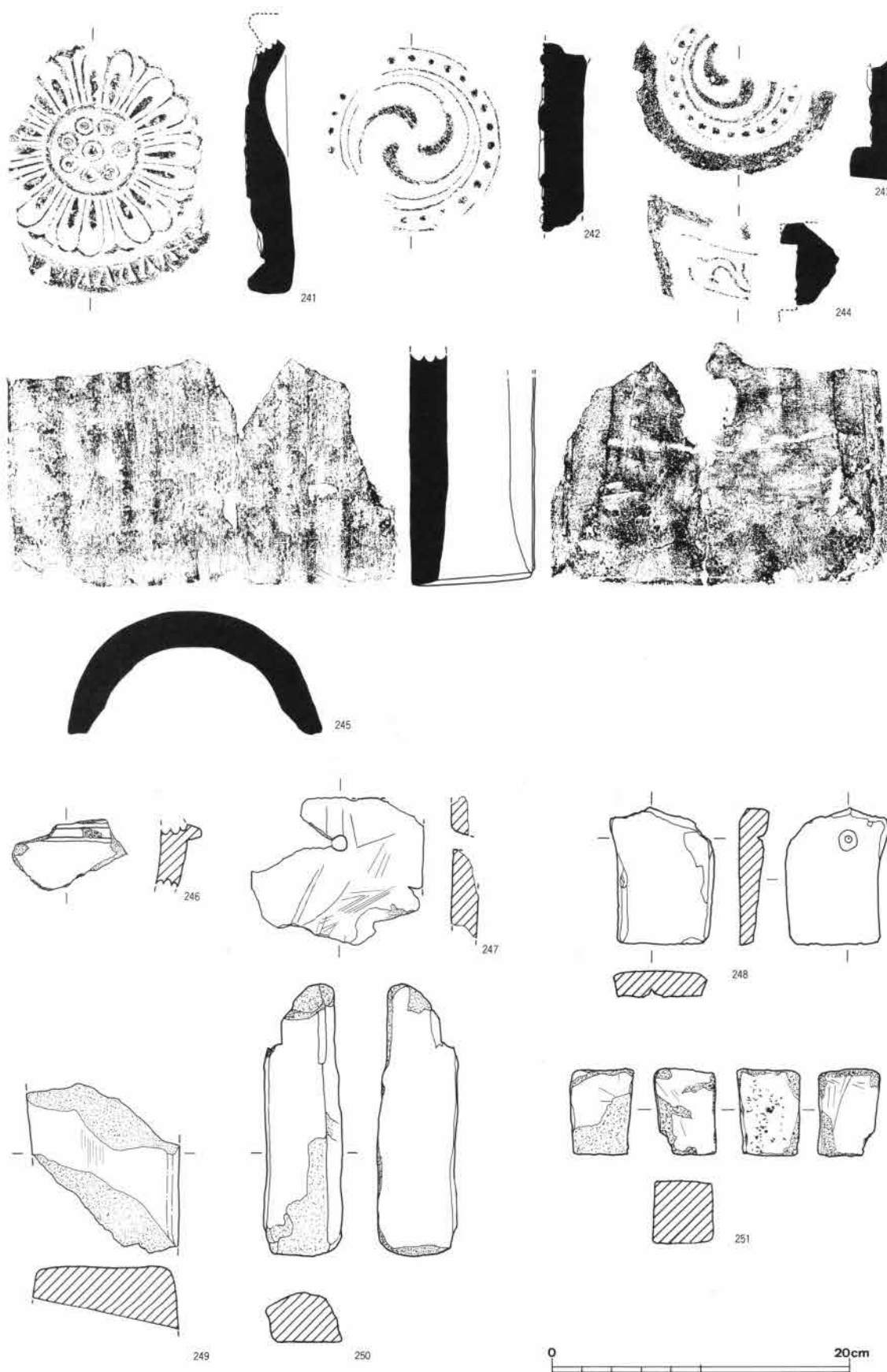
第44図 3トレンチ出土遺物実測図(5) 1/4  
170~215. S X 512



第45図 3 トレンチ出土遺物実測図(6) 1/4  
216~225. S X 512



第46図 3トレンチ出土遺物実測図(7) 1/4  
226~240. S X 512



第47図 3トレンチ出土遺物実測図(8) 1/4  
241~251. S X 512

に調整されているが、内面には段が作られている。240は常滑焼甕である。口縁端部を上下に拡張している。この個体はS D521から出土した破片と接合した。241は複弁蓮華文軒丸瓦である。高麗寺式で、中房には1+7の蓮子が配される。外区は傾斜縁で面違えの鋸歯文を配する。瓦当裏面の上部が大きく円形に凹んでいる。242・243は巴文軒丸瓦である。242は、巴文は左巻きで尾が長く、断面は三角形に近い。連珠文の内外にそれぞれ1条の圏線を巡らせる。243は、巴文は右巻きで尾が長く、断面は台形に近い。連珠文の外側に1条の圏線を巡らせる。周縁は高い。244は唐草文軒平瓦である。唐草文の周りに圏線を巡らせる。245は丸瓦である。外面には側縁に平行する方向のナデ調整が施される。246は滑石製の石鍋である。鏝の断面は低い台形を呈する。247は滑石製の温石である。3方の側面が辛うじて残っている。円孔が1カ所空けられている。248～251は砥石である。248は3面が砥石面として使用されており、砥石面として使用されていない面に円形の窪みが穿たれている。置き砥として使用するとき台に固定するための穴であるか。251は4側面がすべて砥石面として使用されている。

S X 535(第48図252～256) 252は瓦器碗である。口縁部内端に沈線は施されず、内面のヘラミガキもわずかに見られるのみである。253は瓦質土器火鉢である。外面には菊花状のスタンプ文がみられる。254は土師器羽釜である。口縁端部を内側に折り返している。255は陶器鉢である。胎土は灰白色を呈し粗い。256は平瓦である。広端面がわずかに残っている。

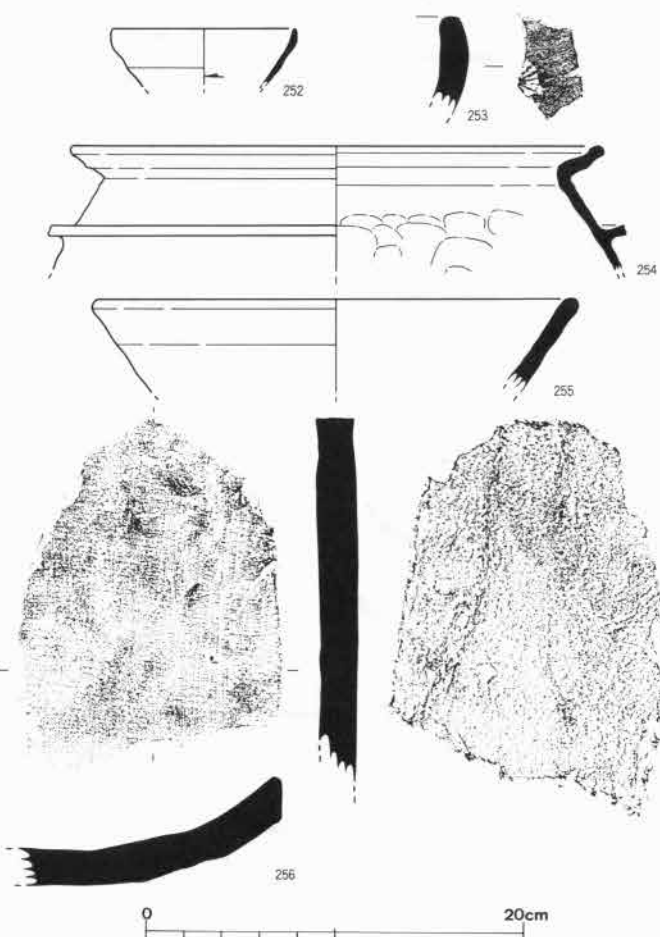
S D 46(第49図257～265) 257は土師器大皿である。口縁端部外面に面取りを施している。258・259は土師器小皿である。258は口縁端部外面にややくずれた面取りを施している。259は1段のヨコナデ調整が施される。260は山茶碗である。淡灰色の粗い胎土の南部系山茶碗である。261～263は瓦器碗である。外面のヘラミガキには分割性が見られず、大和型第Ⅲ段階A型式古相に相当する。264・265は瓦器皿である。内底面に10数往復のジグザグ状の暗文が施される。

S D 512(第49図266～303・第50図304～328) 266～273は土師器大皿である。口縁部に2段のヨコナデ調整を施すもの(266～269)、口縁端部外面に面取りを施すもの(270)、口縁部に1段のヨコナデ調整を施すもの(271～273)がある。274は土師器高台付き皿である。275～294は土師器小皿である。「て」字状口縁のくずれたもの(275)、口縁端部外面に面取りを施すもの(276～285)、口縁部に1段のヨコナデ調整を施すもの(286～294)がある。色調は淡灰色から淡茶灰色のものが多いが、294は淡橙色を呈する。295～311は瓦器碗である。外面のヘラミガキに分割性がみられ、見込みに連結輪状暗文が施された大和型第Ⅱ段階B型式に相当するもの(295～298)と、外面のヘラミガキの分割性がくずれた大和型第Ⅲ段階A型式古相に相当するもの(299～311)がある。312～316は瓦器皿である。317～321は白磁碗である。317～320はⅣ類である。321は内面の下端部付近が露胎となっていることからⅧ類と考えられる。322～324は東播系須恵器鉢である。322の口縁端部は内側に拡張している。325・326は土師器羽釜である。内傾する短い口縁部と短い鏝をもつ。内面はナデ調整によって平滑に仕上げられているが、外面はわずかに指押さえの痕跡が認められる。327は土師器鍋と考えられる。胎土や調整は325・326の羽釜と共通する。328は瓦質土器羽釜である。直立する口縁部の外面はヨコナデ調整によって3条の浅い凹線状を呈し、



口縁端部は内側にわずかに伸びる。内面は横方向の板状工具によるナデ調整、胴部外面はナデ調整が施される。

S D 513(第51図329~363) 329~332は土師器大皿である。口縁部のヨコナデ調整を2段に施すもの(329)と、1段に施すもの(330~332)がある。333~340は土師器小皿である。コースター型の皿(333・334)、口縁端部外面に面取りを施すもの(335~338)、口縁部に1段のヨコナデ調整を施すもの(339・340)がある。341~346は瓦器碗である。341は見込みに暗文がみられない。342は大和型第Ⅲ段階A型式古相に相当するが、343~346は内面のヘラミガキの間隔が大きく開き、口径も14cm未満に縮小しており、大和型第Ⅲ段階B型式に相当する。347~350は瓦器皿である。内底面のジグザグ状の暗文が10往復未満のものがみられる。351・352は白磁

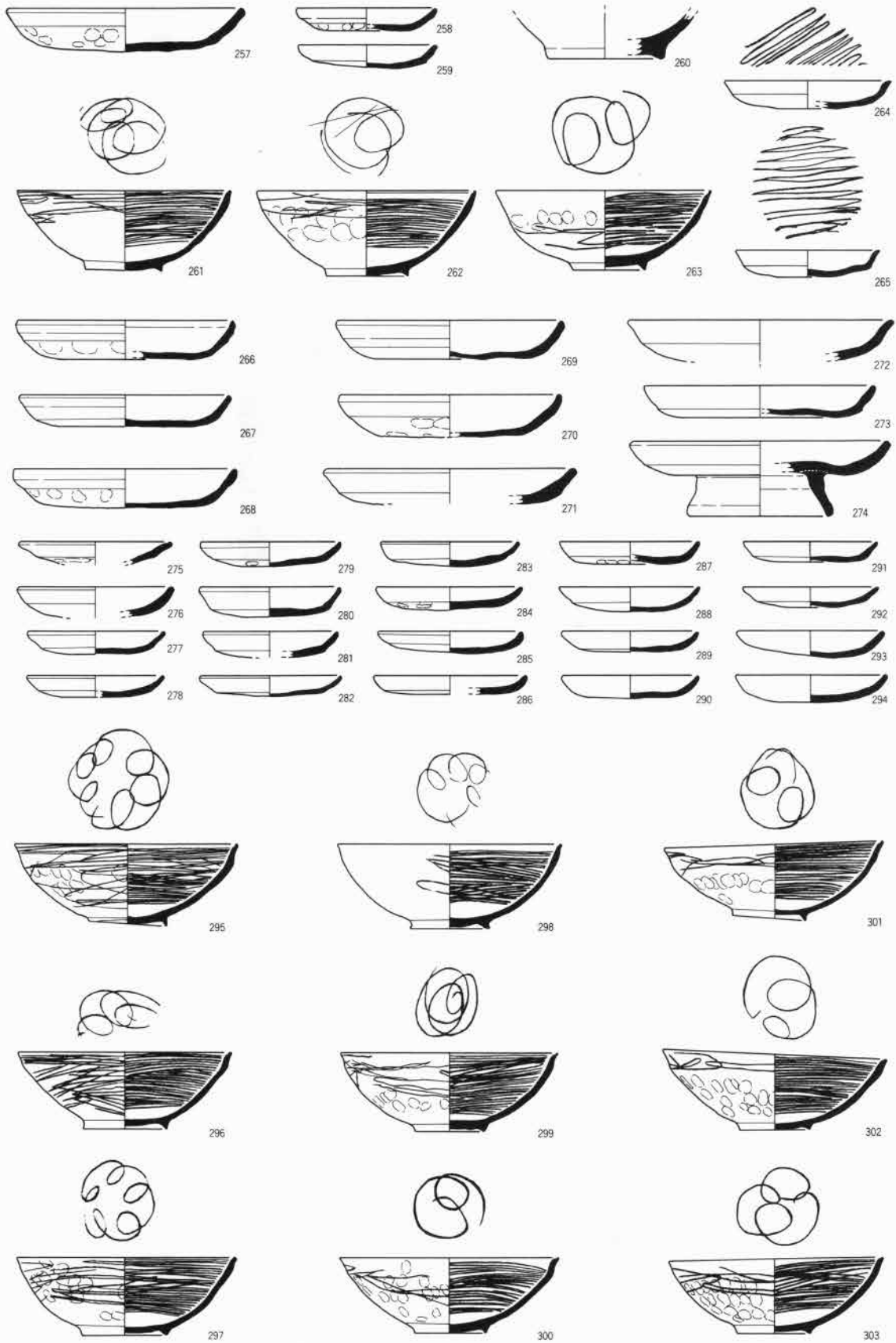


第48図 3 トレンチ出土遺物実測図(9) 1/4  
252~256. S X 535

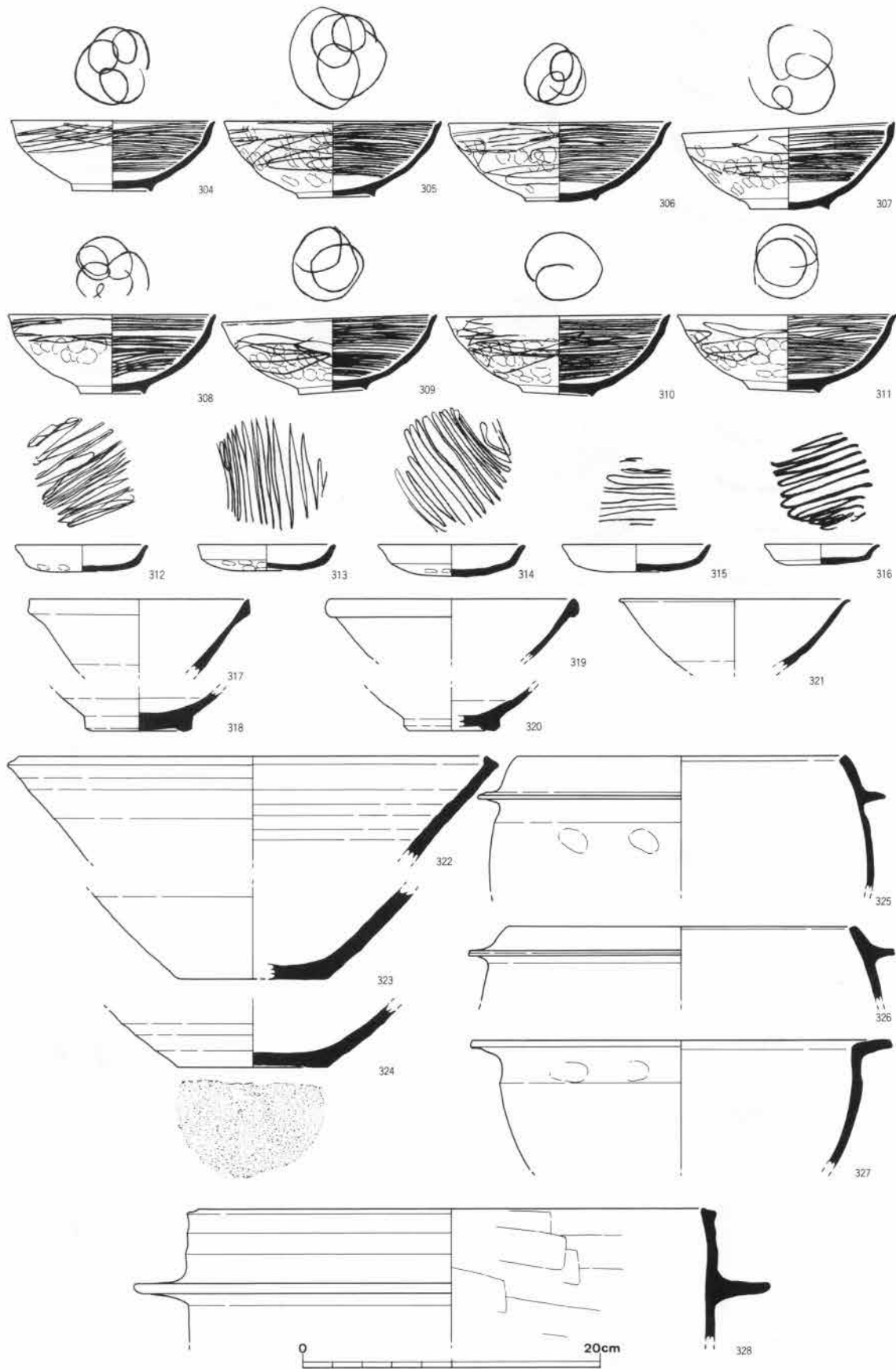
皿である。353~356は白磁碗である。いずれもⅣ類である。357は青磁碗である。龍泉窯系で畳付まで施釉される。釉はオリーブ緑色で、全体に細かな貫入がみられる。358・359は土師器羽釜である。淡灰色から淡茶灰色の粗い胎土で、内傾する口縁部をもつ。360は瓦質土器羽釜である。直立する口縁部の外面は3条の浅い凹線状を呈する。口縁端部は強いヨコナデ調整によって内外方に拡張している。内面は横方向の板状工具によるナデ調整が施される。361は土師器甕形土器である。焚き口に向かって右側上方の釜口部分を含む破片である。外面には把手の痕跡が認められる。内面には横方向の粗いハケ調整が施される。362・363は東播系須恵器鉢である。

S D 521(第52図364~369) 364~367は土師器羽釜である。364はわずかに内傾する短い口縁部をもつ。365は外反する短い口縁部の端部を内側に折り返す。366・367は内湾する口縁部の端部を外側に折り返すもので、短い鏝をもつ。367の鏝は断面三角形の粘土をなでつけたような退化したものである。368は瓦質土器すり鉢である。直線的に開く器形で、端部は断面方形を呈する。内面にすり目がみられるが、何条単位であるかは不明である。369は東播系須恵器鉢である。口縁端部が外下方に大きく肥厚して、玉縁状を呈する。

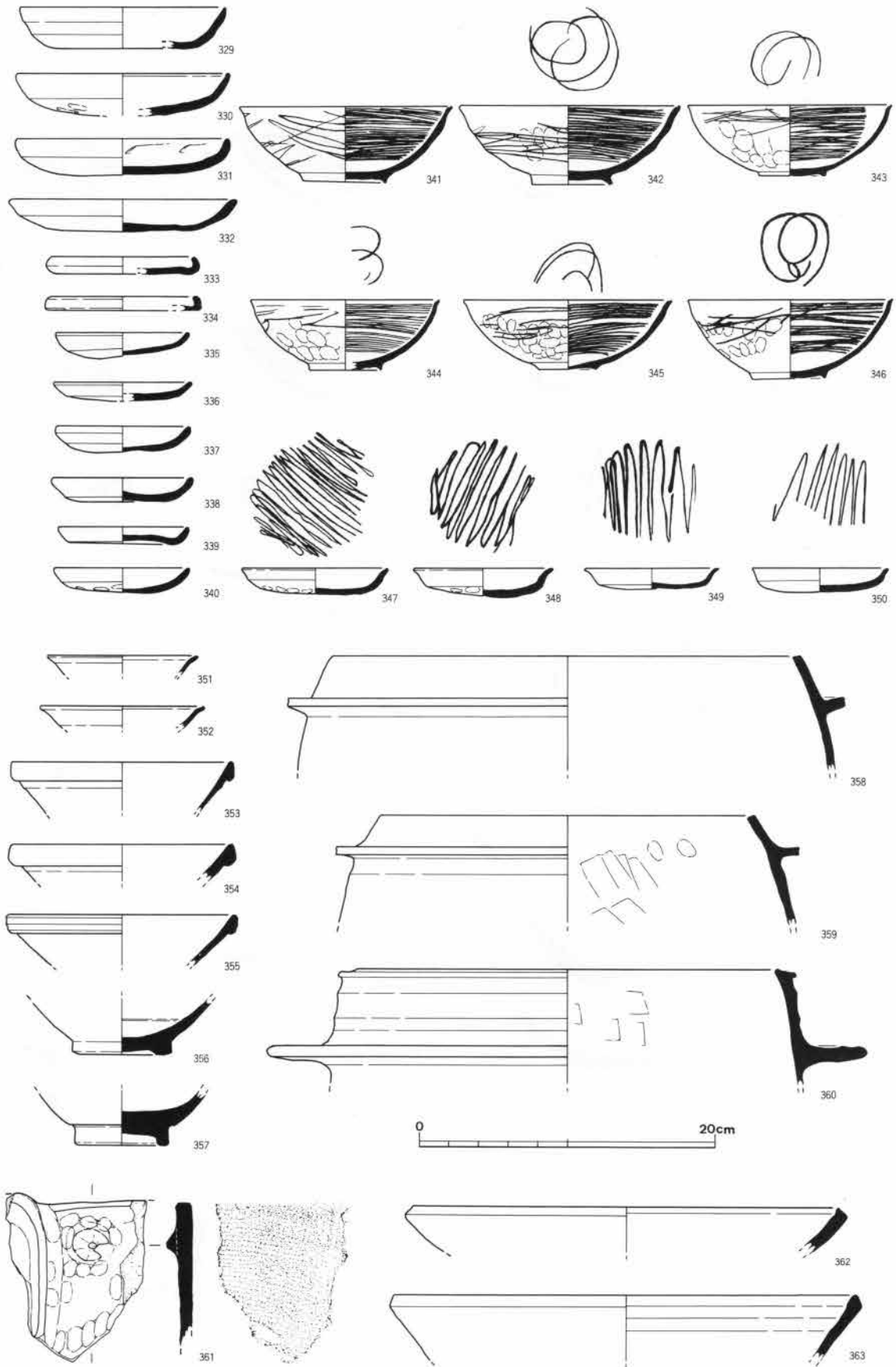
S D 522(第52図370~373) 370は土師器大皿である。口縁部上半のみにヨコナデ調整が施され、端部は外側にやや肥厚する。371は瓦質土器火鉢である。外面には縦方向の幅の広いヘラミガキ



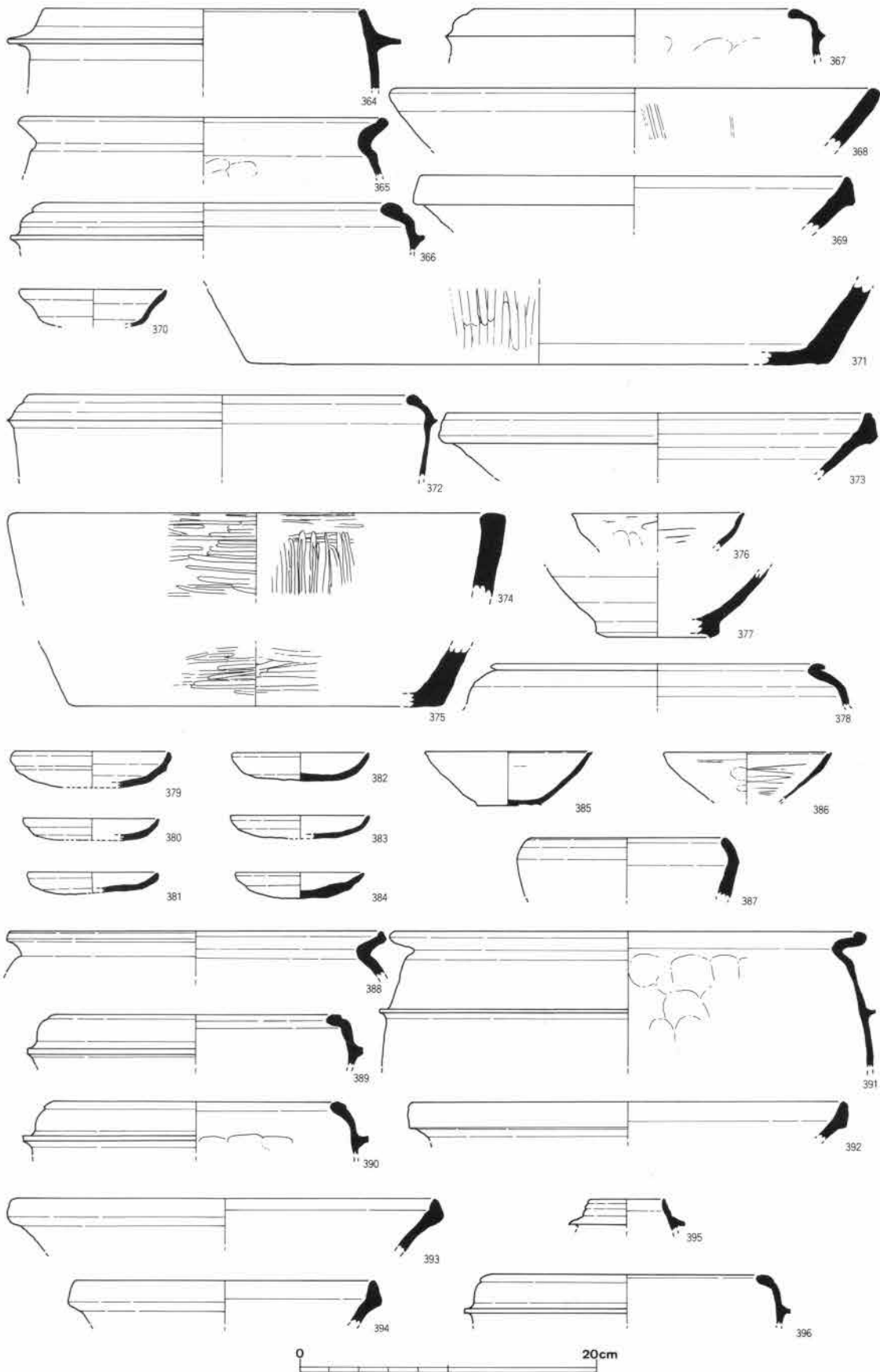
第49図 3 トレンチ出土遺物実測図(10) 1/4  
257~265. S D46 266~303. S D512



第50図 3トレンチ出土遺物実測図(11) 1/4  
304~328. S D512



第51図 3トレンチ出土遺物実測図(12) 1/4  
329~363. S D513



第52図 3トレンチ出土遺物実測図(13) 1/4

364~369. S D521 370~373. S D522 374・375. S D532 376~378. S D534 379~392. S D535 393・394. S D711 395・396. S D742

が密に施される。底部外面は砂底である。372は土師器羽釜である。内湾する口縁部の端部を外側に折り返すもので、退化した断面三角形の鏝が高い位置につけられる。373は東播系須恵器鉢である。口縁端部は外側に肥厚している。

S D 532(第52図374・375) 374・375ともに瓦質土器火鉢である。外面は横方向の幅の広いヘラミガキが密に施される。内面のヘラミガキは、374では体部中位は縦方向、上端部付近は横方向に施され、375では横方向に施される。374と375ではヘラミガキの原体が異なり、同一個体ではないと考えられる。

S D 534(第52図376～378) 376は瓦器椀である。外面にはわずかにヘラミガキが施され、内面には大きく間隔の開いた圏線ミガキが施される。377は白磁椀Ⅳ類である。378は土師器羽釜である。内湾する口縁部の端部を外側に折り返すもので、鏝部以下は失われている。

S D 535(第52図379～392) 379～384は土師器小皿である。379～383は口縁端部外面に面取りが施されるものである。379は口縁部のヨコナデ調整が強く、外面に段ができています。384は口縁部に1段のヨコナデ調整が施される。385・386は瓦器椀である。386は内面に粗い圏線ミガキ、外面の口縁部付近にわずかなヘラミガキが施される。大和型第Ⅲ段階D型式に相当する。387は信楽焼鉢である。388～391は土師器羽釜である。388・391は外反する口縁部の端部を内側に折り返すもので、391の胴部内面には円形の当て具の痕跡が認められる。389・390は内湾する口縁部の端部を外側に折り返す。392は東播系須恵器鉢である。口縁端部は玉縁状を呈する。

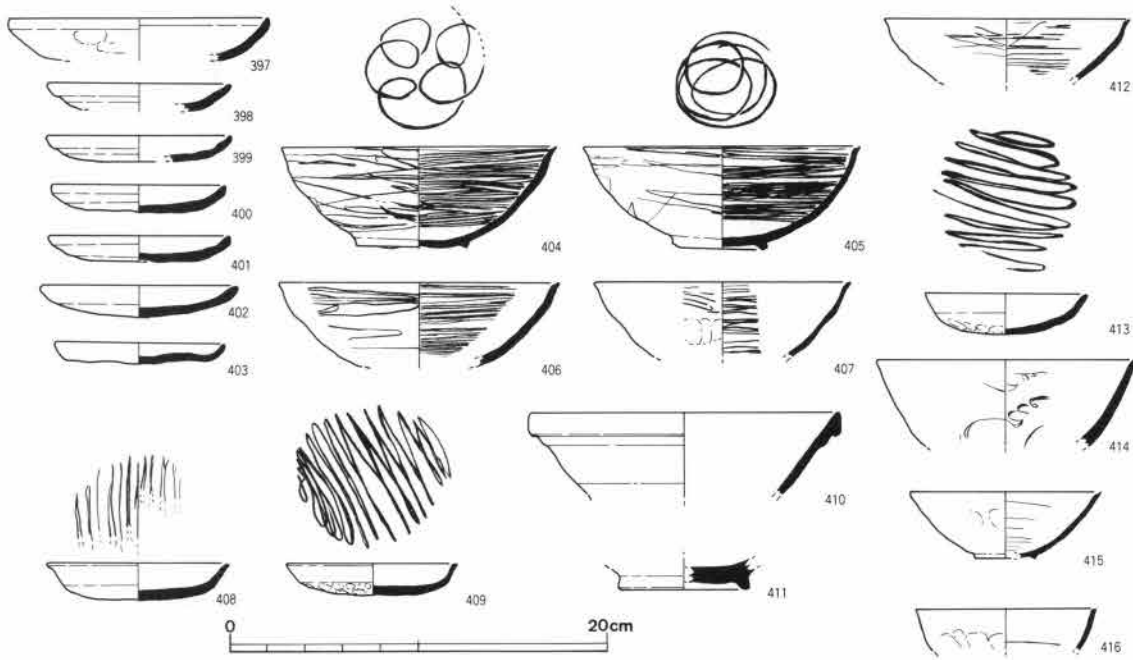
S D 711(第52図393・394) 393・394は東播系須恵器鉢である。口縁端部は上方に折り曲げるように拡張し、外側にも肥厚している。

S D 742(第52図395・396) 395はミニチュアの瓦質土器羽釜である。396は土師器羽釜である。内湾する口縁部の端部を外側に折り返す。

S B 1(第53図397～411) 397は土師器大皿である。口縁端部をつまみ上げるようにヨコナデ調整を施している。398～403は土師器小皿である。口縁部に2段のヨコナデ調整を施すもの(398・399)、口縁端部外面に面取りを施すもの(400・401)、口縁部に1段のヨコナデ調整施すもの(402・403)がある。404～407は瓦器椀である。404～406は庇の北端のピットから出土した。内面の圏線ミガキにはやや隙間が見られるものがあるが、口縁部を外面のヘラミガキに分割性が認められることから大和型第Ⅱ段階B型式の範疇に納まるものと考えられる。407は、大和型第Ⅲ段階B型式に相当する。408・409は瓦器皿である。S K 514と重複するピットから出土しており、本来はS K 514の遺物であったものがピット内に混入したものと考えられる。410は白磁椀Ⅳ類である。411は山茶椀である。淡灰色の粗い胎土の南部系山茶椀で断面三角形の高台が貼り付けられている。

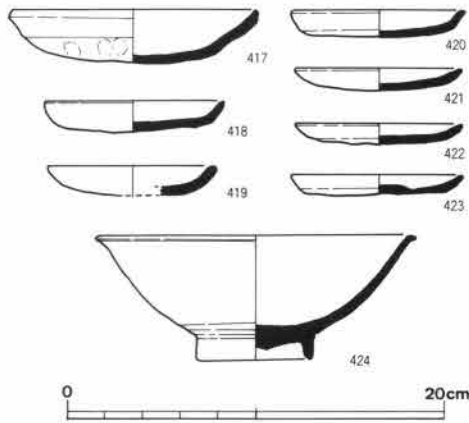
S B 2(第53図412) 412は瓦器椀である。外面上半に粗いヘラミガキが施され、内面には隙間の大きな圏線ミガキが施される。大和型第Ⅲ段階B型式に相当する。

S B 3(第53図413・414) 413は瓦器皿である。内底面に、10往復のジグザグ状の暗文が施される。414は青磁椀である。ヘラと櫛で内面に文様を描くもので、龍泉窯系青磁椀Ⅰ-3類と考



第53図 3トレンチ出土遺物実測図(14) 1/4

397~411. S B 1 412. S B 2 413・414. S B 3 415. S B 5 416. S A 1



第54図 3トレンチ出土遺物実測図(15) 1/4

417~424. S T 382

えられる。副葬品の土師器小皿は7点あったが、1点は遺存状態が悪く、実測することができなかった。口縁部は1段のヨコナデ調整が施されるが、420は一部が面取りを施されたようになっている。424は白磁碗である。V類で、外面の体部下半以下は露胎である。胎土色は灰色を帯び、白化粧が施されている。

えられる。

S B 5 (第53図415) 415は瓦器碗である。外面にはヘラミガキが施されず、内面にも口縁部から見込みまで一連の圈線ミガキが施される。大和型第Ⅲ段階E型式に相当する。

S A 1 (第53図416) 416は瓦器碗である。口縁部内端面にわずかに沈線が施されている。大和型第Ⅳ段階B型式に相当すると思われる。

S T 382 (第54図417~424) 墓の副葬品である。417は土師器大皿である。口縁端部外面に面取りが施される。418~423は土師器小皿

## (2) 4-5トレンチ(第55図)

S D 01 (第55図425~436) 425は山茶碗である。断面三角形の貼り付け高台が底部の外縁に付く。426・427は青磁碗である。426は高台外面まで施釉される。427は全面施釉で、外面に蓮弁文がみられる。428は小破片であるが、口縁部外面に条痕文が認められることや「く」の字に外反する口縁部の端部が方形を呈することなどから、篠原式の縄文土器深鉢と考えられる。429は土

師器壺である。内面にハケ調整がみられる。古墳時代のものと考えられる。430は瓦質土器火鉢である。二次的に火を受けたためか、外面から内面上半にかけて、淡橙灰色を呈する。431は備前焼すり鉢である。口縁端部を上下に拡張している。内面にすり目が見られるが、何条単位かは不明である。432～436は埴輪である。432・433は底部の破片である。423は器材埴輪の台の底部であろうか。434・435は円筒埴輪で、435には断面台形のタガが付く。436は朝顔形円筒埴輪である。これらの埴輪は川西編年のⅣ期に相当する。

(3) 7 トレンチ (第56図～第59図)

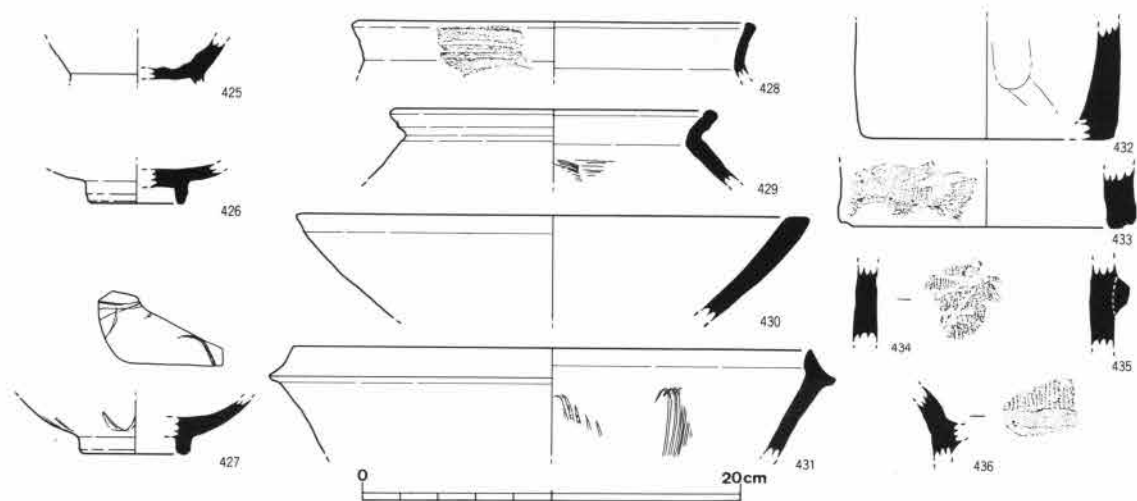
S K 49 (第56図437) 437は瓦器椀である。外面には分割性が明瞭で密なヘラミガキが施され、内面には、見込み部のジグザグ状のヘラミガキの後に、密な圏線ミガキが施される。大和型第Ⅰ段階C型式に相当する。

S K 285 (第56図438～440) 438は土師器小皿である。平坦な底部から口縁部が直立気味に立ち上がる。439は瓦器椀である。外面には粗いヘラミガキが上半部のみ施され、内面はやや隙間の空いた圏線ミガキを施す。大和型第Ⅲ段階A型式古相に相当する。440は土師器羽釜である。

S K 54 (第56図441) 441は白磁椀Ⅱ類である。体部は内湾し、口縁端部は小さな玉縁状を呈する。釉調は黄色味を帯びる。

S K 4 (第56図442～452) 442～444は土師器小皿である。口縁部に1段のヨコナデ調整が施される。446～447は瓦器椀である。外面は口縁部付近のみに横方向の粗いヘラミガキが施され、内面には大きく隙間の開いた圏線ミガキが施される。大和型第Ⅲ段階B型式に相当する。448・449は瓦器皿である。450・451は青磁椀である。450は外面に櫛描き文が施された同安窯系Ⅰ-1b類、451は龍泉窯系Ⅰ-2類である。452は土師器羽釜である。内面は板状工具によるナデ調整が施されるが、胴部外面は指押さえの痕跡や粘土紐の継ぎ目が目立つ。

S K 48 (第56図453～460) 453・454は土師器小皿である。453は口縁部に1段のヨコナデ調整



第55図 4-5 トレンチ出土遺物実測図 1/4  
425～436. S D01





第56図 7トレンチ出土遺物実測図(1) 1/4

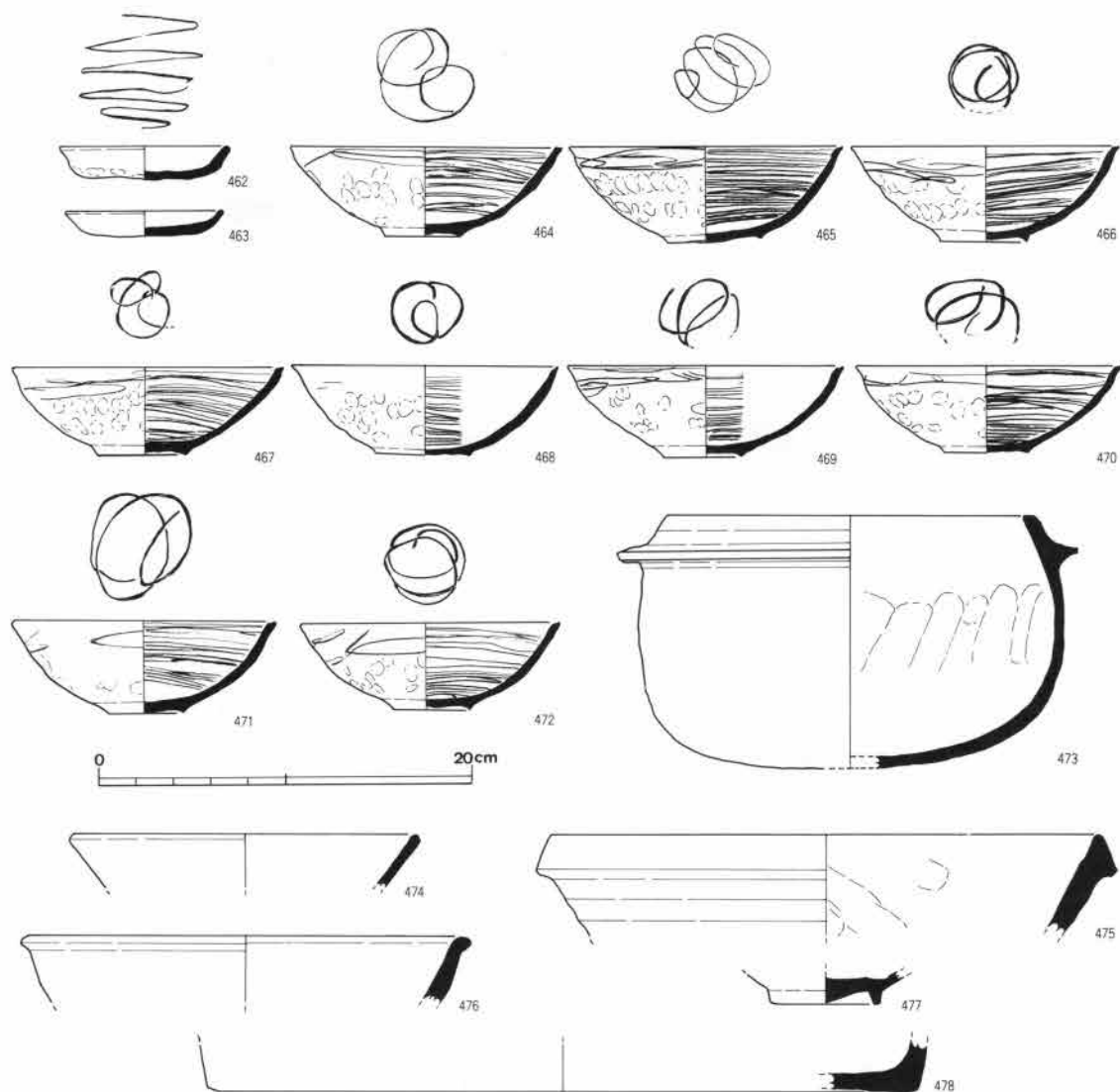
437. S K 49 438~440. S K 285 441. S K 54 442~452. S K 04 453~460. S K 48 461. S K 168

が施される。454は分厚くて平坦な底部から折り曲げるように短い口縁部が立ち上がる。455は土師器大皿である。底部から強く屈曲して口縁部が立ち上がるもので、端部はわずかに上方に曲がりながら尖り気味に終わる。456は瓦器椀である。外面のヘラミガキがみられず、大和型第Ⅲ段階D型式に相当すると考えられる。457は山茶椀である。口縁端部は外反し、丸く終わる。灰白色の粗い胎土である。458・459は瓦器皿である。458は内底面にほとんど隙間なくヘラミガキが施される。460は東播系須恵器鉢である。口縁端部は上方につまみ上げるようにわずかに拡張する。

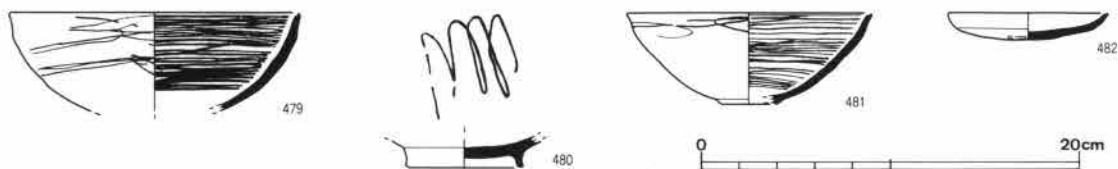
S K 168(第56図461) 461は羽釜の埋納された土坑の埋土から出土した東播系須恵器鉢である。口縁部はわずかに拡張される。

S D 37(第57図462) 462は瓦器皿である。内底面に5往復程度のジグザグ状の暗文を施す。

S D 5(第57図463~473) 463は土師器小皿である。口縁部には1段のヨコナデ調整が施され



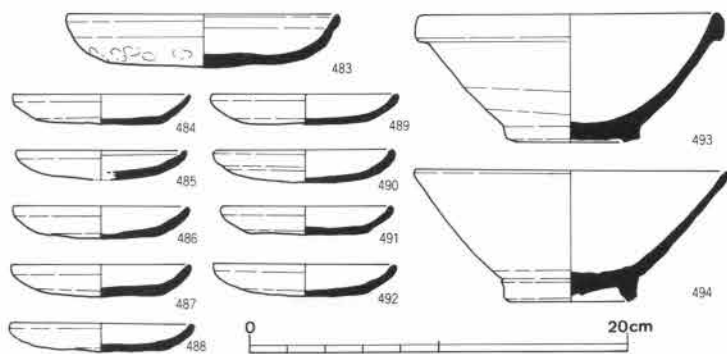
第57図 7トレンチ出土遺物実測図(2) 1/4  
462. S D37 463~473. S D05 474~478. S D01



第58図 7トレンチ出土遺物実測図(3) 1/4  
479・480: S B 2 481: S B 3 482: S B 4

る。464~472は瓦器碗である。内面にやや粗い圏線ミガキが施され、口径14cm余りを測る大和型第Ⅲ段階A型式新相のもの(464~469)と内面の圏線ミガキがさらに粗く、隙間が大きく開いて、口径も14cm未満に縮小した大和型第Ⅲ段階B型式のもの(470~472)がある。473は土師器羽釜である。寸胴形の胴部に短い鏝が付く。胴部内面に縦方向の板状工具によるナデ調整が施される。

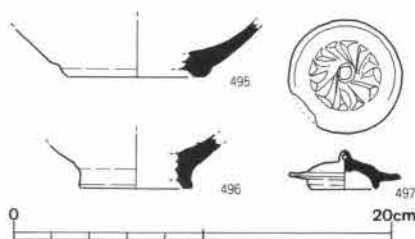
S D 1 (第57図474~478) 474・475は東播系須恵器鉢である。474は口縁端部を丸く納めている。475は口縁端部を外側に拡張して玉縁状を呈する。476は信楽焼鉢である。口縁部は外側に短く屈曲し、端部は丸く納める。477は白磁碗Ⅷ類である。見込みに輪状の釉掻きがみられる。478



第59図 7トレンチ出土遺物実測図(4) 1/4  
483~494. S T 185

は瓦質土器火鉢である。底部外面は離れ砂の痕跡がみられる。

S B 2 (第58図479・480) 479・480は瓦器椀である。479の外面のヘラミガキには分割性がみられ、内面も密な圏線ミガキが施される。480は断面方形の高い高台をもち、見込みにはジグザグ状の暗文が施される。大和型第I段階D型式に相当する。



第60図 遺構に伴わない遺物実測図  
1/4

S B 3 (第58図481) 481は瓦器椀である。内面のヘラミガキは隙間が大きく開き、大和型第III段階B型式に相当すると思われる。

S B 4 (第58図482) 482は土師器小皿である。口縁部は1段のヨコナデ調整が施され、端部は尖り気味に終わる。

S T 185 (第59図483~494) 墓の副葬品である。483は土師

器大皿である。口縁端部外面に面取りが施される。484~492は土師器小皿である。すべて口縁端部外面に面取りを施す。493・494は白磁椀である。493は大きな玉縁状の口縁部と低い削り出し高台をもつIV類で、494は見込みに輪状の釉掻きがみられるVIII類である。494の釉薬は光沢を失っている。

遺構に伴わない遺物(第60図495~497) 重機掘削中などに遺構に伴わない形で出土した遺物は多数あるが、ここでは珍しい中国製陶磁器のみを掲げた。495・496は越州窯系青磁椀である。胎土・釉の発色ともに余り良くない。見込みには目痕がみられる。497は青白磁小壺の蓋である。釉調は透明感のある淡い青色を呈する。

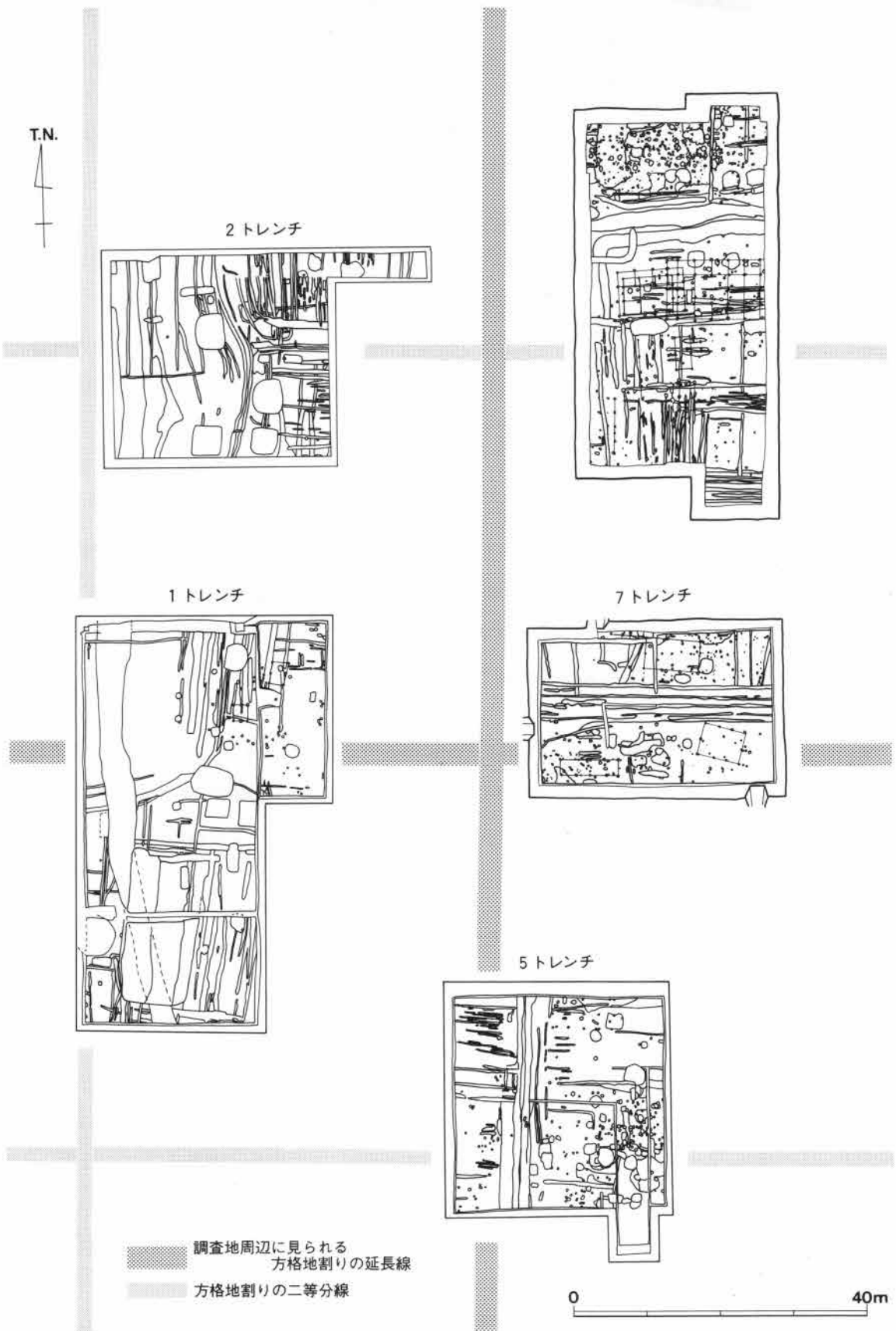
## 5. まとめ

3トレンチで検出された遺構を時期ごとにみると以下のようなになる。

12世紀前半以前に遡ることが確実な遺構はみられず、12世紀後半から突然多数の遺構がみられるようになる。12世紀後半から13世紀前半は遺構・遺物ともに最も数が多く、最盛期と言えよう。

調査区中央部では、L字状に曲がる溝S D 513に囲まれた範囲に、大規模な掘立柱建物跡S B 1とS B 2・S B 3が存在する。これらは互いに重複するために同時に存在することはないが、いずれも13世紀前半のうちに納まる建物と考えられる。S D 513も13世紀前葉に埋没したと考えられるので、S D 513に囲まれた範囲は屋敷地の一面と考えることができる。これらの建物の南側には同時期の遺構は存在せず、空閑地が広がっていたものと考えられる。

この屋敷地の北側には溝S D 512を隔てて調査区の北端までピットなどの遺構が密集している。ここには建物を復元することはできなかったが、S D 512の北側も別の屋敷地の一部と考えるこ



第61図 1～3・5・7トレンチ平面略図(1/800)

とができる。S D512はS D513よりもやや早い12世紀後半に埋没しているが、両者は平行して掘られていることから、同時に存在した時期があったものと考えられる。13世紀初頭頃と考えられる墓S T382もこの屋敷地に関連するものとみることができる。

13世紀後半には調査区中央部にS D535が掘られる。この位置は調査地周辺に見られる方格地割を二等分する位置にあたり、13世紀前半までの屋敷地の建物や溝がこの位置より北でおさまっていたことも、方格地割の二等分線を意識していた可能性が高い。しかしながら、この時期の遺構は少ない。

14世紀に入ると、再び遺構の数が増加する。調査区北部ではS K173・177・530・531、S D521・532、S X512などがこの時期の遺構であるが、建物を復元することはできなかった。中央部以南では、S D735・742・743、S B4・5、S A1・2、S X535などのほか、調査区南部で検出した小溝群のうち、時期の分かるもののほとんどはこの時期の遺構である。

7トレンチでは11世紀後半のS K49、12世紀初頭S B2、12世紀中葉のS T182などの遺構がみられる。しかし、最も遺構が多いのは13世紀中葉から後半で、S K4・48・285、S B3、S D5などがある。この時期は3トレンチでは遺構の少ない時期にあたり、遺跡の中で居住域が移動したことを示しているのかもしれない。14世紀になると7トレンチでは再び遺構の数が減少し、3トレンチで増加することも同様に考えることができる。

また、13世紀中葉のS B3、S D5は北から東に大きく振っているが、平成8年度に調査した4-3トレンチでも13世紀中葉頃の溝S D148などは、N-77°-Wの方向を示し、これらとはほぼ直交する。当遺跡で検出される建物や溝などは、12世紀後半頃まで遡ることが判明した調査地周辺の方格地割に規制されて、正方位に対して平行もしくは直交するものがほとんどであるが、これら方向の異なる遺構は、方格地割が必ずしも12世紀後半からほぼ変わらずに維持されてきたわけではないことを示すものかもしれない。

S D1は時期を特定することはできないが、断面観察によって、溝の北肩が南に移動して溝の幅が狭くなって行くという変遷が明らかになった。調査地周辺の方格地割の延長線は、S D1のさらに南に位置し、地境線の移動の方向性が南であることを示している。

最後に、平成7年度から順次行ってきた調査で、これまでにわかってきたことをまとめると、以下のようなになる。

遺跡の南半部(旧浜道より南側)では、東寄りの3・5・7トレンチで特に遺構が密集して検出された。3・5・7トレンチ付近は、遺跡の中でも最も高い位置にあり、5トレンチで検出された坪境の南北溝から東側が集落の中心部分であると考えられる。この範囲では、12世紀後半を中心に14世紀中頃までの遺構が数多く検出されたが、細かく見れば、この範囲の中でも時期ごとに集落の中心域は移動しているようである。一方、1・2トレンチでは南北に100m以上にわたって続くと思われる溝が検出された。この溝は集落の西を限るものと考えられ、集落の中心からこの溝までの間には耕作溝が目立つほか、13世紀の遺構が散在している。そして、13世紀には集落の西を限ると考えられるこの溝も埋められ、遺構がさらに西に広がっていく。

遺跡の北半部では4-3トレンチ付近を中心に顕著に遺構が検出されたが、南半部に比べると、13世紀以降の遺構が目立つ。遺跡の南半部にあった12世紀後半の集落が北側にも広がったことがわかる。そして、4-5トレンチで検出した北に向かって落ちる肩が、遺跡の立地する微高地の北辺で、集落の北限になると考えられる。

このように、棕ノ木遺跡の調査では、この地の中世集落の変遷について明らかにすることができた。しかしながら、集落の範囲については、西と北の限りは判明したが、東と南については調査対象地の範囲外に集落関連の遺構が続いていることが予想され、今後の開発にあたっては注意が必要である。

また、調査で出土した多量の遺物には、この地域の中世前期の土器編年の基準になる良好な資料が多い。棕ノ木遺跡の集落は、ほぼ中世前期を通じて存続し、溝で区画された屋敷地や中国製の白磁碗を副葬する墓をもつなど、有力な拠点集落であると考えられる。集落の性格としては、少量ながら、瀬戸内海沿岸をはじめ各地の土器類が出土していることから、木津川の川港を押さえるなど、舟運に深く関係する集落である可能性が高いと思われる。

(森島康雄)

注1 伊賀高弘・森島康雄「棕ノ木遺跡平成7・8年度発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第81冊(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1998

注2 森島康雄「棕ノ木遺跡第3次の発掘調査」(『京都府埋蔵文化財情報』第67号(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1998

注3 瓦器碗の型式と年代観は、次によった。

川越俊一「大和地方出土の瓦器をめぐる二・三の問題」(『文化財論叢』奈良国立文化財研究所) 1983

森島康雄「畿内産瓦器碗の併行関係と暦年代」(『大和の中世土器』Ⅱ 大和古中近研究会) 1992

注4 中国陶磁器の型式は、横田賢次郎・森田 勉「大宰府出土の輸入中国陶磁器について」(『研究論集』4 九州歴史資料館) 1978 によった。

調査および整理作業に参加していただいた方は以下のとおりである。(順不同・敬称略)

五百磐頭一・西根正弘・井ノ口雄三・久田亨・奥村茂輝・小松厚子・高木克彦・田渕二郎・福井正武・宮元香織・山本佳子・山口良太・大坪由美香・大山慶子・兼田一成・山本弥生・中島恵美子・山中道代・林益美・小原志奈子・井上綾子・前山華苗子・佐藤美穂・関野雅子

### 3. 木津地区所在遺跡平成9年度発掘調査概要

#### はじめに

この調査は、関西文化学術研究都市の整備事業に伴い、住宅・都市整備公団関西支社(関西文化学術研究都市整備局)の依頼を受けて実施したものである。

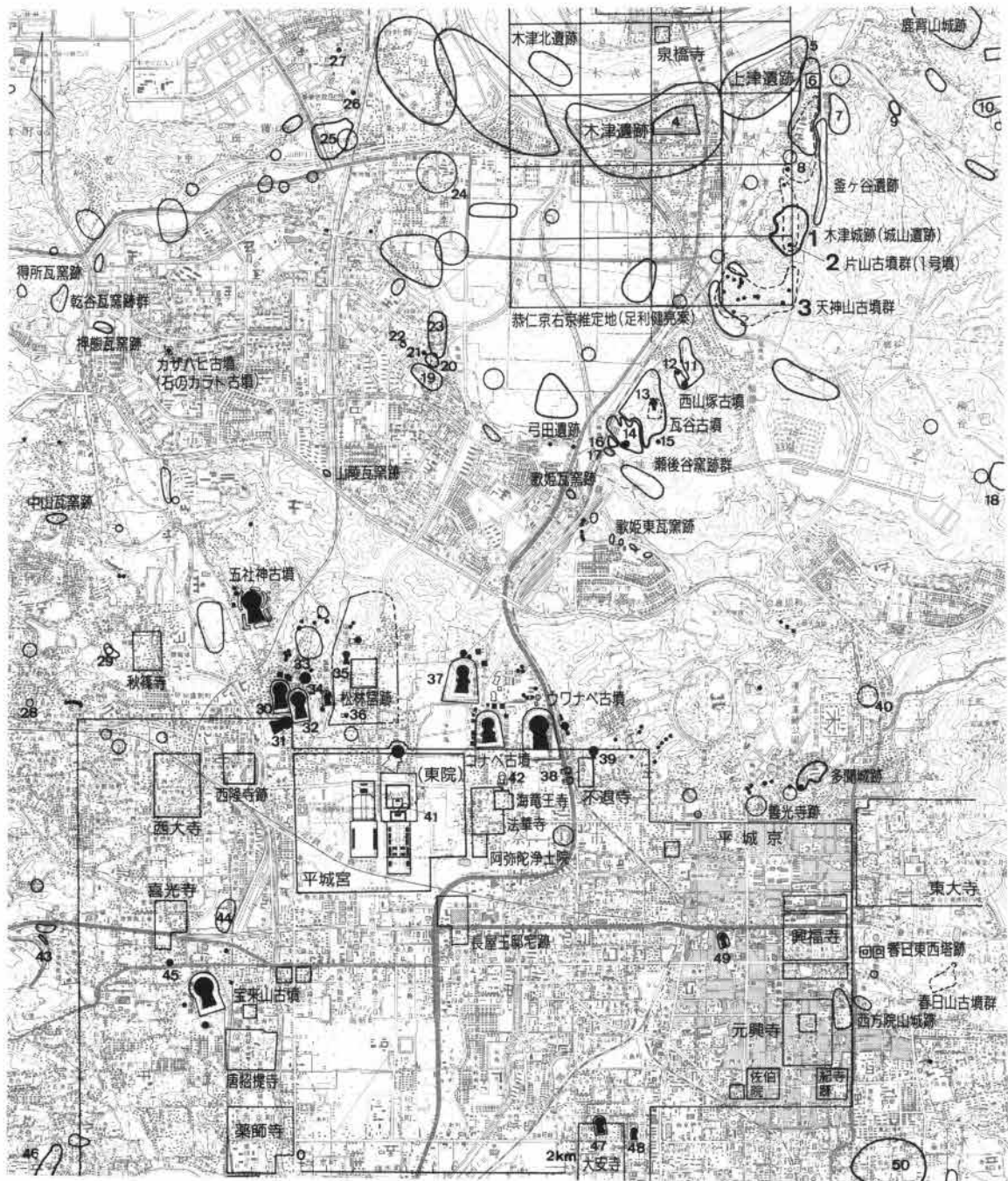
当事業に係る事前の発掘調査は、昭和59年度から現在に至るまで継続的に行っており、今年度は、木津町の旧市街地の東に面する丘陵地帯、つまり学研都市中央地区に所在する木津城跡、片山古墳群、天神山古墳群の3遺跡が調査対象となった。

これらの遺跡は、木津川やその支流の沖積作用によって形成された山城盆地(京都盆地)の南端を馬蹄形に取り囲む鮮新～更新統(大阪層群)からなる洪積丘陵の縁辺に立地する。対象地のある木津東部丘陵の平野側の縁辺部は、南北に直線的に走る断層起源の釜ヶ谷河谷によって地形的に東側の丘陵本体から切り離されている。この地区の地勢は、西に面する傾斜がより急峻で、中小規模の開析谷が数多くみられ、複雑な地形を呈する。これに対し、その東側斜面は開析作用がなされず、西側に比べるとやや緩い勾配で釜ヶ谷側へ下降している。この周囲を囲画された丘陵地区の最高所(標高106.0m)には、通称「城山」と称する山塊があり、基本的にはここから南北方向に主尾根が展開する。

調査の対象となった木津城跡は、この「城山」を中心に形成された遺跡で、その中心部分に土塁や堀によって囲画された曲輪遺構(主郭)等が良好に残されている。天神山古墳群は、当丘陵の南を画する井関川河谷に面する丘陵南端部に位置し、南北主尾根から西に派生する支脈の尾根筋の各所に古墳状の隆起地形が点在する。片山古墳群は、2基の古墳から構成され、木津城主郭の所在する城山から派生した南北方向の尾根筋にやや離れて分布する。

調査は、各遺跡ともその実態に不明な点が多いことから、まず要所に試掘トレンチを設けて遺構、遺物の有無の確認を行い、その成果を受けて適宜調査区を拡張する方針をとった。

つまり、木津城跡については、城郭遺構が遺存する主郭部分については、事前に緑地帯として保存されることが決定されていたため、調査はこの山城の城域の拡がりを確認する目的で、主郭の周囲に派生する尾根筋に7か所試掘坑を設けて行った(第63図のⅠ～Ⅶトレンチ)。その結果、各調査区とも中世の城郭に関連する遺構、遺物は検出されず、代わって弥生時代後期の遺物を含む遺構が広い範囲で確認された。つまり、主郭から北西に延びる尾根筋に配したⅡトレンチでは方形台状墓2基を検出し、主郭南側に連続するⅠ・Ⅴ～Ⅶトレンチでは、竪穴式住居跡や「V」字形断面を呈する堀状の溝を確認した。これらは、その内容と立地条件から弥生時代後期に機能した典型的な「高地性集落」を構成することは容易に判断できたため、遺跡は重複するが遺跡地図で指定された「木津城跡」を含むより広い範囲を中世木津城と区別するため、関係諸機関と協



第62図 調査地位置図及び周辺遺跡配置図 (1/50,000)

- |                  |                  |                |             |
|------------------|------------------|----------------|-------------|
| 1. 木津城跡 (木津城山遺跡) | 2. 片山古墳群 (1号墳)   | 3. 天神山古墳群      | 4. 木津平城跡    |
| 5. 燈籠寺遺跡         | 6. 燈籠寺廃寺         | 7. 赤ヶ平遺跡       | 8. 内田山古墳群   |
| 9. 鹿背山瓦窯跡        | 10. 巾ヶ谷遺跡        | 11. 西山遺跡       | 12. 西山古墓    |
| 13. 瓦谷古墳群        | 14. 上人ヶ平遺跡 (古墳群) | 15. 幣羅坂古墳      | 16. 市坂瓦窯跡   |
| 17. 五領池東瓦窯跡      | 18. 梅谷瓦窯跡        | 19. 歌姫西瓦窯跡     | 20. 音如ヶ谷瓦窯跡 |
| 21. 音乗谷古墳        | 22. 相樂山銅鐸出土地     | 23. 大島遺跡       | 24. 相樂遺跡    |
| 25. 樋ノ口遺跡        | 26. 白山古墳         | 27. 坊谷古墳       | 28. 新堂寺古墳   |
| 29. 秋篠銅鐸出土地      | 30. 佐紀石塚山古墳      | 31. 佐紀高塚古墳     | 32. 佐紀陵山古墳  |
| 33. マエ塚古墳        | 34. 瓢箪山古墳        | 35. 塩塚古墳       | 36. 猫塚古墳    |
| 37. ヒシアゲ古墳       | 38. 平塚古墳群        | 39. 不退寺裏山古墳    | 40. 般若寺     |
| 41. 神明野古墳        | 42. 木取山古墳        | 43. 宝来横穴古墳群    | 44. 菅原東遺跡   |
| 45. 兵庫山古墳        | 46. 六条山遺跡        | 47. 杉山古墳 (瓦窯跡) | 48. 墓山古墳    |
| 49. 念仏寺山古墳       | 50. 南紀寺遺跡        |                |             |



議の上、新たに「木津城山遺跡」と命名することにした。そして、防災対策等の条件の整った木津城主郭から南に延びる主尾根の東側斜面を本調査に切り替えて、その内容の究明を試みることにした。調査期間は、試掘調査が平成9年6月17日から同年10月15日まで、本調査が平成9年12月1日から平成10年3月6日までで、調査面積は合わせて3,000㎡である。

一方、天神山古墳群については、開発対象地が古墳群の広がる丘陵の東寄りに当たり、この地区内では遺跡地図に指示された2基の古墳(1・2号墳)が含まれていた。ただ、この開発計画を受けて再度開発区域内を精密に踏査したところ、新たに8基の古墳状隆起の存在を確認した。調査は、これらの古墳状隆起を結ぶように幅2m、総延長約400mの試掘トレンチを尾根の稜線上に配し、古墳の存否、あるいはその他の埋没遺構や遺物の確認に当たった(第79図)。試掘調査の結果、通称「天神山」と称する当古墳群が分布する最高所(標高99.4m)、及びその西方70mの地点で、人為的な地形加工の痕跡と溝状遺構を確認したので、この2か所を適宜拡張した。調査期間は、平成9年10月6日から平成10年1月28日までで、調査面積は1,100㎡を測る。

次に、片山古墳群は、調査の対象となったのは、遺跡地図に「片山1号墳」と登録された円墳状の古墳状隆起である。この古墳は、木津城主郭が形成された同じ尾根上にあり、主郭南辺の堀状遺構から南へ約70mの地点に立地する。調査は、墳丘とみられた尾根のピーク(標高105.5m)を中心に東西9m・南北13mの長方形トレンチを配して、初めから面的調査を行った(第63図)。調査期間は平成9年8月7日から平成9年10月16日で、調査面積は約113㎡となる。

これら一連の現地調査については、当調査研究センター調査第2課調査第3係長奥村清一郎・同主任調査員引原茂治・同主査調査員古瀬誠三・同調査員伊賀高弘・有井広幸が担当した。調査に係る経費は、住宅・都市整備公団(関西文化学術研究都市整備局)が負担した。

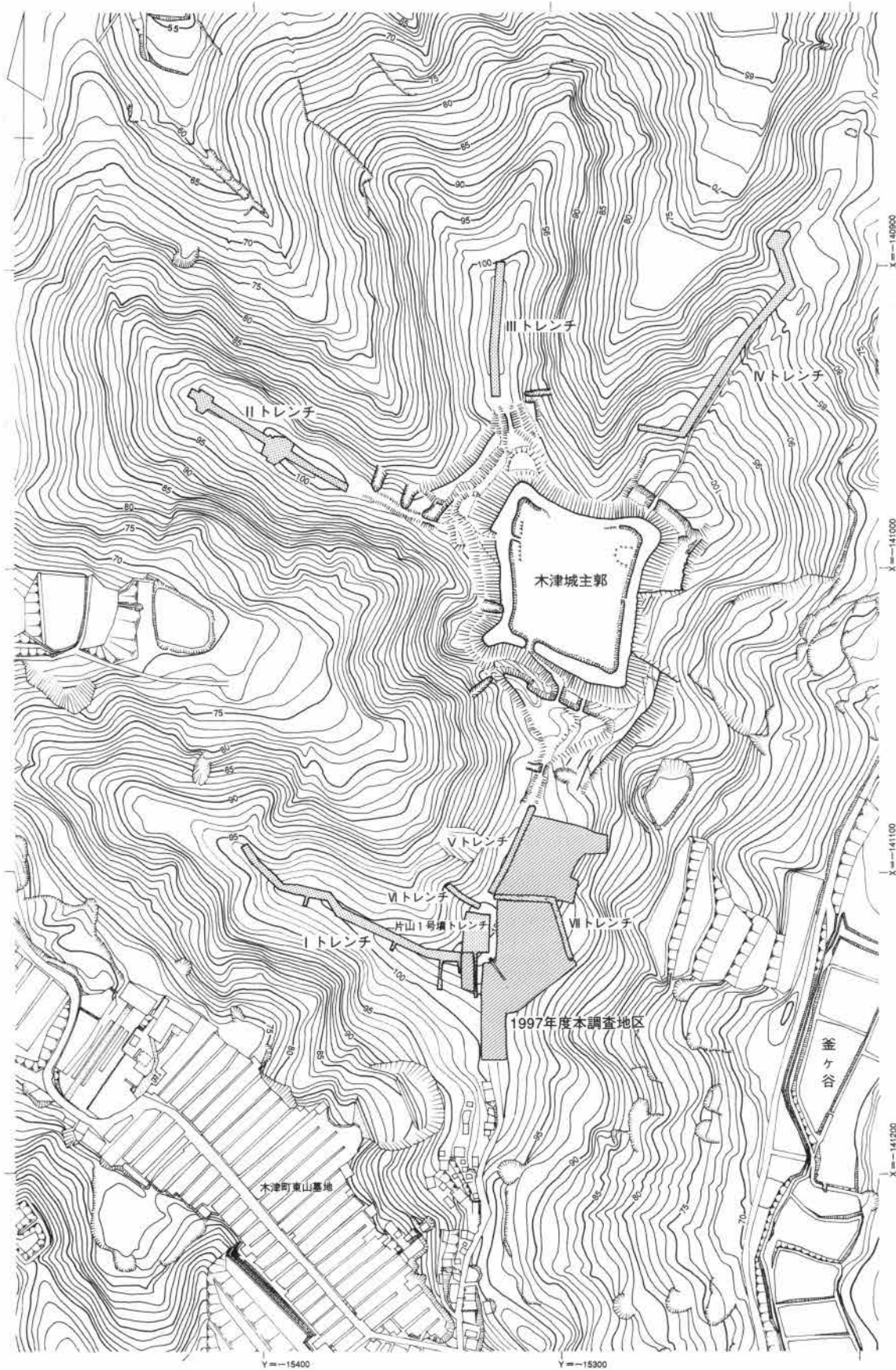
本報告の執筆は、「出土遺物」の項目を奈良大学学生萩谷良太が、それ以外を伊賀が行った。なお、京都府教育委員会、木津町教育委員会、京都府立山城郷土資料館、木津の緑と文化財を守る会、京都大学考古学研究室、京都大学人文科学研究所、奈良国立文化財研究所などの関係諸機関からご教示・ご協力いただいた。また、遺物の整理・分析にあたっては、芦屋市教育委員会森岡秀人氏・奈良県立橿原考古学研究所寺沢 薫氏のご教示をいただいた。さらに、調査および報告書の作成にあたっては、多くの作業員・調査補助員・整理員(注1)の協力をいただいた。末尾ではあるが、記して感謝の意を表したい。

## (1) 木津城山遺跡

### 1. 検出遺構

#### a. 本調査地区(Iトレンチ)

S D01(第64図) 片山1号墳の所在するピークから西方に延びる幅の狭い支脈に設定した試掘



第63図 木津城山遺跡トレンチ配置図(1/2,000)

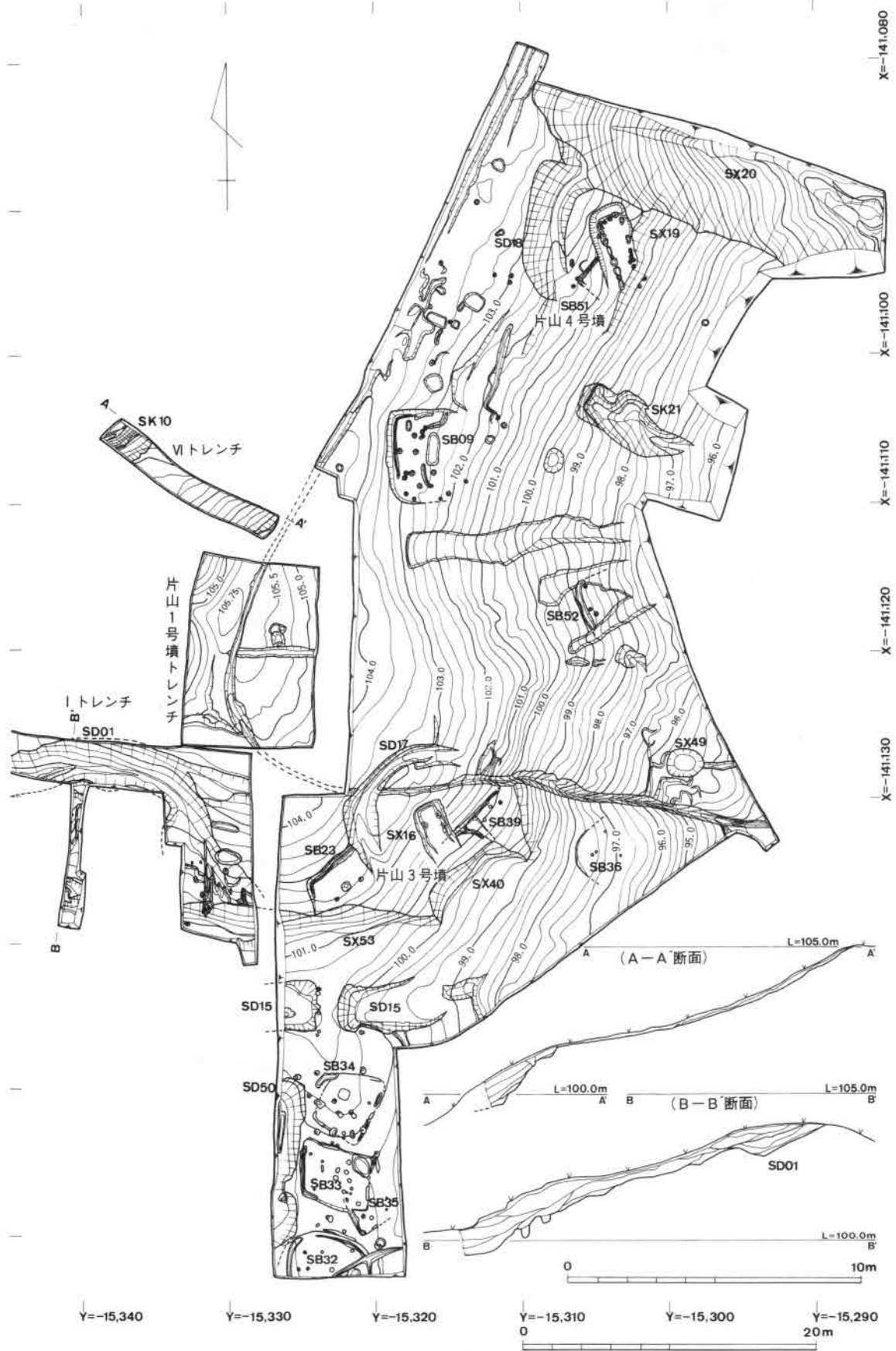
木津城縄張り図は、中井 均氏作成図を地形図に重ね合わせた。

坑(Iトレンチ)で検出した素掘り溝である。支脈部分では尾根の稜線と平行を保ち、その稜線よりやや南に下った斜面で、その主軸を等高線と同じ方向に保って掘削されている。狭い試掘坑の関係で断片的に確認したのみであるが、その検出長は約100mに及ぶ。東側の支脈が主尾根に繋がる部分では、自然地形に沿って緩く南に曲折し、その末端は崖斜面(カット面=S X53)に切られてそれ以降の進路は調査区内では追跡できない。遺構の掘削は将来の本調査に委ねたため、一部しか完掘していないが、東端部のB-B'断面(第64図右下図)付近では、下縁幅の極端に狭い「V」字形の横断面を呈し、上縁幅約3.0m、最大深さ(北岸上縁から)約1.0mを測る。ただし、斜面の下方向(南側)の溝の立ち上がりは概して弱く、全く肩を設けずに現斜面に沿って下降していく部分もある。出土遺物は、弥生後期中葉以降の土器資料(例えば第78図66)が主体を占めるが、埋土上層からは須恵器壺(第78図67)が混入するかたちで出土している。

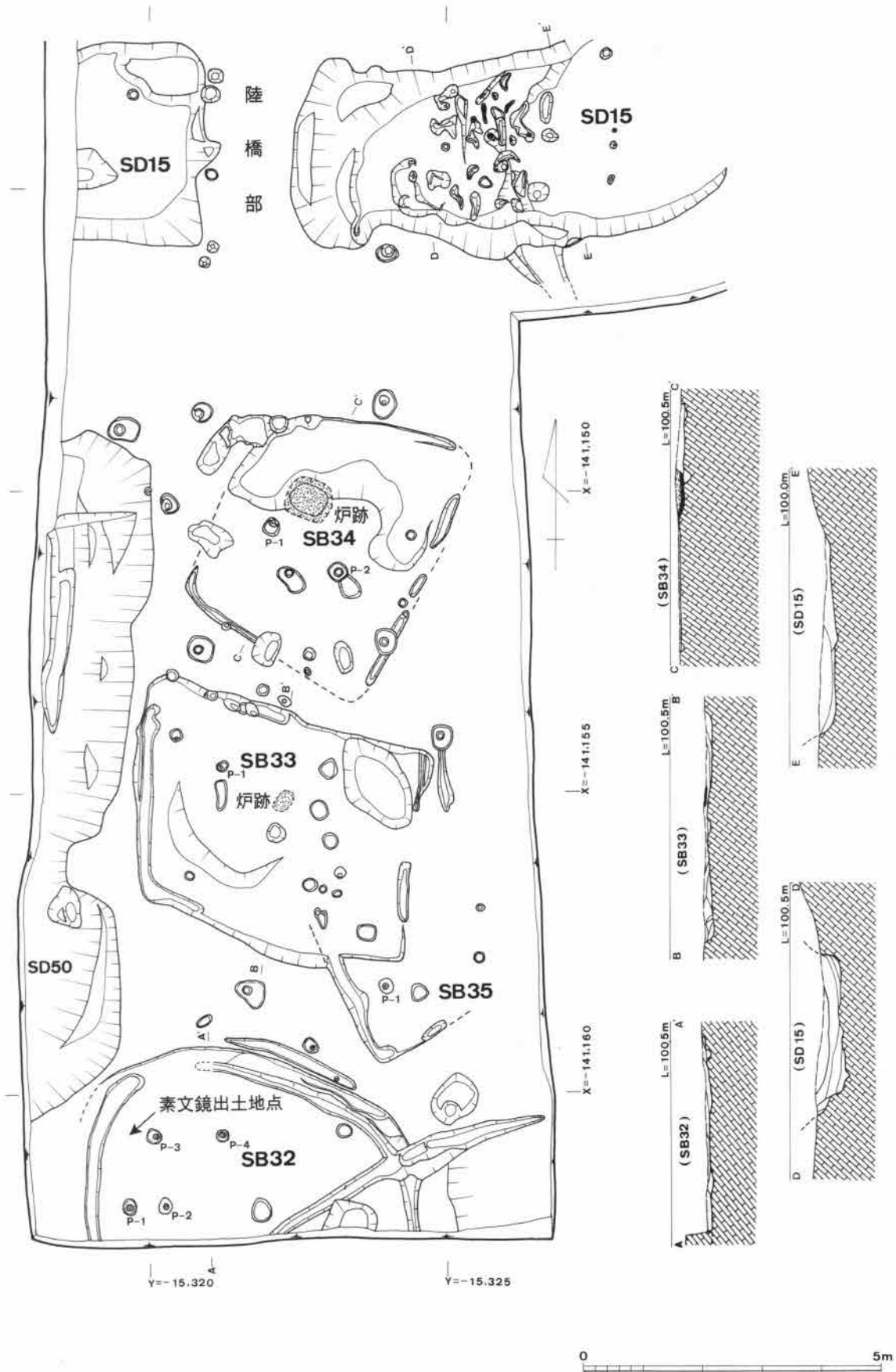
S D15(第65図) 調査区の南寄りで見出した東西主軸の素掘り溝である。その主軸方位は、主尾根の軸線と直交関係にあり、稜線を堀切状に断ち切る方向に掘削されている(検出長14.0m)。また、尾根の稜線(中心軸線)付近では、現状で幅1.6mにわたって陸橋状の掘り残し部分があり、南北方向の通路状を呈する。また、この陸橋部に沿ってその西側辺に径20~30cmで、やや遺存深度の深い柱穴掘形が南北に並び柵列状を呈する。溝の横断面形は、幅の広い平坦な底面から斜面が急角度でやや内湾状に立ち上がる形状を基本とする(現状での上縁幅2.7~3.3m・最大深さ1.2m)。この溝以南の住居跡の遺存度や、北側のカット面(S X53)から想定される後世の地形の大規模な削平を伴う人為的な造作を考慮すると、元来は深さが2.0mを越える箱堀のような濠状遺構であったことが予想される。溝内からはその底面に貼り付くようにして、弥生土器がややまとまって出土した。その内容は後期前葉に集約され、先のS D01よりやや古相を示すものである。

S B32(第65図) 本調査区南端で見出した住居跡である。確認したのはその北半部だが、平面形は、その外縁線が部分的に直線状を示すやや歪んだ円形を呈する(直径約6.0m)。周壁溝は、北西側の周壁の一部を除く壁体下のやや内側に巡る(幅15~35cm、床面からの深さ2~7cm)。主柱穴は、径20~30cmの円形掘形をもち、一見ランダムに配されているようであるが、住居の中心点から同心円状に配されている傾向が読み取れる(主柱配列求心構造、P-1~P-4)。住居の中心付近から北東方向に直線的に幅20~30cm・深さ10cm前後の素掘り溝が延びるが、溝底は住居中心方向に向かって緩く傾斜しており、悪水を住居外に排水する施設とは考えられない。また、住居中央やや東寄りに長辺90cm・深さ24cmの屋内土坑が検出されたが、貯蔵穴であろうか。住居内遺物は概して少ないが、覆土中も含めて土器類は全て弥生後期前葉に納まるものである。また、住居内の北西の周壁溝に近い地点で、床面から3.5cmばかり浮いた層位で完形の素文鏡(第74図RM-01)が鏡背を上に向けた状態で出土した。

S B33(第65図) S B32の北側約1.5mに位置する、平行四辺形プランを呈する竪穴式住居跡である(規模は東西5.0m・南北4.0m)。住居の遺存状態は悪く、壁の立ち上がりは、5~10cmを測るにすぎない。周壁溝は四壁を一巡せず、西辺と東辺に断片的に存在する(幅20cm・深さ2~4cm)。柱穴の配置は複雑で、掘り込みの浅いものが多く、主柱穴の抽出は困難である。住居内



第64図 木津城山遺跡 本調査地区遺構平面図(1/400)・断面図(1/200)



第65図 木津城山遺跡 SB32~35・SD15実測図(1/100)

の中央やや北寄りに浅く掘り窪めた皿状土坑内に炭が薄く堆積する領域があり、その掘り込みが浅いことから地床炉の痕跡と考えられる。床面は平坦でなく、凹凸に富んでいる。とくに北東隅部は浅く掘り残されている。

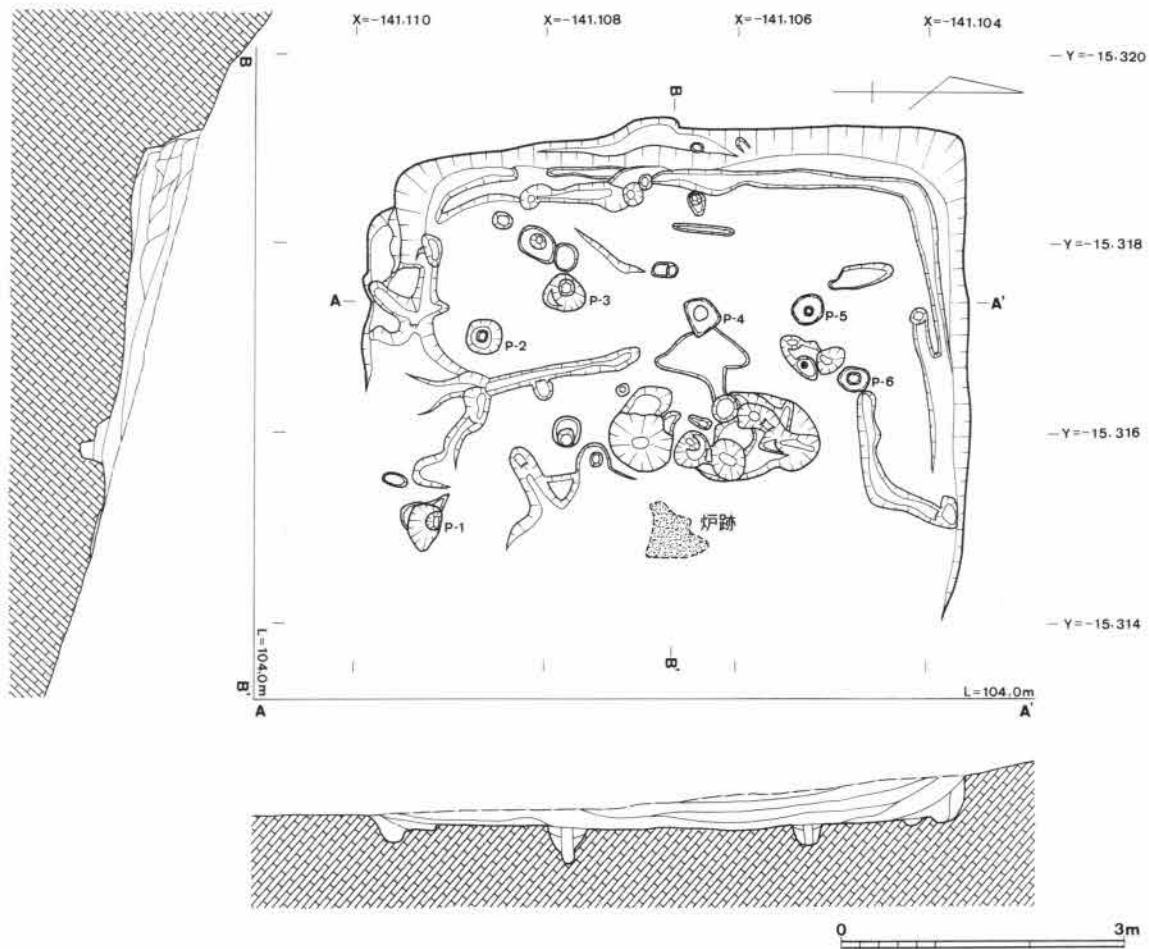
S B34(第65図) S B33の北に接する各辺の長さが不揃いな歪つな台形を呈する竪穴式住居跡である(規模は東西主軸間3.8m・東辺長約4.5m・西辺長約3.3m)。遺存状態は前記のそれよりさらに悪く、周壁溝が断続して検出される程度である。無秩序に配された感のある柱穴のうち、深く掘り込まれたものを選択すれば、東西に並ぶ2本が主柱穴であった可能性がある(P-1・2)。住居中央やや北寄りで0.6×0.8mの規模の隅丸方形の浅い土坑があり、内部に炭が充填されていた。住居床面は、この地床炉跡を境に北半が5cm深く掘り込まれている。

S B35(第65図) S B33の南東側に位置し、これと重複して検出された竪穴式住居跡である。S B33に切られてより先行する。検出したのは周壁の南西隅の一部で、その西壁下には周壁溝(幅20cm・深さ2cm)が残存する。周壁が直角に折れていることから、方形プランを呈するものとみられる。深さが10cmを越える柱穴は、1か所のみで(P-1)、他は支柱であろう。

S B09(第66図) 本調査区中央やや北寄りで検出した竪穴式住居跡である。東に下降する斜面の上縁付近に営まれたもので、標高の高い西側のみを掘り下げて竪穴状にし、東側の低い部分には掘削土を置いて平坦な床面を造成した、いわゆるテラス式住居(半竪穴半平地式住居)である。ただ、盛土造成部分は流失して遺存していない。南北長6.5mを測る方形プランを呈し、その主軸はほぼ正南北方位を示す。先述の通り周壁は西辺が良く遣り、壁高は最大0.98mを測る。周壁溝は、東辺を除く三方の壁体部より少し内方に「コ」字形に巡るが、南辺のそれは溝幅を広げかけたかたちで乱れる。また、周壁溝以外に床面に穿たれた小溝が数条みられる。柱穴の配置は一見ランダムだが、深度の深いピットを抽出すると、6基の柱穴がほぼ同心円上に求心的に配されている様子がうかがえる(P-1~P-6)。床面のほぼ中央に、土坑が2基南北に隣接するように存在する。北側のそれ(南北1.5m・東西1.0m・深さ0.4m)は、底部が複雑に起伏する形状を呈するのに対し、南側は径0.7mの円形ですり鉢状断面(深さ0.56m)を示す。両者は貯蔵あるいは貯水に使用されたものであろうか。この中央ピットのすぐ東側に、地床炉を示す炭の薄い堆積が認められた。また、西辺周壁のほぼ中央の壁下に、高さ30cmの柱状の丸みをもった自然石を樹立させたような遺構が検出された(図版第46(4))。これは断面観察の結果、住居廃絶後、その覆土上面からピット状の土坑を掘り込み、中央に石を据えて焼土で埋め戻した遺構であると判明した。

S B23(第67図) 後述する片山3号墳の西側に接する竪穴式住居跡である。検出したのは住居の北側の一部で、東辺は3号墳周溝により、また南側は崖状遺構S X53にそれぞれ切れられ遺存しない。住居の平面形は、周壁のラインが直線的であることから方形プランと推測することができる。残存する壁体部直下には幅15~30cmの周壁溝が巡る。柱穴は2mの間隔で2基確認されたが、その柱筋は周壁の示す方位と一致する。また、2基の主柱間に径0.6m・深さ0.4mの小さな円形土坑が存在する。床面には炭化した木材がみられ、当住居は焼失したものとみられる。

S B39・40・53・56(第68図) 片山3号墳の墓域とほぼ重複するかたちで、その下層で検出さ

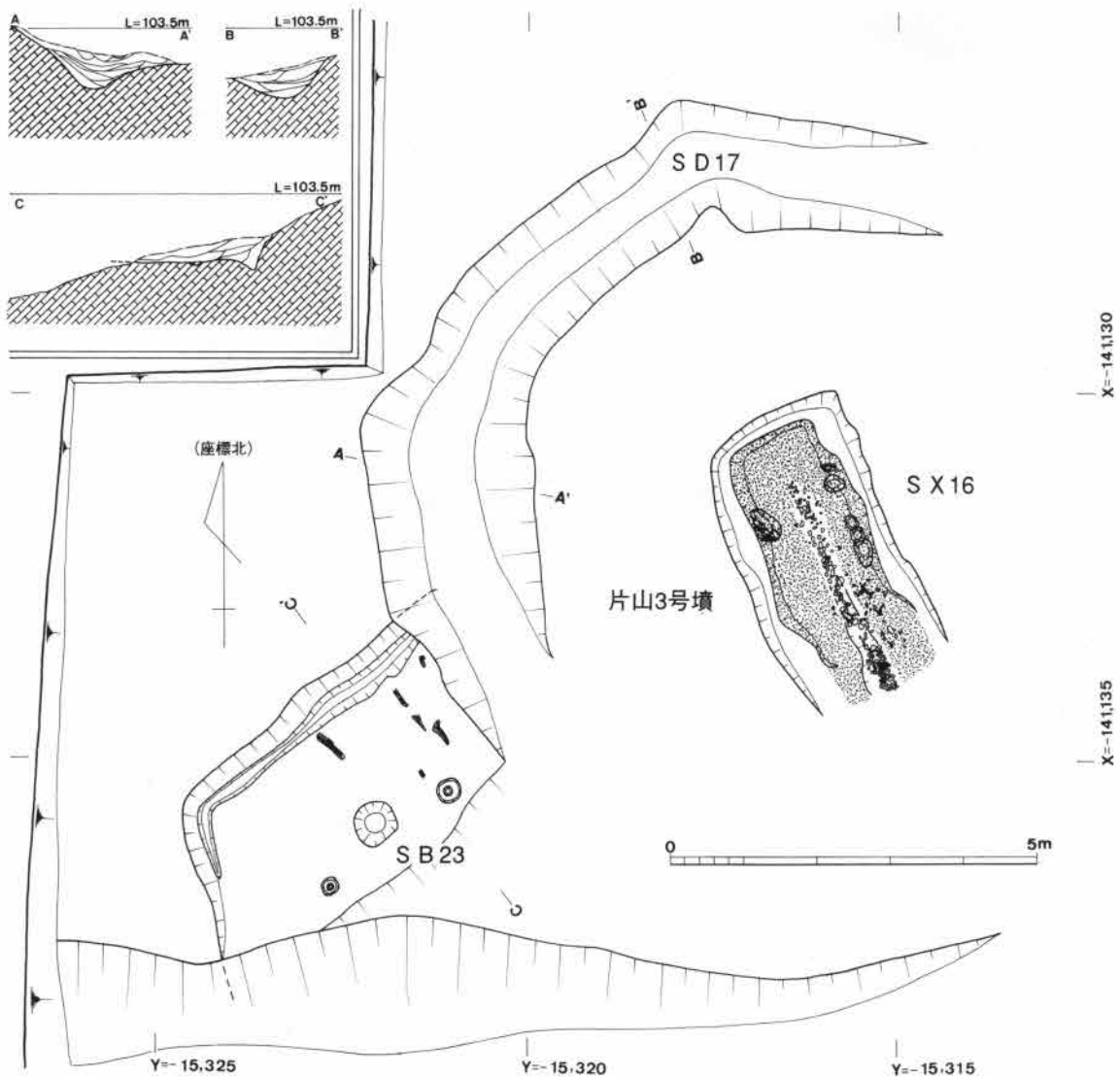


第66図 木津城山遺跡 S B 09実測図(1/80)

れた住居様遺構である。いずれも限られた区域に重なって営まれており、敷地を共有しながら、それを踏襲する住居の建て替え、もしくは住居等の敷地を確保するための造成地形(いわゆる段状遺構)かもしれない。このうち、S B 39・56は周壁溝を伴っており、その示すラインから39は方形、56は円形プランを呈する南斜面に営まれたテラス式住居であろう。39には2基の柱穴がみられる。S B(S X)40は、住居としては壁面の傾斜が緩く、床面も傾斜しており、内部に柱穴や周壁溝もない。ただ、遺物(土器類)はややまとまって出土しており、その中に鐸形土製品(第75図)や、完形の土器なども含まれていることから、特殊な(祭祀色をもった)性格が与えられた空間(広場)を傾斜地に確保するための段状の施設とみることもできる。

S B 36 S X 40の東方の斜面地で検出されたテラス式住居跡の残骸である。遺存状態は極めて悪く、西側の高位側の壁体がわずかに遺る。周壁の描く平面形は緩く曲折しており、円形住居の可能性もある。この住居のすぐ西側には小規模な礫敷面があり、土器類がまとまって出土した。

S B 51(第71図) 調査区の北寄り、片山4号墳の主体部(S X 19)に切られるかたちで検出された、竪穴式(テラス式)住居跡である。遺存するのはその北西側の一部だが、深さが約20cmのこの壁体直下を巡る周壁溝(床面からの深さ5cm)が「く」字形に屈折することから、方形プランを呈するものとみられる。床面に支柱穴を構成すると思われるピットが1基のみ残存する。

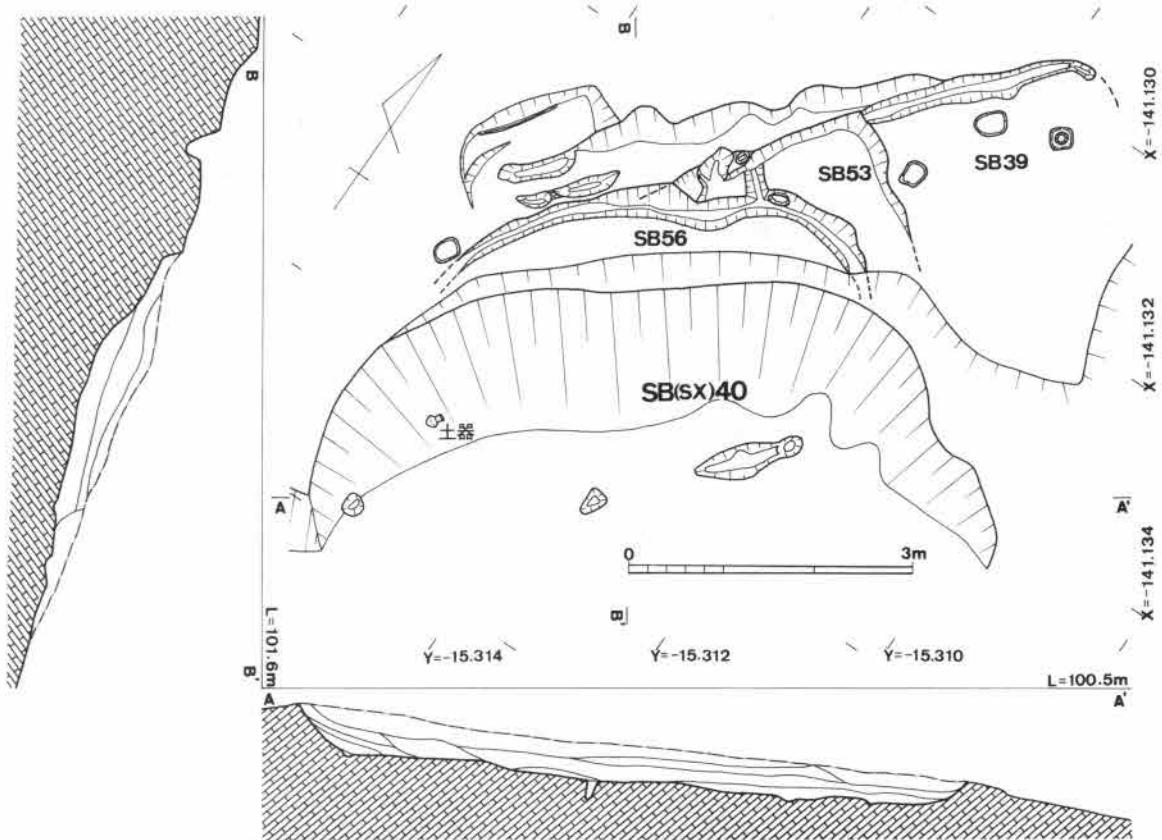


第67図 木津城山遺跡 S B 23・片山3号墳実測図(1/100)

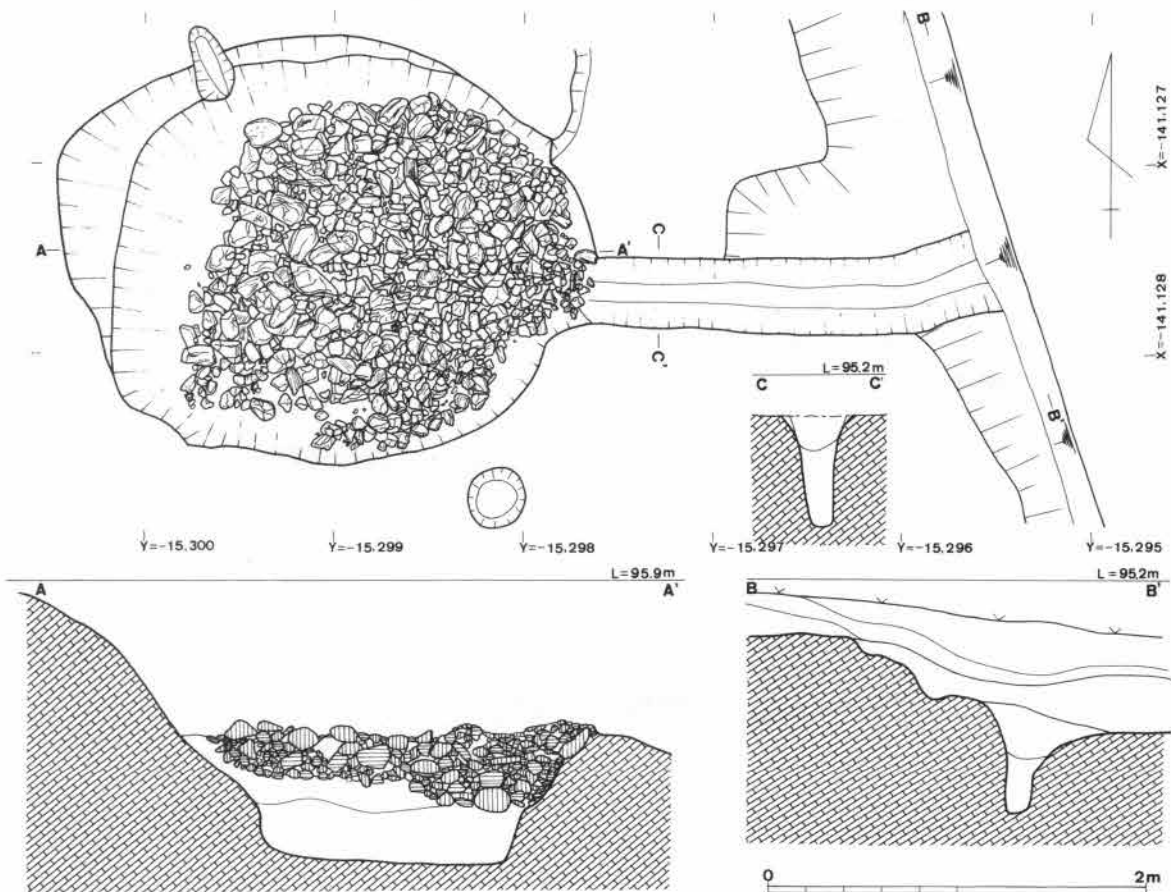
S X 49(第69図) 片山3号墳の主体部から約16m東方の山腹斜面に位置する土坑である。やや東西に長い円形プラン(東西径2.8m・南北径2.3m)を呈し、底部の平坦な逆台形状に掘り込んでいる。内部にはその上層に厚さ0.3~0.5mにわたって自然礫(礫径3~30cm)が密に充填されていた。また、この土坑から東方に向かって1条の直線的な溝(上縁幅0.4m、検出面からの深さ0.6m)が延びる。出土遺物がないので時期が特定できないが、天水を浄化する施設かもしれない。

片山3号墳(第70図) 片山1号墳トレンチの位置する主尾根のピークから東南東方向に小規模な尾根状地形が派生するが、この支脈の南東斜面に位置する小規模な古墳である。外部施設として主体部の背後の標高の高い部位のみ周溝を配して墓域を画する(S D 17)。周溝の平面形は、半円弧を指向しているようだが、仔細に観察すると、その中軸ラインが、直線的で約5mの辺長をもって2か所で鈍角に折れる多角形状を呈する。周溝により画された墳丘もおおむね多角形を呈し、その規模は、周溝中軸線で復元的に計測すると軸長約12mを測る。周溝の断面は、斜面地に掘開かれたため、内傾斜面がより長く、狭い平坦な底部から両斜面が逆台形状に立ち上がるか、



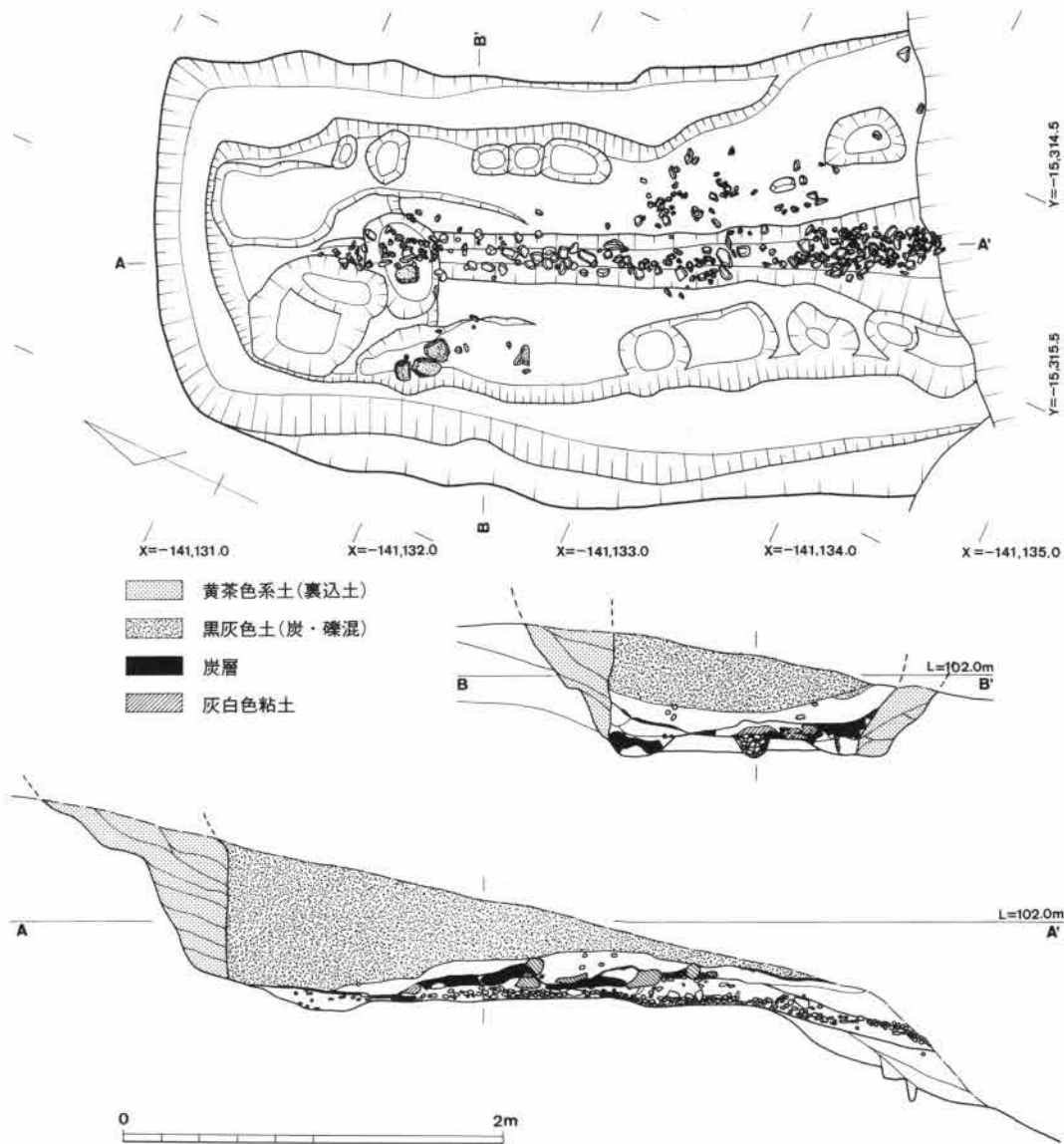


第68図 木津城山遺跡 S X16下層遺構(S B39・40・53・56)実測図(1/80)



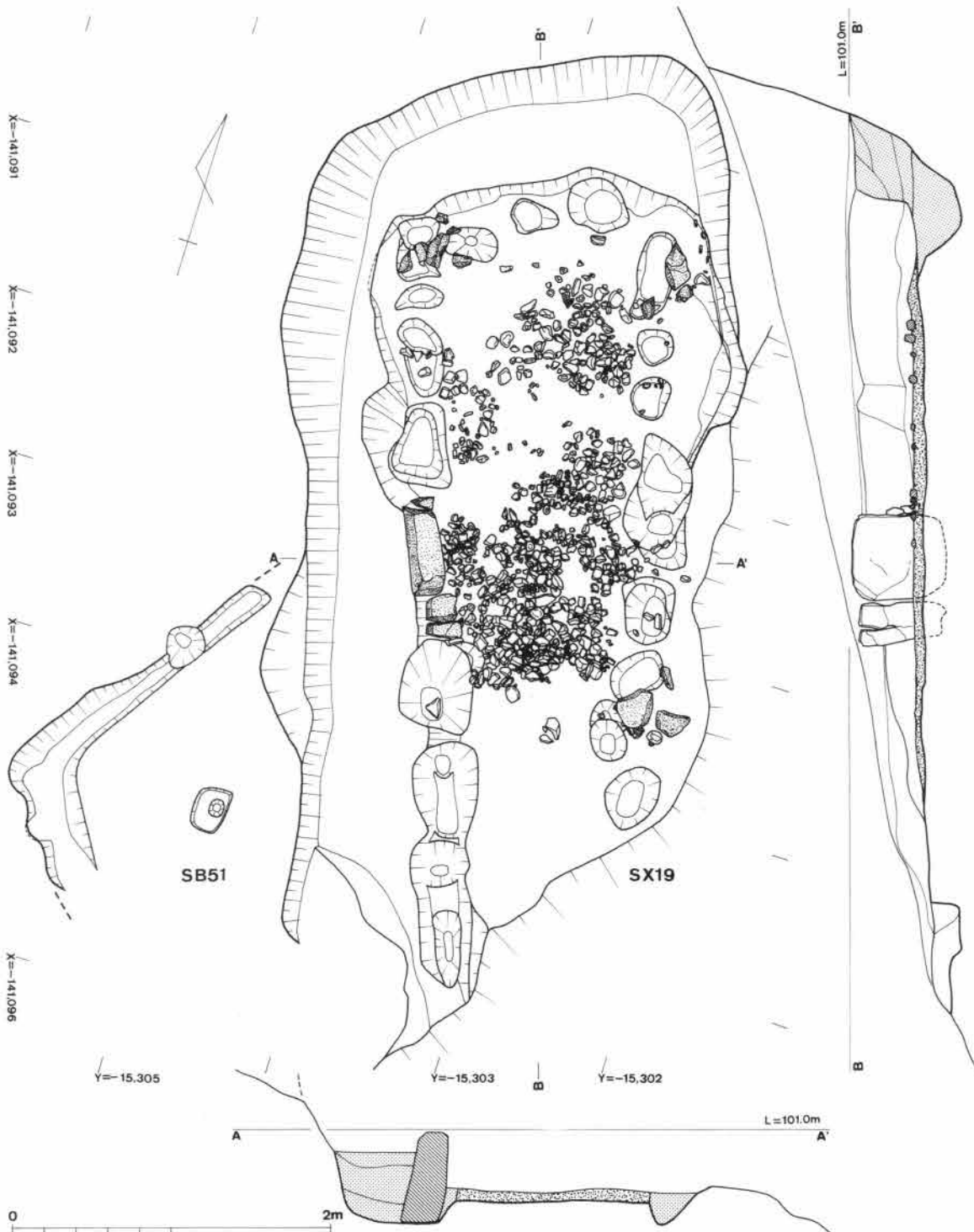
第69図 木津城山遺跡 S X49実測図(1/40)

下縁の不明瞭な「U」字形を呈する。内部主体(S X16)は、斜面の下位に位置する開口部側を失うが、小規模な横穴系の埋葬施設とみられる。その構造は、幅約2.0mの箱形断面を呈する墓壇を掘削し、その内部に木棺を覆う室(槨)を構築するものだが、調査時点で槨室を形成する材が全く遺存していなかったため、通常の横穴式石室構造を採用していたかどうか判断できない状況にあった。ただ、側壁を支持する裏込め土の内壁は垂直に立ち上がり、その長側辺の壁下に、石材の抜き取り穴かとみられる浅い土坑が接続するようにみられた。しかし、この壁下の小土坑内にも、炭や青白色粘土が堆積していたことから、木心粘土室(窯槨墳)とまでは言えないまでも、木材でもって槨室を構成する一種の木室墓の可能性も指摘できる。さらに、槨室内床面上には多量の炭が堆積しており、これらの木槨が火化された可能性が示唆される。槨室床面には礫敷はみられないが、その中軸線に沿って幅0.25m、深さ12~15cmの直線的な素掘り溝が掘られ、内部に小礫を充填して排水溝としている。出土遺物は、混入品である弥生式土器片以外全くない。



第70図 木津城山遺跡 S X16(片山3号墳内部主体)実測図(1/40)

片山4号墳(第71図) 3号墳の北北東約32mの地点で、主尾根稜線からやや東に下った山腹斜面に位置する。墓域を画する周溝(S D18)が高所側にのみ掘開されるが、その北東半部は後述する谷状地形S X20に切られて遺らない。周溝の平面形は、その主軸線が直線的で、主体部の北西側で直角に折れる形態を示し、それに画された墳丘も方形をなすものとみられる(一辺約10.0m)。周溝の断面形は逆台形を基本とする(上縁幅約3.0m)。内部主体(S X19)は、南南東に開口する



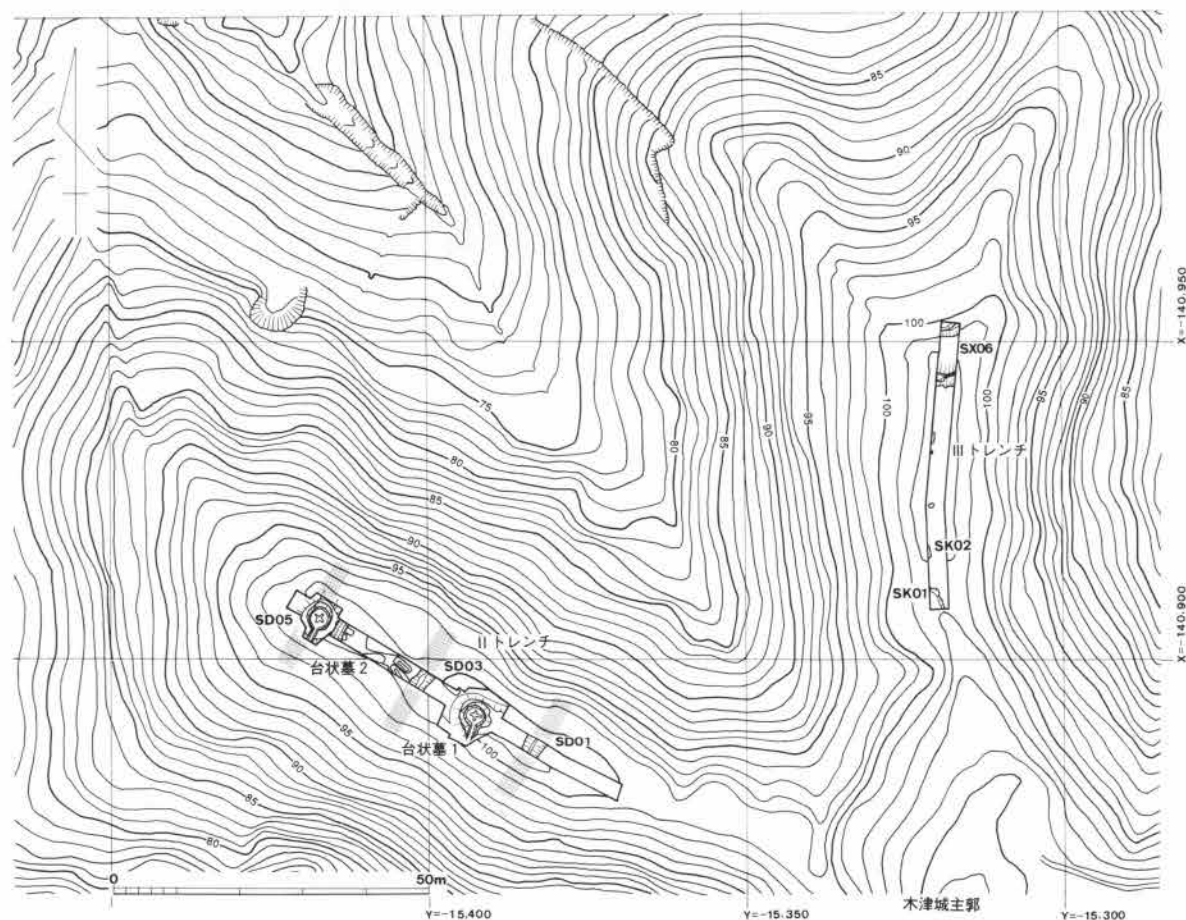
第71図 SX19(片山4号墳)・SB51実測図(1/40)

小規模な横穴式石室である。墓壙は幅2.8m、奥壁側の最大深さ1.6mの長方形プランを呈する。石材は、墓壙側壁下に沿って掘られた幅0.7mほどの溝状の窪みに据え付けられるが、現状ではほとんど抜き取られ、わずかに西側壁の基底石2材が原位置を留めるにすぎない。石室の袖形式は、石材の抜き取り穴の配列より、東側壁が屈折する片袖式と考えられるが、玄門部での内方への張り出しはわずかである。石室の平面的な規模は、玄室幅約1.3m、玄室長約2.6m、羨道幅約0.8m、羨道残存長2.0mを測る。唯一残存する側石は、一辺60cm四方で厚さ25cmを測る板石状の斑状花崗岩を用い、横口縦積みで構築している。

S X 20 調査区の北端で検出した東西主軸の谷状地形である。確認したのは北側に向けて下る斜面のみだが、部分的に狭い底部から北側に立ち上がる斜面を検出しており、下縁の中軸線を北側に折り返せば、幅は10~15m前後と推定できる。斜面上縁は直線的なラインを示し、その切り込みも鋭いため、自然の開析とは考えにくい。北側に中世の城郭遺構が隣接するため、当該期の大規模な竪堀状遺構の可能性はある。遺構内の堆積土は少なく、出土遺物は皆無である。

b. II~IVトレンチ

木津城主郭から北西に派生する尾根筋に設定した試掘坑がIIトレンチである(第72・73図)。この調査区では、尾根の主軸に直交する溝がほぼ20m間隔で3条検出された。その規模や構造から、当初木津城に伴う堀切と考えたが、内部から弥生式土器のみが純粹に出土する点や、溝に挟まれ

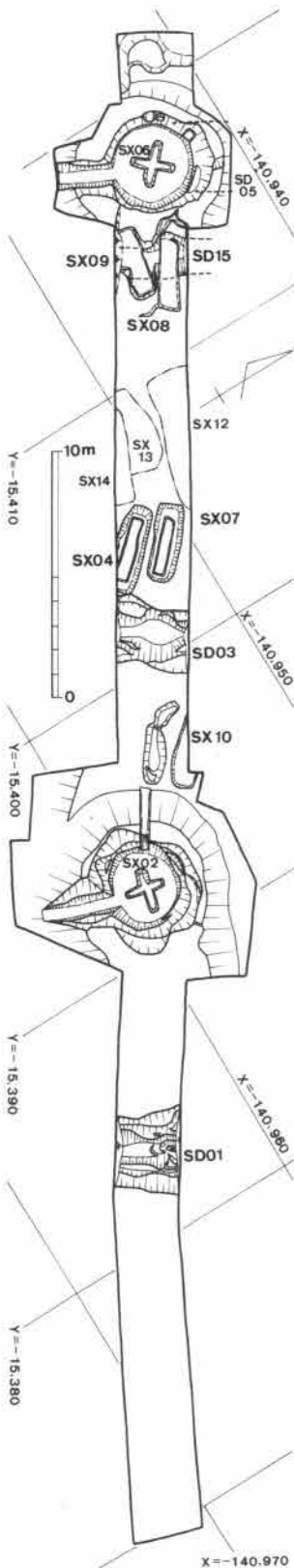


第72図 木津城山遺跡 II・IIIトレンチ配置図・主要遺構平面図(1/1,250)

た空間に埋葬施設が多数検出されるにいたって、この溝は方形区画墓(この場合立地が丘陵上なので方形台状墓)の区画溝であることが判明した。つまり、SD01と03によって区画されたものを台状墓1、SD03と05で区画された側を台状墓2と整理すると、台状墓1・2は、SD03を共有して尾根の脊梁部に東西に縦列配置する方形台状墓であることが判明した。なお、SD05及び台状部の多くの埋葬施設については、試掘調査であるためその存在を確認したのみで、完掘はしていない。以下、個別の遺構について若干の補足をする。

**方形台状墓1** 区画溝の規模と断面形態は、SD01が、上縁幅2.6~3.5m、検出面からの深さ1.1m、横断面はやや丸みを帯びた「V」字形である。一方、SD03は、上縁幅2.5~3.0m・深さ0.75mの規模を有し、その横断面形は両斜面が比較的緩い勾配で下り、その中央付近が傾斜を強めて2段落ち構造を呈する。SD03内からは、溝底から10cmばかり浮いた位置で近江系の加飾壺が正立した状態で出土している(第76図1)。埋葬施設は、SX10の他、砲台陣地SX02の内壁面でその断面を数か所確認している。

**方形台状墓2** 西側の区画溝SD05については、西側の砲台陣地(SX06)とほぼ重複しており、その内壁に断面として確認したのみで掘削していないが、その規模や形状は先の区画溝と変わるところはない。両区画溝間に挟まれた台状部では、幅3mの狭い試掘範囲にも関わらず、合計7基の木棺直葬形式と思われる墓壙を確認した。そのうち、掘削した東寄りの周辺埋葬施設をみると、SX04は、墓壙の長軸3.5m・幅1.2m、検出面からの深さ0.45mを測る長方形プランを呈する。平坦な墓壙底には墓壙下縁から内方に0.1mばかり寄った範囲に小礫を敷き詰め棺台とする。棺の側板痕跡はなかった。SX07は、04の北側に接するように主軸方位を平行に揃えた埋葬施設である。墓壙は、長軸3.2m・幅1.2m・最大深さ0.6mの規模を有し、壙底の内側寄りを更に浅く掘り窪めてここに小礫を乱雑に敷き詰めて棺床とする。側板、小口板の痕跡はSX04同様残されていない。方台部西寄りのSX08・09については、検出面が西に向かって次第に傾斜していることもあって、遺存状態は良好とは言えないが、墓壙はともに長方形プランで、長さ3.0m前後・幅1.0m前後の規模を有する。両者とも完掘していないが、その西半部を南北方向に貫く墓壙より新しい溝(SD15)の掘削に伴い、その下縁が一部墓壙底(棺底)に達し、SX09と重複する部分で獣帯鏡破鏡(第74図RM-02)が1点出土した。



第73図 木津城山遺跡  
II トレンチ平面図(1/300)

**砲台陣地(S X 02・06)** トレンチの中央と西端で、同形同大の周囲に土塁をともなう円形土坑を検出した。両者とも掘削調査前から窪地として現地形にその姿を表していた。その構造は、直径4.0m前後で横断面が逆台形を呈する深さ約1.0mの土坑を地山面に掘削し、その排土をその周囲(とくに低い西側)に土塁状に積み上げる。そして、坑底と同レベルを保つ溝を一方向(両者とも南側)に掘削して、土坑内の水抜きとする。平坦な土坑底には「十」文字状に溝を切っている。この遺構の性格については、その構造や地元の方々の聞き取り調査から、第二次大戦中に構築された、高射砲もしくは機銃を据え付けた跡(砲台陣地)、あるいはサーチライトを設置した跡(監視所)と考えられる。

**Ⅲ トレンチの遺構** 木津城主郭から北に延びる尾根筋では、Ⅱ トレンチほど顕著でないが、浅い皿状土坑や遺物を包含する傾斜面等を検出した。北端で検出したS X 06は、北側に傾斜する落ち込み状の遺構で、深さは現地表下0.3~0.6mを測り、その堆積土中からは弥生式土器(弥生後期前葉)が出土した。遺構の性格は明らかではないが、弥生時代の遺物を包含する遺構の北への拡がりを確認する上で重要である。S K 01は、検出面からの深さが0.2~0.3m前後の浅い土坑で、底面は起伏に富んでいる。出土遺物はない。S K 02は、西半が調査区から外れるが、長さ2.5m・幅約0.7mの南北に主軸をもつ平面長方形の土坑である。底面は平坦でなく、南北方向の細かい溝が掘られている。出土遺物はないが、単独で営まれた木棺直葬の土壙墓の可能性はある。

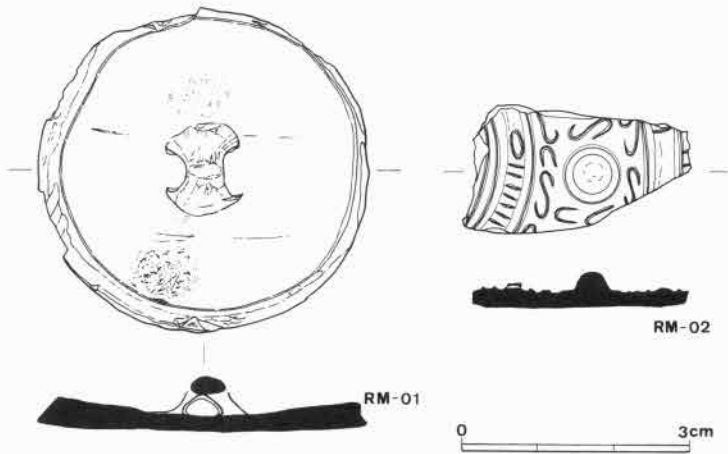
**Ⅳ トレンチの遺構** 木津城主郭の北東隅部に土橋が構築されているが、そこから北東に延びる尾根筋に設けた試掘トレンチである。この調査区はⅡ・Ⅲ トレンチとは異なり、比較的急な斜面地である。このトレンチでは、南端屈折部において、2条の溝を検出した。両溝とも幅約2.0mの規模を有し、溝の心々間で測って約2.5mの間隔で平行に掘られている。溝の断面は「V」字形で斜面の下位ほど深くなる。出土遺物はないが、尾根の稜線上から西側の谷へ斜め方向に下る通路(城道)の側溝かもしれない。(伊賀高弘)

## 2. 出土遺物

### (1) 鏡・鐸形土製品

**鏡** RM-01は、鏡背に文様を表現しない、いわゆる素文鏡である。直径は4.4cmで、厚さは鈕付近が最も薄く(2.0mm)、縁部に向かって反りをもって徐々に厚みを増す(縁頂部で鏡面の垂直方向で計測して約3.5mmを測る)。鈕は、基部の示す平面ラインはほぼ正円を呈するが、鈕孔側からみたその側面形は、やや厚みのある板状の紐を逆「V」字形に折り曲げたような形態に作り、半球態をなさない。縁部の外斜面は、調整が雑なため、直線状を指向するが、部位によっては湯口がわかるほど屈折するなどして乱れている。鏡面はていねいに研磨され光沢をもつが、鏡背は鋳離した状態のままで、その表面は細かい凹凸が残る。鏡背の一部に赤色顔料が付着している。

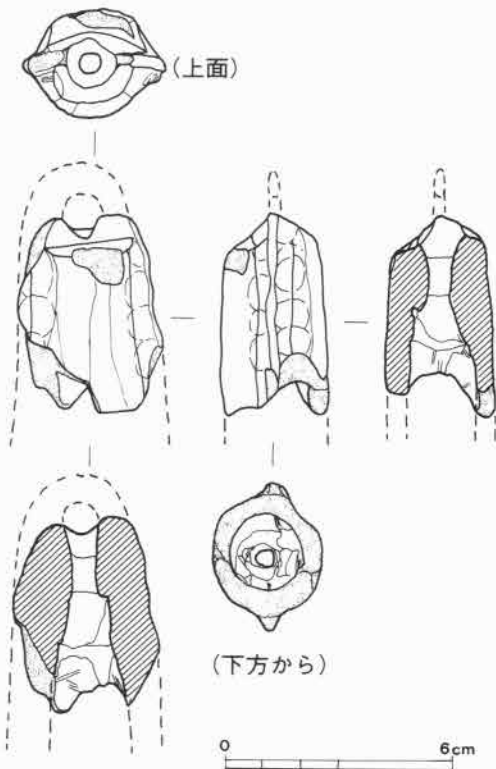
RM-02は、方形台状墓2の台状部周辺埋葬施設S X 09から出土した獸帯鏡の破鏡である。遺存状態は概して良好で鏡面は光沢を残す。鋳上がりそのものも良い状態で、鏡背の図文も錆化しておらず鮮明である。出土した個体は鈕座部分の小片資料で、長軸3.0cm・短軸1.7cm・厚さ2mm



第74図 木津城山遺跡 銅鏡実測図(実寸)

を測る。破面は加工していない。遺存する部分の鏡背文様は、鈕本体を欠くが、鈕座内帯と外帯が残る。鈕座内帯は、内方から、内側に2本、外側に1本の小さな圏線をもつ有節重弧文を配し、その外縁に小乳をもつ乳帯文を配する図文構成をとる。乳帯文は、乳間に芝草文や銘文の入る通常のものとは異なり、「U」「S」字状の渦文を地文として充填している。乳は先端に丸みをもつ半球形に近い断面を示し、円座を伴う。地文の渦文は、扁平でひしゃげた感に作る。鈕座外帯は、内外両側に1本ずつの圏線を伴う凸帯で、一部に帯を横断する線が認められることから、有節重弧文の可能性はある。四神瑞獣等を表した主文部を欠くので、細線式か浮彫式(半肉彫式)かにわかに判断しがたいが、有節重弧文の多用や扁平な渦文の形態は、同形式鏡群の新しい要素であり、A. D. 1世紀末に出現する浮彫式獸帯鏡に、まみられる意匠と考えられている<sup>(註2)</sup>。

を測る。破面は加工していない。遺存する部分の鏡背文様は、鈕本体を欠くが、鈕座内帯と外帯が残る。鈕座内帯は、内方から、内側に2本、外側に1本の小さな圏線をもつ有節重弧文を配し、その外縁に小乳をもつ乳帯文を配する図文構成をとる。乳帯文は、乳間に芝草文や銘文の入る通常のものとは異なり、「U」「S」字状の渦文を地文として充



第75図 木津城山遺跡 鐸形土製品実測図(1/2)

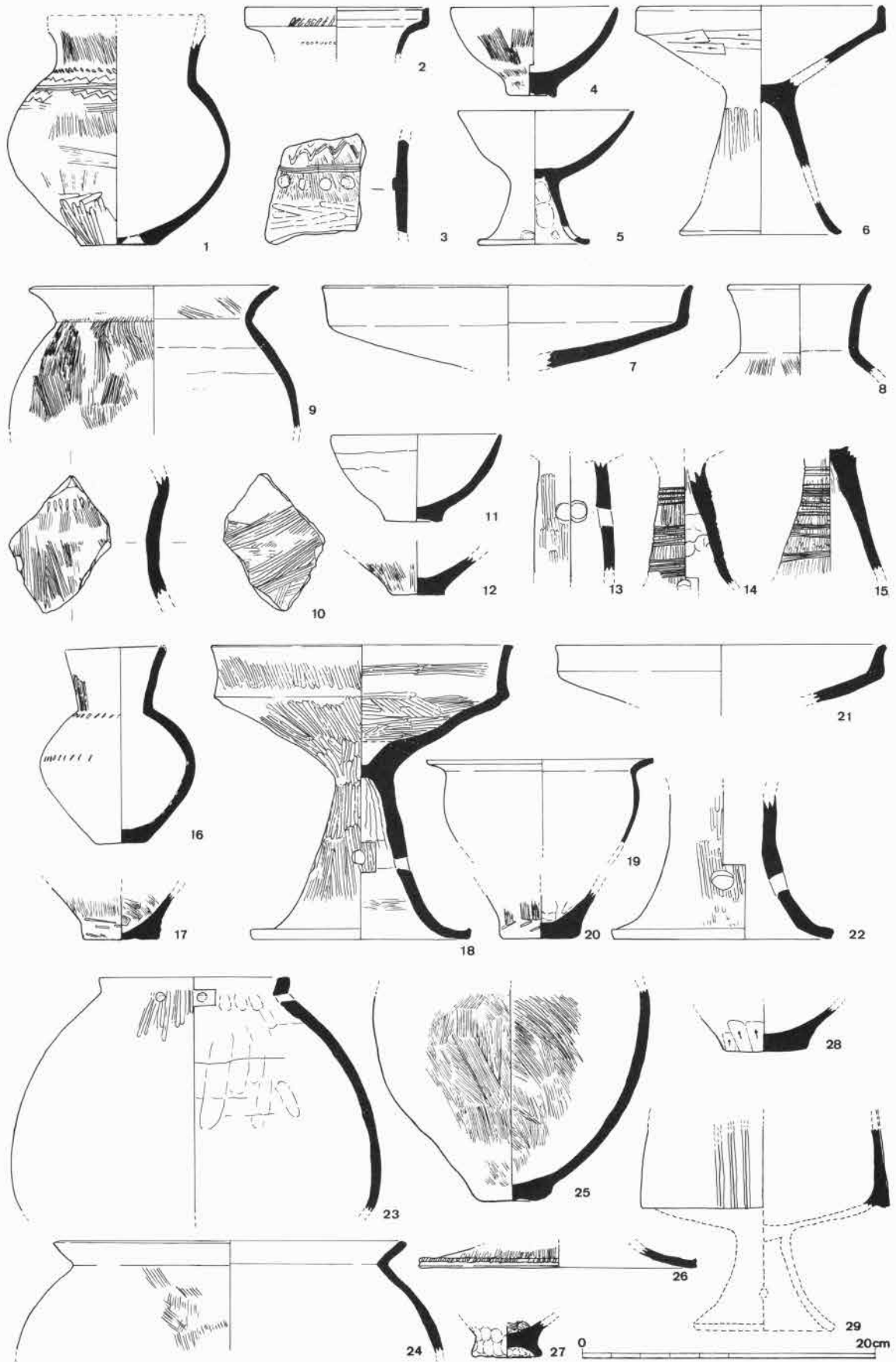
**鐸形土製品** S X40とS B36に挟まれた土器が集積する磔敷地区で出土した。遺存するのは鐸身の上半部で鈕及び鐸身下半部を欠いている。鐸身の横断面は真円に近く、両側に短い鱗が縦方向に連続する指頭圧により鐸身本体から捻り出される。舞は、板状の鈕基部から外下方に向かって匙面を設けて、緩く下降ぎみに傾斜している。舞孔は円形で舞中央に1孔穿たれている。鐸身は無文で、型持孔も遺存部分には穿孔されていない。

(伊賀高弘)

(2)土器・石器類(第76～78図)

城山遺跡より出土した土器・石器類は、弥生時代後期を中心とする。以下、実測図化したものについて、遺構ごとに概要をのべる。当遺跡の土器群は、丘陵上の遺跡に通有にみられるように、保存状態がきわめて不良である。このため器面調整などの識別が困難な土器が多い。

**方形台状墓出土の土器** 1は体部に文様帯が巡



第76図 木津城山遺跡 出土遺物実測図(1) 1/4



る壺形土器である。上部より刻目文、波状文、直線文、波状文、直線文の順に施文される。このうち直線文はハケ状の工具により、波状文は回転台を利用せずに施文している。調整は頸部はハケ調整、体部中央はハケ調整の後にナデを施しており、下半はミガキ調整を施している。底部は打ち欠いて穿孔している。2は受口状口縁を呈する。口唇部は内傾する。磨滅しているため明瞭ではないが、口縁部に刺突文、頸部に刺突の痕跡が残るいわゆる近江系土器である。3は器種不明。櫛描波状文、直線文、円形浮文が施される。円形浮文には赤色顔料?が付着している。4は鉢形土器である。5は椀形の杯部をもつ高杯形土器である。脚部に4か所以上の透しが入る。6は小片であるが図のように復元できる。杯部には横方向のケズリが行われる。以上の方形台状墓出土の土器は、弥生時代後期前半の時期に位置づけられる。

**SK10(VIトレンチ)出土の土器** 7は浅い杯部にやや外反する口縁をもつ。60は壺形土器である。頸部に櫛描の波状文を巡らす。調整はハケを主体とする。

**SB09出土の土器** 8は長頸壺形土器の口縁部である。外面の頸部以下はハケ調整、頸部より上部および内面の調整は横ナデで仕上げる。9・10・12は甕形土器である。9・10ともに頸部に刻目文を施す。9の内面はハケ調整の後にナデを、外面はハケ調整を施す。口唇部内面は横ナデを施す。11は鉢形土器である。13～15は高杯形土器柱状部である。13は円筒状で4方向に透しが入る。14はミガキを施した後に4条もしくは5条の沈線をめぐらす。内面には粘土のつなぎ目が明瞭に残る。

**SB(SX)40出土の土器** 16は、頸部と胴部に刻目文がめぐる長頸壺形土器である。口頸部が器高の約1/3ほどであり、やや外反してのびる。この点は8・40と共通する形態である。18は高杯形土器である。全体に細かいミガキが施される。17・20の甕形土器の底部は外面タタキ調整の後、ハケ調整がなされている。19は口縁部が体部から屈曲してのびる鉢形土器である。21は浅めの杯部に端部がわずかに外反する口縁部が接続する。22は器台形土器である。28は底部であり、縦方向のケズリを施す。59は壺形土器である。頸部には指頭圧痕が残りその上から横ナデがはいる。内部にも指で搔き上げた痕跡が残る。粗雑な作りである。

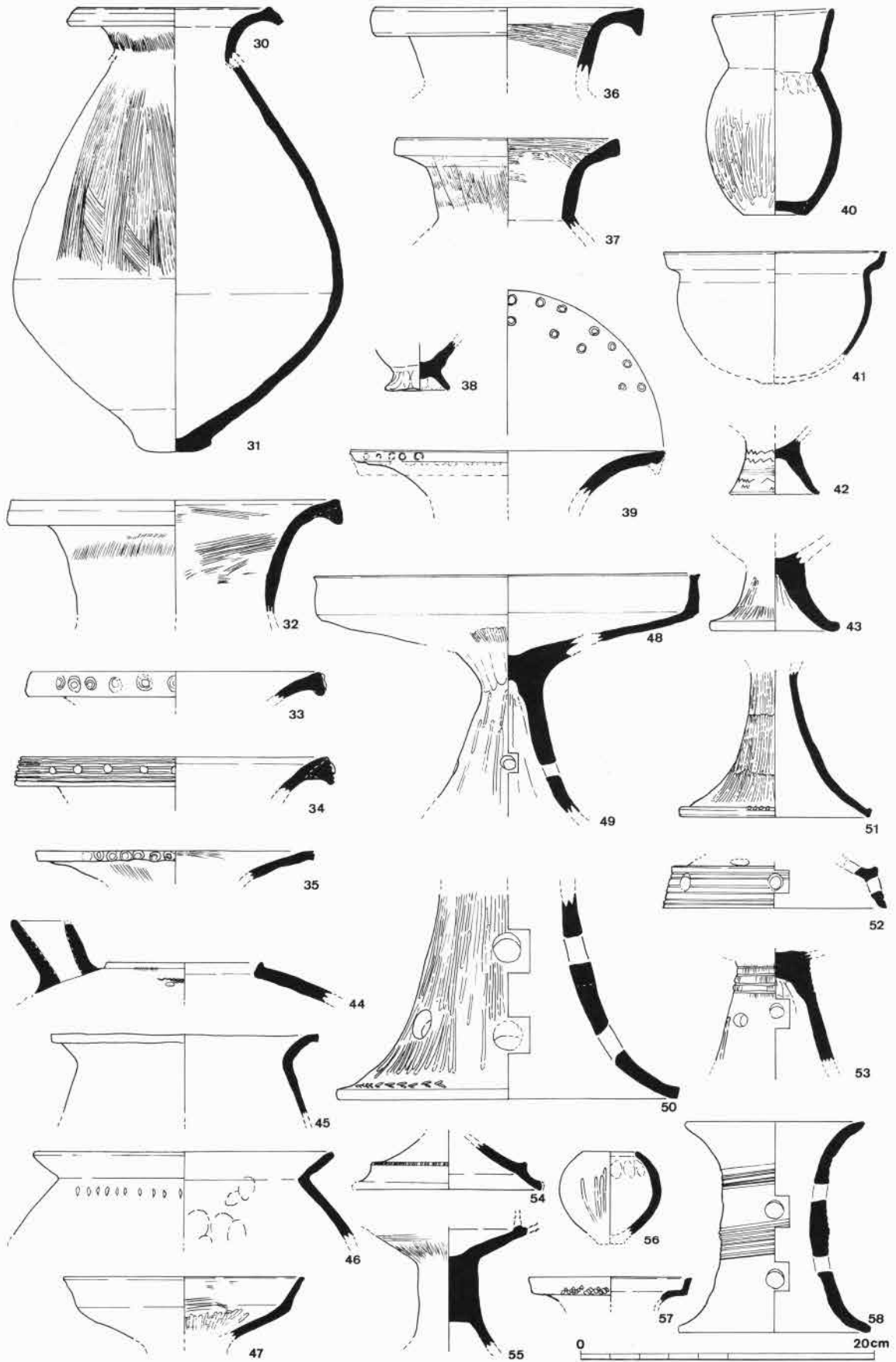
**SB36出土の土器** 23は無頸壺形土器である。頸部に指押さえが残る。24は甕形土器である。

**SX19出土の土器** 25はやや突出した底部をもつ。内外面ともにハケ調整を施す。

**VIトレンチ出土の土器** 26は脚部として図化した口縁部(受部)の可能性もある。端部に凹線がめぐり、刻目文がはいる。27は台付鉢形土器の底部である。

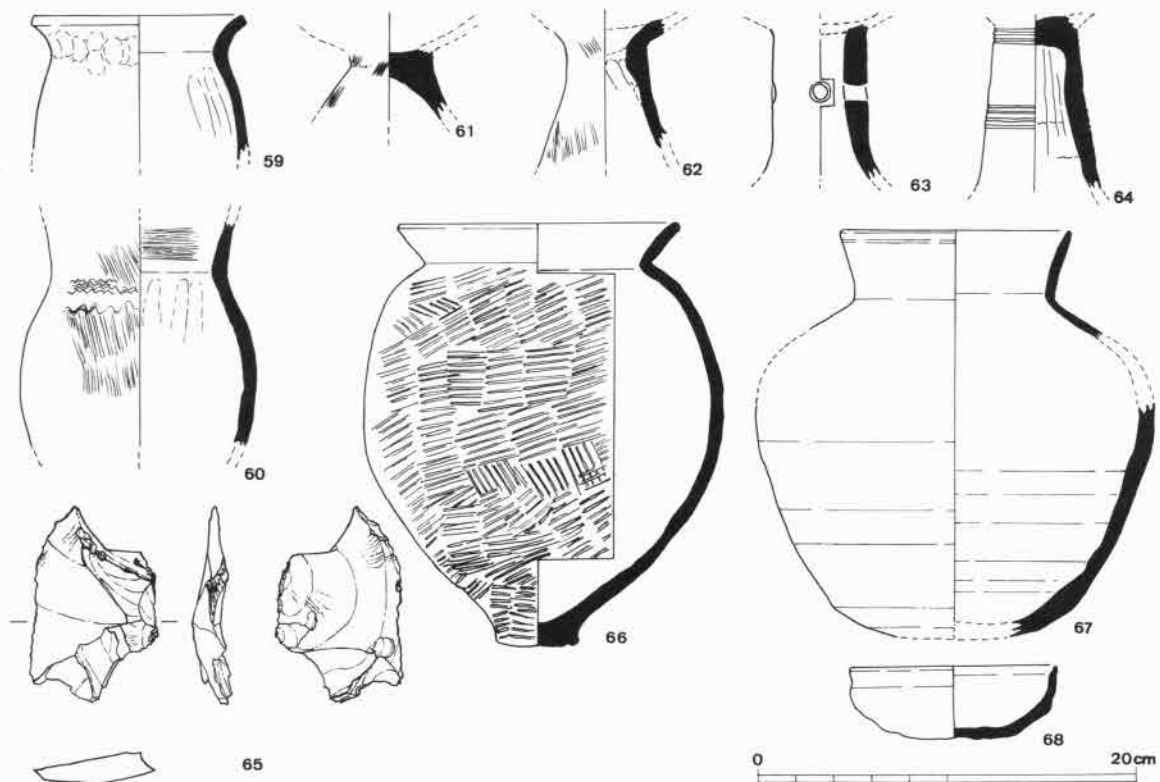
**SB33出土の土器** 29は台付無頸壺形土器である。3条の縦方向の隆起をナデつけて作り出す。色調は暗茶褐色を呈する。

**SD15出土の土器** 30は壺形土器の口縁部である。口縁部を斜め下方へ拡張して作る。磨滅しているため明瞭ではないが、刺突文の痕跡が残る。31はイチジク形を呈する体部をもつ。外面は縦方向のハケ調整を施すが、内面は磨滅が激しく調整は不明である。32～34・36・37は広口壺形土器の口縁部である。擬口縁に粘土紐を貼り付け、さらに粘土を充填して垂下部を作り出している。32はナデを施し無文である。外面、内面ともハケ調整を施す。33は横ナデ調整した後に円形



第77図 木津城山遺跡 出土遺物実測図(2) 1/4

浮文を貼り付け、さらに円形の刺突を加えている。内面調整は横方向のミガキである。34は5条の擬凹線文を施し円形浮文を貼り付ける。35は器台形土器の口縁部である。ハケ調整の後に竹管文を巡らす。38は鉢形土器の底部である。黄白色を呈する。39は口縁部内外面に竹管文を施している。垂下口縁であったと考えられ粘土紐を貼り付けた際の圧痕が外面に残る。色調は赤褐色を呈する。40は器高の約1/3程の口頸部をもつ長頸壺形土器である。41は受口状の口縁を呈する鉢形土器である。内面調整は下半は縦方向、上半は横方向のナデ調整である。42は台付の脚部である。櫛描の波状文と凹凸のある施文工具による直線文がはいる。43は暗茶褐色を呈する。中河内からの搬入品と考えられる。44は注口土器であり、色調は茶褐色を呈する。注口は体部に孔を穿ち、体部内面にまで粘土を押し出して接合している。端部はつまみ上げて成形している。外面には円形浮文を貼り付けており、櫛描波状文が施される。外面の調整はハケの後にナデもしくはミガキ調整である。体部以下がどのような形態になるかは不明である。45・46は甕形土器である。45の最終調整は内外面ともに横ナデである。口縁部以下から頸部付近には煤が付着している。46は外面に刻目文がめぐる。内部には指頭圧痕が残る。47～49・51～55は高杯形土器である。47の杯部は明瞭に外反する口縁部をもつ。粗いハケ状工具による調整とミガキ調整による。48は浅めの杯部に直立する口縁部がつき、端部は左右へのつまみだしによる面をもつ。屈曲部にも横ナデによる面をもつ。51は端部に1条の凹線がめぐり、刻目文がはいる。52は6条の擬凹線が巡り円形の透しがはいる。内外面とも剝離・磨滅が激しく調整は不明である。53は柱状部に4条の沈線がハケ調整の後に施される。54は脚部に段を有する。段部上段には細かい刻目文がはいる。磨滅



第78図 木津城山遺跡 出土遺物実測図(3) 1/4

剥離が激しいため調整などは不明である。色調は茶褐色を呈する。裾部外面に円形浮文が貼り付けられていた可能性がある。55は中実の脚部をもつ。杯部内面に直立するように粘土帯が巡る。56はミニチュアの土器である。外面を磨いており、精巧に作られている。57は受口状口縁を呈する。口縁部に列点文を施す。50は器台形土器である。裾部に綾杉文がめぐる。58は柱状部に沈線が巡り、円形の透かしが2段はいる。色調は黄白色を呈する。以上、S D15の出土遺物は弥生時代後期初頭から中頃にかけての様相を呈する。

**S B 32出土の土器** 61は高杯形土器の頸部で復元したが、甕形土器底部の可能性もある。62～64は高杯形土器である。62は脚部の成形後、ハケ調整を行い、時間的なプレスを有して杯部の成形を行っている。円盤充填法がとられたと考えられる。63は円筒形の柱状部を持つ。4方向の透かしはいる。64は沈線が巡る。63・64ともに径1mm前後の砂粒を多く含む。

**S B 51出土の遺物** 65は剥片である。石材はサヌカイトである。

**S D 01出土の土器** 66はほぼ完形に近い甕形土器である。全面にタタキが残る。67は須恵器壺形土器である。

**S D 04出土の土器** 68は土師器杯である。 (萩谷良太)

### 3. 小 結

今回の調査で検出した弥生時代後期の集落遺構については、それが典型的な高地性集落を構成するものであることは多言を要しないであろう。つまり、当遺跡は、高地性集落が有する様々な条件を高い比率で満たしている。一例を示すと、その立地条件が挙げられる。比高差約60mを測る比較的急峻な丘陵頂部に営まれ、ヤマトとヤマシロを結ぶ水(木津川)陸両面にわたる幹線ルートを眼下に見下ろし、京都盆地のみならず奈良盆地(主としてその西半地域)を望見できる要害環境にある。まさに高地性集落が有する監視・哨戒・通報・防塞という主要な側面を備えている。

次に、この高地性集落の年代的な在り方を検討すると、出土遺物等から弥生時代後期前葉にその造営の中心が求められる。つまり、佐原 真が提唱した畿内編年を基軸とした時期区分でいうところの、V期初頭に集落の始期を求められる。森岡秀人は、高地性集落出現の第二の画期として、瀬戸内圏高地性集落を経てIV期末からV期初頭に畿内中枢部に出現するものを重視する。そして、その展開内容によってさらに集住型と群棲型に類別して、その発展過程を検討している<sup>(注3)</sup>。城山遺跡の場合、試掘調査の結果、集落の拡がり木津城主郭部分も含め広範囲に展開することが予想され、いわば平地の拠点集落の移村を前提とした集住型高地性集落の範疇で理解した方が妥当であろう。この場合の低地の母集団(母村)の候補としては、IV期で終焉する大畠遺跡を指摘できる。要するに、鉄器の流通を主たる原因とする生産様式・手段の急速な変容を受けた、この社会全体の変質期に、おそらく鉄の供給ルートをめぐる覇権争いに端を発する、西方勢力(ツクシ政権)との争乱を背景にもつ緊張関係が、城山遺跡における高地性集落の出現の背景となっているものとみられる。また、同じ地域にあって、田辺天神山遺跡など淀川水系流域に展開する、V期後半に出現する高地性集落は、中国史書にみえる「倭国大乱」との関連性が指摘されている

が、これらとは時期的には一線を画すべきで、それらの遺跡間のネットワークには組み込まれていない点も重視せねばならない。出土土器は、木津川流域の他の遺跡の様相とは異なって、概して大和系の土器が主流を占めるが、中河内や近江などの近国のみならず、遠く中部瀬戸内や山陰系の土器も一定量組成しており、当時一般化しつつあった、広域土器流通の形跡が濃厚にうかがえる。また、獣帯鏡や素文鏡については、いずれもそれらが招来、もしくは国内における製作の最も早いもので、特に前者は、破鏡という形態で埋葬施設から出土した点としては国内最古例となり、中国での製作から入手・伝達を土器の暦年代と絡めて考察する上で重要な資料となる。

一方、今回の調査でその存在が明らかになった片山3・4号墳については、いずれも内部主体の遺存状態が悪く、その詳細については検討できない。ただ、両古墳とも後期群集墳のような尾根型の立地形態をとらず、標高の高い山腹斜面に面状に分布している点や、墳丘の平面形が方墳秩序への指向を示すこと、副葬遺物が全くみられない点などは、7世紀代のいわゆる終末期群集墳の典型的な要素である。3号墳内部主体において火化行為が行われた可能性が指摘できる点や、4号墳の単葬、単次葬が想定できる石室の小型化は、これを更に強調する。

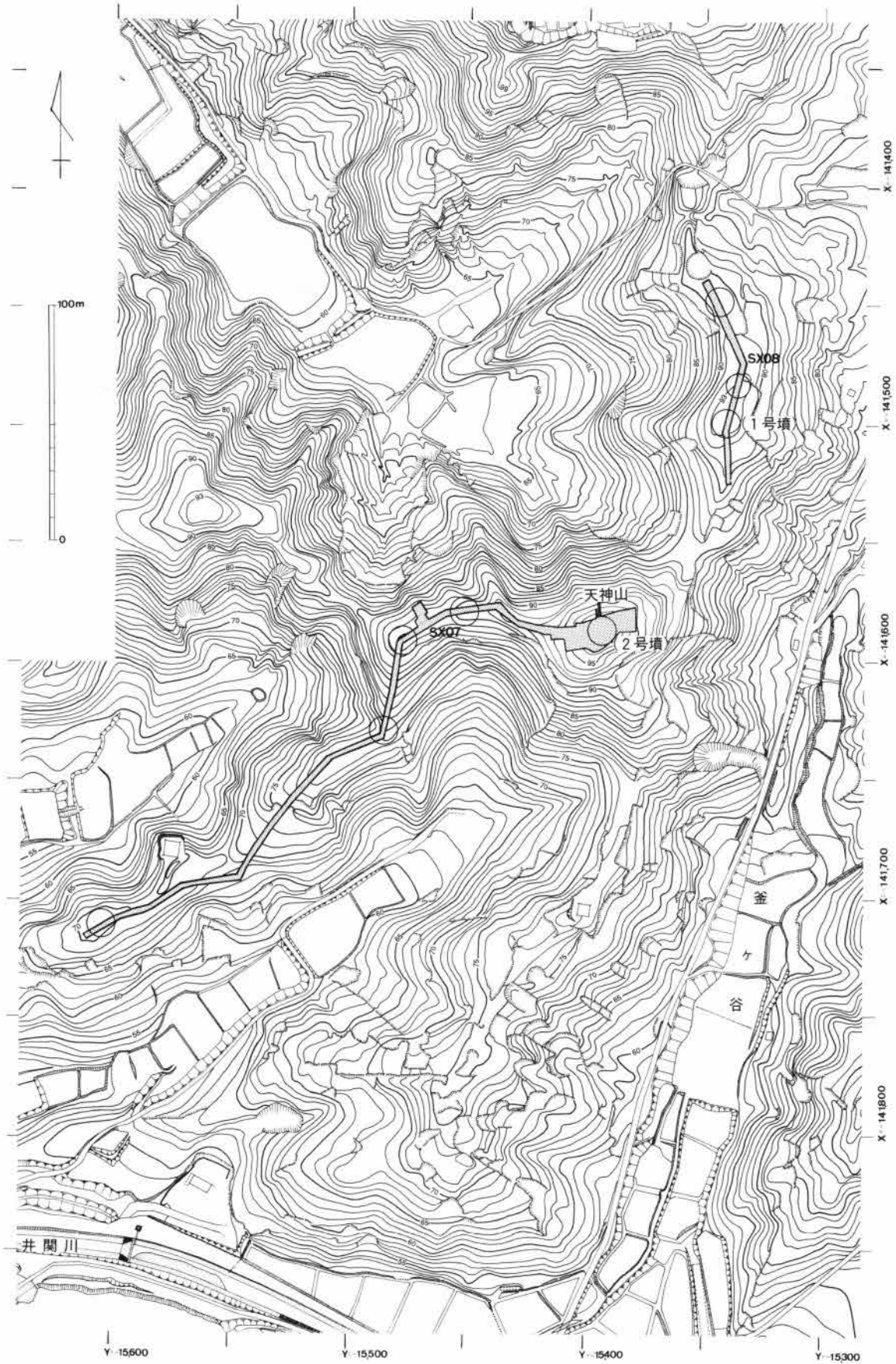
(伊賀高弘)

## (2) 天神山古墳群

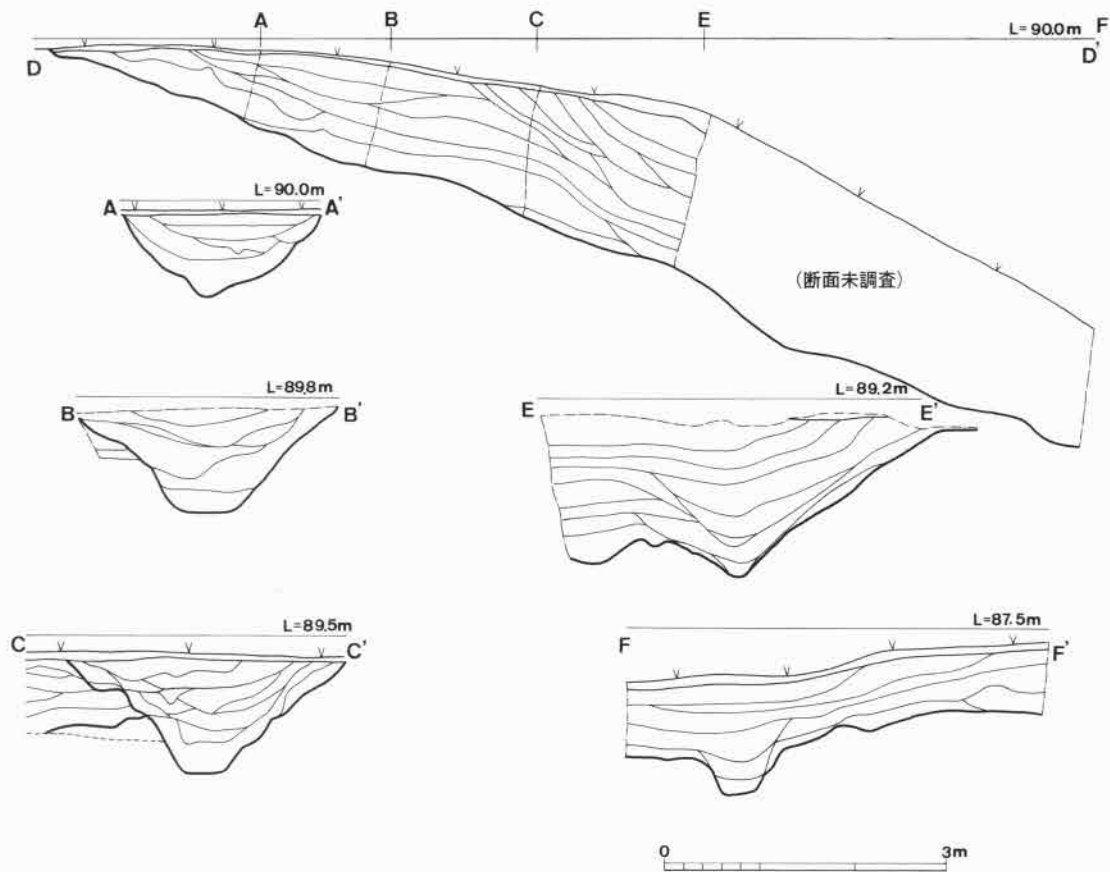
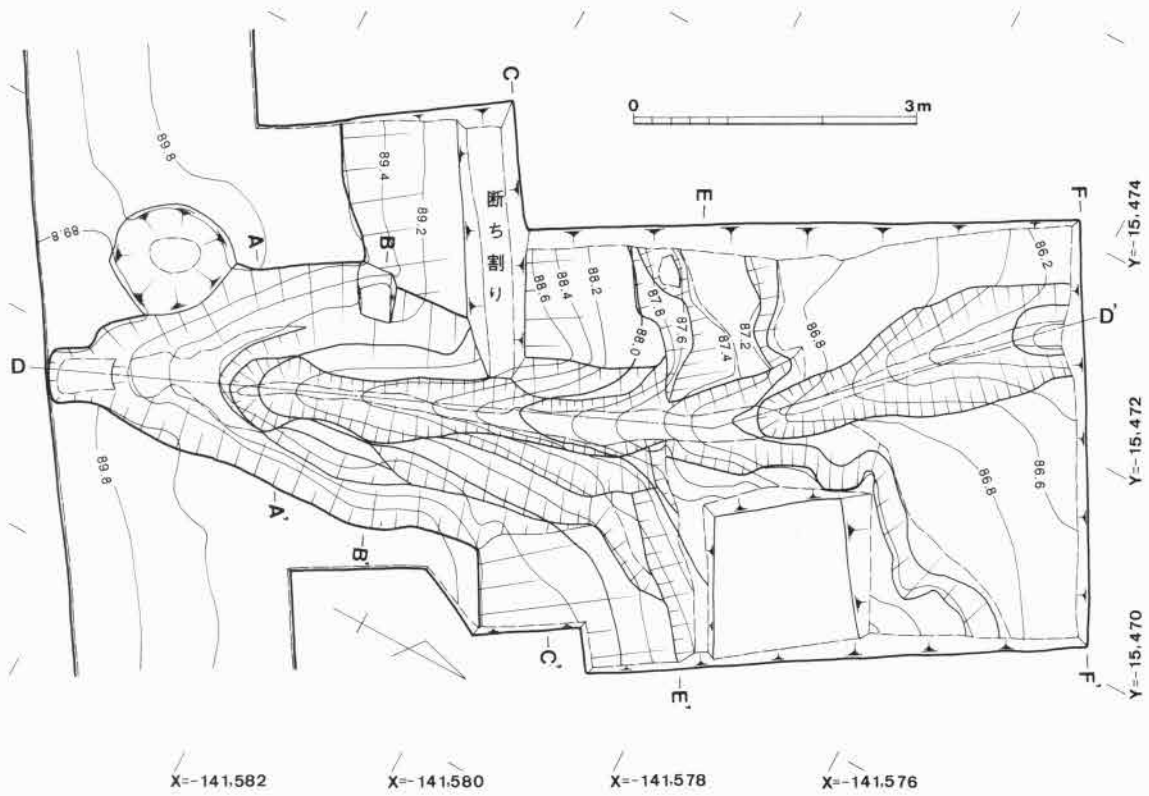
### 1. 検出遺構

天神山古墳群は、『京都府遺跡地図』によると、天神山と称する標高99.4mを最高所として、そこから派生する丘陵尾根筋に形成された前方後円墳2基を含む11基の古墳からなる古墳群として、周知されていた。今回の調査対象地は、天神山を含む古墳群の東寄りの地区であり、事前に分布調査を行ったところ、周知の2基(1・2号墳)を含めて、合計8基の古墳状隆起を確認した。したがって、調査は、まずこれらの古墳状隆起が古墳であるか否かを確認する目的で、丘陵尾根筋に沿って、幅2mの試掘トレンチを連続的に配して実施した(第79図)。試掘調査の結果、古墳状隆起の大半は、自然地形であると判明した。ただし、天神山2号墳とされていた「天神山」の山頂地区と、そこから西へ約70mの地点(SX07)、及び天神山の北方100mの地点(SX08)で、遺構と考えられる土色の変化を確認したので、この部分を拡張して遺構の拡がりの追求した。

**天神山の山頂地区(天神山2号墳)** この地区については、山頂部分が調査前から非常に精美的な円錐台形を呈していたことから、古墳である可能性が高いと推定していた。ところが、調査を進めていくと、山頂平坦面において、近年掘られた溝状遺構を検出した以外、古墳の埋葬施設の痕跡は確認できなかった。また、周囲に古墳と自然地形を限る周濠などの施設も存在しないことが明らかとなった。ただ、断ち割り調査の結果、北側斜面に地山を覆う厚い堆積層が認められ、人為的に山頂部分を削平し、その土を北側に押し出して、一定の平坦面を形成する造作の跡が確認



第79図 天神山古墳群 トレンチ配置図(1/2,500)



第80図 天神山古墳群 S X07実測図(1/80)

された。人為的な地形改変が行われた時期は、土師器細片(第81図71) 1点のみの出土では明らかにし難いが、当地が江戸時代初期に、徳川幕府から岡田国神社(天神社)に与えられた土地で、そこに近年まで小祠が存在したという伝承が伝わることから、この時期に祠の敷地を確保する目的で、平坦に均された可能性が指摘できなくもない。

S X 07(第80図) 瘦せた丘陵尾根の頂部から北西側斜面にかけて掘削された溝状遺構である。溝の軸線はやや蛇行するものの、概ね直線的で、山腹を走る等高線に直交する。溝の最大幅は約3.0mで、横断面は「V」字形を呈する。縦断面は、現在の地形が北方で「く」字形に折れて傾斜を強めるのに対し、この遺構の底のラインは、脊梁部の開始部から同一の勾配をもって直線的に深くなっていく(最大の深さ2.0m)。内部の堆積土中には焼土や炭が目立って多く混入し、主として埋土下半から弥生時代後期前葉の土器や石包丁が出土した。

S X 08 S X 07と同様に尾根の頂部から斜面方向(西側)に尾根筋と直交して掘られた溝状遺構である。長さ4.5mにわたって検出したが、さらに斜面下に向かって延びるものと思われる。検出範囲における最大幅は3.5mで、横断面は「V」字形を呈する。縦断面は、開始部から急な角度で掘り込まれ、まもなく緩やかな傾斜に移行する点はS X 07とはやや異なる。埋土に焼土や炭は混じえないが、埋土上層から奈良時代の須恵器が出土した。(伊賀高弘)

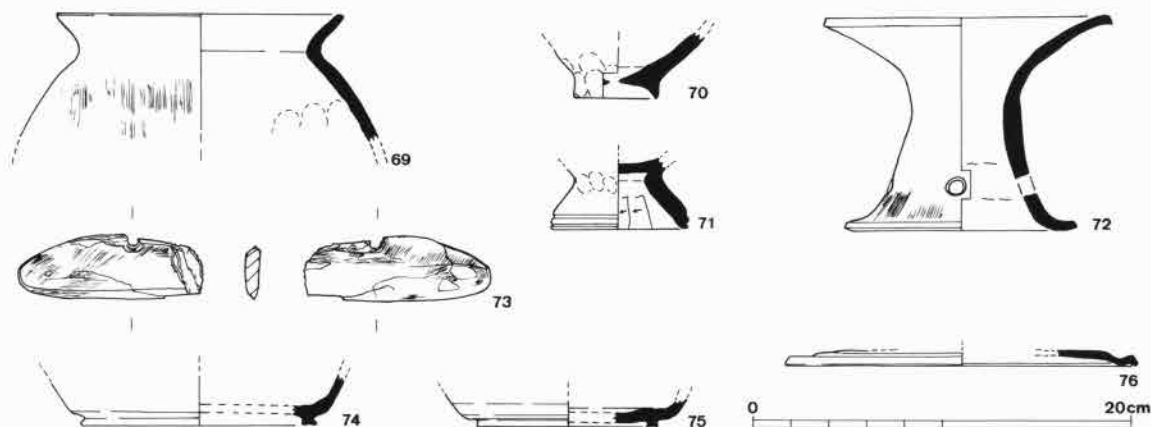
## 2. 出土遺物

天神山古墳群から出土した遺物は、弥生時代後期から奈良時代を中心とする。

69は甕形土器である。頸部に横ナデがはいる。70は底部に焼成前に穿孔をしている。上げ底の底部はつまみだして成形している。72は器台形土器である。暗茶褐色を呈する。4か所に透しが入る。73は石包丁である。石材は粘板岩(もしくは頁岩<sup>(注4)</sup>)である。71は裾部に2状の凹線が巡る。内面は横方向の削りを施す。74~76は須恵器である。(萩谷良太)

## 3. 小 結

今回の調査では、調査区内の古墳状隆起はことごとく古墳でないことが判明した。



第81図 天神山古墳群 出土遺物実測図(1/4)



その反面、幅の狭い尾根から山腹にかけて掘られたやや規模の大きな溝状遺構を2か所検出するという意外な成果を得ることができた。この遺構の性格は判然としないが、これらの遺構から、北側に位置する弥生時代の高地性集落を検出した、木津城山遺跡と同時期の遺物が出土した点は見逃せない。そもそも、平野部から離れたこのような丘陵地から生活用具である土器が出土すること自体異常な現象である。いずれにせよ、弥生時代の遺構・遺物が出た以上、当時の高地性遺跡が、上記の木津城山遺跡の範囲を超えて、広範に展開している可能性が高く、今後注意しなければならない地域であることは間違いない。(伊賀高弘)

### (3) 片山1号墳

#### 1. 検出遺構

片山1号墳は、『京都府遺跡地図』によると、丘陵頂に位置する一辺8mの円墳で、過去に鉄鍬が出土したと伝えている。

調査地内の樹木を伐採したところ、確かにやや南北に長い古墳状隆起を認めたため、調査は、当初から面的なトレンチを設けて実施した。調査の結果、非常に薄い表土(腐植土)を剥ぐと、すぐに地山となり、若干の遺構を検出したものの、古墳を示す遺構(埋葬施設や外部施設など)は全く検出されず、また、古墳時代の遺物も出土しなかった。

検出した遺構は、小規模な溝(素掘り溝)と、底に花崗岩の切石を置いた土坑である(第82図)。

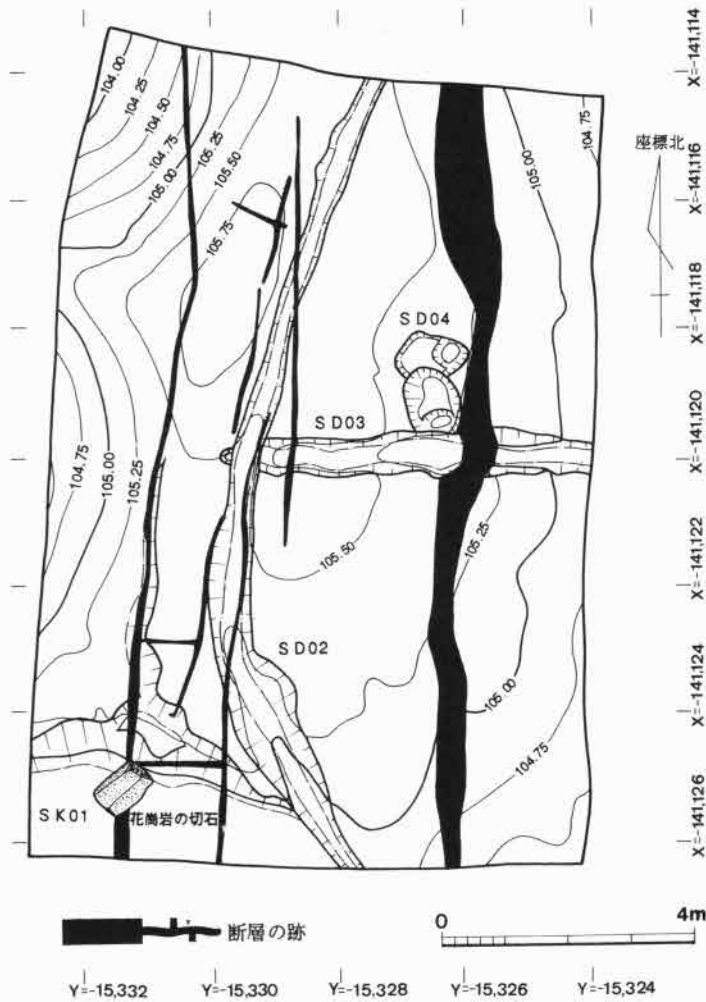
S K 01 調査区の南西で検出した土坑であるが、その北側斜面の一部しか確認していない。底部は平坦で、北側の検出面からの深さは約0.3mを測る。この土坑の底からやや浮いた位置で長軸1mを測る加工を施した花崗岩が据え置かれている。石材は斑状花崗岩で、この地域では産出しない石で、過去に遺跡地内に運び込まれたのは間違いない<sup>(注5)</sup>。土坑内埋土中から、土師器皿が1点出土した。細片のため時期を決めがたいが、胎土や色調から中世以降のものと考えられる。

S D 02 南北に延びる尾根筋の軸線上に掘削されており、南半は緩やかに円弧を描くように東方向に曲がる。内部に黒色土が堆積しており、近世以降の土地区画溝と考えられる。南北の延長線は先の木津城山遺跡本調査地区で確認しており、北側は主尾根の稜線中軸に沿って直線的に、南側は大きく東方に曲折して東側の山腹を下っている。

S D 03 西端がS D 02を意識するごとく掘られた東西方向の溝である。重複関係や埋土の相違などから、S D 02と同時期とはみられないが、出土遺物がなく、時期、性格とも不明である。

#### 2. 小 結

今回の調査では、古墳に関連する遺構・遺物は全く確認されなかった。したがって、片山1号墳として遺跡登録された古墳は、古墳でないことが明らかとなった。ただ、周辺に堆積した土量



第82図 片山1号墳トレンチ 遺構平面図(1/120)

は山頂部付近としては異常に多く、片山1号墳とされた山頂部は、ある時期に削平された可能性がある。そうした人為的な造作が、調査地のすぐ北側に存在する中世の木津城の普請に関連する可能性は、この地点がこの城の大手と推測されていることから十分考えられる。最後に、今回の調査地内では、地震痕跡を確認した。具体的には、およそ南北方向に走る大小の粘土層の帯であり、小規模な断層と考えられる。特に、調査地の東1/3の地点を南北に走る断層は、広いところで幅0.8mを測り、さらに調査区外に延びる。これらの小規模な断層群は、活断層本体ではなく、その周辺に形成された副断層とみられ、調査地点の東側約150mにある釜ヶ谷と称する谷地形が主断層と考えられている<sup>(注6)</sup>。

(伊賀高弘)

注1 調査に参加していただいた方がたは以下の通りである(五十音順、敬称略)

秋本哲治・井本敬子・井ノ口雄三・榎本威信・大坪由美香・大山慶子・荻野富紗子・奥村茂輝・小原志奈子・兼田一成・金松 誠・木本昌英・久田 亨・櫻谷綾子・小出純子・小西千春・小松厚子・坂手華子・佐藤美穂・高木克彦・田淵二郎・筒井由香・中島恵美子・西根正弘・萩谷良太・林益美・播磨尚子・藤田徹也・古川良子・南 憲和・松田洋介・宮本香織・室林由香・山口良太・山田三喜子・山中道代・山本弥生

注2 京都大学人文科学研究所岡村秀典氏のご指示による。

注3 森岡秀人「弥生時代抗争の東方波及—高地性集落の動態を中心に—」(『考古学研究』第43巻第3号 考古学研究会) 1996

注4 石材の同定は、橋本清一氏のご指示による。

注5 石材および産地同定は、橋本清一氏のご指示による。

注6 橋本清一氏のご指示による。

## 4. 長岡京跡右京第585次(7ANTGT-6地区)・ 第589次(7ANSKT-3地区)・下植野南遺跡 発掘調査概要

### 1. はじめに

この調査は、名神大山崎ジャンクション建設に伴い日本道路公団大阪建設局の依頼を受けて、当調査研究センターが実施したものである。平成9年度は、京都府乙訓郡大山崎町大字下植野小字五条本(五条本地区)と、同町大字円明寺小字門田(門田地区)の2か所での調査を行った。

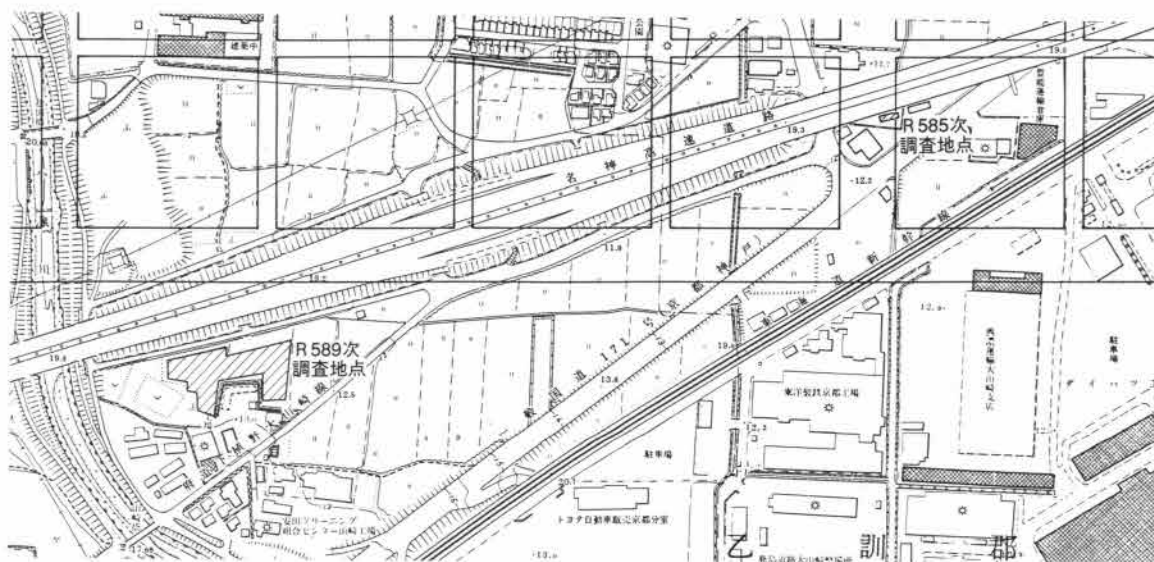
調査地は、長岡京の推定復原(平城京型)によると、五条本地区が右京九条一坊十三町にあたり、門田地区が右京九条二坊十二・十三町隣接地であり、縄文時代から近世にかけての複合遺跡である下植野南遺跡として周知されている。

調査には、R585次地点では、平成10年1月19日から同年2月13日までを要し、調査面積は約120m<sup>2</sup>である。また、R589次地点では、平成10年2月2日から同年3月10日までを要し、調査面積は2,200m<sup>2</sup>である。現地の調査は、当調査研究センター主任調査員戸原和人、同調査員岩松保・松尾史子が担当した。

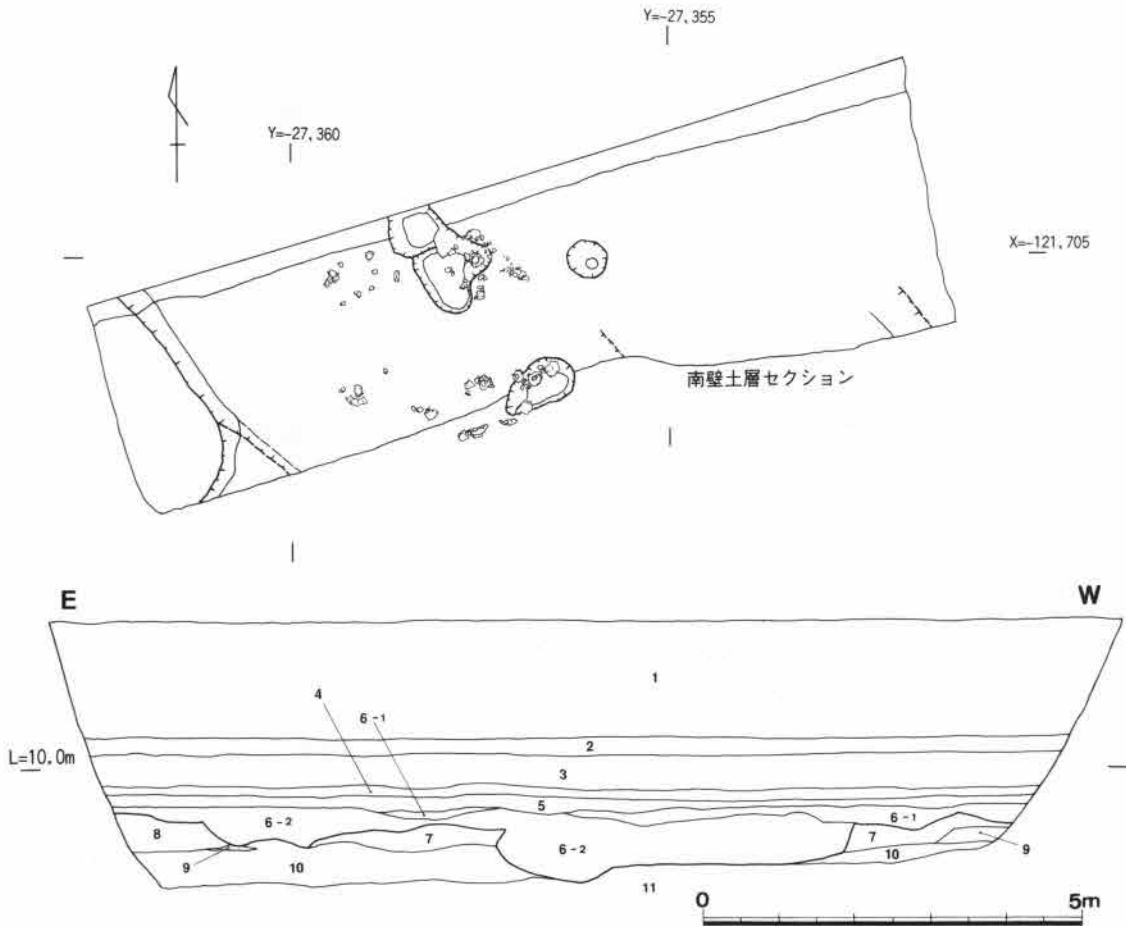
### 2. 調査概要

#### (1) R585調査区

調査地の北側は、名神高速道路の橋脚に接していた。このため、安全対策として調査トレンチの北辺にシートパイル(鋼矢板)を打ち込こむこととし、掘削土は、調査地の敷地がせまいために、



第83図 調査地位置図(1/5,000)



第84図 R585次調査区南壁土層図

1. 盛り土      2. 黒灰色砂性粘質土(耕作土)      3. 暗灰褐色粘質土      4. 灰褐色粘質土  
 5. 茶褐色粘質土(上面黒褐色マンガンの沈殿)      6-1. 暗褐色粘質土礫混じり(直径2~3cm)  
 6-2. 暗灰褐色粘質土礫混じり(直径2~3cm)      7. 灰色砂礫(直径2~3cm)      8. 黄灰色砂性粘質土  
 9. 灰色砂礫(直径0.5~1cm)      10. 黄褐色砂性粘質土      11. 黄褐色粘質土(部分的に灰褐色砂入り)

場外に搬出した。

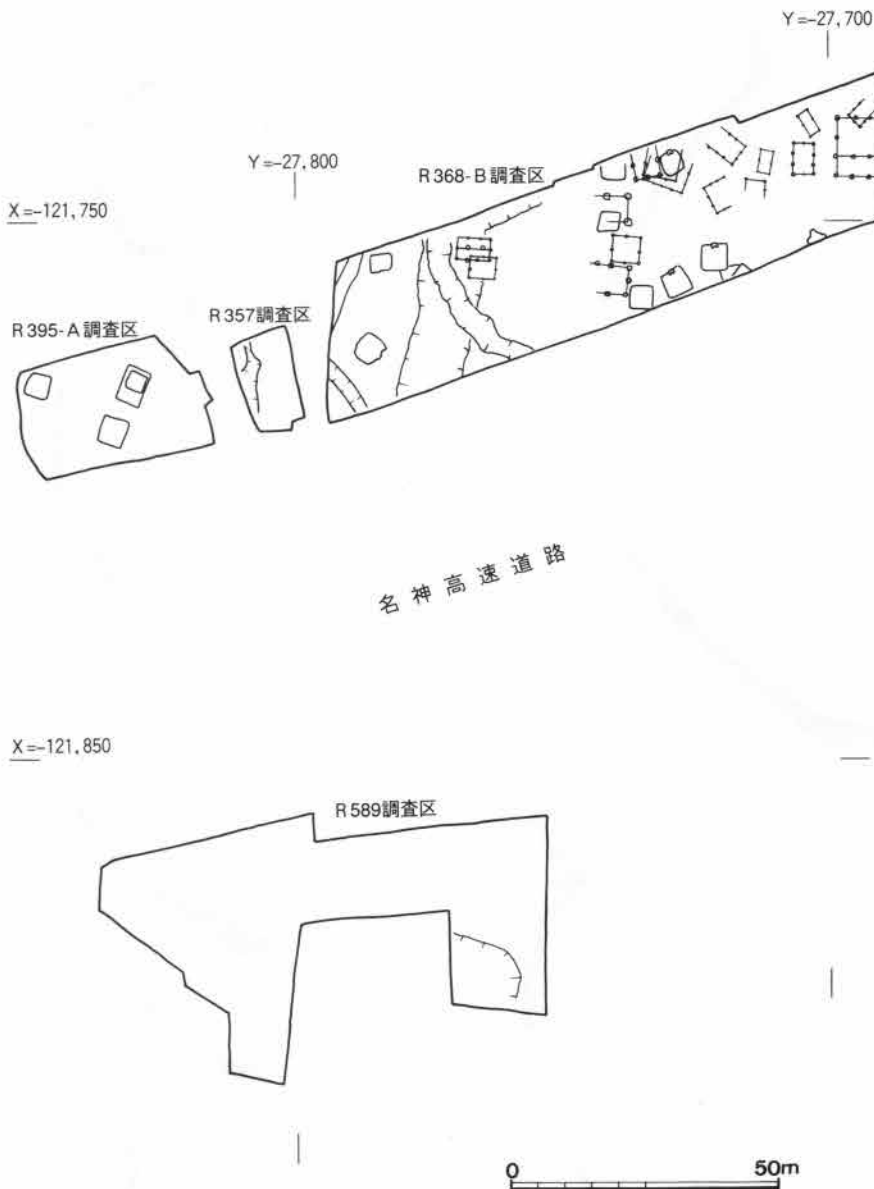
調査地の地層は、標高約11.9mの地表面から約1.5mの盛り土(第1層)がなされており、第2層は旧耕作土である。第3層(暗灰褐色粘質土層)と第4層(灰褐色粘質土層)からの出土遺物はなく、第5層(茶褐色粘質土層)からは、土師器・須恵器片が出土している。第6-1層(暗褐色粘質礫混じり土層)及び第6-2層(暗灰褐色粘質礫混じり土層)からは、弥生時代終末期から古墳時代前期にかけての土器を検出した。第7層の灰色砂礫は、河川堆積層であり、第7層以下から遺物は出土していない。検出した遺構としては、標高9.4mの第8層を掘り込む第6・7・9層が、旧河道の埋め土と考えられる。そのうち第6層は、弥生時代終末期から古墳時代前期のものである。本調査区で検出した遺構は、旧河道S D01のみであった。

旧河道S D01 調査地の幅が狭いため明確ではないが、概ね北西から南東に流れる旧河道である。標高約9.4mの第8層を掘り込み、第6・7・9層によって埋まっている。調査地内で検出した幅は約10.0m・深さ約1.1mを測る。そのうち、第6層からは、弥生時代終末期から古墳時代前期の遺物が出土した。

(2) R 589調査区

京都府教育委員会の試掘調査により、地表下1.8mで平安時代の遺構面があることが判明したので、大量の土砂を効率的に除去するために、遺構面までの掘削は重機掘削を2回に分けて実施した。今回の調査では、本格的な遺構の検出は行わず、次年度以降に期すことになった。このため、今年度の調査では、  
— 断片的な知見を得たにすぎない。

本調査区の遺構面は、現在までのところ、2面を確認している。上面は、GL-1.4~1.5mで、調査地の東半に褐色砂礫と灰色砂礫層が分布し、褐色砂礫層中からは、わずかに

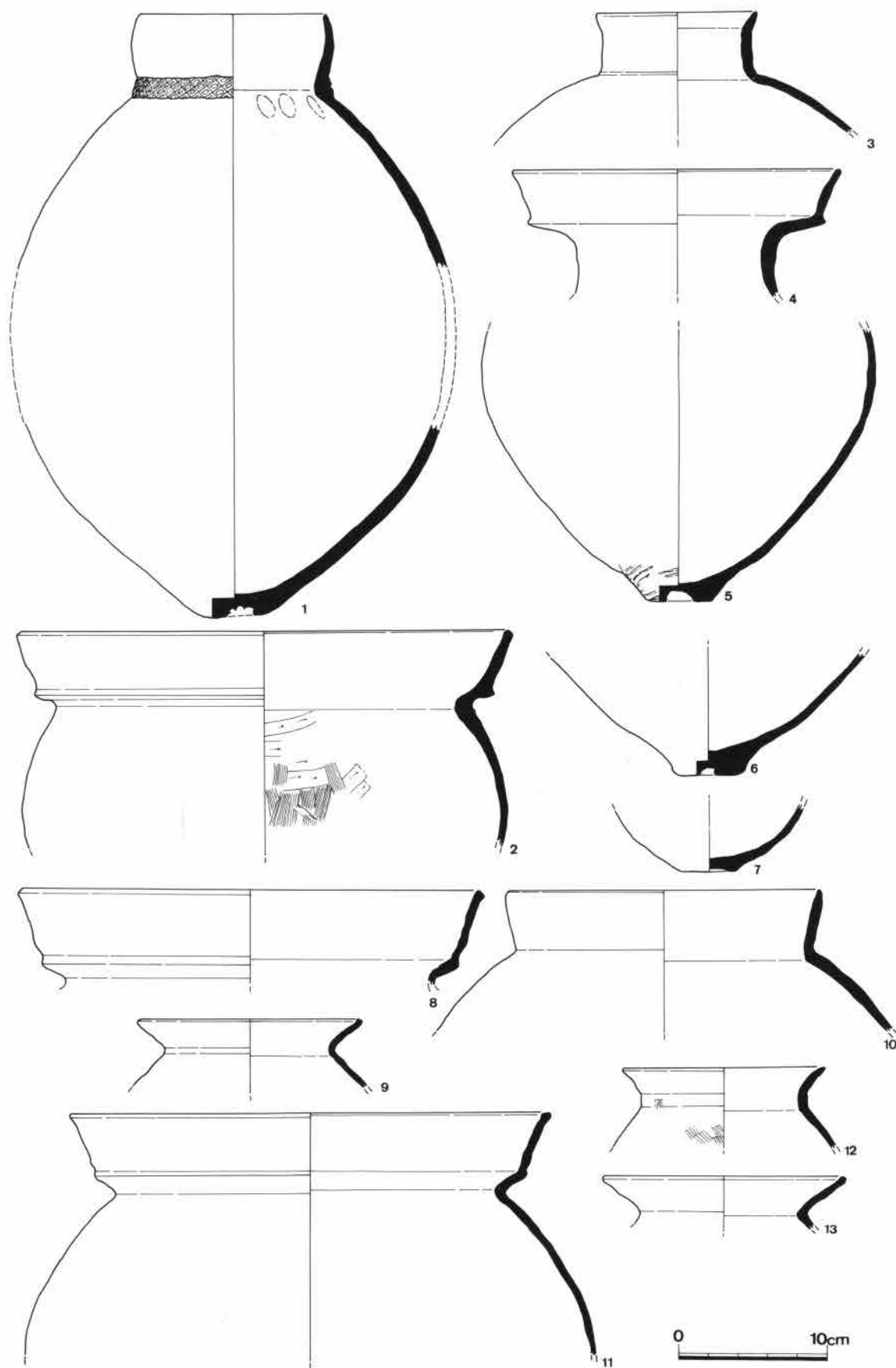


第85図 R 589地点周辺遺構配置図

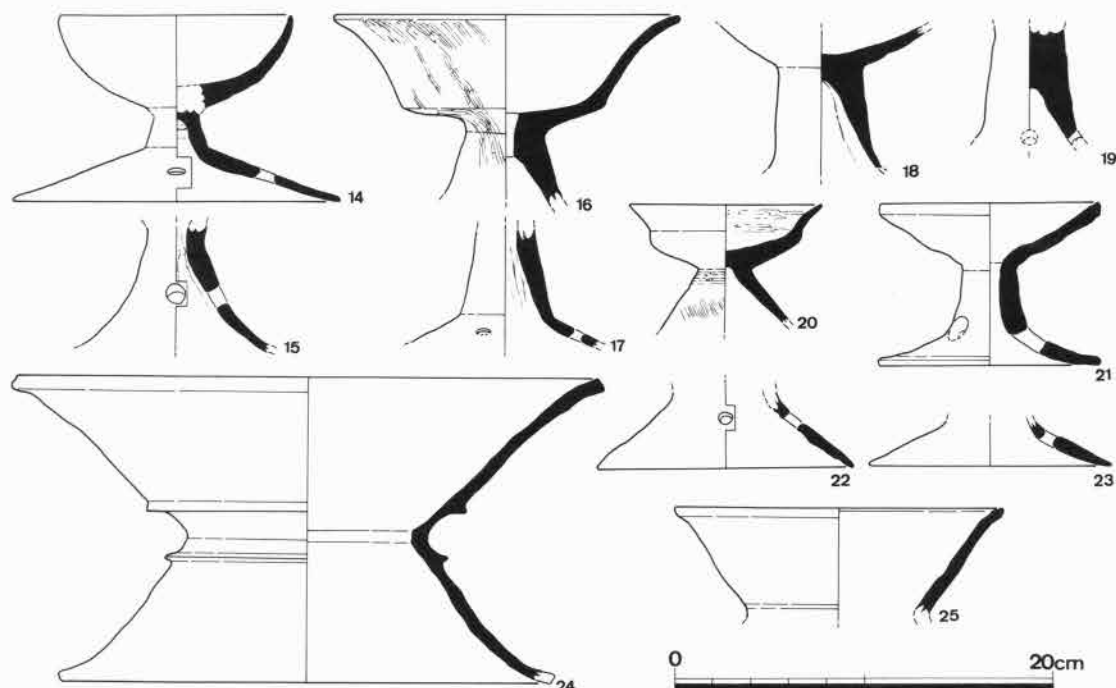
に黒色土器や緑釉陶器などの平安時代の遺物が出土している。この遺構面では、南半部で青灰色粘土が堆積した中世の湿地状の落ち込みのほか、平安時代と考えられる土師器甕の埋納土坑や、中世以降の井戸を確認している。この砂礫層の下位には、古墳時代の土器を包含する暗褐色粘質土が広く堆積しており、この時期の集落遺構が分布していると考えられる。

3. 出土遺物

下植野南遺跡の発掘調査では、調査面積が比較的限定されていたにも関わらず、多様な他地域系土器が出土しており、拠点集落の特徴を呈している。出土遺物の総量は、コンテナ・バット8箱程度であるが、その中から特徴的な土器を図示した。1は、直立して内湾する口縁部を有する壺で、頸部には粘土帯に斜格子を作り、その間に刺突を施す。色調は暗赤褐色である。この土器



第86図 下植野南遺跡出土土器実測図(1) 1/4



第87図 下植野南遺跡出土土器実測図(2) 1/4

は、在地の土器とは認められず、山陰～西部瀬戸内周辺との関連性が指摘されるものである。3も近似した形態を持ち、直口壺とも言うべきものであろう。2・8・11は、山陰地域の甕と見なされるものだが、山陰地域からの搬入品ではなく、畿内ないしは在地の土器かと考えられる。4は二重口縁壺であるが、詳細な調整は不明である。5～7は、畿内の弥生傾向の甕であり、円盤充填された特徴的な底部を持つ。また、5は痕跡的に、底部付近の外面に右上がりのタタキを観察することができる。10は、直立する口縁部を持った甕であり、在地系のものではないかと考えられる。12は、単純「く」の字口縁を持つ甕であるが、頸部が2段に折れる。他の土器とは時期的に共伴しないものだと考えられる。9・13は、薄手の畿内系の土器で、庄内～布留系の甕であると考えられる。

第87図には供膳系器種を中心に図示している。14は低脚の高杯で、大きく開く裾部が特徴的である。16は、布留系の有段の高杯であり、外面を斜め方向のミガキによって仕上げる。見込み部中央に下方から貫通する孔があるが、これは上方からの円盤充填部分が剥離したものである。4方向に円形の透かしを有する。通有の高杯と比較しても器壁が厚いという特徴がある。20・21は布留系で小型精製3種を構成する小型器台である。20は、杯部内面に横方向の丁寧なミガキ、21は裾部に3方向の円形透かしを設けている。24・25は山陰系の鼓形器台である。24は、くびれ部の稜が極めて鋭く、鼓形器台の中でも古式のものと言える。それに比して、25は、稜が省略された、時期的に下るものである。

これらの土器群は、庄内式新相～布留式の初頭に該当するもので、他地域系の土器も一定量存在し、非常に興味深いものである。これは、この時期に広域的な交流を行った、拠点集落としての下植野南遺跡の特性を示すものと言えよう。

#### 4. ま と め

R585次調査区では、名神高速道路拡幅に伴う発掘調査で確認されていなかった、弥生時代終末期から古墳時代前期にかけての集落が、調査地の周辺に存在することが判明した。この時代の遺跡としては、下植野南遺跡の北に所在する松田遺跡で、大山崎中学校建設に伴う発掘調査によって住居跡が確認されている。また、下植野南遺跡の中では、調査地の南西約270mで、同時代の住居跡が確認されている。

R589次調査区では、周辺の調査結果を考慮すると、古墳時代集落や平安時代の掘立柱建物跡等が包蔵されている可能性が高いと考えられる。今年度の調査は、遺構面までの掘削と大まかな遺構検出および下位に堆積している土層と遺構面の確認作業が主体であった。

下植野南遺跡の平安時代の建物群は、平城宮式瓦の出土や大型建物の存在などから第三次山城国府との関連が想定されるものであるが、今回の調査地では、数点の土器が出土したものの、関連遺構は確認できなかった。一方、古墳時代の集落の広がりについては、良好な包含層を認めており、調査地の南・東側にも分布している様相を示している。さらに、調査地の南には平安京と山崎津を直線的に結んだとされる久我畷が斜交しており、その関連遺構の検出が期待される。

(戸原 和人)



# 圖 版



(1)浦入遺跡群全景（南から）



(2)浦入遺跡群全景（西から）

図版第2 浦入遺跡群



(1)A地点全景（東から）



(2)A地点全景（真上から、上が北西）



(1)A-1 地点全景 (真上から、上が北西)

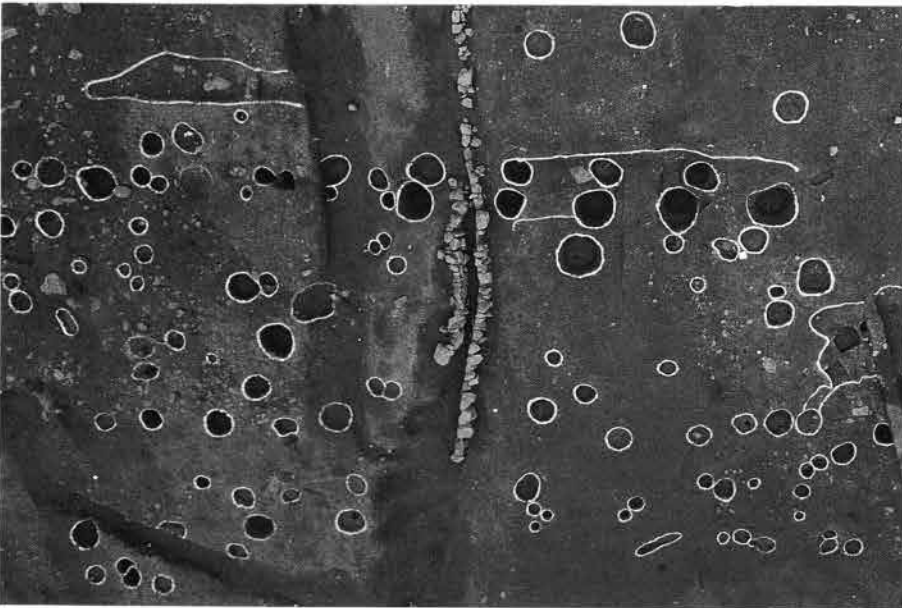


(2)A-1 地点全景 (東から)

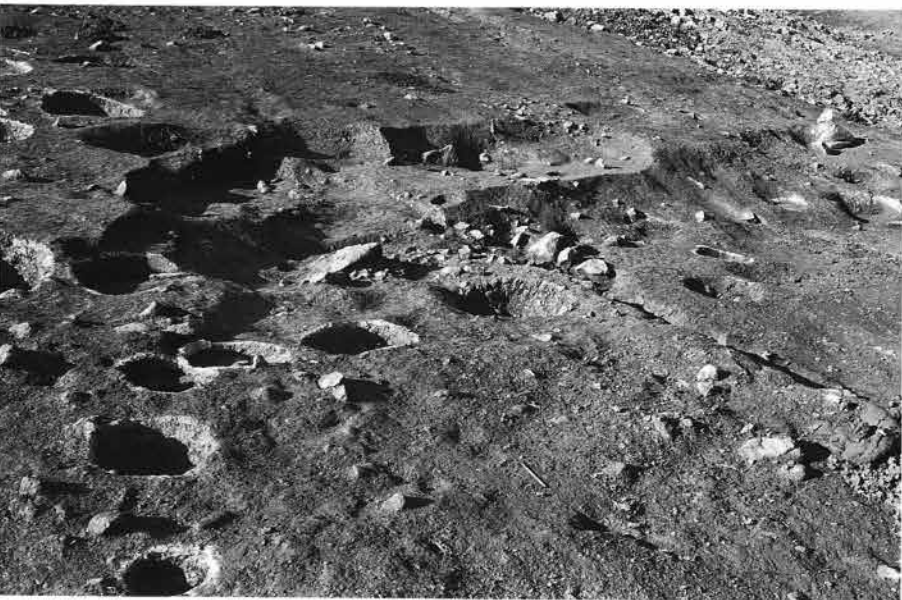
図版第4 浦入遺跡群



(1)A-1 地点重機掘削作業風景  
(南から)

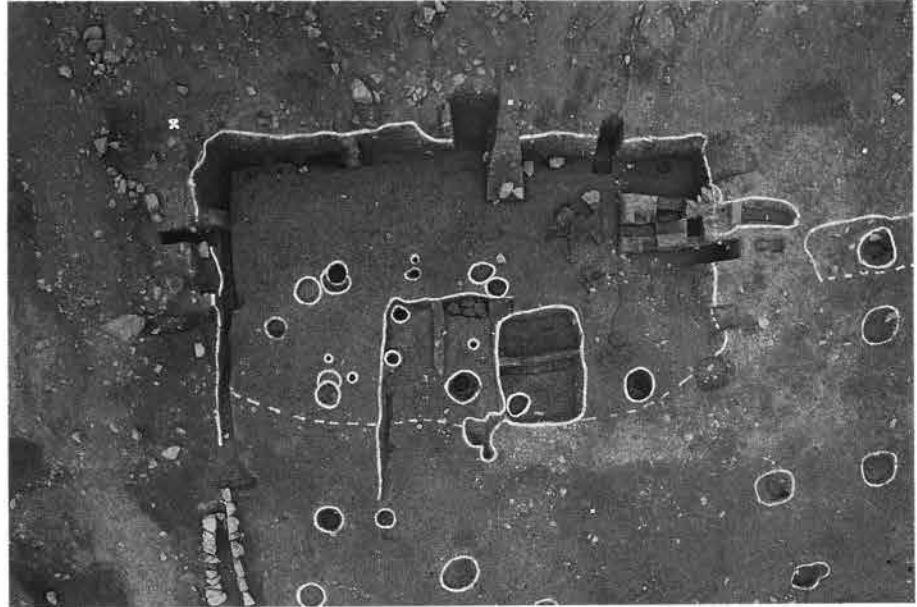


(2)A-1 地点柱穴群  
(上が北西)



(3)A-1 地点竪穴式住居跡  
SH04・05 (南から)

(1)A-1 地点竪穴式住居跡  
SH01全景  
(真上から、上が北西)



(2)A-1 地点竪穴式住居跡  
SH01作業風景  
(北から)



(3)A-1 地点竪穴式住居跡  
SH01カマド全景  
(西から)





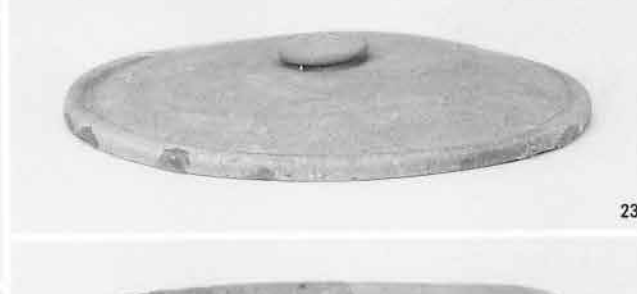
(1)A-2 地点全景 (南東から)



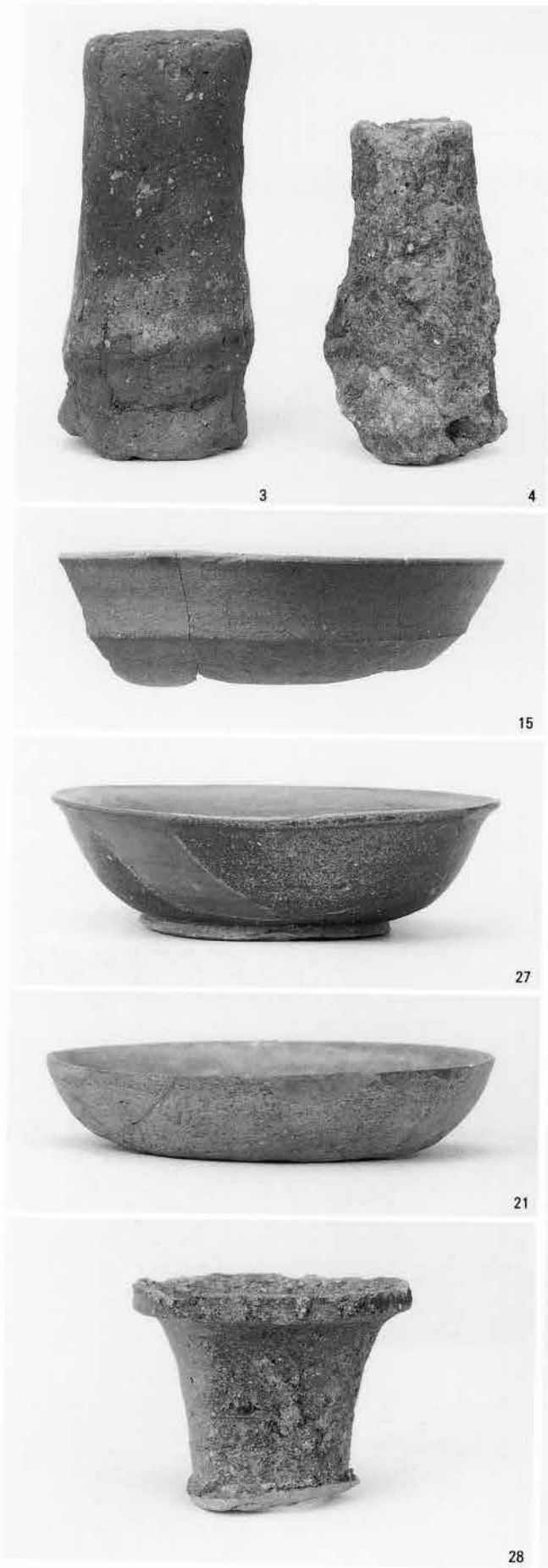
(2)A-3 地点全景 (東から)



(3)A 地点現地説明会全景







A地点出土遺物(2) ただし30のみO地点出土



(1)O-1 地点全景 (東から)



(2)O-2 地点全景 (東から)



(1)O-2 地点石敷炉 (南東から)



(2)O-2 地点S K02全景 (南東から)

図版第11 浦入遺跡群



(1)R地点全景（北東から）



(2)R地点全景（真上から、上が南）



(1)R地点丸木舟出土状況（東から）



(2)R地点丸木舟近景（南東から）



3 トレンチ全景（上が北）



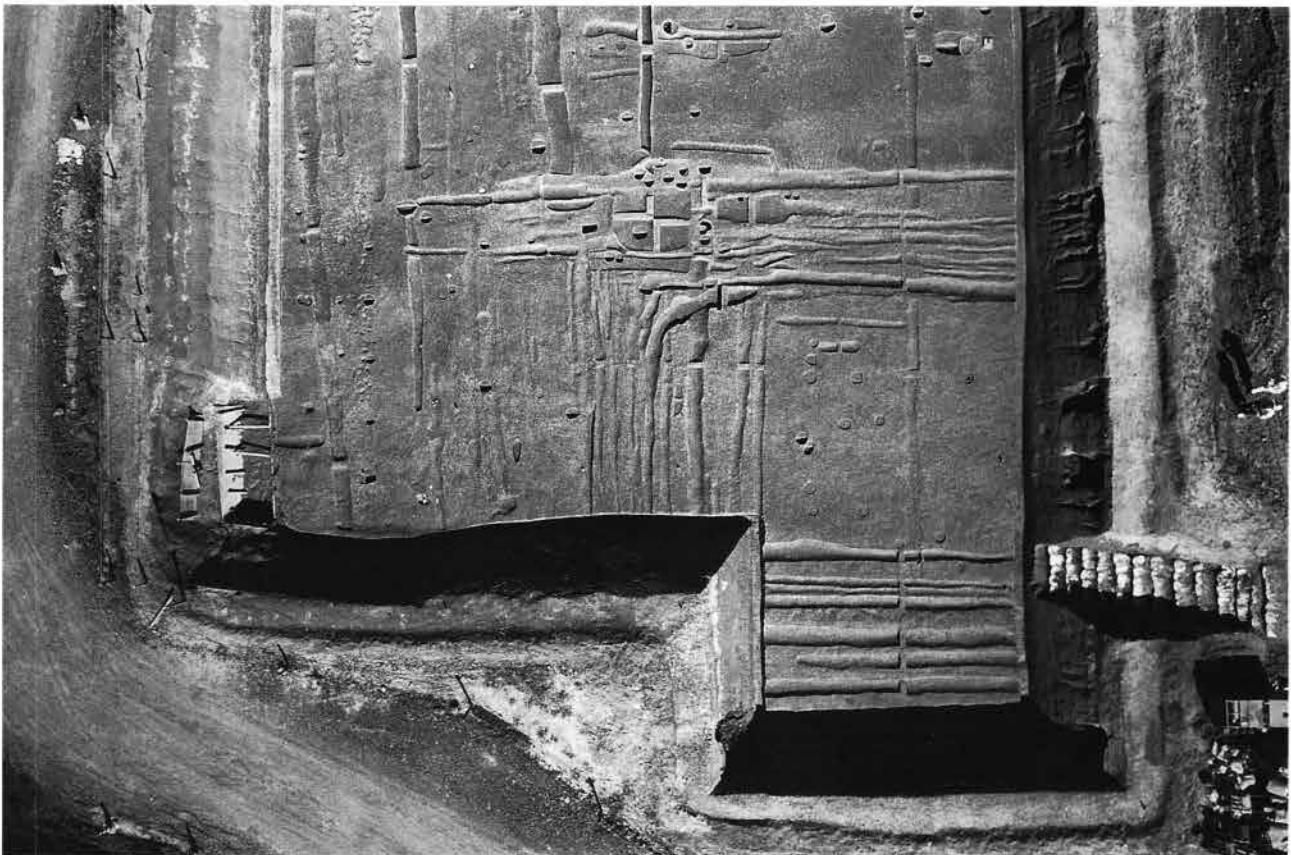
(1)調査地全景（南から）



(2)3 トレンチ北部全景（上が北）



(1) 3 トレンチ中央部全景 (上が北)

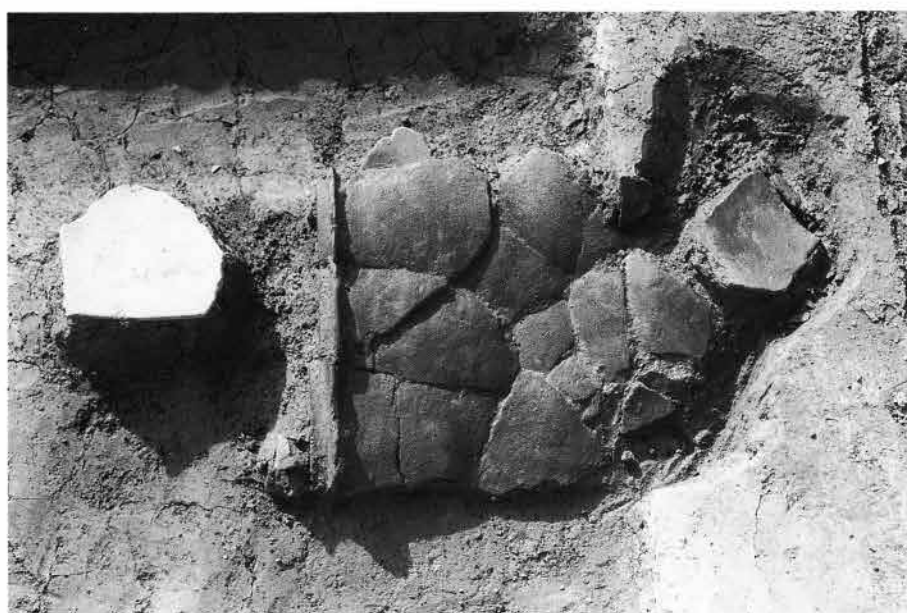


(2) 3 トレンチ南部全景 (上が北)





(1) 3 トレンチ S K92 全景  
(南から)



(2) 3 トレンチ S K592 遺物  
出土状況  
(東から)



(3) 3 トレンチ S K514 全景  
(北から)

(1) 3 トレンチ S K671 遺物  
出土状況 (東から)

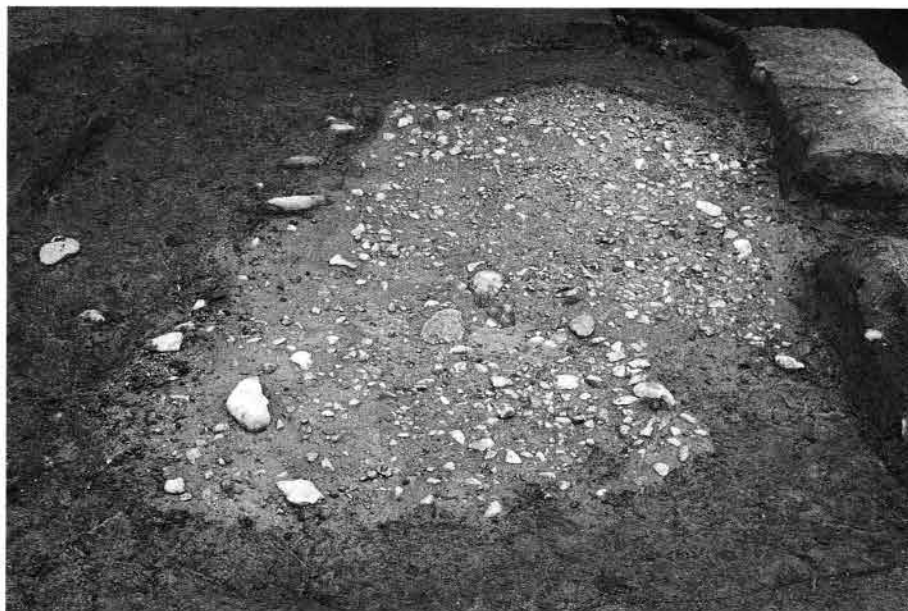


(2) 3 トレンチ S K530 全景  
(南から)

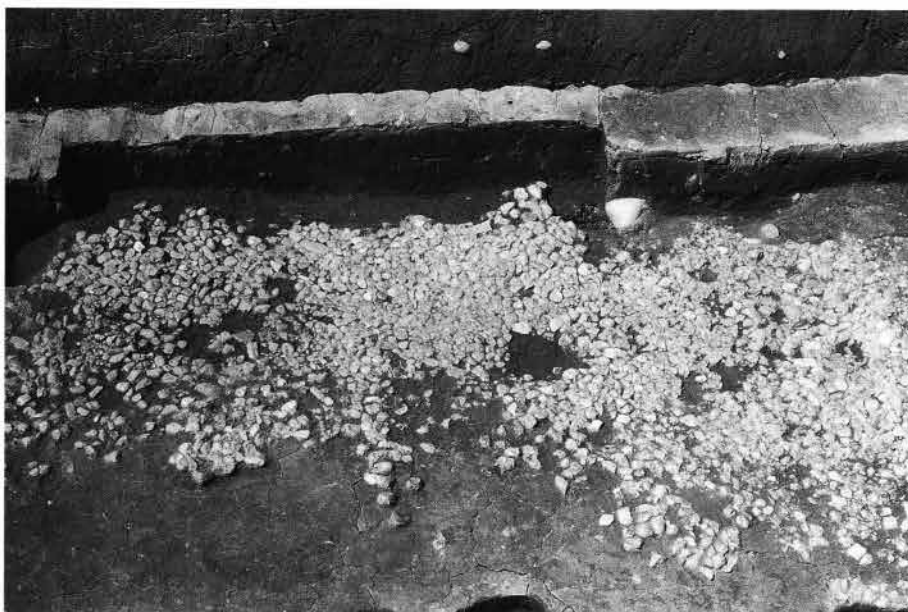


(3) 3 トレンチ S K531 全景  
(南から)

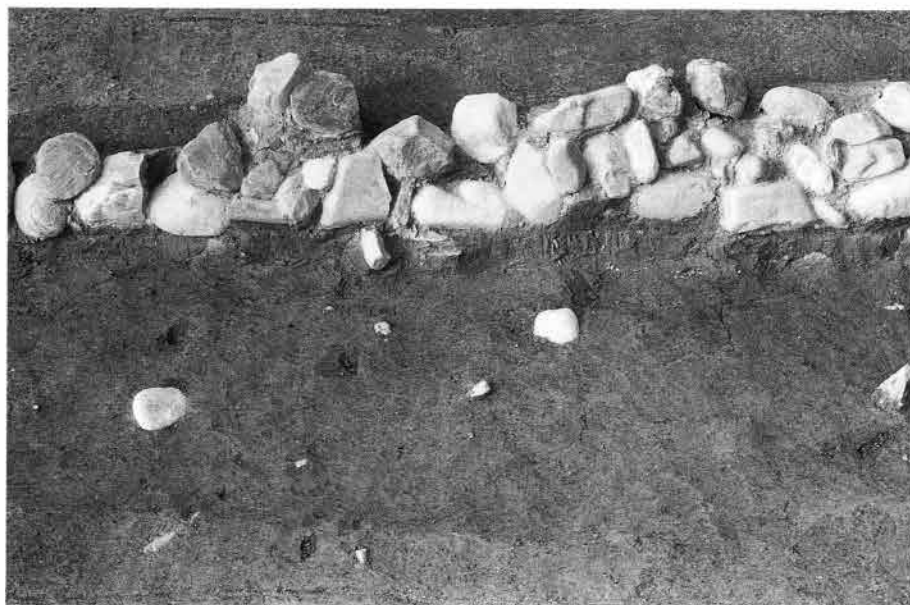




(1) 3 トレンチ S K 531 小石敷  
検出状況 (南から)

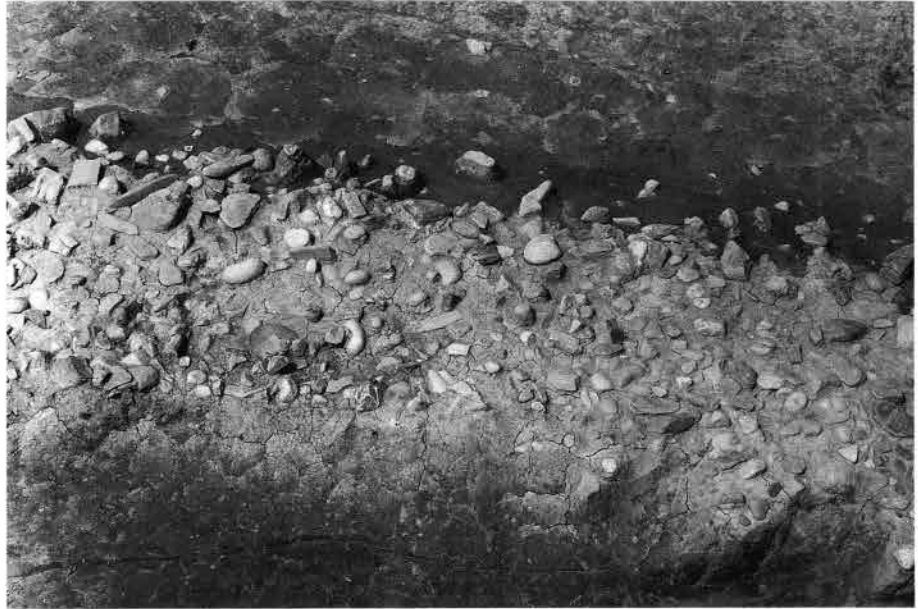


(2) 3 トレンチ S K 173 北部小石敷  
検出状況 (南から)



(3) 3 トレンチ S X 535 石組検出  
状況 (南から)

(1) 3トレンチ S X512 礫群  
検出状況 (南から)



(2) 3トレンチ S D512 遺物  
出土状況 (南から)



(3) 3トレンチ S D513 遺物  
出土状況 (北から)





(1) 3トレンチSB1ピット  
(SP665) 根石・柱根  
検出状況(南から)



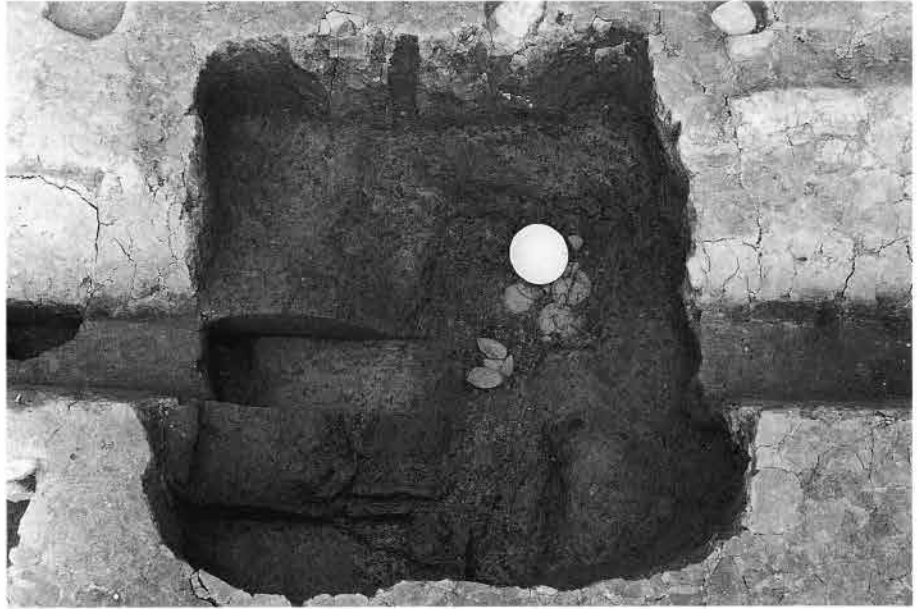
(2) 3トレンチSB1ピット  
(SP635) 遺物出土状況  
(西から)



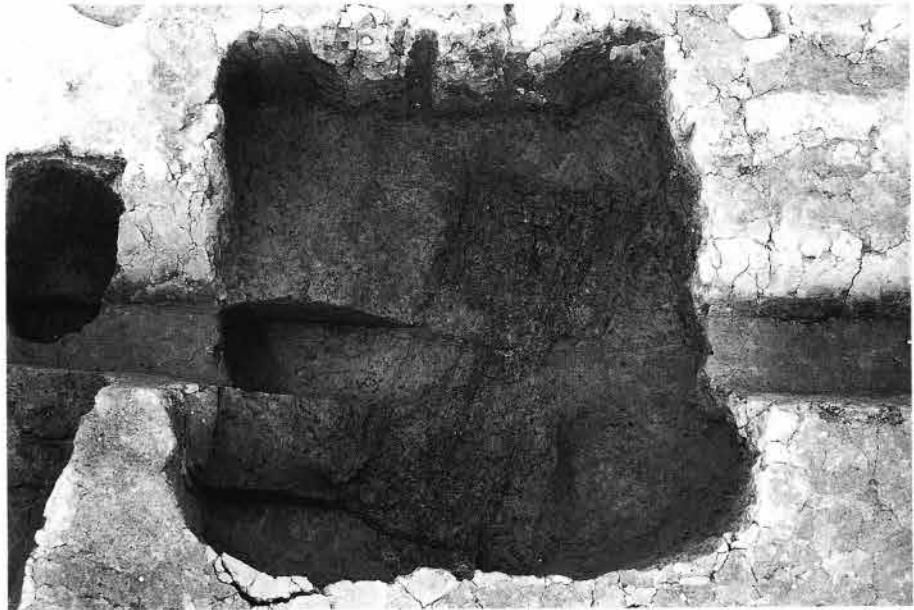
(3) 3トレンチSB2ピット  
(SP855) 断面(南から)

図版第21 椋ノ木遺跡

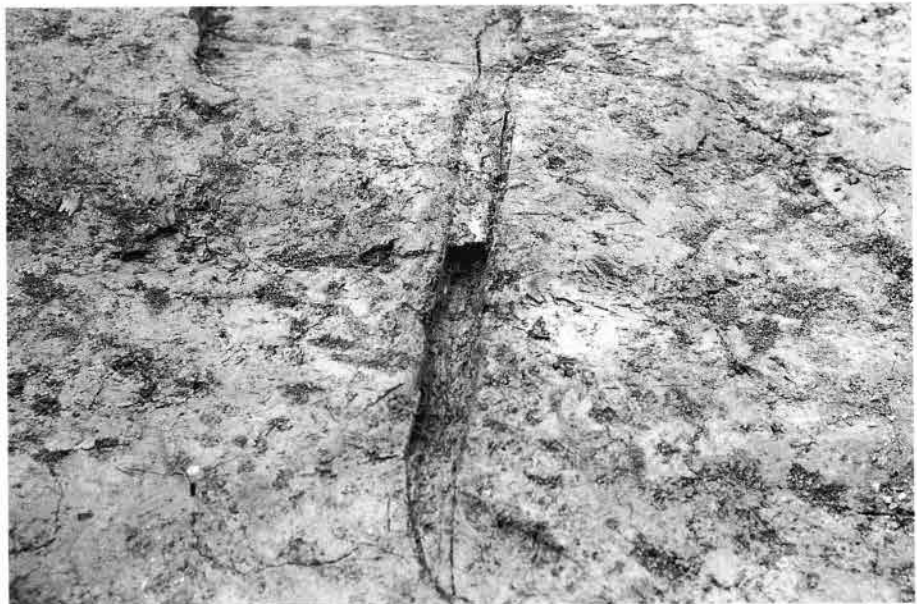
(1) 3トレンチS T382副葬品  
検出状況(南から)



(2) 3トレンチS T382底板  
出土状況(南から)

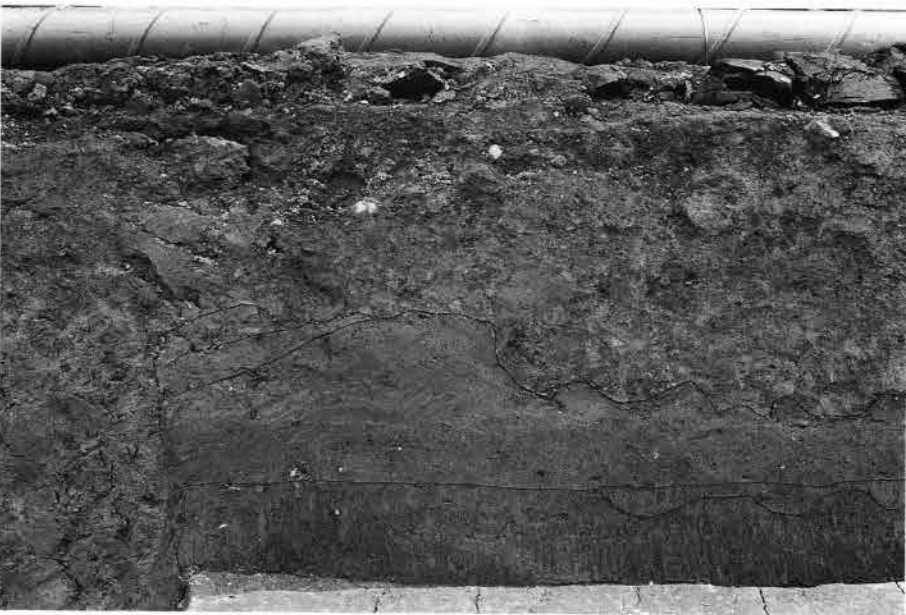


(3) 3トレンチS T382底部栈木  
痕跡検出状況(東から)

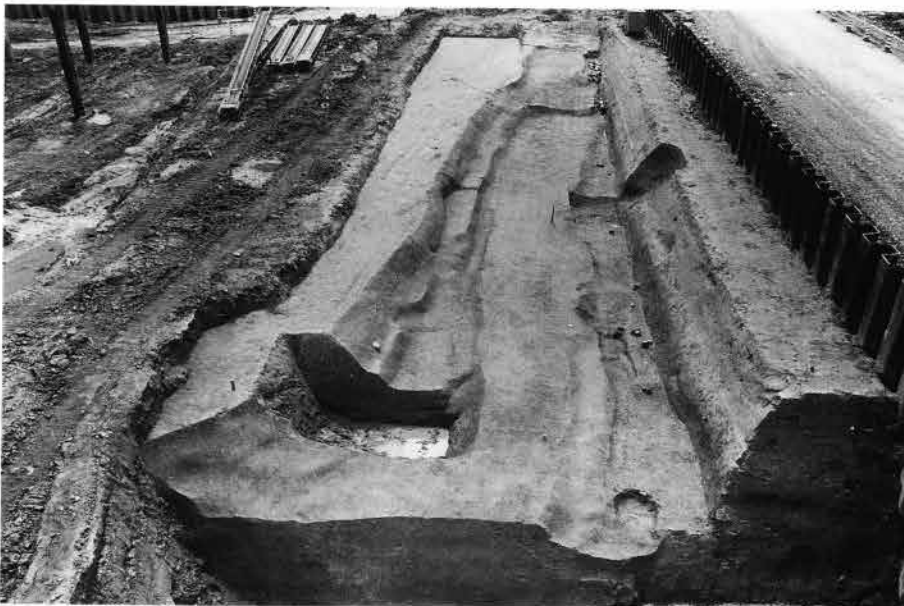




(1) 4-1 トレンチ拡張区全景  
(東から)



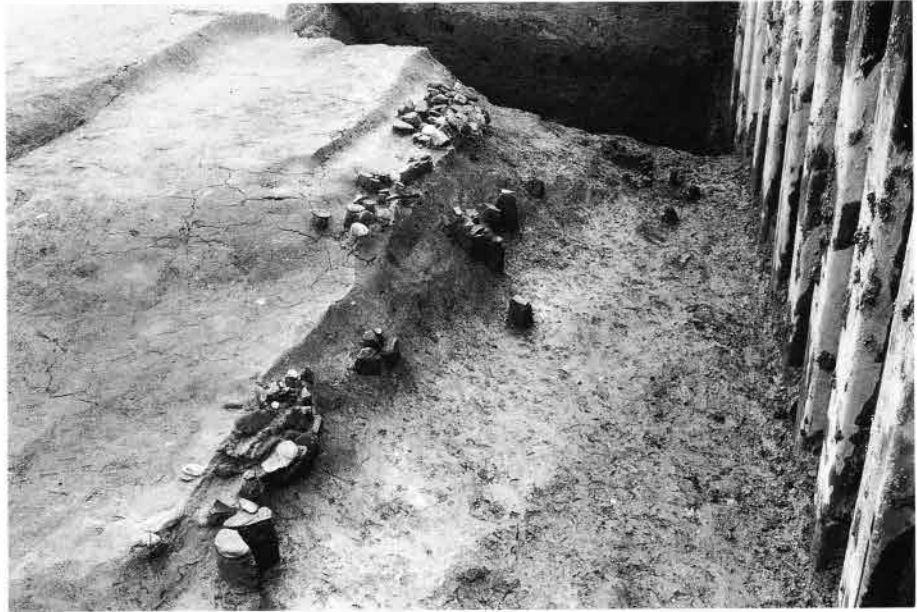
(2) 4-1 トレンチ拡張区南壁  
(北から)



(3) 4-5 トレンチ拡張区全景  
(南から)

図版第23 棕ノ木遺跡

(1) 4-5 トレンチ拡張区 S D01  
遺物出土状況 (東から)



(2) 6 トレンチ全景  
(西から)



(3) 6 トレンチ西部第1遺構面全景  
(南東から)

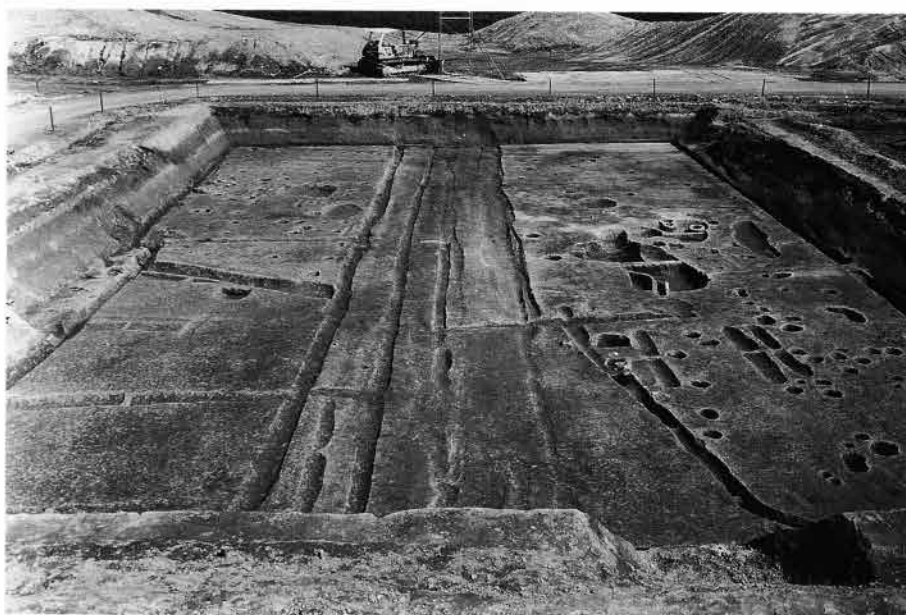




図版第24 棕ノ木遺跡



(1) 7トレンチ全景  
(東から)



(2) 7トレンチ全景  
(西から)



(3) 7トレンチ S K54全景  
(東から)

(1) 7トレンチSK4 全景  
(南から)

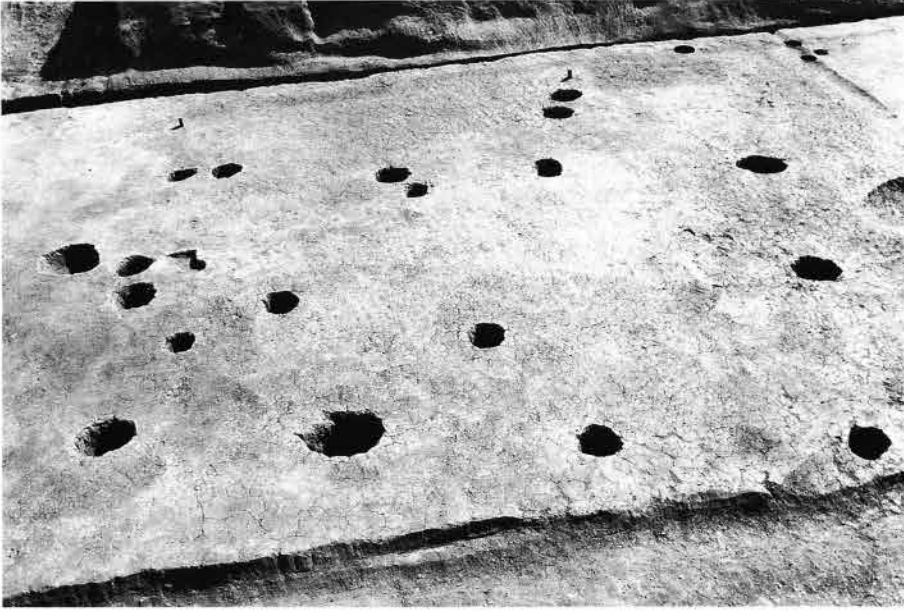


(2) 7トレンチSK168 全景  
(南から)



(3) 7トレンチSD5 遺物出土状況  
(北東から)

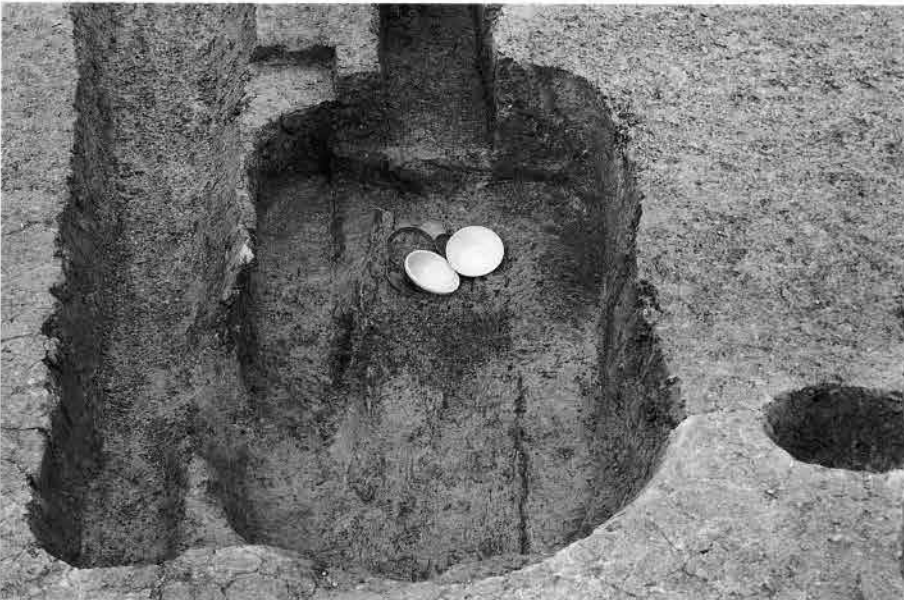




(1) 7トレンチSB3全景  
(北東から)



(2) 7トレンチSB4全景  
(西から)



(3) 7トレンチS T185全景  
(南から)

(1) 7トレンチS T185副葬品  
出土状況1 (上が南)



(2) 7トレンチS T185副葬品  
出土状況2 (上が南)



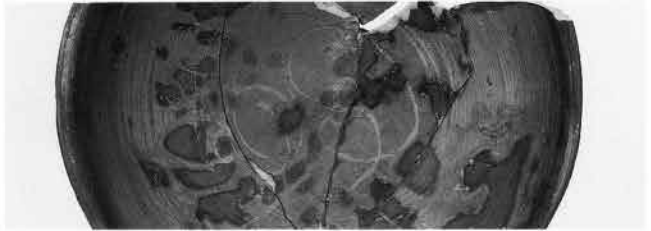
(3) 7トレンチS T185副葬品  
出土状況3 (上が南)





22

106



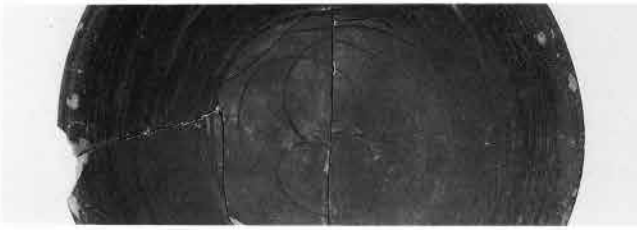
43

188



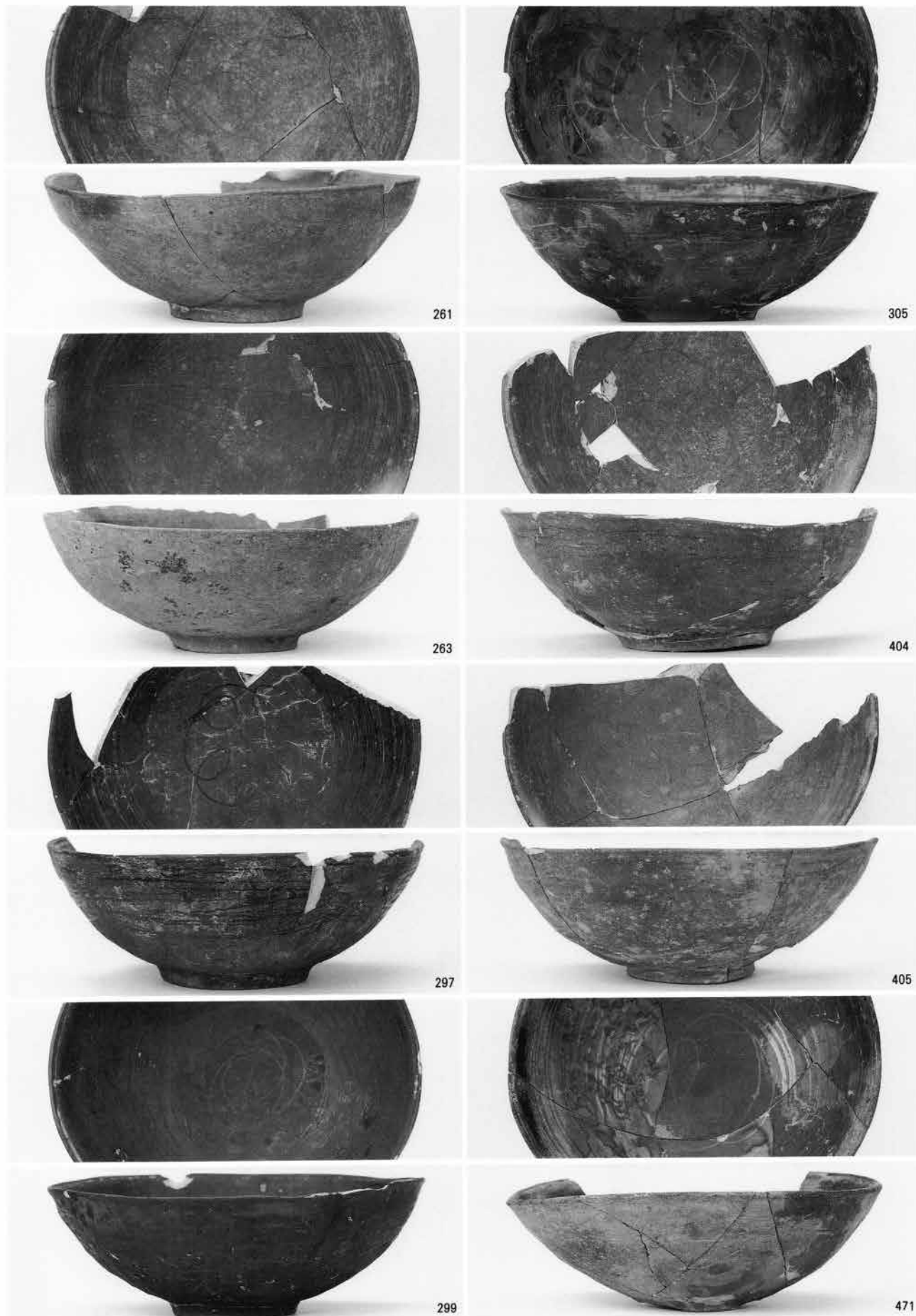
48

191



81

195





29



473



241



242



166



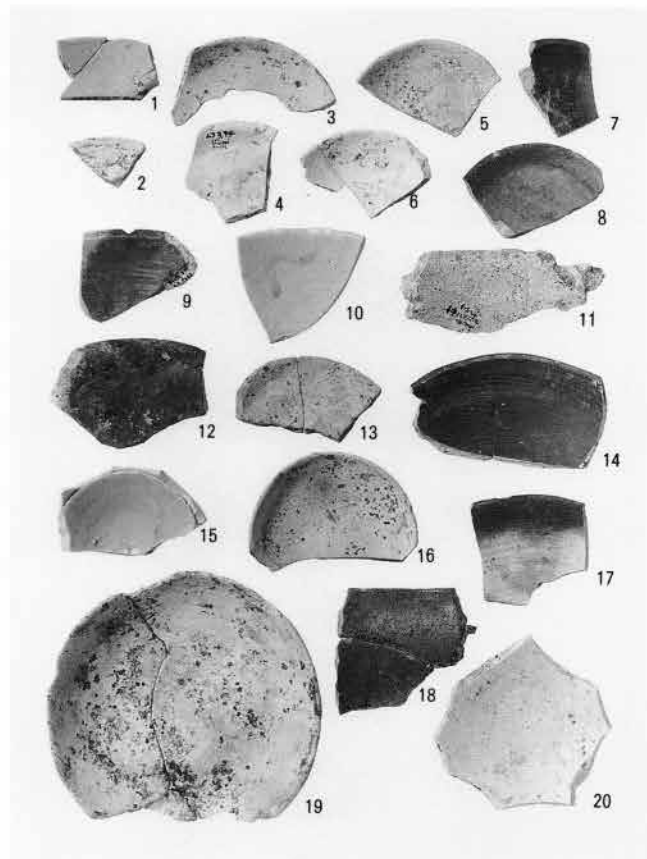
243



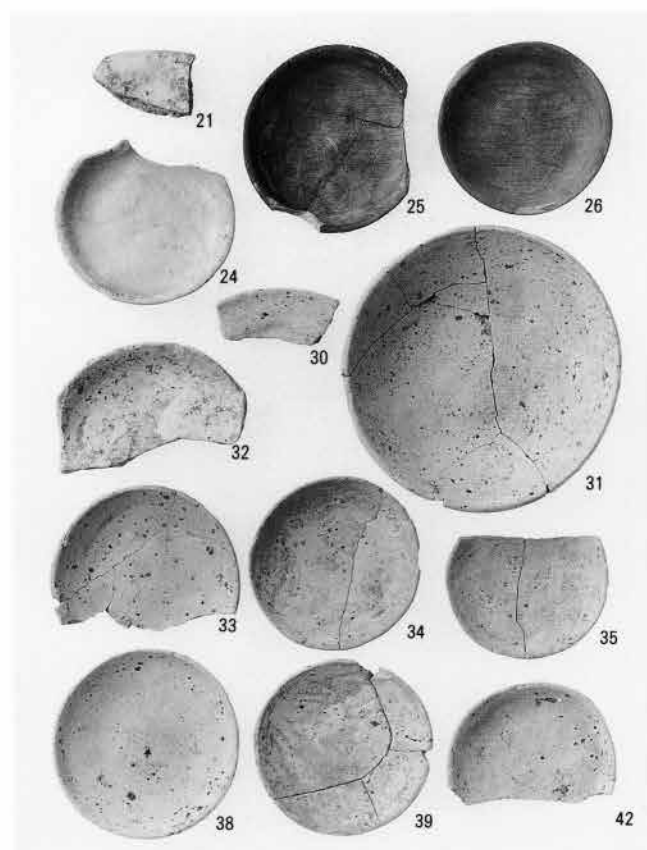
244



167

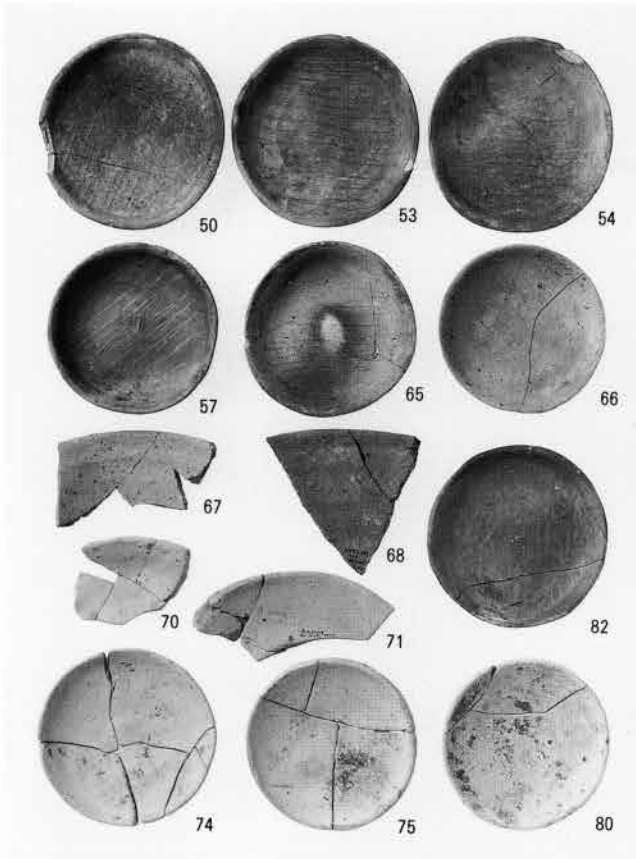


(1) 3 トレンチ S K 92・94・95・335出土遺物

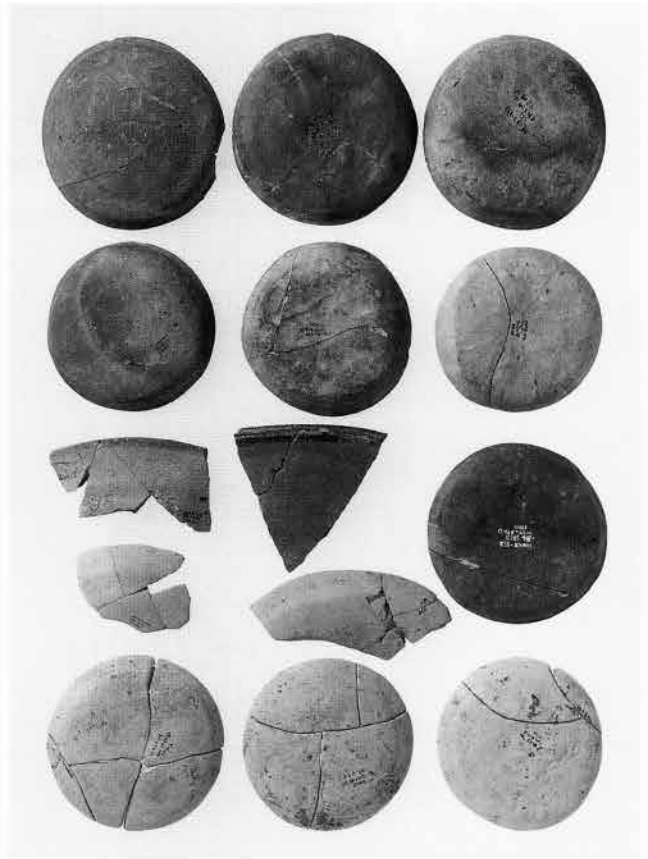


(2) 3 トレンチ S K 668・514出土遺物

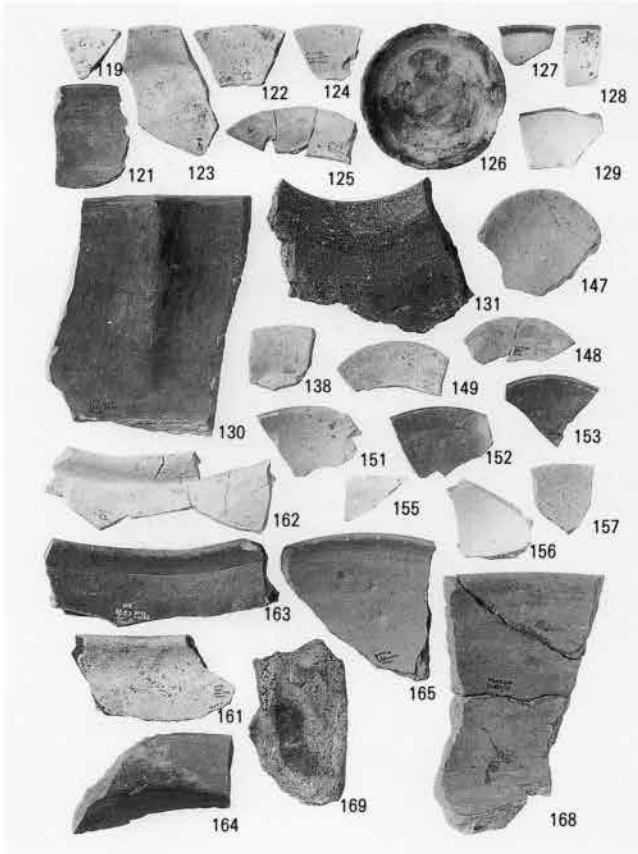




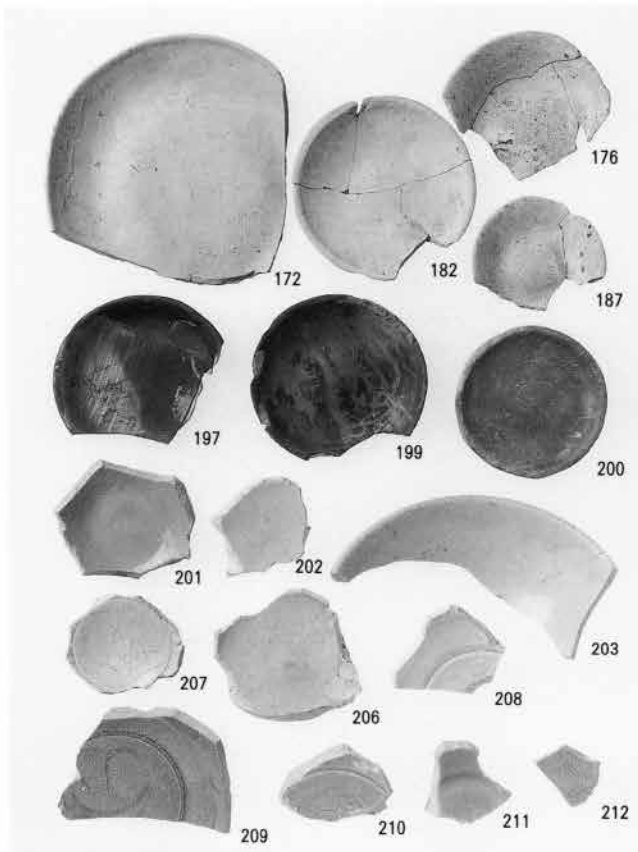
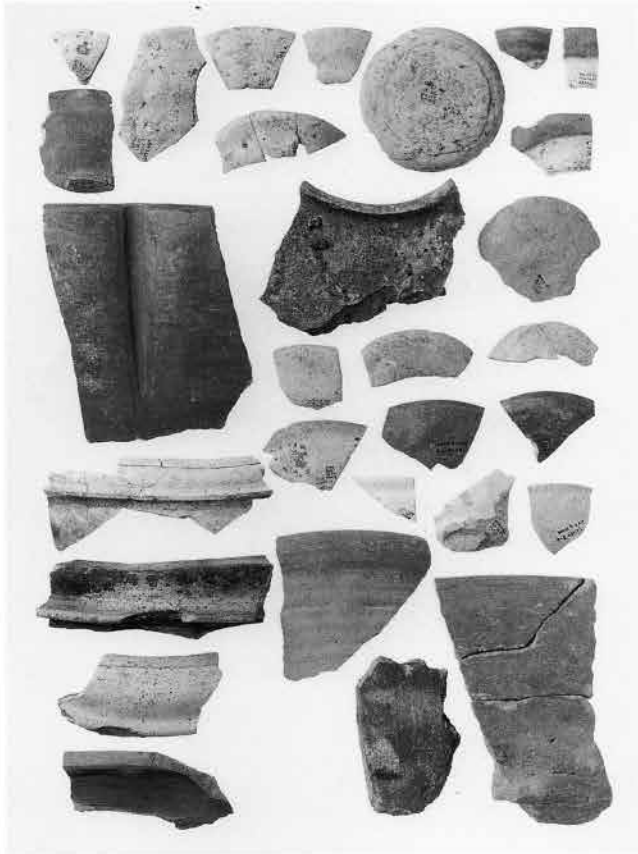
(1) 3 トレンチ S K514・671出土遺物



(2) 3 トレンチ S K671・530出土遺物

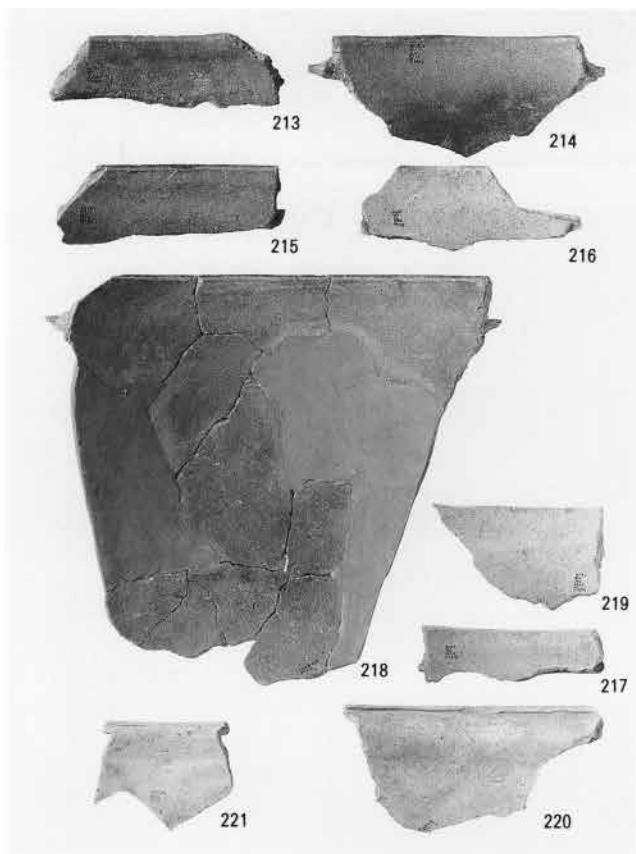


(1) 3 トレンチ S K531・177・173出土遺物

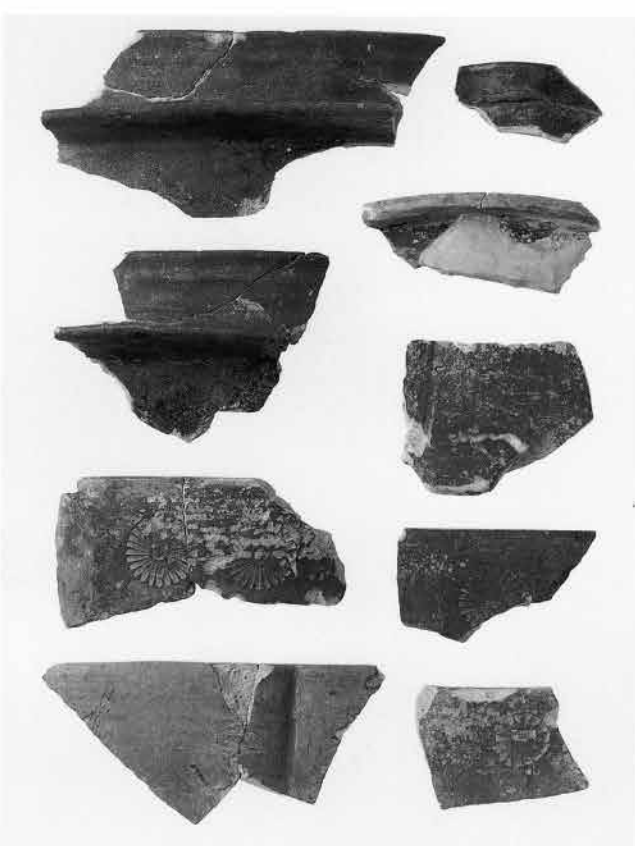
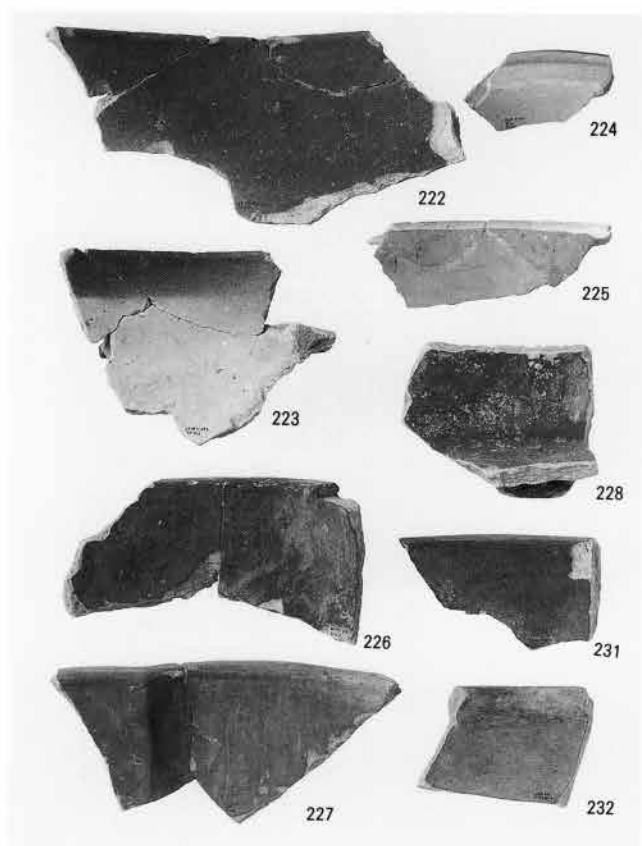


(2) 3 トレンチ S X512出土遺物

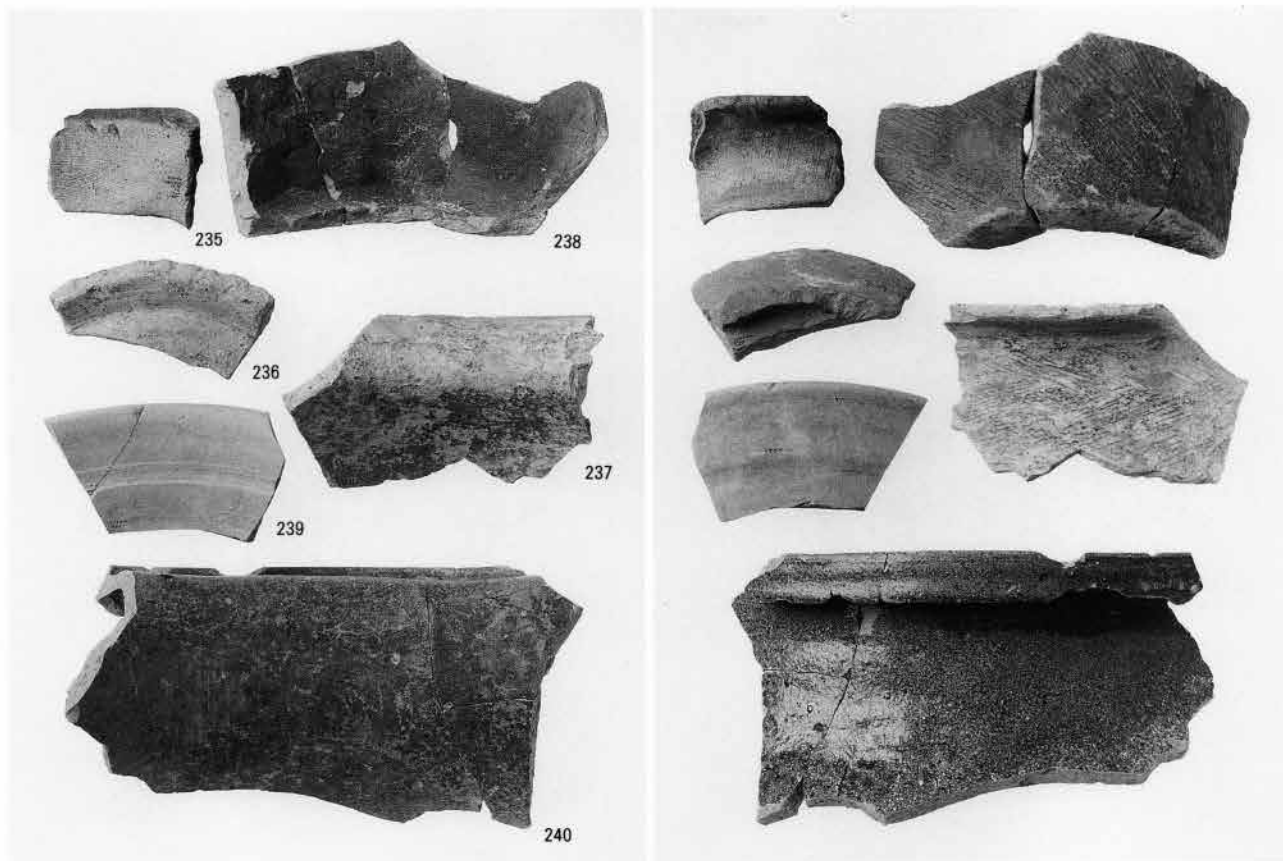




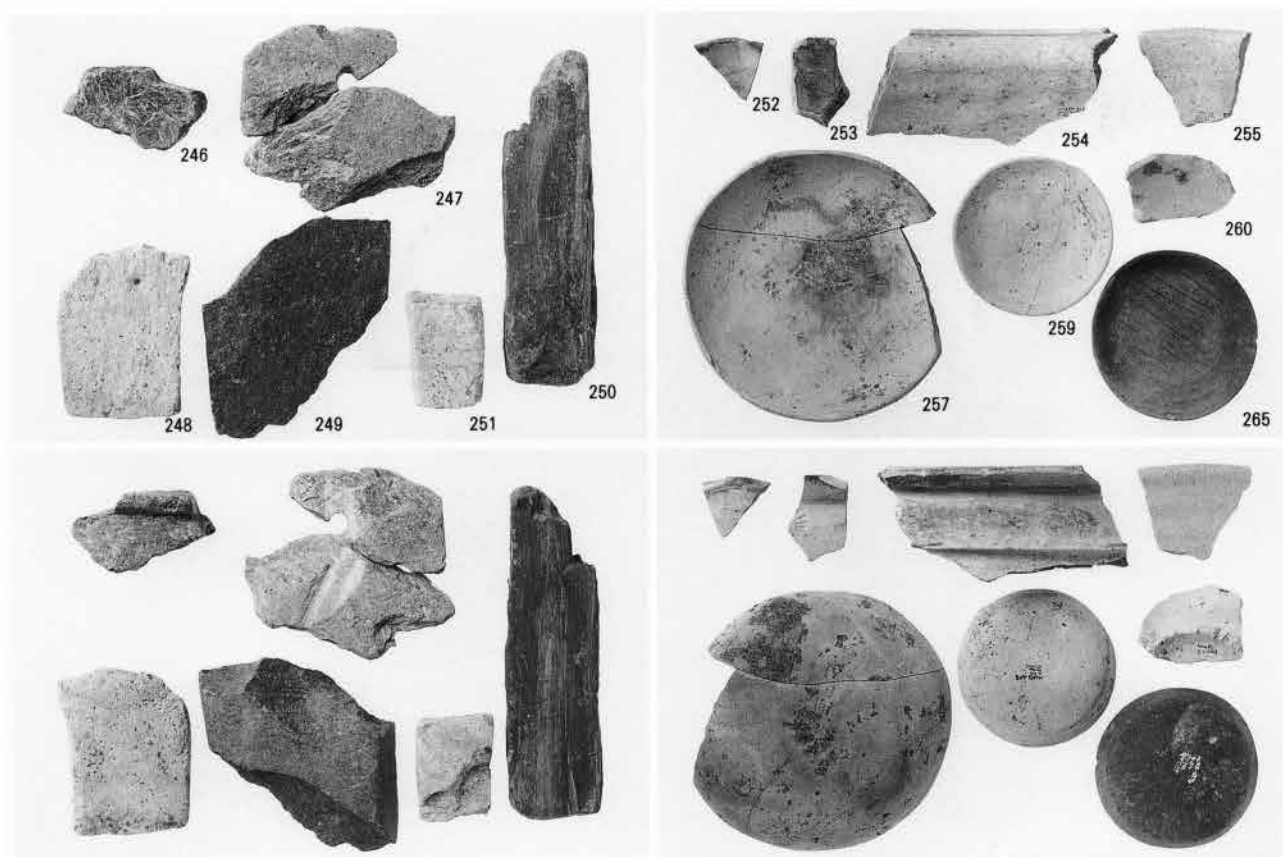
(1) 3 トレンチ S X512出土遺物



(2) 3 トレンチ S X512出土遺物

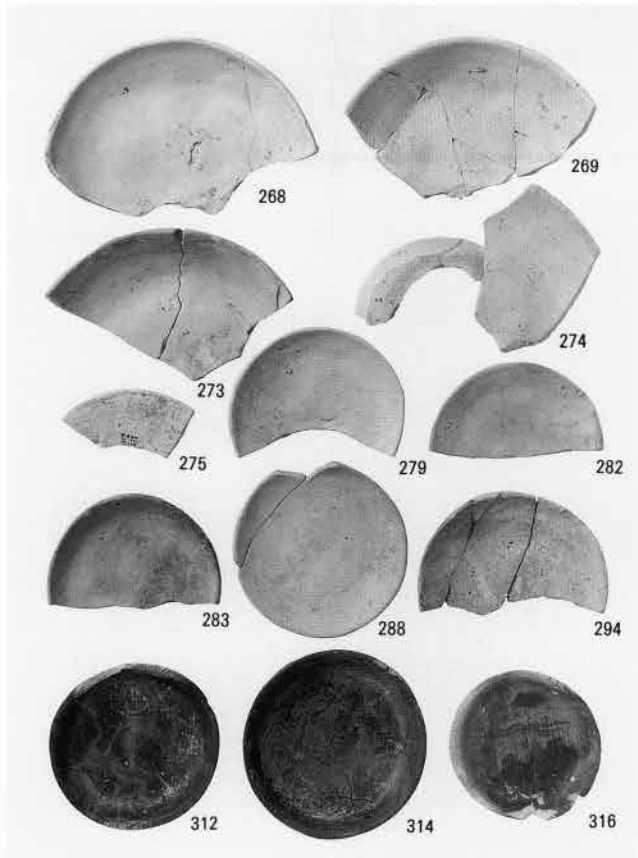


(1) 3 トレンチ S X512出土遺物

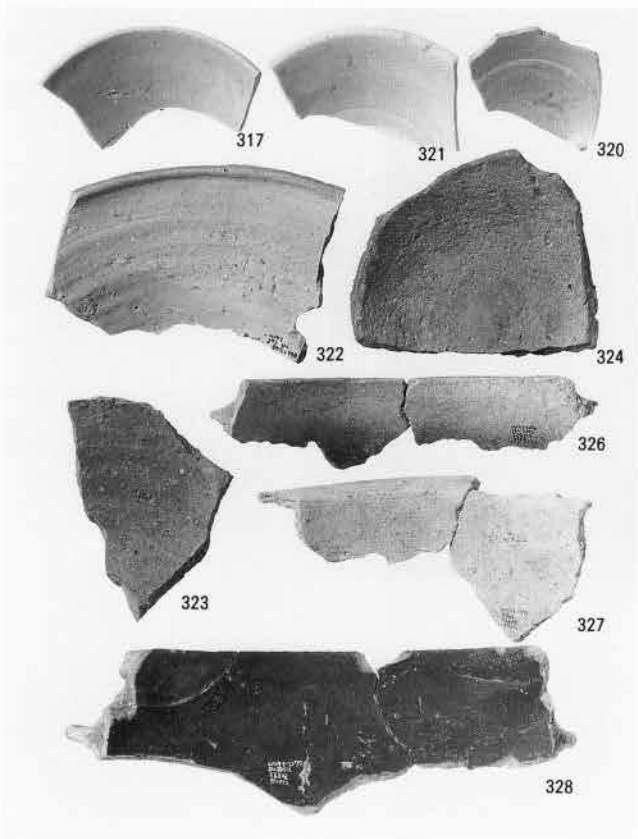
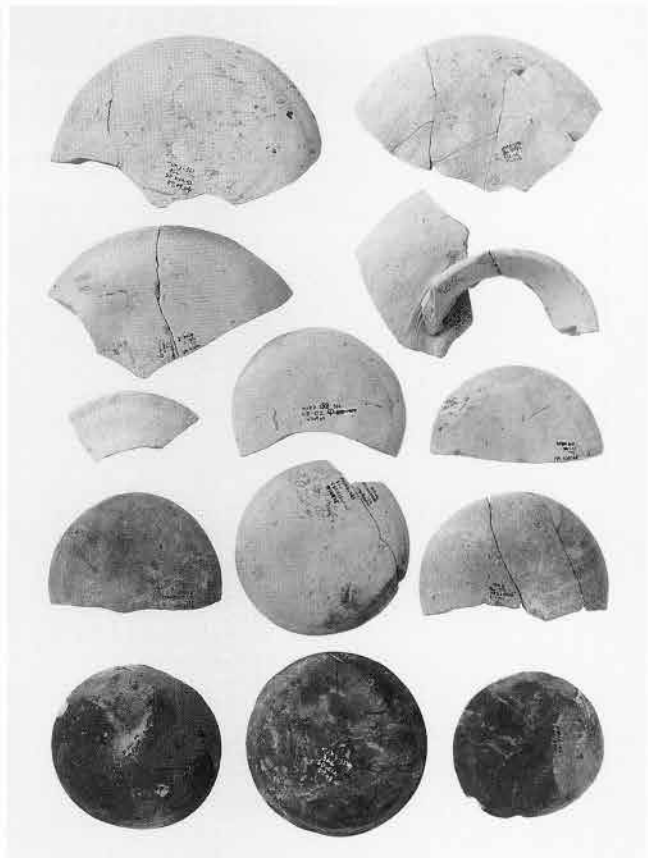


(2) 3 トレンチ S X512出土遺物

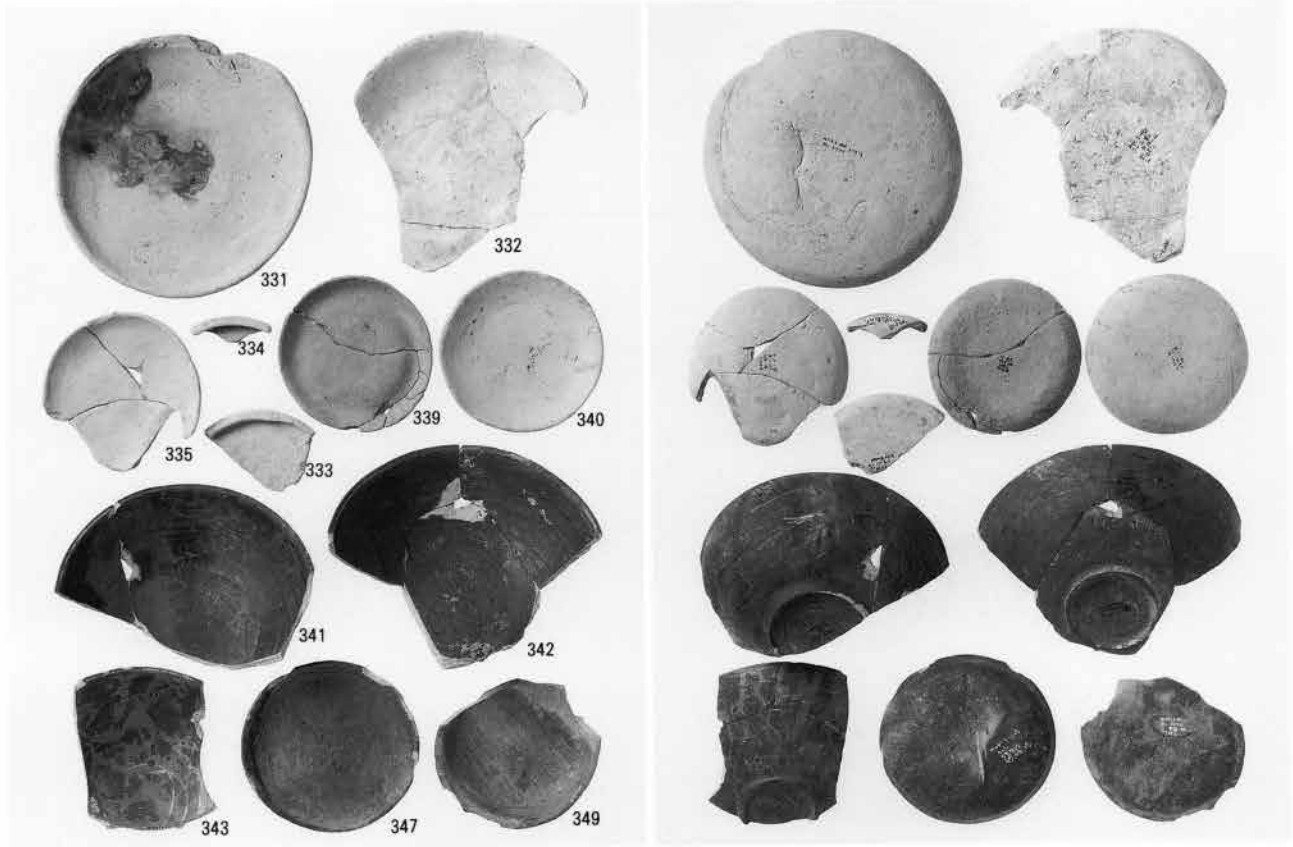
(3) 3 トレンチ S X535、S D46出土遺物



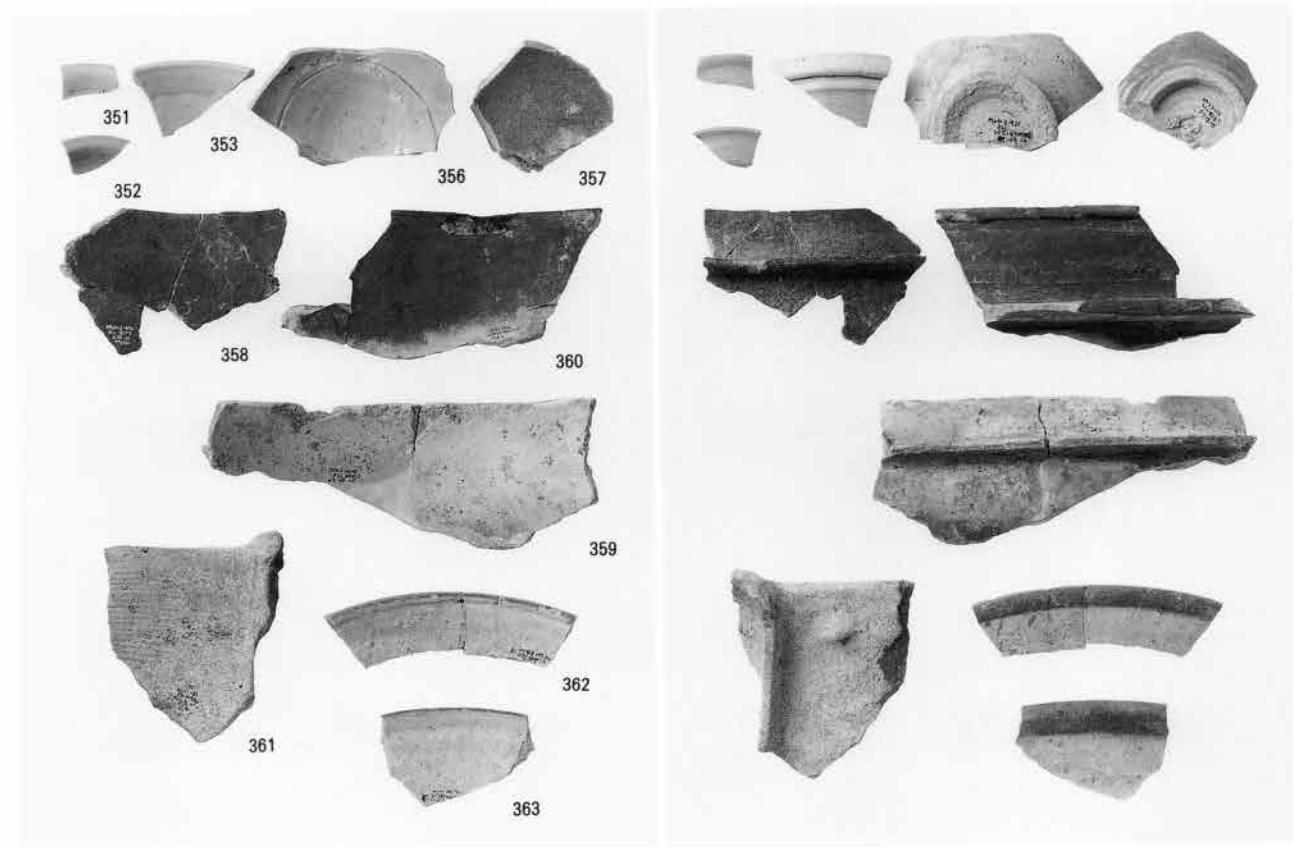
(1) 3 トレンチ S D512出土遺物



(2) 3 トレンチ S D512出土遺物

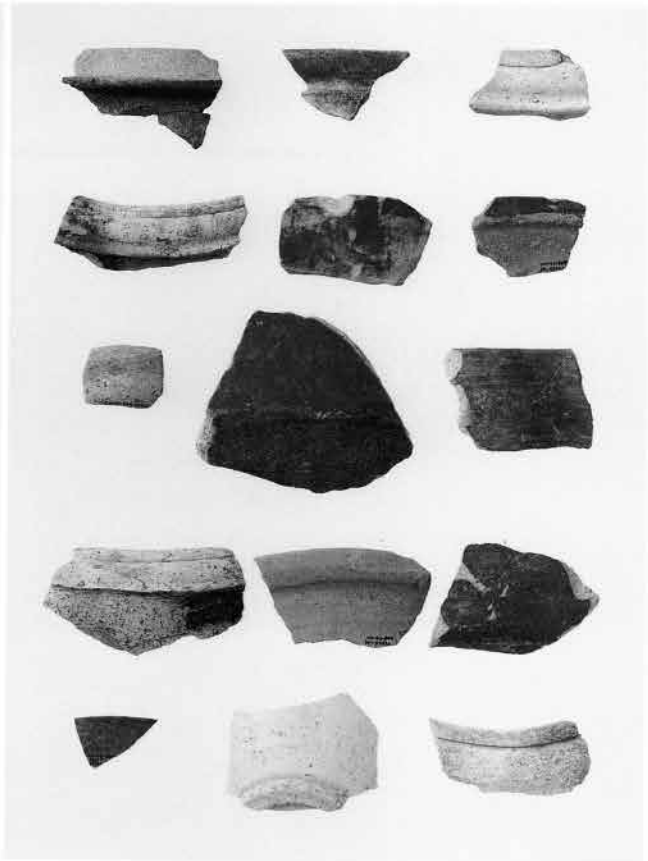
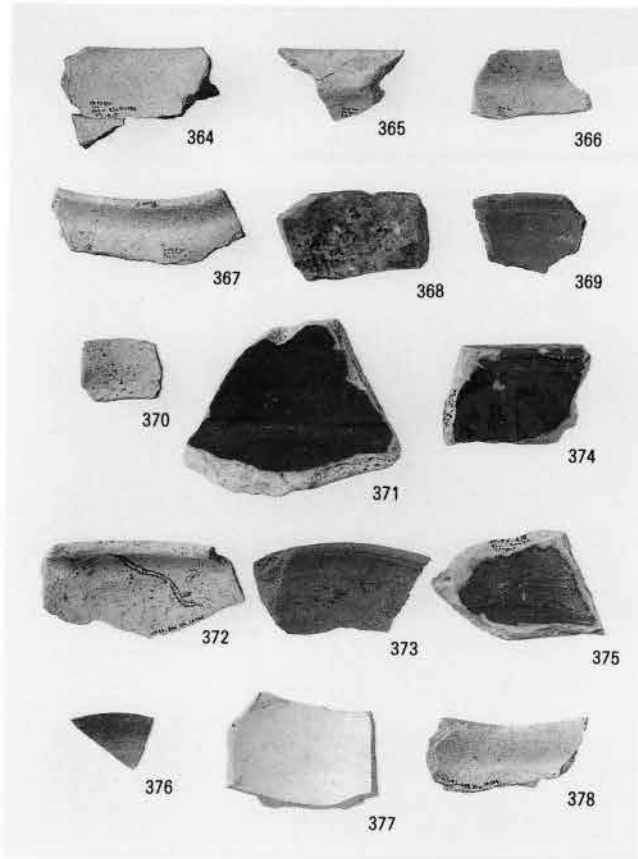


(1) 3 トレンチ S D513出土遺物

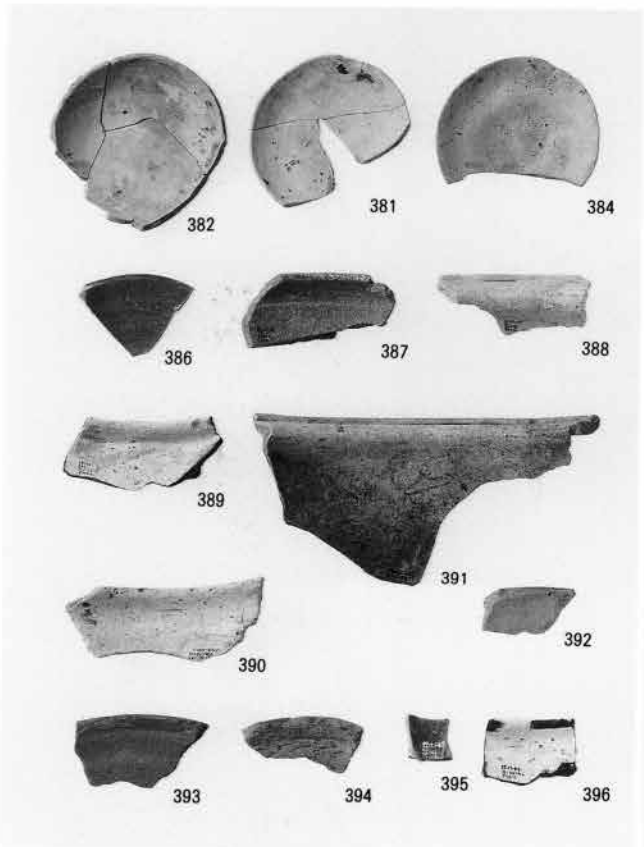


(2) 3 トレンチ S D513出土遺物

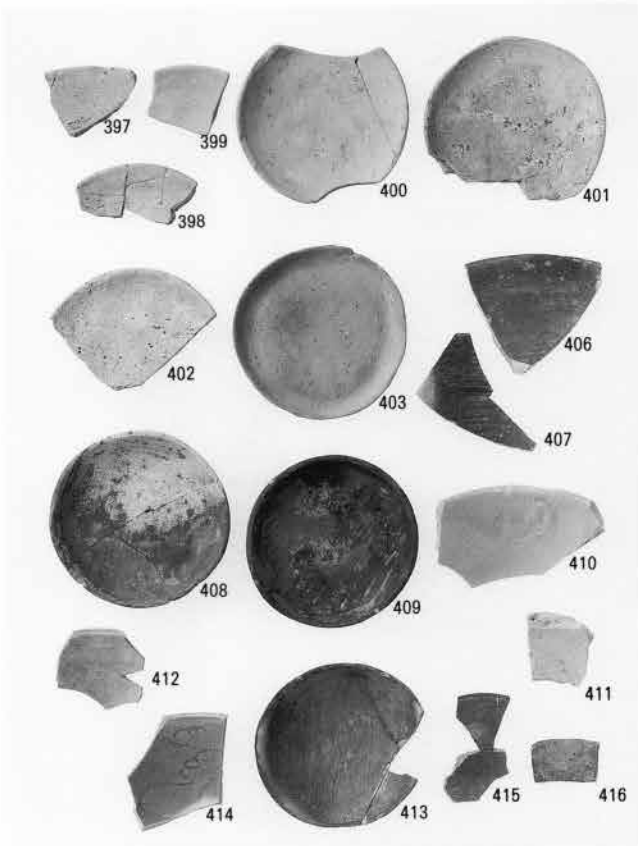
図版第38 椋ノ木遺跡



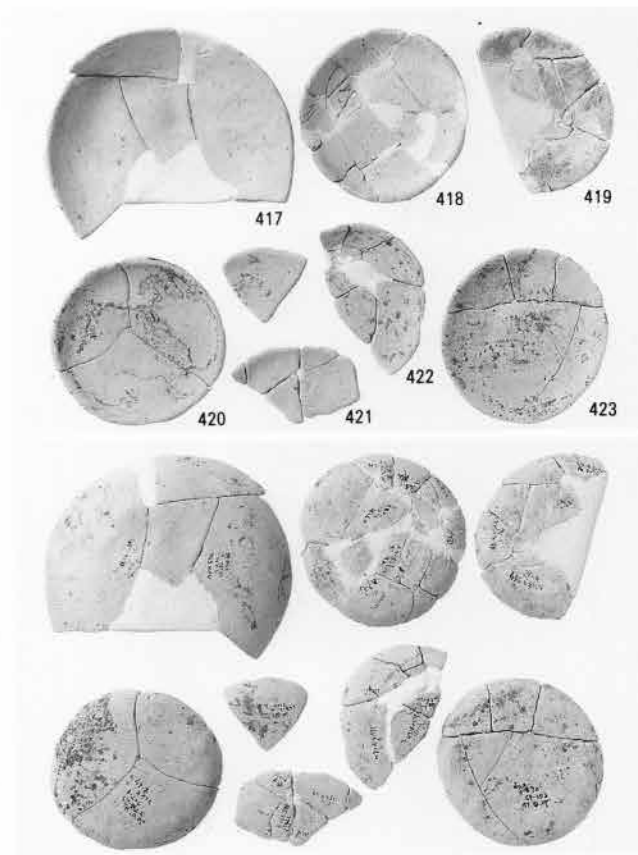
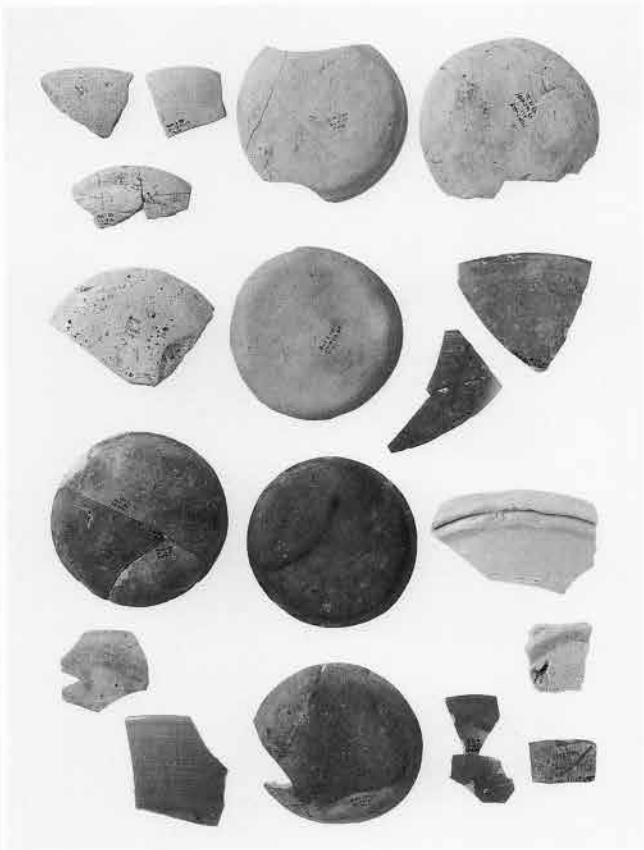
(1) 3 トレンチ S D521・522・532・534出土遺物



(2) 3 トレンチ S D535・711・742出土遺物



(1) 3 トレンチ SB1・2・3・5、SA1 出土遺物

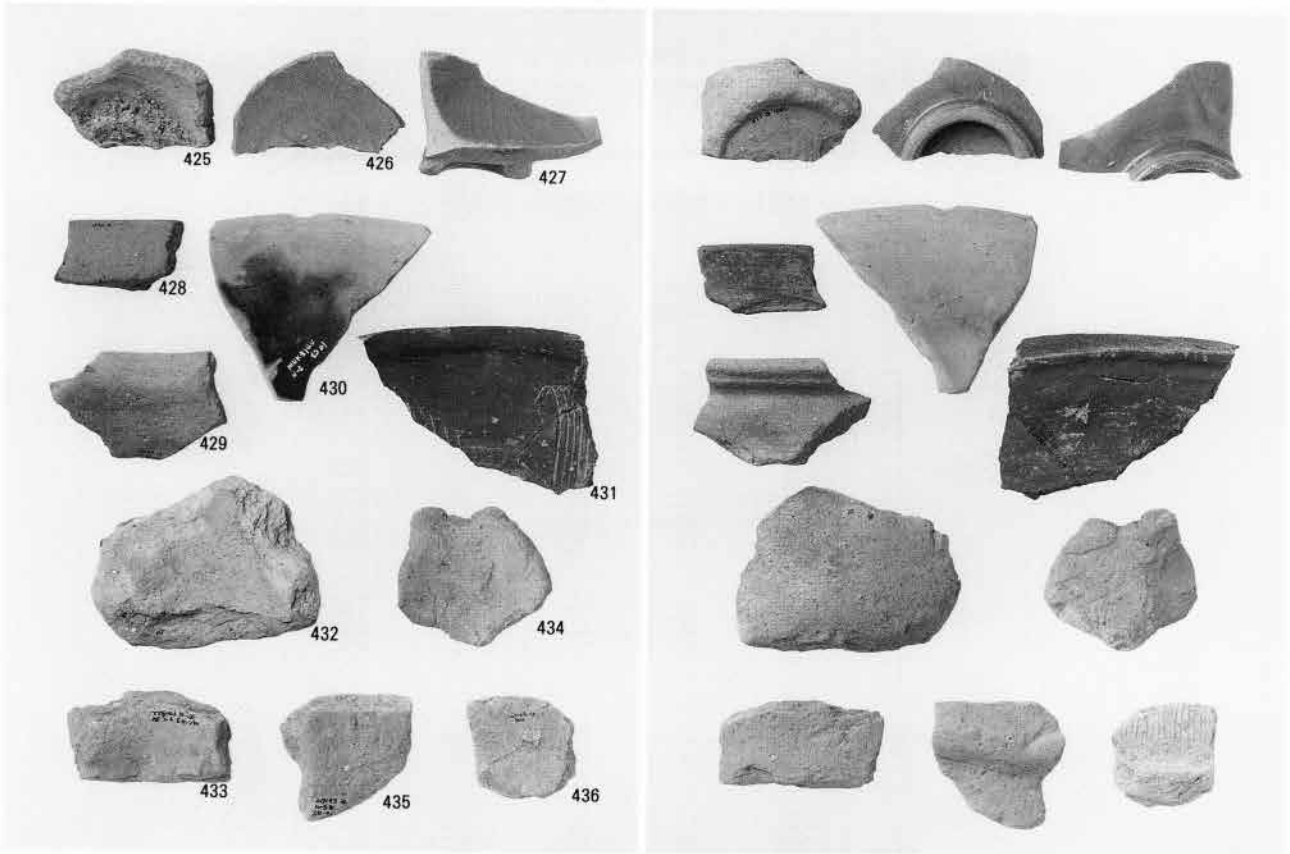


(2) 3 トレンチ S T382 出土遺物

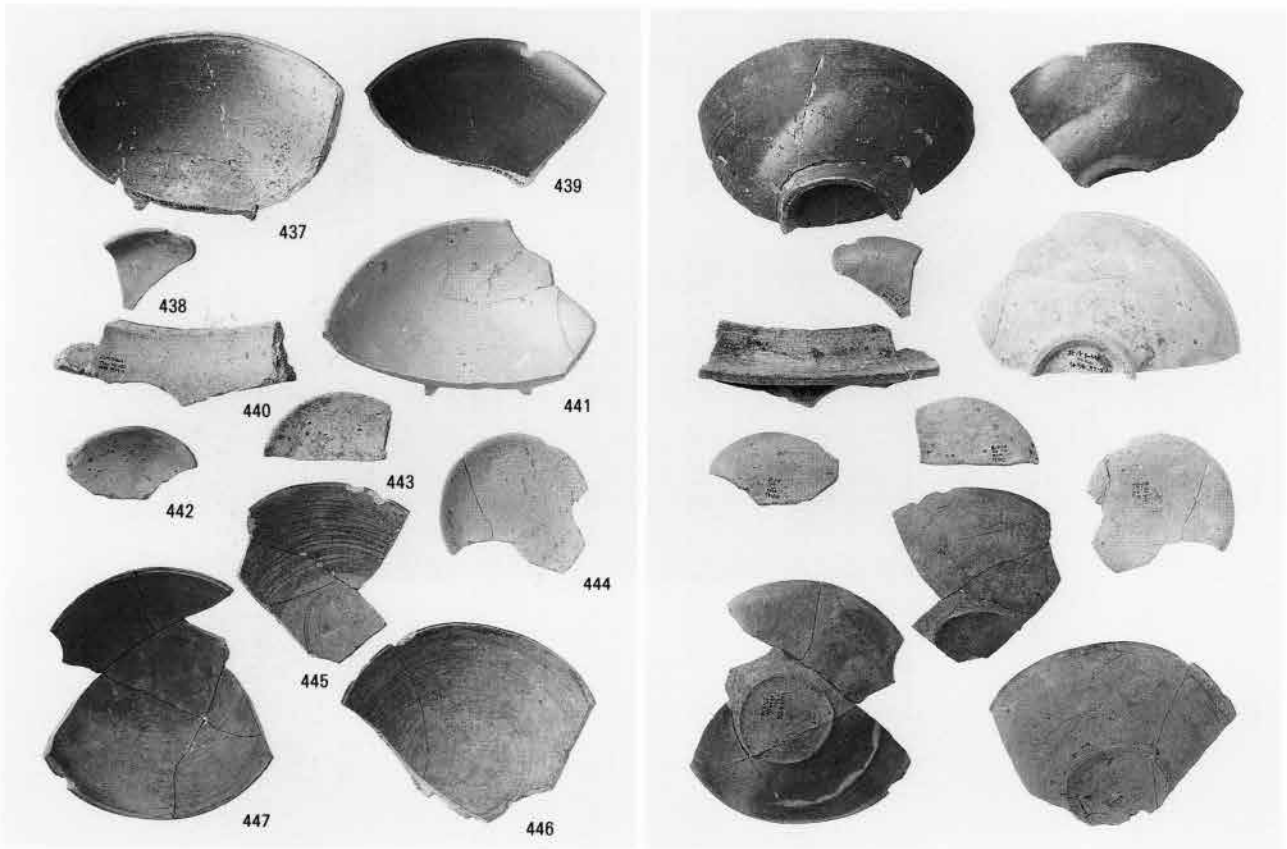




図版第40 椋ノ木遺跡

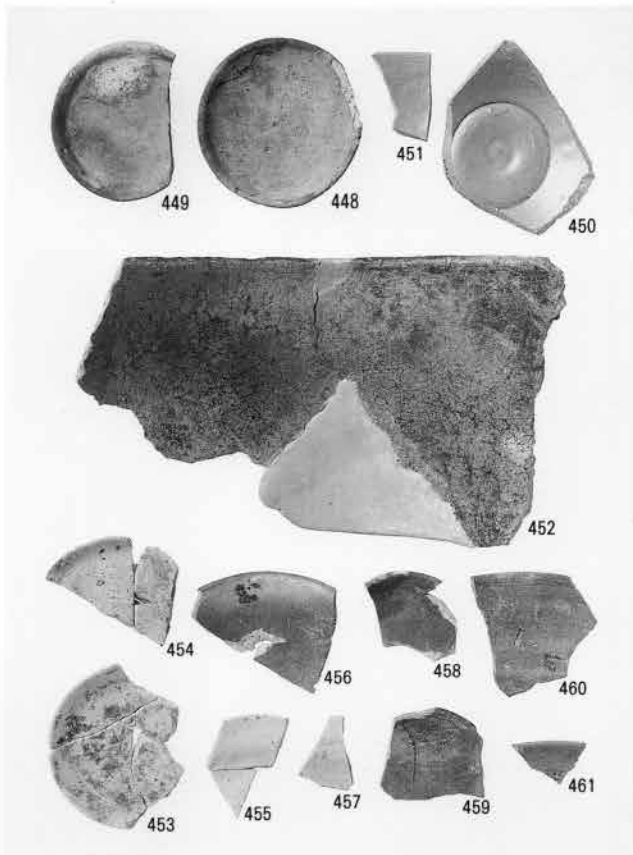


(1) 4-5 トレンチ SD 1 出土遺物

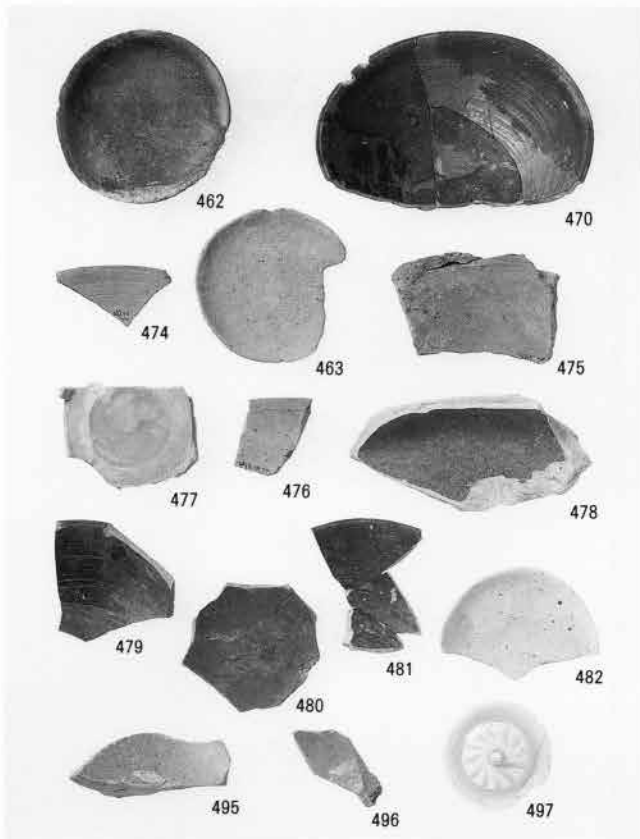


(2) 7 トレンチ S K 49・285・54・4 出土遺物

図版第41 椀ノ木遺跡

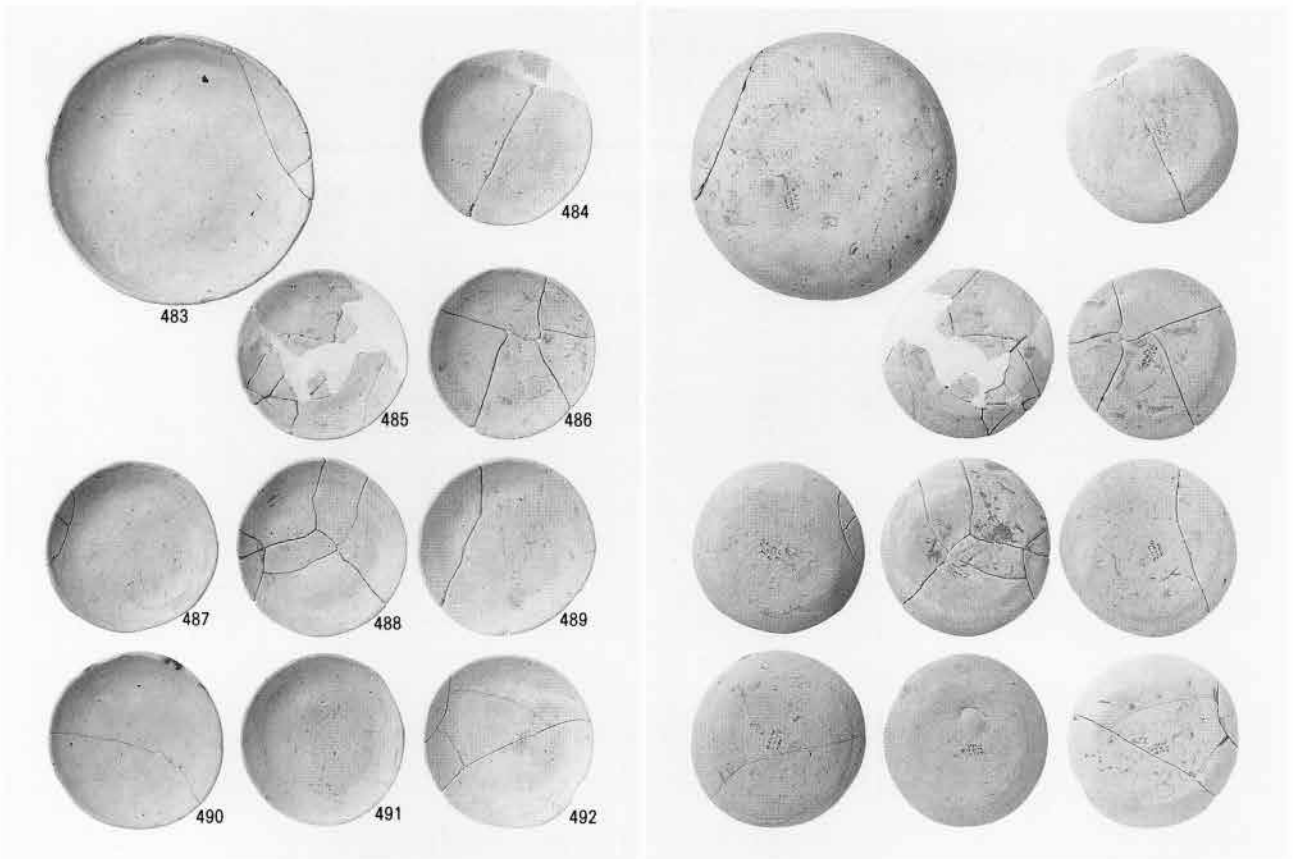


(1) 7 トレンチ SK 4・48・168 出土遺物

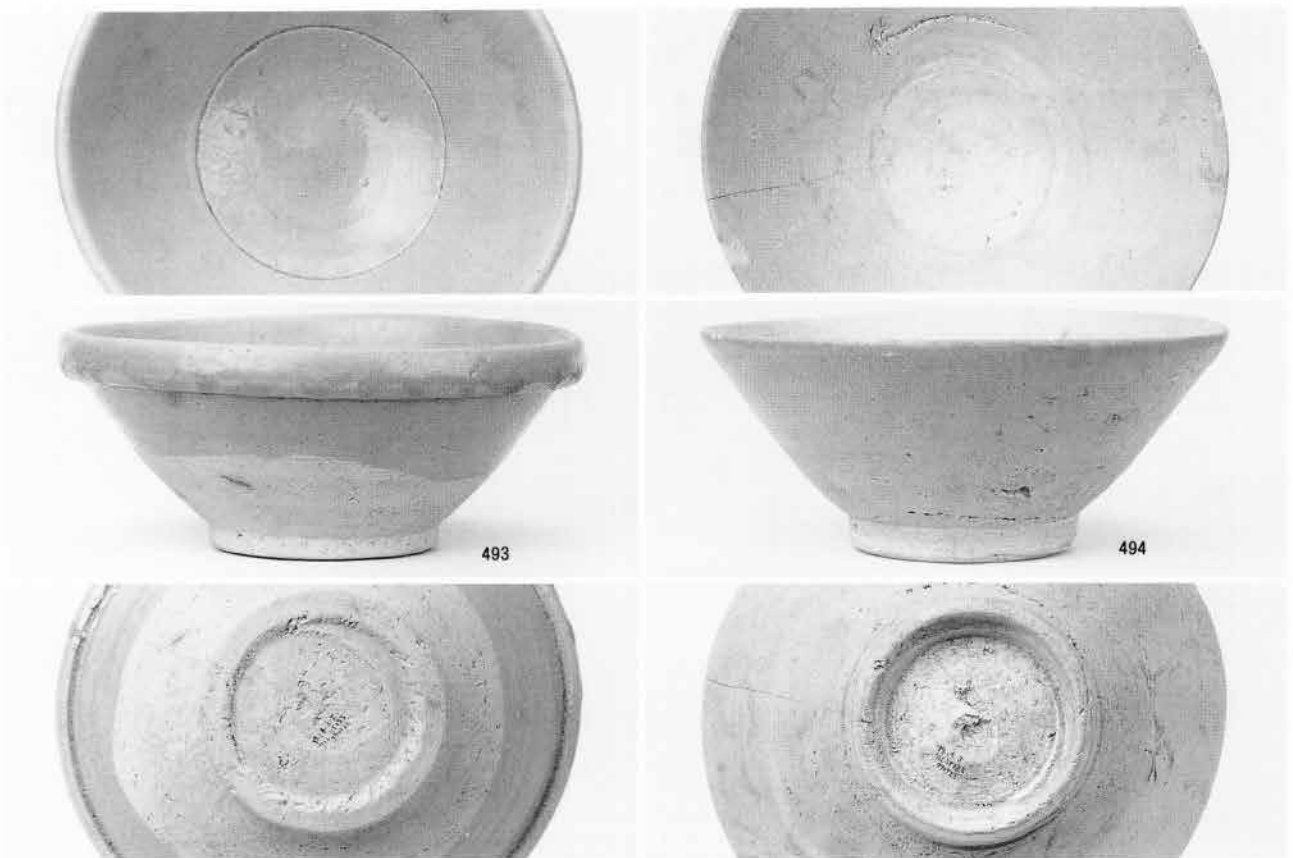


(2) 7 トレンチ SD 37・5・1、SB 2・3・4、遺構に伴わない出土遺物

図版第42 椀ノ木遺跡



(1) 7 トレンチ S T185出土遺物



(2) 7 トレンチ S T185出土遺物



(3)調査地遠景 3 (南から)



(4)調査地遠景 4 (南東から)



(1)調査地遠景 1 (西から)



(2)調査地遠景 2 (北西から)



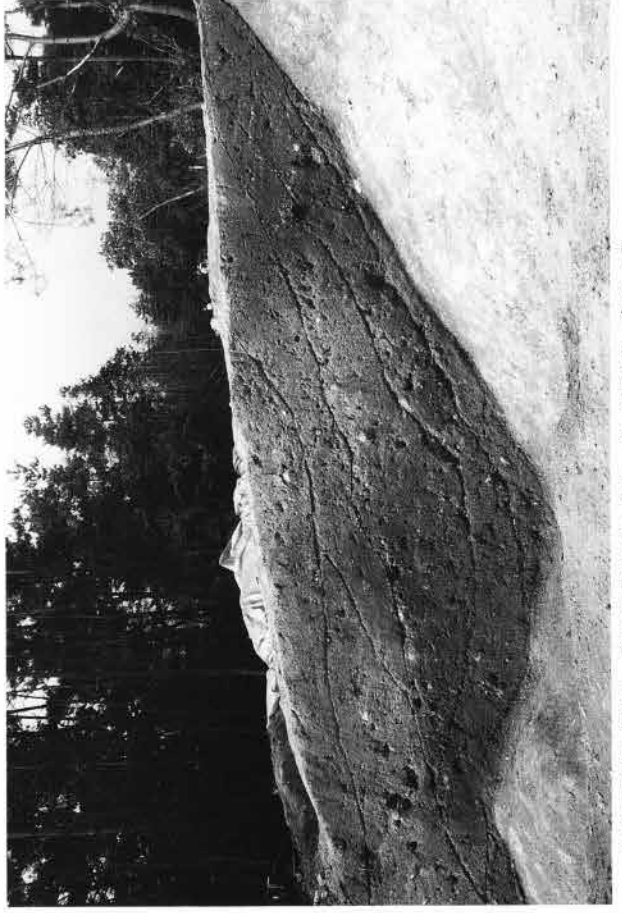
(1)木津城山遺跡 I トレンチ全景 (西南西から)



(3)木津城山遺跡 S D01、S X53検出状況 (南から)



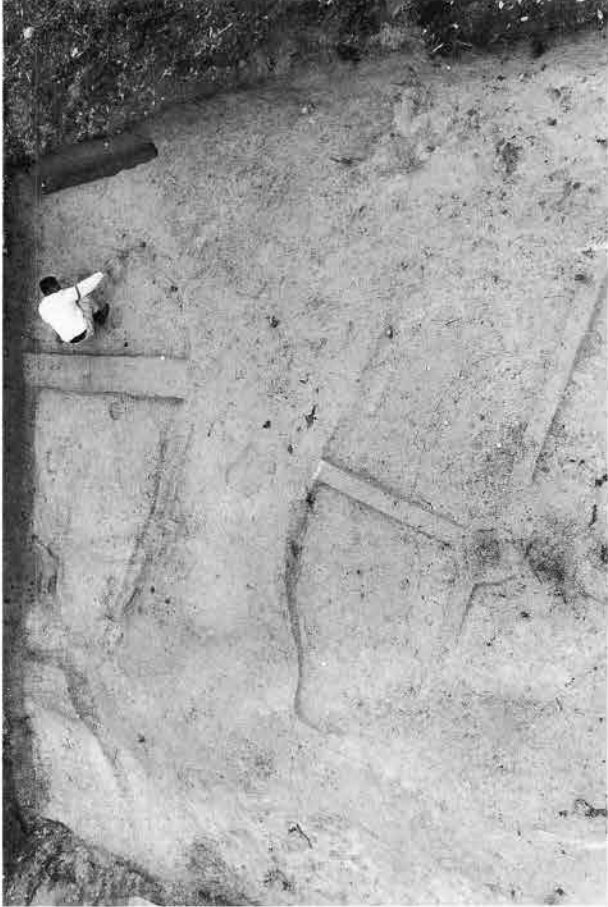
(2)木津城山遺跡 I トレンチ S D01検出状況 (東南東から)



(4)木津城山遺跡 S D01横断面 (B-B'断面、東から)



(1)木津城山遺跡 本調査地区南半部全景 (南西から)



(3)木津城山遺跡 S B 32・33検出状況 (素文鏡出土地点を指示、北から)



(2)木津城山遺跡 S B 32～35検出状況 (北から)



(4)木津城山遺跡 S B 32素文鏡出土状況 (上が北)



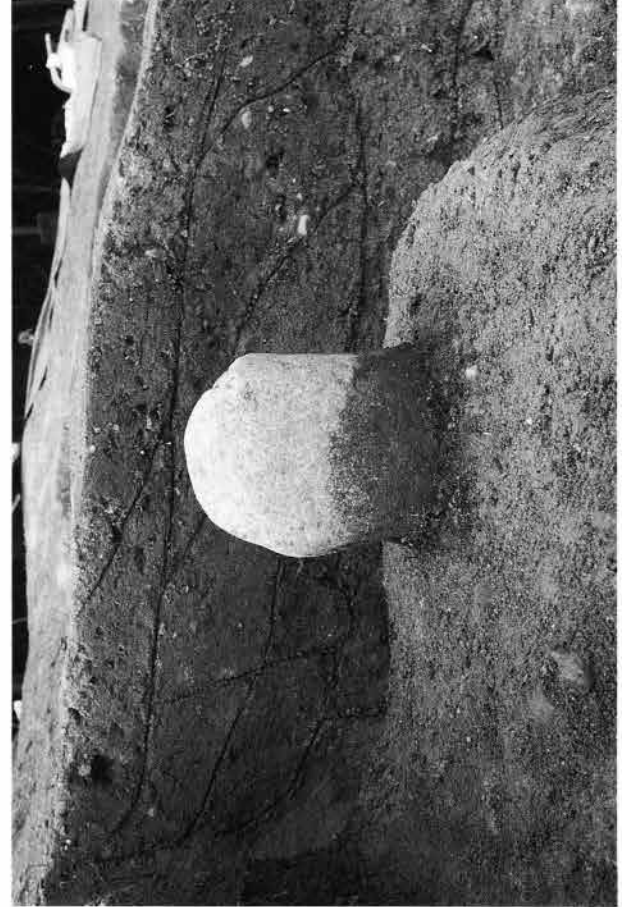
(1)木津城山遺跡 SD15全景 (遺物出土状況、西から)



(3)木津城山遺跡 SB09全景 (東から)



(2)木津城山遺跡 SD15全景 (完掘段階、東から)



(4)木津城山遺跡 SB09内の立石検出状況 (南から)



(1)木津城山遺跡 片山3号墳全景 (主体部完掘前、北西から)



(2)木津城山遺跡 片山3号墳の櫓室内に堆積した炭層 (北西から)



(3)木津城山遺跡 片山3号墳全景 (櫓室内完掘状況、南東から)



(4)木津城山遺跡 片山3号墳下層遺構検出状況 (南東から)





(3)木津城山遺跡 S X 49検出状況 (北から)



(4)木津城山遺跡 S X 20検出状況 (東南東から)



(1)木津城山遺跡 片山4号墳全景 (東南東から)



(2)木津城山遺跡 S B 23・S X 53検出状況 (南東から)



(1)木津城山遺跡 II トレンチ遠景 (北西から)



(2)木津城山遺跡 II トレンチ全景 (南東から)



(3)木津城山遺跡 II トレンチ S D03周辺遺構検出状況 (南東から)



(4)木津城山遺跡 II トレンチ方形台状墓Ⅰ区画溝(S D01)検出状況(北西から)



(3)木津城山遺跡 Ⅲ トレンチ検出状況 (南から)



(4)木津城山遺跡 Ⅳ トレンチ検出状況 (南西から)



(1)木津城山遺跡 Ⅱ トレンチ砲台陣地 (S X 02) 検出状況 (南東から)



(2)木津城山遺跡 Ⅱ トレンチ砲台陣地 (S X 06) 検出状況 (南東から)



RM 1



RM 2



1



5



2



3



4



11



出土遺物(2) (木津城山遺跡)



46



50



49



42



53



58



66



68



23



67



41



72



52



73



集合写真

出土遺物(4) (木津城山遺跡・天神山古墳群)

(1)長岡京跡右京第585次調査地点  
全景（東から）



(2)長岡京跡右京第585次調査地点  
遺物出土状況（北から）



(3)長岡京跡右京第585次調査地点  
遺物出土状況（西から）







長岡京跡右京第585次調査地点出土遺物（番号は挿図に同じ）

報告書抄録

ふりがな								
書名								
副書名								
巻次								
シリーズ名	京都府遺跡調査概報							
シリーズ番号	第85冊							
編著者名	石井清司・田代 弘・筒井崇史・森島康雄・伊賀高弘・戸原和人							
編集機関	(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター							
所在地	〒617-0002 京都府向日市寺戸町南垣内40-3			Phone	075(933)3877			
発行年月日	西暦 1998 年		11 月		26 日			
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積 m <sup>2</sup>	調査原因
		市町村	遺跡番号					
うらにゅうい せきぐん 浦入遺跡群	まいづるしちとせこ あざいけかなる・は ながくち 舞鶴市千歳小字池 カナル・花ヶ口	202		35° 31' 30"	135° 20' 40"	19970414 ～ 19980318	15,900	発電所建設
むくのきいせ き 椋ノ木遺跡	そうらくぐんせい か ちょうおおあざしも こまこあざむくのき ・やなぎがいと・か みのき・わきた 相楽郡精華町大字 下狛小字椋ノ木・ 柳垣外・神ノ木・ 脇田	366	46	35° 46' 16"	135° 48' 8"	19970506 ～ 19981107	2,850	下水道処理 施設建設
きづしろやま いせき 木津城山遺 跡	そうらくぐんきづち ようきづかたやま 相楽郡木津町木津 片山	362		34° 43' 24"	135° 49' 52"	19970617 ～ 19980306	3,000	宅地造成
てんじんやまこ ふんぐん 天神山古墳 群	そうらくぐんきづち ようきづかたやま 相楽郡木津町木津 片山	362	56	34° 43' 39"	135° 49' 52"	19970807 ～ 19971016	1,100	宅地造成
かたやまいちご うふん 片山1号墳	そうらくぐんきづち ようきづかたやま 相楽郡木津町木津 片山	362	40	34° 43' 39"	135° 49' 57"	19970807 ～ 19971016	113	宅地造成
ながおききょう あとうきょうだ い585じ しも うえのみなみい せき 長岡京跡右 京第585次 下植野南遺 跡	おとくにぐんおやま ざきちようおおあざし も うえのこあざごじよ うもと・おおあざえん みようじこあざもんで ん 乙訓郡大山崎町大 字下植野小字五条 本・大字円明寺小 字門田	303	29	34° 54' 8"	135° 42' 3"	19980119 ～ 19980213	120	道路拡幅
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
浦入遺跡群	集落・生産	縄文 奈良 平安		竪穴住居・テラス状住居 テラス状住居・製塩炉		丸木舟・縄文土器 須恵器・製塩土器 須恵器・製塩土器		
椋ノ木遺跡	集落	平安  鎌倉		土坑・ピット  土坑・ピット・墓		瓦器・土師器 中国陶磁器 瓦器・中国陶磁器		

木津城山 遺跡	集落	弥生	竪穴住居・溝・テラス状住居	鏡・鐸形土製品 弥生土器	
天神山古墳 群	古墳	古墳		土師器・須恵器・ 石包丁	古墳状隆起
片山1号墳	古墳	古墳			古墳状隆起
下植野南遺 跡	集落	古墳	旧河道	土師器	

## 京都府遺跡調査概報 第85冊

平成10年11月26日

発行 (財)京都府埋蔵文化財調査研究  
センター

〒617-0002 向日市寺戸町南垣内40番の3  
Phone (075)933-3877 (代)

印刷 三星商事印刷株式会社

〒604-0093 京都市中京区新町通竹屋町下ル  
Phone (075)256-0961 (代)